



Nagoya City University Academic Repository

学位の種類	博士（芸術工学）
報告番号	甲第1496号
学位記番号	第13号
氏名	大橋 正浩
授与年月日	平成 27 年 3 月 25 日
学位論文の題名	西高木家陣屋御殿にみる近世武家住宅の公と私の構成
論文審査担当者	主査： 溝口 正人 副査： 志田 弘二, 鈴木 賢一, 久野 紀光

西高木家陣屋御殿にみる近世武家住宅の
公と私の構成

THE REINTERPRETATION ON THE SPATIAL COMPOSITION OF
SAMURAI RESIDENCE WITH FOCUSING ON THE MEANING OF
COMMON AND PRIVATE
: IN THE CASE OF THE NISHITAKAGI JINYA

平成27年 3月

名古屋市立大学
Nagoya City University

大橋正浩
OHASHI Masahiro

目 次

第1章 序論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第1節 研究の目的と背景

第2節 既往の研究

第3節 研究の対象と方法

第4節 本論の構成

附 節 西高木家陣屋の沿革

附－1．天保3年(1832)の屋敷類焼以前

附－2．天保3年屋敷類焼直後の再建

附－3．天保8年(1837)の造営

附－4．嘉永5年(1852)の造営

附－5．安政4年(1857)の改修

附－6．万延から明治初期までの修復

附－7．明治5年(1872)以降の屋敷規模縮小

附－8．明治29年(1896)の改修

註釈

図版

年表

第2章 再建後の移徙からみる西高木家陣屋 天保度上屋敷御殿の空間構成・・31

はじめに

第1節 移徙の経緯

第2節 移徙の手順

2－1．仮住居から御殿まで

2－2．御殿内の儀式

2－3．移徙儀式の性格の相違

第3節 天保御殿の平面における移徙儀式が行なわれた場所の比定

3－1．天保御殿の平面構成

3－2．移徙儀式が行なわれた場所

3－3．儀式間の移動経路

第4節 儀式からみる御殿の平面構成と空間的性格

4－1．対面空間

4－2．居住空間

4－3．儀式に用いられなかった室群

まとめ－天保御殿の空間構成から－

附 節 天保御殿に関する新出絵図

附－1．はじめに

附－2．絵図の概要

附－3．絵図の年代判定

附－4．絵図の性格

附－5．まとめ

註釈

図版

第3章 縮小明治御殿にみる平面構成の基本原則・・・・・・・・・・ 55

はじめに

第1節 屋敷の規模縮小とその要因

第2節 屋敷の規模縮小を示す『高木家文書』

第3節 明治期における近世遺構の確定

第4節 明治御殿に関する史料

4－1．絵図の概要

4－2．絵図の性格

4－3．絵図と事実関係との対応

第5節 規模の縮小過程と御殿平面の基本原則

まとめ

註釈

図版

第4章 嘉永度下屋敷御殿の施設性格・・・・・・・・・・ 75

はじめに

第1節 高木家に関する文書群にみる下屋敷御殿の建築構成

1－1．下屋敷御殿について記される高木家に関する文書群

1－2．下屋敷御殿の平面

1－3．2階の存在とその意匠

1－4．平面構成と行事の対応

第2節 下屋敷造営の経緯

2－1．「高木三館鳥瞰図」の分析からみる下屋敷の成立過程

2－2．造営の目的

第3節 下屋敷御殿の施設の性格

3－1．下屋敷御殿と天保御殿との類似と相違

3－2．類例からみる二階座敷を有する御殿の社会的位置づけ

まとめ

註釈

図版

第5章 結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99

第1節 本論の成果

第2節 今後の研究課題

関連発表論文および報告

謝辞

資料編

第 1 章

序論

第1章 序論

第1節. 研究の目的と背景

本論文は、史料と遺構の分析に基づく近世武家住宅の空間的な特質の解明を目的とした研究である。

江戸時代、領地（知行所）（註1）をもつ武家の当主は、幕藩体制における領主、封建社会における一族の家長という2つの性格を有していた。これら社会的な性格は、それぞれ公と私という語に置き換えることができ、武家が構えた屋敷に影響を与えた。その結果、当主が住まう御殿では、公に対応する政庁と私に対応する居宅という2つの役割を有する職住一体の住宅になった。さらに多くの武家は、知行所と江戸の双方に複数の屋敷を構えたが、これらの屋敷群も家中の男女や複数世代の住宅として、公と私の役割を分担することになったと考えられる。

このように公と私、2つの社会的な役割を持つ近世武家住宅を建築的に理解することは住宅史の重要な課題といえるが、その前提として各屋敷、各御殿が担う役割と建物との対応関係を把握することが必要であり、この関係の把握には実証的な分析が不可欠である。具体的には、平面・意匠・建築構成などの建築的実体と、当主や家族、家臣たちによる利用実態を実証的に明らかにした上で、導かれる建物と機能、相互の関係を分析し、御殿の室群が有する空間的な性格を把握する必要がある。

しかし、機能を理解する前提となる日常的な生活についても不明な部分が多く（註2）、時代ごとに建物が機能を変えていた事例も確認される（註3）。そのため従来用いられてきた、近世の空間概念である表と奥による建築的な理解の妥当性も再検証すべき問題となっている。

また、武家住宅は社会的地位や石高の相違に基づき、規模と構成が多様であるが、従来の建築史研究では、対面儀礼で中心的な役割を持つ書院座敷に注目した様式史的な視点に重点がおかれ、御殿の建物群全体を把握した上での、共通する平面構成の原理を解明することは十分におこなわれてこなかった。

さらに、上屋敷や下屋敷など、併存した複数の屋敷各々の役割と施設としての性格を知る上で前提となる建築的な類似や相違、相互の関係については整理されていない。このように既往の研究の検討から、近世武家住宅の空間的な特質を理解する上で浮かび上がる、

ア) 御殿の室群の空間的な性格

イ) 平面構成の基本原理

ウ) 複数の屋敷群の施設の性格の相違

以上の3つの課題について、本論文では考察をおこなっている。

第2節. 既往の研究

住宅史通史において、住宅の変遷を、住む人の生活との関連において論ずるという明確な視点をもったのは戦後になってからである(註4)。平井聖は対面・接客の際の用法を詳しく検討し、殿舎平面との対応を一殿舎一機能という関係で形式化した(註5)。この形式平面は座敷飾を備え御書院と称されることから、この様式を書院造としている。意匠や平面のみではなく、機能との対応関係から平面構成を明らかにした平井の総括的な研究以来、書院造の様式規定に関わるような大きな論考はみられない。近年の近世住宅研究はむしろ個別の実証的研究の深化に力が注がれている。

平井は住宅平面と機能との対応関係の分析から、婚姻・相続形態の変化、接客形式の変化など社会的な要因を重視し、住宅平面の変遷を辿っている。そして、住宅の中に公的、私的表向、私的内向という3つの領域概念を定め、各時代の住宅平面との対応関係を考察し、各時代の住宅様式の特徴を分析した(註6)。とくに近世武家住宅においては近世固有の領域である表と奥を公と私に対応させ、社会的な対面や主人の居所に用いられた表向の室群を対象に分析を行なっている。また、服部佐智子は平井の公と私を引用し、女性の生活空間という視点から江戸城本丸御殿大奥の御殿向の室群を対象に平面との対応関係を分析している(註7)。座敷飾を重視しつつ行為とともに分析を進めた服部は奥向の室群にも表向同様に公と私が存在し、公的表向、公的内向、私的表向、私的内向という4つの領域概念を定めた。しかし、平井と服部の分析は対象が局所的であることや、平井の指摘する公と私がどこまで汎用性をもちうるかが明らかになっていないなどの課題がある。

室群が持つ機能を明らかにするうえで重要なことは御殿の政庁や居宅における日常的生活を知ることである。しかし、近代の聞き取り調査などの結果からは室群の用途を僅かに確認できるのみで不明な部分が多い(註8)。また、近世固有の領域も、機能とどう対応しているか、境界がどこに位置するかなど不明な点がある。深井雅海が江戸城本丸御殿で指摘しているように(註9)、時代ごとの機能の変化によって居住者達が境界を錯綜して用いていた事例もある。また、モリス・マーティンが検討しているように、御殿拡大とともに機能が移り変わっていった小笠原家住宅などの事例もある(註10)。

このように、各事例で表と奥の設定条件に相違が予想される一方で、領域の整理は

従来からの重要な課題でもある。領域を整理するには具体的な事例から建築的実体として平面、意匠、建築構成を明らかにすること、御殿で行われる儀式や行事などから利用実態を明らかにすること、そこから領域が有する空間的特質を分析することが重要と考えられる。

第3節. 研究の対象と方法

本論文では、交代寄合衆と呼ばれる旗本である西高木家が知行地に構えた陣屋を分析対象とする。交代寄合衆の殿様は本妻や嫡子と共に在地し、自領の屋敷である陣屋に居住した(表 1-1)。規模は異なるが、妻子と同居する点では江戸城に居を構える將軍家と居住形態が類似し、武家として特殊な存在といえる(註 11)。一方で、石高で同様でありながら知行地には代官を置き、妻子ともに江戸住まいであった一般の旗本、あるいは家格として同列の位置づけであるが、正妻が江戸住まいであった大名、いずれとも居住形態は異なる。このように、交代寄合衆である西高木家の陣屋は、將軍、大名、旗本が構えたそれぞれの屋敷に対して共通する点と相違する点を有するが、政庁と居宅を備えた職住一体の住宅として近世武家住宅を理解する上では、指標となる事例と考えられる。

西高木家の概要については、筆者も刊行に携わった溝口正人著作の『岐阜県史跡 旗本西高木家陣屋跡 主棟等建造物調査報告書』(以後、報告書と表記)に依ることとし、ここでは簡単に触れることにする。

高木家は美濃国石津郡多良・時両郷(現在の岐阜県大垣市上石津町)を知行地として陣屋を構えた(図 1-1)。関ヶ原の戦い後に入部した際、高木家は三家に分枝して陣屋を構えた。三家は陣屋の位置から西家(2300石)、東家・北家(各1000石)と称され、さらに名字に屋敷の位置を重ねて西高木家、東高木家、北高木家と通称される(以後、この通称に従う)。三家はそれぞれ上屋敷や下屋敷など複数の屋敷を構えた(註 12)。陣屋の周囲には武家地(註 13)や町地(宮坂本町)が形成され、伊勢街道が南北に通り、小規模な城下の形態を示す(図 1-2)(註 14)。陣屋跡地には、寛政年間(18世紀末)の『農州旬行記』にも記述がみられる石垣(註 15)、西高木家の墓所群、天保3年(1832)造営の西高木家上屋敷御殿の一部が遺構として現存する。平成26年10月6日には「西高木家陣屋跡」として国の史跡に指定された。

このような、高木三家の知行地支配、家政、勤役などを記した文書が、『高木家文書』および関連する文書群(以後、高木家に関する文書群と表記)である(註 16)。文献や屋敷図の一部は、報告書にまとめられているが(註 17)、本論文では新たな資料も加えて

500 点以上の文書の原典を解読し分析を行った。

本論文では、以上の西高木家陣屋に関する遺構と文書群をもとに、以下の分析作業を行う。まず、絵図に示された平面の室群について、部屋名、座敷飾などの舗設を整理し、現存遺構を参照して高さや意匠に検討を加え、建築的実体を平面上で明らかにする。さらに御殿の利用実態を儀式や御殿の改修の分析を通して把握する。

文献や屋敷図などの歴史的資料からは近世武家の住宅における生活の様子が明らかになり、時代を通じた検討が可能である本論文は、近世武家住宅を建築的に理解するための基礎的な研究と位置づけられる。

第 4 節．本論の構成

本論文は 5 章から構成される。序論と結論を除く 2 章から 4 章は前掲した各課題に対応している。第 2 章から第 4 章までの課題と構成を西高木家の御殿の変遷と照らし合わせれば図 1-3 のようになる。以下、第 2 章から第 5 章の概略を記す。

第 2 章では、移徙(引越)の儀式に着目し(註 18)、天保 3 年(1832)再建上屋敷御殿(以後、天保御殿と表記)の室群について機能に基づく領域での整理を試み、平面や屋内意匠に反映されている各領域の空間的性格について分析している。

第 3 章では、明治初期の上屋敷御殿(以後、明治御殿と表記)の縮小で実施された平面の改変と結果としての領域の再編に着目し、明らかとなる平面構成の原理を整理している。

第 4 章では、嘉永 5 年(1852)造営の下屋敷御殿(以後、下屋敷御殿と表記)について、平面からみる領域の整理をした上で、年中行事の舗設に着目し、意匠や建築構成での上屋敷御殿(天保御殿)との相違から導かれる施設的な性格を検討している。

第 5 章では、以上の結果をまとめ、西高木家陣屋の各御殿の平面、および上屋敷と下屋敷の相互の関係が、それぞれ公と私の関係で理解できること、さらには公と私との相違が、建築に反映されていたことを示し、江戸城を初めとする近世武家住宅の分析に、この把握を展開している。

また、第 1 章、第 2 章の章末に設けた附節では、報告書刊行以降に整理が進んだ文書や、存在そのものが新たに明らかになった文書から得られた新知見をもとに、西高木家陣屋の沿革の補足と建物に関する分析内容の報告を追記し、本文中に記述がおよばなかった部分を補足した。

附節．西高木家陣屋の沿革

西高木家陣屋の沿革については、すでに報告書で整理されているが、今回の調査から新たに得られた知見からはより詳細な部分が明らかになった。以下では、本論文執筆時点における調査結果を反映させることとし、報告書の記載事項に一部、加筆・修正を加え、天保3年(1832)の類焼から明治29年(1907)までの西高木家陣屋の変遷を再整理する。陣屋と人物の事蹟を表1-1の年表、各御殿の造営・改修の変遷については第4節で既に述べた図1-3としてまとめた。

従来、明確に把握されていなかった近世から近代に至る西高木家陣屋の変遷については、『高木家文書目録』(註19)で概観されている。さらに屋敷地の現状と比較しつつ『高木家文書』をもとに整理したのが辻下榮一である。辻下の著書(註20)には、文政12年(1829)から明治までの屋敷の変遷を整理し、天保3年(1832)の西高木家陣屋の類焼、明治5年(1872)以降の屋敷・建物の削減と嘉永5年(1852)建造表門の現在地への移転、明治29年の主屋建造を指摘し、関係文書及び屋敷図の一部についても時系列順に言及している。報告書では、高木家に関する文書群の調査対象をさらに広げた分析により、天保3年再建の状況、明治5年の縮小の状況、明治29年の改修など、屋敷の変遷の実態が明らかとなっている。さらに本稿では、天保3年に再建した建物の実体、天保8年と嘉永5年の造営、安政4年の改修状況の詳細が明らかとなり、従来の見解を修正する部分も生じた。

附一 1．天保3年(1832)の屋敷類焼以前

天保3年(1832)3月4日、西高木家陣屋は、隣接する北高木家陣屋(北高木10代玄蕃貞金の屋敷)の火災に類焼して、表・奥の住居(上屋敷)と下屋敷が焼失した。事後の経緯は、文献A-020「御焼失一件日記【5-あ】」に記される。

焼失箇所は、幕府に「御類焼之覚」、尾張藩には「覚」として届を出している。「御類焼之覚」には、表奥御住居向不残、表御門、埋御門、裏御門、御土蔵、御長屋(3ヶ所)、御廐、御作事小屋、御稽古小屋、御下屋鋪御住居向不残、同所御門、御家中屋敷を焼失箇所とする。尾張藩に提出した「覚」は類焼後数日を経ており、より多くの焼失物件が記されたものらしい。幕府に届けられた「御類焼之覚」の内容とは幾点かの相違をみる。また幕府宛ての「御類焼之覚」とともに江戸の高木修理屋敷(西高木家江戸屋敷)に送った書状の中身に「別啓本文ニ御土蔵不残と申進候得共御蔵式三ヶ所并御客屋者相残り申候」と記されていて、主要な殿舎はほぼ焼失したものの、土蔵2、3カ所と「御客屋」は類焼を免れている。

なお、絵図A-001「[屋敷絵図]【47】」(図1-4)の西高木家陣屋入口の南には、朱墨

で記される建物の間取りと、間取りの際に「土蔵造 客館」「安永年中玄関前客家之替二建立」「明月閣之称有額」という書き込みが確認できる(図 1-5)。建物名称、建造年代、火災に強い土蔵造という建物の仕様からは、安永年間(1722-1780)建造の「御客館」(明月閣)が、焼け残った「御客屋」とみることができる。また、文献 A-001「御客屋木割【188】」という文献は年代未詳ながら、「御客屋」との関連性が類推できる。

天保3年類焼以前の陣屋の建物構成を描いた絵図と考えられるものに、絵図 A-001「〔屋敷絵図〕【47】」、絵図 A-002「御屋敷図面入【4】」(図 1-6)、絵図 A-003「西館絵図【10】」(図 1-7)、の3点がある。

絵図 A-001 は全長約 2.8mに及ぶ大図面で一間を6分で描く。前掲2つの屋敷図には記載のない下屋敷も含んだ広範囲の屋敷図で、高塀や石垣、土手など外構状況を色分けする。年号に関する記述はないが、6尺3寸の竿により実測した、ある時点での実態図である。建築に関わる記述では畳枚数、部屋名、柱の位置を記す。張り紙が多い点で、数次の改変が確認できる。絵図 A-002、絵図 A-003 に描かれる奥廻りの棟がない。「客館」にみられた「安永年中」という記述から、この屋敷絵図は少なくとも安永以前のものであるといえる。

絵図 A-002 は全長約 1.4mの家相図で、文政11年(1829)9月という年紀と各部屋の規模をあらわす畳枚数、一部の部屋名、方位を記す。

絵図 A-003 は全長約 2.3mの家相図で、黒と朱の墨で部屋名を書き分け、方位を記す。図中には文政13年、包紙には天保3年と年号を記す。

絵図 A-001 には絵図 A-002 と絵図 A-003 に記される「奥居間」が存在しないなど「奥」の部分に違いが見られるが、絵図 A-002 と絵図 A-003 は北側土蔵の相違以外はほぼ同様である。永年にわたる書き込みや張り紙を施す絵図 A-001 は、3つの屋敷図の中で最も古く、その時々の変更を示した現況図であり、絵図 A-002 と絵図 A-003 は「奥居間」増築以後の計画図あるいは実施図と考えられる。これら3つの屋敷図に共通して示されるように、焼失前の西高木家陣屋の上屋敷御殿は、「表」「奥」「臺所」部分からなる点で天保御殿と同じ構成である。しかし、殿舎全体が雁行状に配置される構成は天保御殿と異なる。

なお、かつて主屋の北にあつて、損傷が大きく現在は解体されて部材の一部が残されている土蔵の棟札には、文政10年8月の年紀がある。この土蔵は天保3年の類焼を免れた2、3カ所の土蔵のうちのひとつとなる。

附一 2. 天保3年屋敷類焼直後の再建

上屋敷の再建工事を焼失後程なく開始したことが、工事入札に関する文献 B-032 か

ら文献 B-049、絵図 B-001、絵図 B-002「御建前三棟諸職人ヨリ之請書類也【6-あへと】」に記される。屋敷類焼から1ヵ月半程後の天保3年(1832)4月20、21日頃に、「御臺所」、「御中奥」、「表書院」、「裏書院」、「御居間」、「御長屋御門」などを対象とした屋敷「普請」の入札をおこない、入札から約2週間後の天保3年5月7日が新始であったことが確認できる。

文献 B-005「御普請中諸職人諸色勘定帳【5-か】」には「御臺所棟請負 棟梁 吉田武太夫 三宅兵吉 三輪弥五郎」「御臺所棟 百八拾四坪」、「大奥御建前請負人 濃州高須住 大工 吉兵衛 円吉 利兵衛」「御建前坪数百三拾八坪」、「表御座之間御建前請負人 江州樋口村 大工 伊兵衛」「御建前坪数百拾坪」と造営した建物、大工、建坪についての記述があり、入札文書の表具師、昼職人、左官職人の事項には多数の部屋名を記す。類焼直後に造営された屋敷が「御臺所棟」、「大奥」、「表御座之間」という構成であったこと、それぞれの坪数、さらに部屋名の概要がわかる。本稿執筆に関わる調査時には天保再建直後の屋敷を示すと考えられる絵図 B-003「屋敷絵図」(図 1-8、以後、天保再建屋敷絵図と表記)がみつかり、詳細な分析については第2章の附節で述べる。

入札から約8ヵ月後の天保3年12月13日には、西高木一家が新築になった上屋敷に引っ越しする。文献 B-031「御家移ニ付取扱一件【106-う】」には「御引移御順」として殿様と奥様をはじめとした家族が仮住居から新屋敷の大奥御対面所に御着座するまでの経路が記される。以上の経路は天保御殿について考察するうえで重要な記述であるため、部屋名とともに第2章で検討を述べる。

なお、報告書では年紀のない絵図 J-001「長屋門建絵図【2】」について検討している。絵図 J-001 は正面右側に格子を描く長屋門の立面図で、左側に側立面を重ねて描く。屋根および軒付けの描写は瓦葺きではなく檜皮葺や柿葺のようなおさまりである。報告書では、絵図 A-001 で描かれる類焼前の上屋敷表門と嘉永造営の下屋敷御門(後述する、現存表門)との平面の相違を指摘した上で、番所を右に突き出す構成や規模が、絵図 E-007「上石津郷土資料館所蔵絵図」(後掲、以後、安政屋敷絵図と表記)に描かれる上屋敷の表門に類似するとしている。しかし、今回の調査では天保再建屋敷絵図を含む上屋敷表門の検討から、天保再建時の仮表門から絵図 C-001「三高木館鳥瞰図」(図 1-9、以後、鳥瞰図と表記)の冠木門に建て直される際の計画案の可能性を考慮するに至った。仮表門、鳥瞰図の冠木門、安政屋敷絵図(図 1-10)の表門の比較については、第2章の附節、第4章の第2節で述べる。

附一 3. 天保 8 年(1837)の造営

天保 8 年 12 月の日付が入る文書に、文献 C-001「御作事方諸職人并ニ品々御払書出し【10】」、文献 C-002「諸色御入用下調【11】」の 2 つがある。これらの文書のうち文献 C-002 は「若殿様御部屋」の造営にかかわるものらしく、規模を「桁行八間二張(梁のこと)四間」で「三拾貳坪余」と記す。用いられた畳は「御畳四十二畳半」であったことが確認できる。問題となるのは、「若殿様御部屋」を造営した場所である。天保御殿内には「三拾貳坪余」を納める余地がない。ところが、天保再建屋敷絵図では空閑地である天保御殿の北側に、鳥瞰図では建物があることが確認できる。よって、天保再建屋敷絵図にみられた空閑地に「若殿様御部屋」を造営した可能性が高い。また、表 1-1 からは後の 12 代貞広に関する建物であることが分かる。弘化元年(1841)には貞広室が入興しており、若殿様家族の独立した居宅として「奥」に位置づけられる場所に造営されたと考えられる。「若殿様御部屋」の分析については第 4 章の第 2 節で詳細を述べる。

附一 4. 嘉永 5 年(1852)の造営

文献 D-044「〔下屋敷建前につき覚】【30】」には「嘉永五壬子年二月廿三日御下屋敷御建前同御門共今日新始ニ付」と記される。下屋敷御殿とその御門を嘉永 5 年に造営したことがわかる。文献 D-101「御下屋敷御普請中日記【60-あ】」により嘉永 4 年 11 月付け「御下屋敷御普請」に関する内容が確認できる。天保御殿の「臺所棟」を請け負った大工と同一名である「吉田武太夫」「三輪弥五郎」の請負書が掲載され、下屋敷御殿は「御建前壹ヶ所 桁行拾九間五尺三寸五分 梁行九間一尺貳寸」という規模であったという。同文献によれば、御門の柱立は嘉永 4 年 11 月 13 日である。第 3 章第 3 節で述べるように下屋敷御門と判断される現存表門の棟札には、嘉永 5 年 11 月の年紀が入り大工棟梁として「吉田武太夫」「三輪弥□□(五郎ヵ)」の名を記す。

この嘉永の造営に関して注目できるのは、嘉永 5 年 9 月付けの文献 D-047「御下屋敷御地面江奥御新御殿御引去り御普請御棟揚御規式并ニ御柱建初メ御規式共御調帳【114】」である。表題をそのまま採るならば、下屋敷の敷地へ奥御新御殿を曳いたことになる。天保御殿が造営されてから下屋敷御殿の造営が始まるまでの間、人が住む御殿などを造営した記録は「若殿様御部屋」以外確認できていない。そこで、天保御殿の「奥」に建造された「若殿様御部屋」を「奥御新御殿」にあて、「若殿様御部屋」を下屋敷へ曳き、さらにこれをもとに下屋敷御殿を建造したとみるならば、現存資料にもっとも整合することになる(図 1-3)。このような「若殿様御部屋」と下屋敷の関係、造営の要因、そして下屋敷の施設的な性格については第 4 章で述べる。

附一 5. 安政4年(1857)の改修

嘉永5年(1852)の普請から5年後の安政4年6月付けで上屋敷と下屋敷の改修が確認できる。下屋敷御殿の平面を唯一描く史料として、安政屋敷絵図には上屋敷(図 1-11)とともに、下屋敷(図 1-12)を記載する。御殿、御門、土蔵などを記し、畳割および畳枚数・「床」・「棚」・「押入」などを書き込む。安政4年9月に貞広は妻を迎えており(表 1-1)、そのための改修と考えられる。

包紙に「安政四年 五年 御上屋敷 御下屋敷」と記す絵図 E-001 から絵図 E-006 「新規御普請下絵図入【218-け〜せ】」はこの改修に関する図面一式を納める。天保御殿の奥棟北面諸室を描くいずれも安政屋敷絵図によく相応することから、大奥居室や下屋敷玄関・臺所周りの改修を示すものと確定できる。

絵図 E-001 「〔屋敷図〕【218-け】」、絵図 E-002 「〔屋敷図〕【218-こ】」は天保御殿の奥棟北面諸室を描いたもので、絵図 E-002 には家相を見るための方位が朱墨で入る。特に絵図 E-002 には「朱印新規御目論見也」との記述があり、黒墨による記載が既存で、朱墨による記載が新規造営部分であることがわかる。黒墨で描かれる北面雪隠には朱墨で「是所之雪隠此被取拂之事」と記す。この取り払われるべき雪隠が安政屋敷絵図では描かれておらず、安政屋敷絵図は安政の改修以後の様子を記したものとなる。

臺所および玄関廻りを記す絵図 E-003 「〔屋敷図〕【218-さ】」は、安政屋敷絵図との比較から下屋敷御殿の臺所と玄関周りを描く。同様な比較から、絵図 E-004 「〔屋敷図〕【218-し】」は天保御殿の東側に位置する長屋を描くとわかる。ただし南面は両者で相違し、安政屋敷絵図では白州となっている。絵図 E-004 では高屏と入口が設けられ、土間となっており、縁にも相違がある。白州と式台を描く絵図 E-005 「〔屋敷図〕【218-す】」は、上屋敷であるか下屋敷であるか判断できない。

絵図 E-006 「〔屋敷図〕【218-せ】」は、上屋敷の外形腺を描く家相図である。安政屋敷絵図の天保御殿の外形線に酷似しており、「表」「奥」「臺所」の3棟構成で、表棟と奥棟の西側がL字型廊下で繋がれる点が一致する。なお、絵図 E-001、絵図 E-002、絵図 E-006、安政屋敷絵図の4図ともに奥棟東面に縁が回るから、安政の改修前後ともに天保御殿の奥棟と臺所棟は縁を介した別棟の建物となる。

附一 6. 万延から明治初期までの修復

万延から明治初期までの期間は大きな改修はなく、部分的な修理に関する記録が確認できるが、詳細については不明なものが多い。文献 F-001 「御破損所御修復向欠所附覚【70】」の表紙に「万延元年 大雨ニ付御破損所修復向欠所附覚 申五月十一日 森代助 平塚忠四郎」と記され、万延元年(1860)に大雨被害に対して、生垣や塀など

外構廻りの修復をおこなっている。

家屋敷関係に分類されて慶応の修復に関すると考えられる文書に慶応元年（1865）12月付けの文献 F-016「諸色御払物書出帳【133】」、慶応3年正月付けの文献 F-024「所々御修覆向積立帳【78-あ】」、慶応3年11月付けの文献 F-025「御中口東御普請仕法帳【78-い】」、慶応4年4月付けの文献 F-026「所々御修覆向書付覚帳【79】」の4点が存在し、建物の修復に関する文献と考えられる。文献 F-024「所々御修覆向積立帳【78-あ】」の記述内容からは、高木家菩提寺である「正林寺御門」の修復と、部屋名から推察できる天保御殿の修理に関する文献と考えられる。天保御殿では「御茶之間」の煙出し窓の取り付け及び「御書院」より「竹之間」の雨戸敷の修復をしたようである。

慶応4年の修復と同様のものと考えられる明治元年（1868）の文献 F-028「御作事御入用諸色御払物扣帳【138】」と文献 F-029「御作事御入用諸色御払物扣帳【139】」は、職人の作料を記す以外、具体的な内容は不明である。

附一 7. 明治5年（1872）以降の屋敷規模縮小

明治2年、貞広は所領を返上した。この時期西高木家は明治政府に対し、様々な働きかけをおこなったが官職を得ることはできなかった（註21）。明治4年8月には貞広が死去して、養子の貞正が跡を継ぐ。以後、屋敷規模を縮小していく。明治5年以降の文書には、建物から道具類に至るまで、売り払う内容のことが多い。

明治5年4月時点で下屋敷が存在したことは、文献 F-033「御下邸御修覆諸入用留記【9-あ】」および文献 F-035「御下屋敷御修覆凡積り帳【10】」から明らかである。明治5年4月14日～同6年5月18日の日記である文献 G-001「〔日記】【1】」には「四月十四日下屋舗住居」「元家来参ル」の記述が確認できる。この頃貞正は下屋敷を住居としていたことがわかる。

明治5年6月付けの文献 F-034「奥御館并御勝手御館御建前向取調覚帳【9-い】」には、当時の「奥御殿」と「御勝手館」の規模を記す。「奥御館」は「御対面所之部」「御中奥之部」「御北之間之部」「奥御部屋」からなり、部屋名と畳枚数を記す。これらの部屋名は天保3年（1832）に屋敷が類焼した直後とほぼ同一であり、「奥御館」は天保御殿の「奥棟」とみてよい。同文書に「御臺所屋南也 壁際より北迄御取拂 京間六尺三寸 桁行拾七間 梁行七間 此坪百拾九坪」と記されていて、「御勝手館」は天保御殿の「御臺所棟 百八拾四坪」のうち南半部に相応し、残す計画だったようである。ただし1ヵ月後となる明治5年7月8日付の文献 G-002「差上申御請書之事【186-あ】」には「御屋敷御建前之内御臺所壹棟畳建具右不残御拂」とあり、後に臺所棟はすべて撤去と決まっただけである。（註22）このような屋敷の縮小の背景には第3章第1節で述べる

桑原応助という人物が関与していたらしい。また、報告書の時点では明らかにされていなかった、明治御殿の平面を直接的に示す屋敷絵図がみつかった。この「明治七年甲戌二月廿八日認之」と年紀を記す絵図 G-004「〔建物図面〕【583】」(図 1-13) は類似する平面を同じ縮尺で並べて描く。左側は天保御殿の奥棟部分と同じ平面を記すのに対し、右側には同じ奥棟の平面ではあるが、朱墨や貼紙などによる修正を加えている。この絵図については第 3 章第 4 節で検討している。

屋敷全域の改編を記したのが、明治 6 年 6 月付けの文献 G-017「御屋敷御主法之覚【81】」である。「御上屋敷之内奥向御繕ニテ御住居ト御治定相成候」、「御表始御不用之分不残御拂跡敷地御開拓之旨」、「御下屋敷も御拂相成候ハハ御下屋敷之御門御引被遊候」など、天保御殿の「表」などを取り払い「奥」を繕い住居とすべきこと、下屋敷も取り払い、御門を上屋敷へ引くべきことを記す。屋敷地再編の計画図と思われるスケッチも挿入する(図 1-14)。この頃に再編の方針が定まったらしい。

明治 7 年(1874) 3 月付けの文献 G-020「御上邸修覆諸入用留【16】」は「茶之間」や「臺所」の取繕いに関する文献で、「茶之間煙出シ窓打繕」などの記述がある。臺所棟撤去をうけて、旧奥棟の一部を台所や茶の間に改修したことがわかる。屋敷整理の最終段階となる(註 23)。

以後も、「御物置」(文献 G-003「差上申御請書之事【186-い】」)、「御長屋」(文献 G-004「差入申御請書之事【186-う】」)、「御門南長屋」(文献 G-005「奉差上御請書之事【186-え】」)、「御建家壹忝」(文献 G-006「御請書一札之事【186-お】」)、「御土蔵壹ヶ所」(文献 G-007「御約定証書之事【186-か】」)の払い下げが続く。

文献 G-020「〔家売り払い覚帳〕【187-い】」には「明治六年十二月十八日」と日付を記し、ひとくくりの文献 G-019「奥畳払之分【187-あ】」には「奥畳払之分」、「表畳払之分」で売り払われた畳の枚数を記す。この頃に表部分も売り払われたと考えられる。

明治 8 年 10 月 16 日からという日付がある文献 G-024「表御書院跡并集義館前開発ニ付人足名前附留帳【492】」からは、この時点で表棟が存在しなかったことが明らかになる。当時の当主である貞正の日記、文献 G-027「日記【14】」によれば、こうした払下げ行為は明治 27 年まで続いたようである。

以上、明治 5 年以降の屋敷払下げにより、旧奥棟を中心に屋敷を再編する。この状態に関連する屋敷図と推定できるのが絵図 G-006「〔屋敷図〕【44】」である(図 1-14)。文字や線描の形式から近代の図面と判断される「五百分一縮図」の配置図である。主屋は文献 F-034 に記される「奥御館」の規模と近似し、外形は安政屋敷絵図上屋敷部分の奥棟にほぼ一致する。この主屋は天保 3 年造営以来の「奥棟」部分と考えてよい。

奥棟の位置に変更はないが、外形線で記される屋敷地は北半部に縮小し、門も安政屋敷絵図とは異なった位置、規模となっている。ただし、昭和 42 年頃には敷地東端に沿って長大な長屋が建ち、絵図 H-003 や絵図 I-001 に描かれるが、家相見の方位が入るこの図には描かれない。計画図であり、附属屋などは実体と相違する可能性もある。

なお絵図 G-006 には屋敷地東端に養蚕室を描くが、後述の絵図 H-006 にも同じ建物を描き、実際に建設されたと考えられる。現存主屋の床にも、何カ所か養蚕の炉が切られている。また文献 G-017 の挿入図には茶園開拓を示すが、この時代、高木家の家計を支える生業の試行錯誤が伺える。第 3 章第 3 節で述べるとおり、主屋南西には正方形に近い外形の「茶席」が描かれる。後述の通り嘉永造営下屋敷東庭の茶席に相応するものと考えられる。なお、報告書の時点では、絵図 J-006「屋敷立体絵図【28】」や絵図 J-007「屋敷立体絵図【29】」は、この茶席に関する図面とも思われていたが、今回間取りを再検討したところ、下屋敷の茶室とは異なる平面であることが明らかになった。

附一 7. 明治 29 年(1896)の改修

明治 29 年 2 月 13 日付けの文献 H-001「御受書【204-あ】」には「御屋敷切組み直しツギ出し玄関廁共製図之通り」との記述が、文献 H-002「受証【204-い】」には「旧御建物コボシ」との記述が確認できる。明治 29 年建造の現存主屋は単純な新築ではなく、明治 5 年以降主屋となった天保再建の「奥御館」を、一部を切り組み直すことにより縮小したものであることがわかる（註 24）。明治 5 年に主屋とした奥棟がどのような変遷をたどったかは明らかではないが、明治 24 年の濃尾地震で被害を受けた可能性もある。この他、同文献により土蔵 5 カ所と長屋の曳家を記し、文献 H-002 には旧建物取り壊し代金とともに土蔵 5 棟、長屋 1 棟、御茶席 1 棟の曳家を計上している。

貞正は明治 13 年から 26 年まで上石津郡長を務め、明治 27 年第 3 回衆議院選挙で衆議院議員に当選する。屋敷地の整備はこのような要因に基づいていた可能性もある。現存主屋の棟札（地鎮時のものか）には「明治廿九年八月廿二日」の年紀があり、上石津郷土資料館に所蔵される上棟棟札（旧位置は不明）には「明治廿旧九年十一月十一日」の年紀を入れるため、工事の進捗状況がわかる。また発見棟札には「愛知縣名古屋市関鍛冶町二丁目三拾九番戸 棟梁 吉田鎌三郎」とあって、明治の一連の作事に関わる大工の吉田鎌三郎は、当時名古屋在住であったことがわかる。吉田鎌三郎は、先述した天保 3 年類焼後の造営において臺所棟、嘉永 5 年の造営では「下屋敷」及び「御門」に携わった「吉田武太夫」の後裔である可能性が高い。

現存遺構は、10 畳・8 畳・6 畳に床・付書院を構え入側がつく書院座敷と、台所部

分を備えた東西棟の建物（以後、書院座敷棟と表記）に、式台玄関・茶室・10 畳二間の座敷を備えた南北棟の建物（以後、南座敷棟と表記）が南から取り付く構成になっている。

現状は風雨による損傷から書院座敷棟の棟筋から北側を切損しているが、報告書では遺構から確認できる痕跡と絵図の検討から改修当時の平面を復元している（図 1-15）。現存遺構の平面および、復元平面と全て一致する屋敷絵図は確認できていないが、東西棟の建物と、南側に直交して取り付く棟の 2 棟構成が類似し、東西棟の建物は書院座敷棟の現状平面と一致する絵図 H-014 「〔屋敷図〕【17-け】」、計画図か実施図かは不明であるが、現存主屋と酷似する立面図である絵図 H-020 「〔屋敷図〕【27】」など、明治 29 年の改築に関する屋敷絵図の存在が確認できる。

先に述べたとおり、現存遺構は明治御殿を改修した建物である。これはつまり、天保御殿の奥棟を再構成したものであることを意味する。奥棟と現存遺構との関係について、報告書では、安政屋敷絵図との比較から検討している（註 24）。書院座敷棟は、殿様の居室である「御中奥御居間」を中心に、奥様の居室群などを含む大奥の室群と平面が一致する。また、南座敷は、奥棟の南面に位置する「大奥御御対面所」のうち、南向に床を構える「御次」15 畳と入側部分に該当し、間仕切り位置を変更し、10 畳 2 間に改修したとしている（図 1-3）。また、書院座敷棟西側に廊下を介して接続する茶室は平面の類似から下屋敷御殿の茶室を曳家したと考えられる（註 25）。

参考文献

- 1) 新見吉治：旗本 日本歴史叢文，吉川弘文館，1967
- 2) 永島今四郎，太田賛雄 編：千代田城大奥 上下，朝野新聞社，1892
- 3) 旧東京帝国大学史談会編：旧事諮問録，青蛙房，1965
- 4) 深井雅海：江戸城一本丸御殿と幕府政治，中央公論新社，2008
- 5) 大和智：日本住宅史，建築史学 第3号，pp146-160，1984，9
- 6) 平井聖：日本の近世住宅，鹿島出版会 SD 選書，1966
- 7) 平井聖：日本住宅の歴史，NHK ブックス，1974
- 8) 服部佐智子，篠野志郎：江戸城本丸御殿大奥御殿向における殿舎構成の変遷と空間構成について，日本建築学会計画系論文集 第74巻 第641号，pp1631-1640，2009. 7
- 9) 服部佐智子，篠野志郎：享保期から万延期に至る江戸城本丸御殿大奥御殿向内の御用場からみた将軍家における生活空間の変容，日本建築学会計画系論文集 第75巻 第653号，pp1735-1743，2010. 7
- 10) 服部佐智子：享保期から万延期に至る江戸城本丸御殿大奥御殿向内の座敷飾による各殿の格，日本建築学会計画系論文集 第77巻 第675号，pp1207-1214，2012. 5
- 11) 服部佐智子：弘化期・万延期における江戸城本丸御殿大奥御殿向の室内意匠による各殿舎の格，日本建築学会計画系論文集 第79巻 第697号，pp789-797，2014. 3
- 12) 重要文化財小笠原家住宅修理工事報告書，飯田市，1970
- 13) モリス マーティン・N：小笠原家 江戸時代旗本屋敷の復原，日本建築学会大会学術講演梗概集 NO. 9013，pp667-668，1986，8
- 14) 西田真樹：交代寄合美濃衆高木家年中行事-春-，宇都宮大学教育学部紀要 第41号 第1部，pp29-41，1991. 3
- 15) 西田真樹：交代寄合美濃衆高木家年中行事-夏-，宇都宮大学教育学部紀要 第42号 第1部，pp51-60，1992. 3
- 16) 西田真樹：交代寄合美濃衆高木家年中行事-秋-，宇都宮大学教育学部紀要 第43号 第1部，pp35-53，1993. 3
- 17) 西田真樹：交代寄合美濃衆高木家年中行事-冬-，宇都宮大学教育学部紀要 第44号 第1部，pp69-81，1994. 3
- 18) 可児市史 第2巻 通史編 古代・中世・近世，2010
- 19) 名古屋大学附属図書館・付属図書館研究開発室：名古屋大学附属図書館 2009 年春季特別展(地域貢献特別支援事業成果報告)旗本高木家主従の近世と近代-高木家文書と小寺家文書-，2009

- 20) 上石津町編：上石津町史 史料編, 1975
- 21) 上石津教育委員会：新修上石津町史, 2004
- 22) 岐阜縣史蹟名勝天然記念物調査報告書 第三回, 岐阜縣, 1971
- 23) 樋口好古：『濃州徇行記』
- 24) 石川寛：高木三家文書の現状と課題－高木家文書調査報告 2013－, 名古屋大学附属図書館研究年報 第 11 号, 2014
- 25) 溝口正人編・執筆：岐阜県史跡 旗本西高木家陣屋跡 主屋等建造物調査報告書, 大垣市教育委員会, 2009. 3
- 26) 国史大辞典編集委員会：国史大辞典 第十四卷, 吉川弘文館, 2003
- 27) 名古屋大学附属図書館高木家文書調査室編：高木家文書目録 1－5 卷, 名古屋大学附属図書館, 1978-1983
- 28) 辻下榮一編著：入郷四百年記念 水奉行旗本高木家 交代寄合美濃衆, 2001
- 29) 石川寛：交代寄合高木家主従の明治維新, 名古屋大学附属図書館研究年報 第 8 号, 2009
- 30) 中村達太郎：日本建築辞彙〔新訂〕, 中央公論美術出版, 2011
- 31) 渋谷葉子：尾張藩江戸上屋敷の殿舎と作事――七世紀前半の様相――, 徳川林政史研究所研究紀要 第 38 号, 財団法人徳川黎明会, 2004, 3

註釈

- (註 1) 参考文献 1) p1 参照。「近世史徳川幕府時代には、幕府の法令では禄高 1 万石以上を大名といい、その知行所を領分というのに対して 1 万石未満を旗本といい、その知行所を知行所という」と記述がある。
- (註 2) 参考文献 2)、3) 参照。以上の書籍は、近代に入ってからおこなった江戸城本丸御殿などに関する、旧女中などからの聞き取り調査をまとめている。
- (註 3) 参考文献 4) pp116-121 参照。
- (註 4) 参考文献 5) 参照。
- (註 5) 参考文献 6) 参照。
- (註 6) 参考文献 7) pp208-215 参照。
- (註 7) 参考文献 8) から 11)。
- (註 8) 前掲(註 2) 参照。
- (註 9) 前掲(註 3) 参照。
- (註 10) 参考文献 12) 13) 参照。

(註 11) 参考文献 14) から 17) 参照。以上 4 つの論文には寛永 3 年(1750)から明治 3 年(1780)までの高木家が行った年中行事が記される。行事には若殿様や女性家族の参加するものもあり、在地での生活が確認できる。その他の事例として、参考文献 18) には幕府と尾張藩の両方に属し 4600 石の在地旗本であった千村家が久々利(岐阜県可児市)に構えた陣屋について記している。陣屋は上屋敷と下屋敷からなり、上屋敷は主人の居住と役所の機能をもち、下屋敷は隠居所や若殿様の居住に用いたとされる。

(註 12) 後出の文献 A-020「御焼失一件日記【5-あ】」(本稿第 2 章参照)によれば、西高木家が家中屋敷を御仮殿としたのに対し、出火元である北高木家は「下屋舗」に移ったと記され、北高木家にも下屋敷が存在し類焼を免れたことがわかる。また、東家については上屋敷、下屋敷、抱屋敷の屋敷図が残されている。

(註 13) 参考文献 19) によれば高木家領の兵農分離は文政 8 年(1825)に家政改革の一環として行われている。この時、家臣 12 名には高木家屋敷近辺への屋敷移転を命じており、武家地形成の一因になったと考えられる。

(註 14) 「上石津町基本図」(平成 8 年)を下図とし、天保 8 年から嘉永 5 年の状況を描いた(本稿第 4 章第 3 節参照)、絵図 C-001「高木三館鳥瞰図」(参考文献 20)21)) 所収、第 1 章附節参照)、安政 4 年以後の状況を描いた絵図 E-007「上石津郷土資料館所蔵絵図」(本稿第 1 章附節参照)、絵図 B-003「〔屋敷絵図〕」(本稿第 1 章附節および第 2 章附節参照)、「明治廿一年五月調 上石津郡宮村字繪圖 養老郡多良村大字宮」、「多良高木家陣屋址圖」(参考文献 22)所収)の比較により作成した。「高木三館鳥瞰図」には西高木家陣屋の南西に複数の建物が描かれるが「上石津郷土資料館所蔵絵図」には同位置に家中屋敷という書込みがあり、武家地の範囲が推定できる。

(註 15) 寛政年間(1789～1801)の編纂とされる参考文献 23)の「美濃国御領分岐阜奉行所部」のなかには多良村に関する記事があり、高木家陣屋について「館を山の峰に構へ下よりみあげ、殆んど城郭に彷彿たり、家中屋敷も続いてあり」と記す。

(註 16) 参考文献 24) 参照。現在名古屋大学附属図書館には、総点数 10 万点に及ぶ資料が収蔵保管され、5 万 2 千点については目録 5 巻が刊行されており(第 1 期)、平成元年からは残された書状・書付類数万点の整理がされ(第 2 期)、補遺文書は 1 万 6000 点余りが整理されている。現在も附属図書館研究開発室を中心に、残る書状類の整理及び関連史料の調査・研究が進められている。文献・屋敷図には附属図書館独自の整理番号が当てられている。

上記以外の高木家に関する文書として、西家に関する文書は大垣市教育委員会や個人の所蔵、東家に関する文書は徳川林政史研究所、蓬差文庫、個人の所蔵、北家に関する文書は個人の所蔵が確認されている。

(註 17) 参考文献 25) 参照。

(註 18) 参考文献 26) によると「移徙」は「貴人の転居を敬つていう語」とされ、吉日を選び、担当者(行事)を定めて行う点が、貴族社会の行事一般の例と同じであるとしている。西高木家の天保御殿の場合、文献からは「移徙」という言葉が確認できなかった。しかし、嘉永の下屋敷御殿再建のときには「移徙」が用いられること、江戸城など他の武家住宅でも用いられることから「移徙」を用いた。

(註 19) 参考文献 27) 参照。

(註 20) 参考文献 28) 参照。

(註 21) 参考文献 29) 参照。

(註 22) 文献 G-038「主法帳【590】」には表棟の桁行と臺所棟の梁間寸法を足した規模を「表一棟」としている。臺所棟に属し、表棟に隣接する「御玄関之間」や「使者之間」までが取払いにおける対象になっていたと考えられる。また、絵図 G-013「[建物図面】【588】」には天保御殿の奥棟と台所棟のみ描かれた配置図に台所棟の上に張り紙がされる。2つの史料からは明治御殿に旧奥棟を利用し、臺所棟の一部を残す計画であったことがわかる。

(註 23) 註 1 に同じ。

(註 24) 参考文献 30) の「切組」の項には「柱梁など諸材をその位置に取り付ける前に、必要に応じて枅を作り、孔を彫り、その他仕口などを準備すること」とある。よって、切り組み直すということは枅を加工し直して用材を組み立て直す意と考えられる。また、参考文献 30) には尾張藩江戸屋敷鼠穴邸の作事に切組が用いられたとある。

(註 25) 参考文献 25) 第 3 章第 1 節 pp29-32。

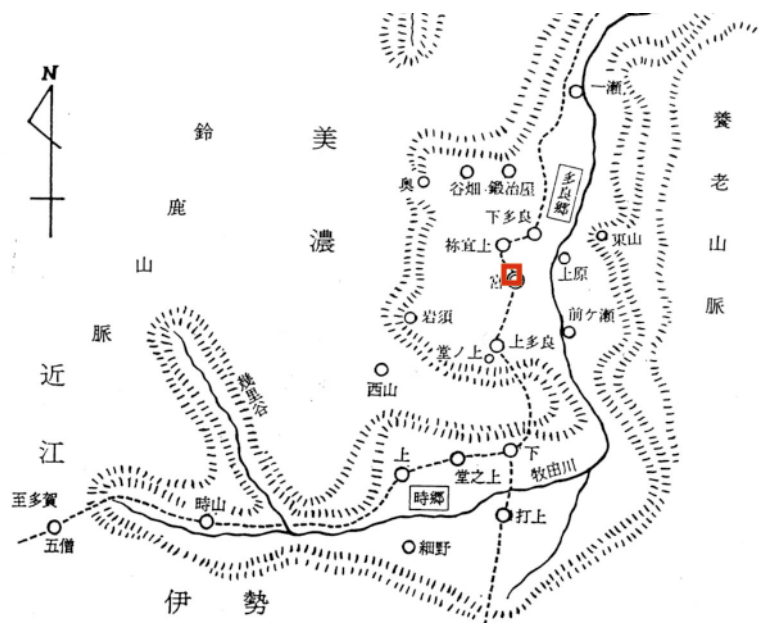


図 1-1 高木所領付近略図（赤口の位置は西高木家陣屋）

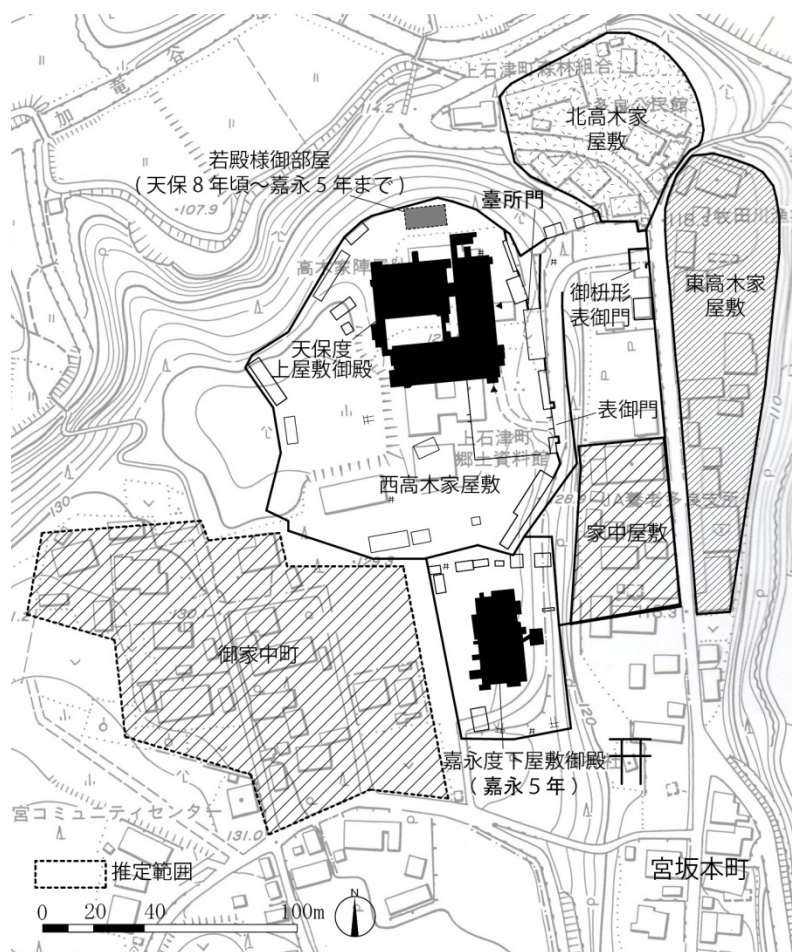


図 1-2 西高木家陣屋配置図

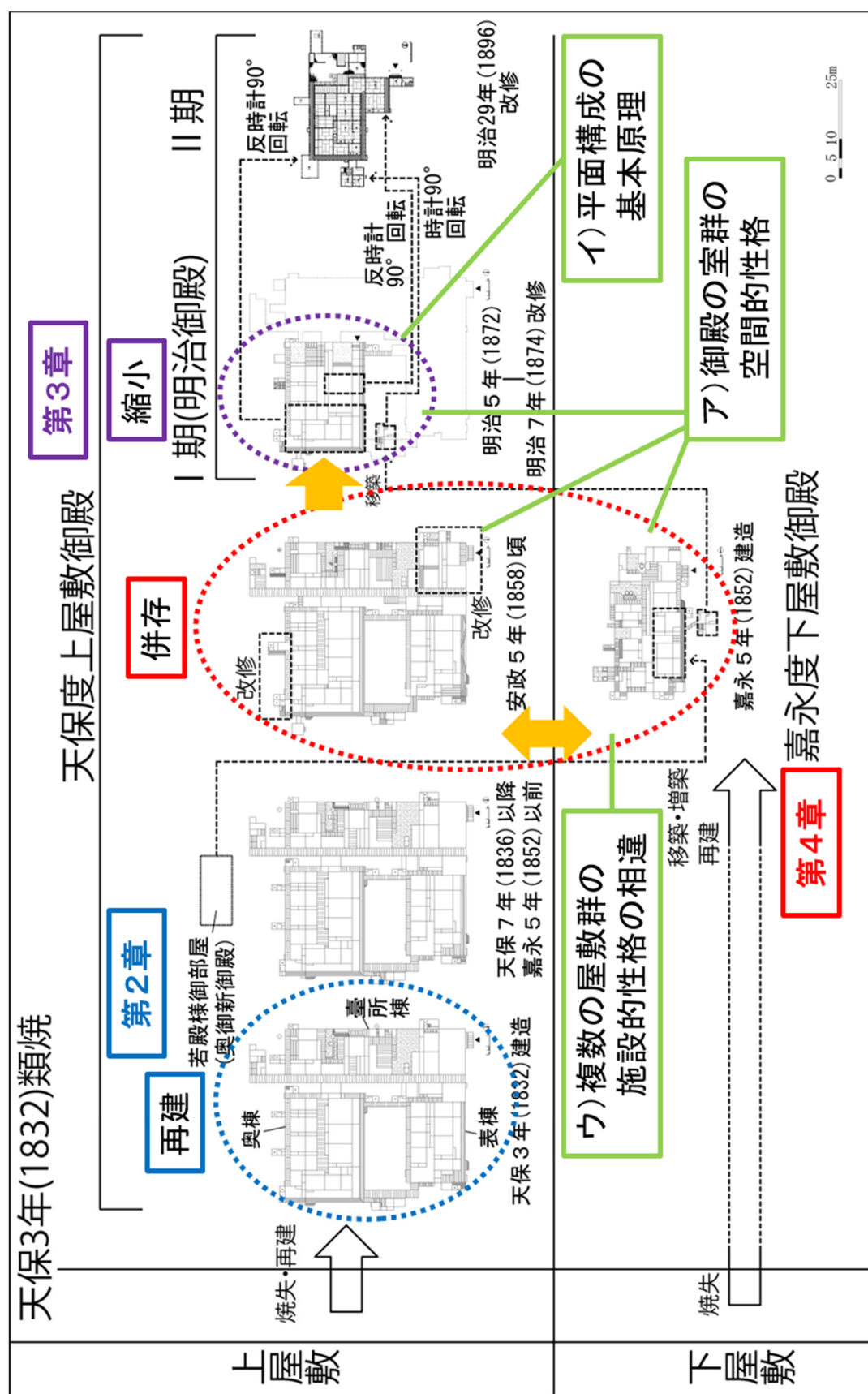


図 1-3 西高木家陣屋変遷図と各章の分析対象



図 1-4 「屋敷絵図【47】」(右手が北)

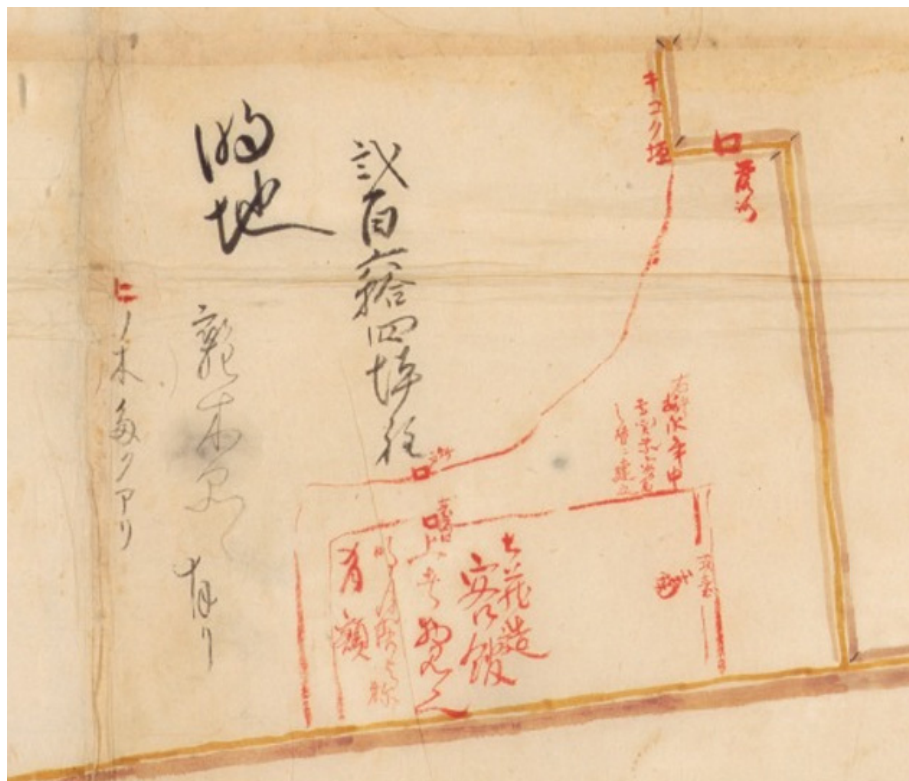


図 1-5 「屋敷絵図【47】」「客館」部分詳細



図 1-6 「屋敷絵図【4】」 (右手が北)

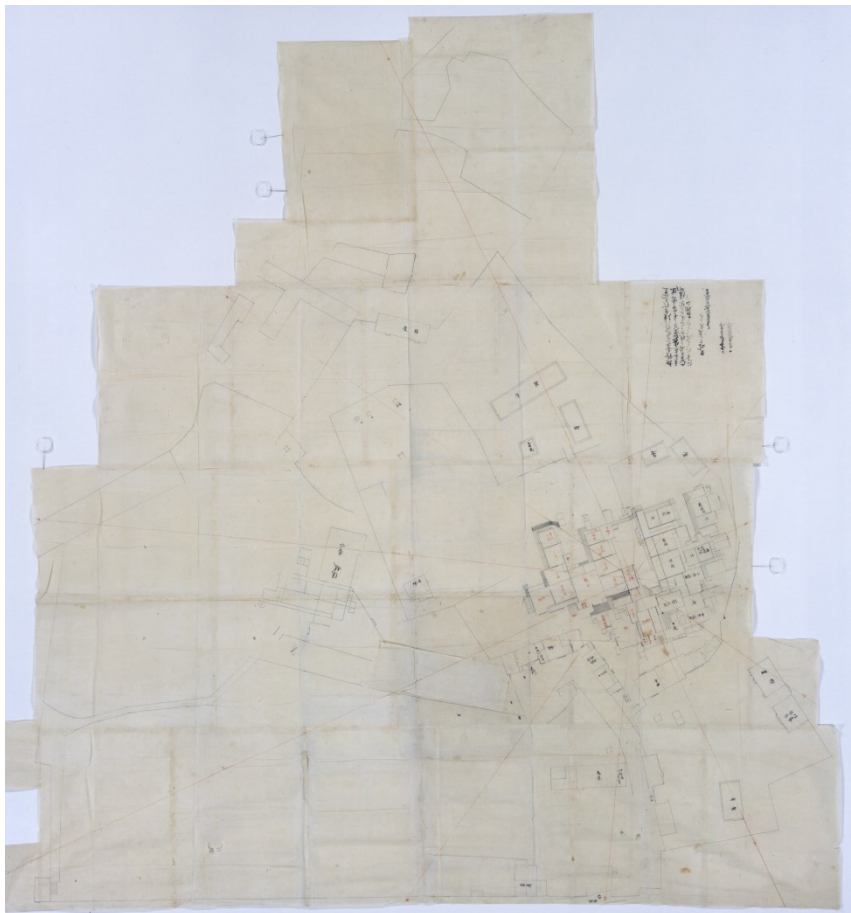


図 1-7 「西館絵図【10】」 (右手が北)



図 1-8 天保再建屋敷絵図（右手が北）

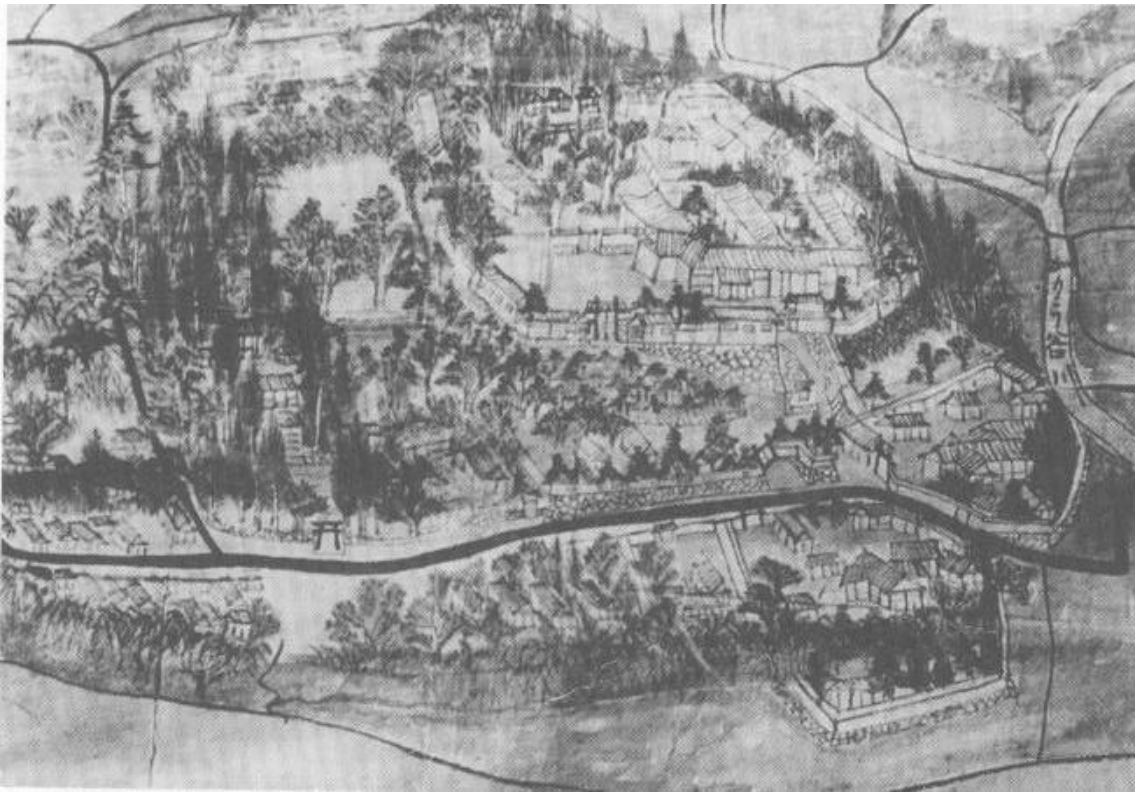


図 1-9 「高木三館鳥瞰図」（右手が北）（上石津町史 史料編, 1975 より転載）

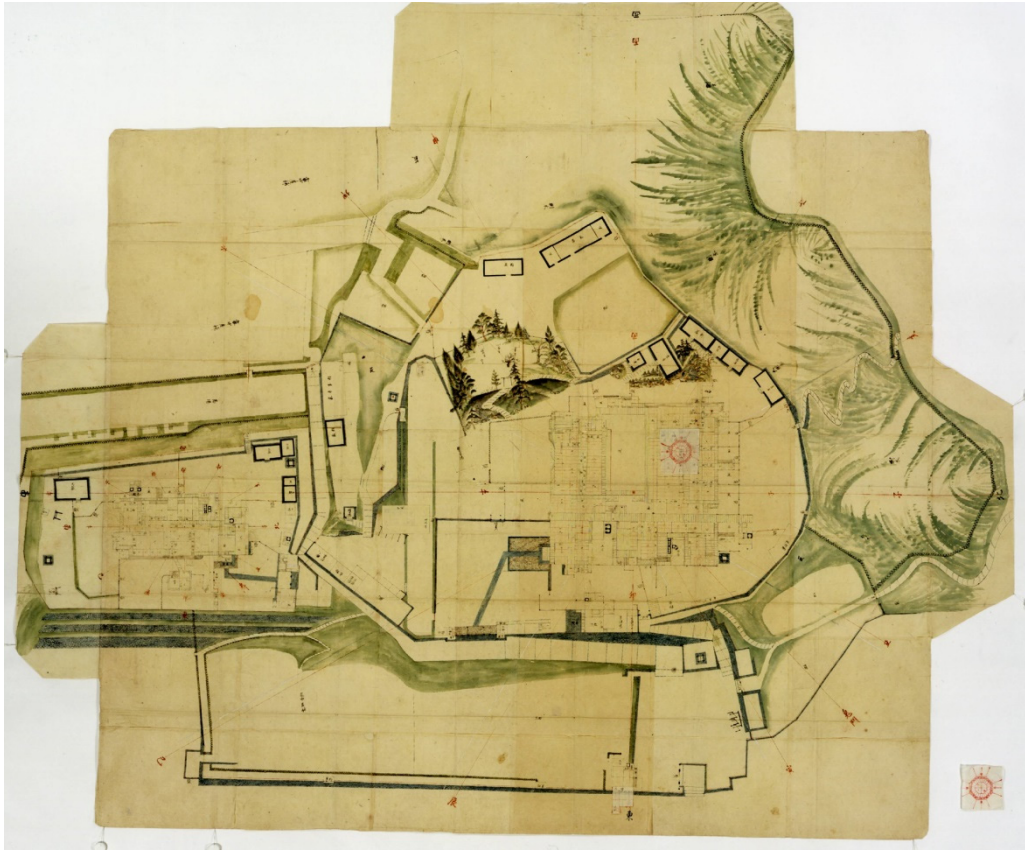


図 1-10「上石津郷土資料館屋敷絵図」(右手が北)(大垣市教育委員会提供)

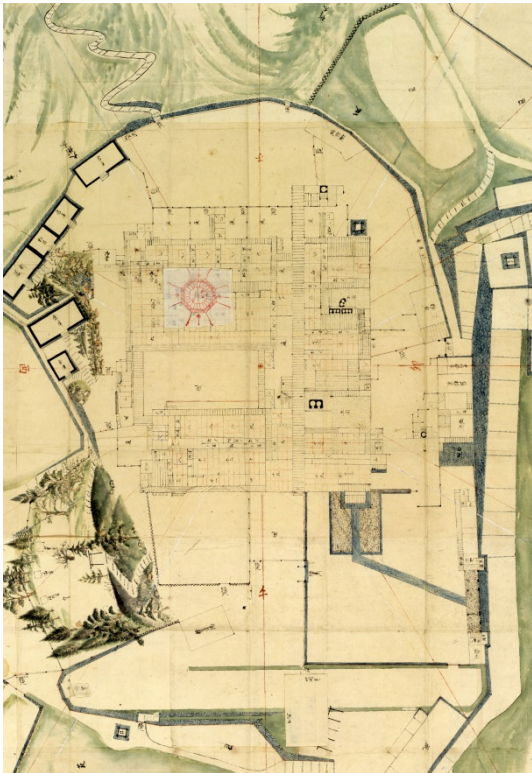


図 1-11「上石津郷土資料館屋敷絵図」
(上屋敷部分)(大垣市教育委員会提供)

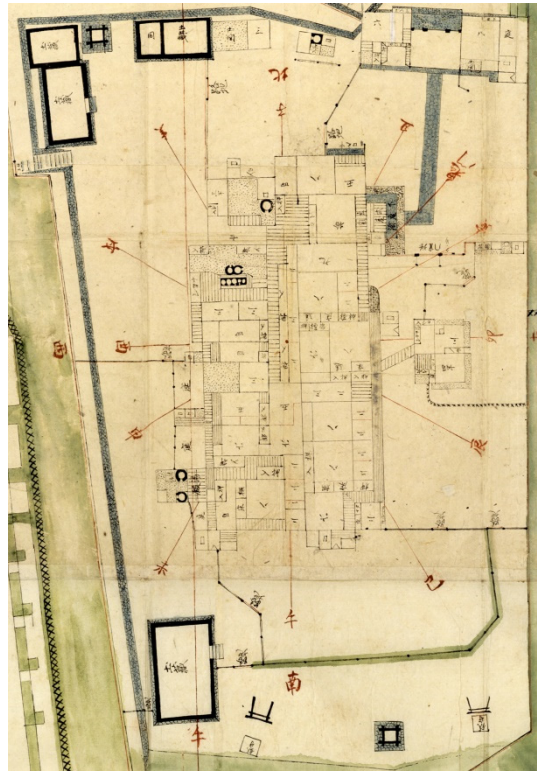


図 1-12「上石津郷土資料館屋敷絵図」
(下屋敷部分)(大垣市教育委員会提供)

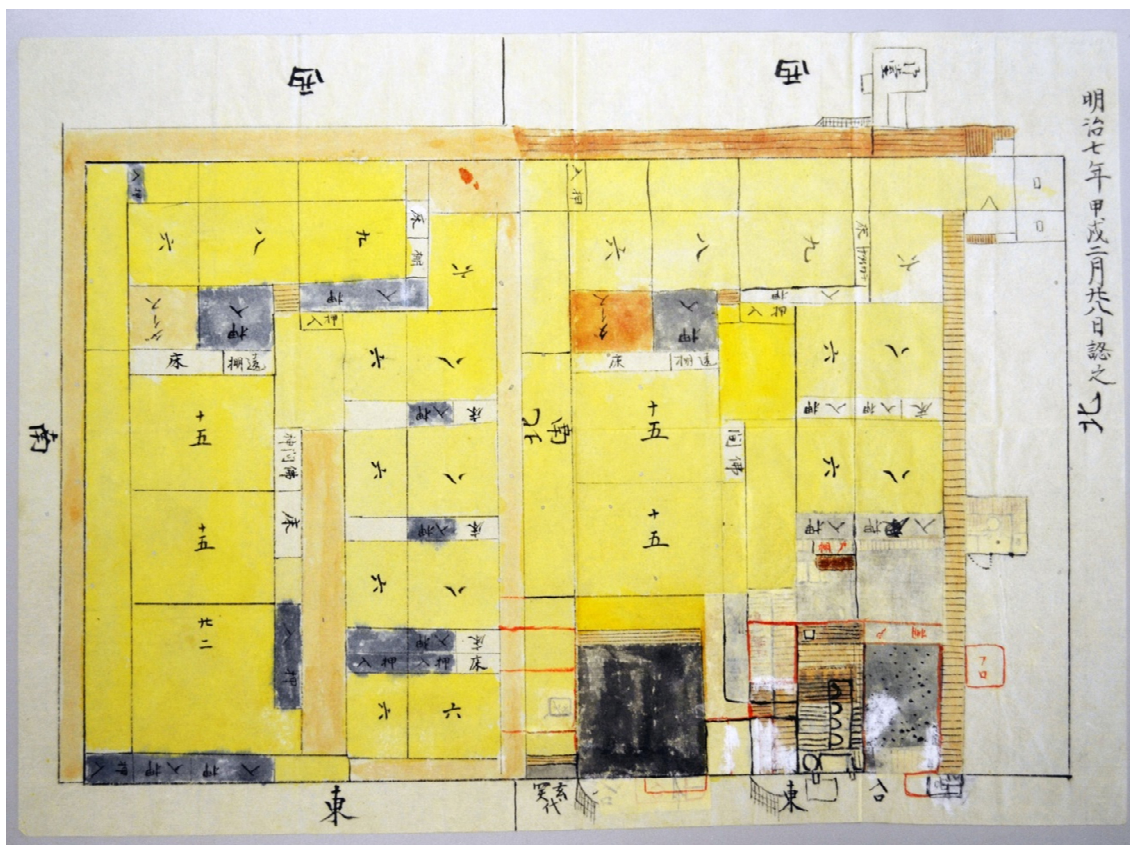


図 1-13 「[建物図面]【583】」(右手が北)

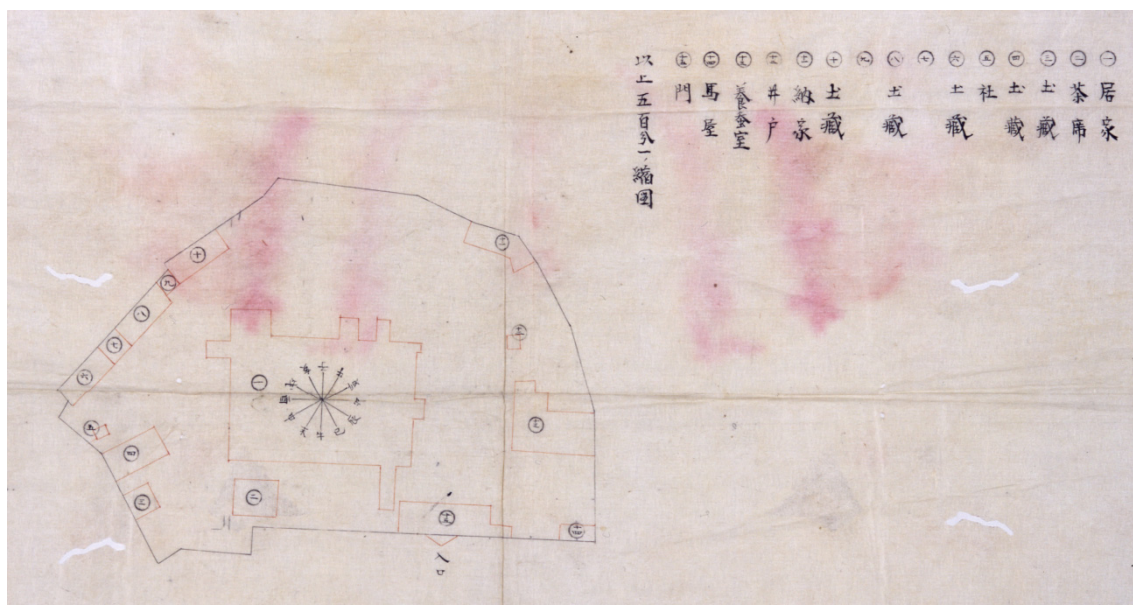


図 1-14 「〔屋敷図〕【44】」

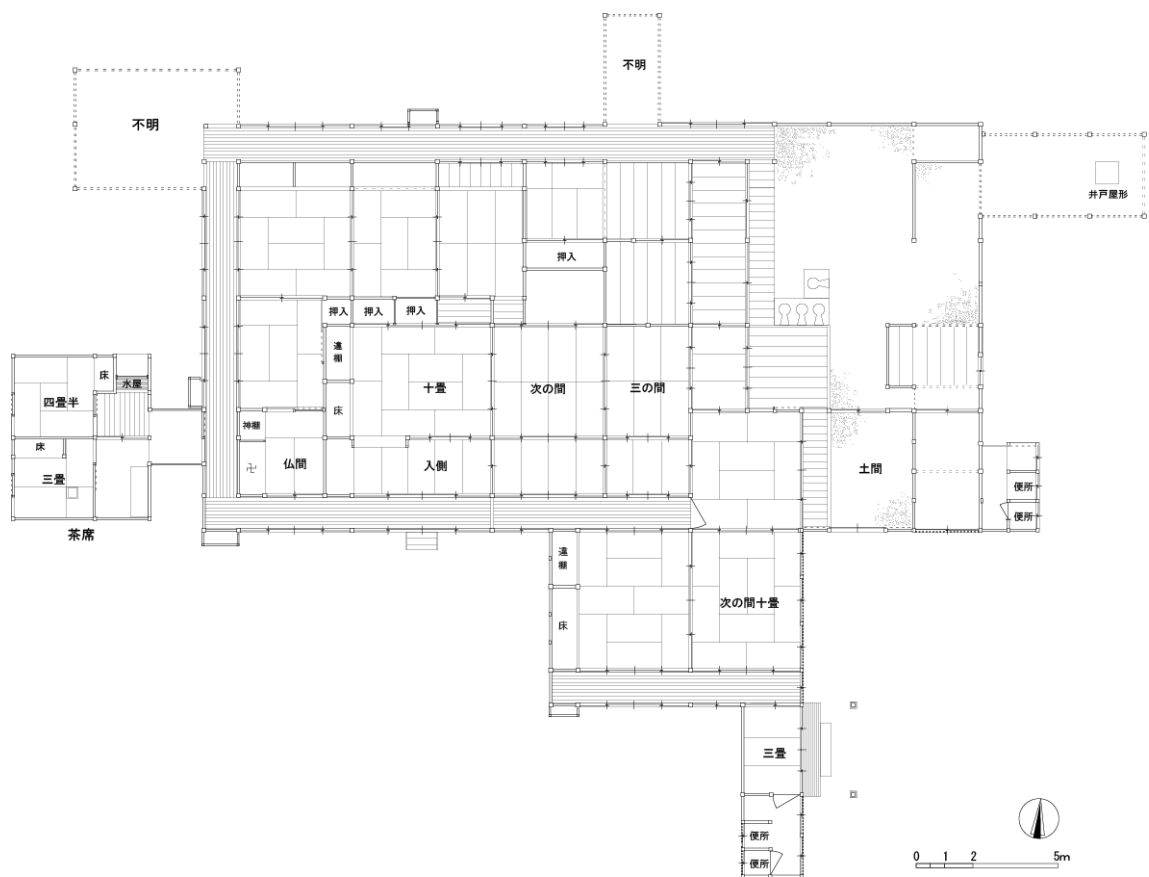


図 1-15 明治 29 年主屋復原平面図

第2章

再建後の移徙からみる西高木家陣屋

天保度上屋敷御殿の空間構成

第2章

再建後の移徙からみる西高木家陣屋 天保度上屋敷御殿の空間構成

はじめに

近世では、吉事となる引越の儀式内容に日常的な利用実態が反映される。そこで本章では、西高木家の中心的な居館であり、天保3年(1832)の類焼後、同年に再建した上屋敷御殿である天保御殿(註1)を対象に、再建時の引越儀式に用いられる場所と参加者との関係から、様々な室群が、政庁、武家儀礼の場、同居する家族の生活の場としてどのように機能していたかという御殿の空間構成について明らかにする。

第1節. 移徙の経緯

美濃国石津郡多良・時両郷(現在の岐阜県大垣市上石津町)を知行地とする交代寄合美濃衆 高木家は、中世多羅城跡とされる丘陵地に屋敷を構えた。分枝した西家(2300石)、東家・北家(各1000石)の三家は上屋敷・下屋敷といった複数の居館を構え、屋敷の周囲には武家地や町(宮坂本町)が形成された(図2-1)。

このような、三家の知行地支配、家政、勤役などを記した文書が、高木家に関する文書群で、西高木家については屋敷の造営に関する文献や屋敷絵図も確認されている。基本的な文書については別途、報告書で分析したが、本稿では『高木家文書』のうち、天保3年再建後の移徙手順が記された文献B-031「御家移ニ付取扱一件【106-う】」(註2)(以後、取扱一件と表記)に注目する。

再建移徙の原因になった火災とその後の対応について記した文献A-020「御焼失一件日記」(註3)によると、火災は天保3年(1832)3月4日午ノ中刻に、北高木家から起こった。西高木家も上屋敷と下屋敷が類焼、結果として御殿をはじめほとんどの建物が焼失し、御殿が再建されるまでの期間、家中屋敷数軒を仮住居とした(註4)。

取扱一件によると、火災から9か月後の天保3年12月3日に移徙は行われており、儀式には系図(図2-2)に示す家族6名[殿様(経貞)、奥様(於雅)、若殿様(貞広)、慎之介様(貞徳)、鎮姫様、於銚様](註5)のほか、家臣たち(御家中、御徒士、御徒士格、役人、給人、御目付、御近習、奥掛かり御用人、医師など)が参加している。

第2節. 移徙の手順

取扱一件には、移徙手順として儀式の内容・参加者・用いられた場所が記されている。取扱一件に記される場所と内容をもとに当日の移徙の進行手順についてまとめた

ものが図 2-3 である。当日、多くの部分で女性家族と男性家族に分かれて儀式を行っていることがわかる。図中には儀式の実行順に番号をふり、女性家族のみの儀式には「f」、男性家族のみの儀式には「m」を付けて表記した。

2-1. 仮住居から御殿まで

仮住居から天保御殿までは、女性家族と男性家族に分かれて移動している。女性が先行し、男性が時間差で後行する。別々の移動ではあるが、上屋敷まで男女とも同じ経路で進む(図 2-1)。女性家族の出発は「卯上刻」で男性家族は「卯刻」、現在の暦の1月半ばであるから出発は未明である。

「御仮殿」を出発し(I f、I m)、「御家中町」を通り(II f、II m)、「宮坂本町通り」(註6)を経て(III f、III m)、「御杣形表御門」から上屋敷へ入場している(IV f、IV m)。その後、御杣形表御門から御殿までは記されていないが、参殿に用いた玄関は男性家族が「表御玄関」、女性家族は「御廣敷」と使い分けている。後述する天保再建屋敷図をもとに対応する門から入場したと考えると、女性家族は「御廣敷」に近い「臺所門」(V f)を、男性家族は「表御玄関」に近い「表仮門」(V m)を通ったことになる。

2-2. 御殿内の儀式

儀式には大きく、着座する家族に熨斗が献上される祝儀と、家族どうし、あるいは家族と家臣の対面のふたつがある。取扱一件からは、御殿内の儀式でも多くの場合で男性と女性の家族が別行動した様子が確認できる。以下、順を追って確認する。

御廣敷の玄関から入った女性家族3名は「奥様御居間」で熨斗献上の後(2 f)、鎮姫と於銚は「御部屋」でさらに熨斗献上を行った(3 f)。時間的な前後は明らかではないが、別動した男性家族は「表御居間」で「大熨斗」(註7)献上(2 m)、続いて若殿様と慎之介は「御部屋」でさらに熨斗献上となる(3' m)。別途、殿様は「御中奥」で熨斗献上となる(3 m)。

「大奥御対面所」で初めて家族全員が同席し(4)、家族同士の対面、「大熨斗」献上の後に一献となる。その後、殿様と若殿様が「表御居間」(5 m)、女性家族が「大奥御対面所」(5 f)(註8)で、それぞれ関係する家臣との対面を行なう。家臣との対面が記されない慎之介は、そのまま「御部屋」(5' m)に留まったと考えられる(註9)。以後、参加者は不明であるが鎮守へ参詣した後、再び家族全員が「大奥御対面所」に揃い、家族同席での食事が行なわれている。

2-3. 移徙儀式の性格の相違

以上、整理した儀式の内容、参加者、用いられた場所から、儀式としての移徙の性格を整理する。

仮住居から御殿までは、陣屋敷地内を通るのが最短であるにも関わらず、道程を迂回して町を経由し、御枡形表御門から入場する。御殿までの移徙が知行地内における公的な儀式としての性格を有していたための経路選択であろう。一方、御殿内では参加者全員が西家に関わる身内の人間であり、儀式の内容は家族個々や家族同士、家臣に関連するものに終始している。公的な性格を持つとはいえ、本来は引越という家族の私的な儀式として行われたと考えられる。

さらに御殿内の儀式内容に注目すると、主要な儀式は、家族個々の安寧を願う熨斗献上、家臣や家族が参列する大熨斗献上、2つの祝儀と、当主と家族や家臣の対面であり、御殿の日常における利用実態が儀式の内容に反映されていることがわかる。つまり家族は女性家族と男性家族に大別され、熨斗献上の場所が家族構成員個々の日常の居所であり、家臣を含めた参加者各々の社会的な位置付けが参加した儀式の場所選択に関連していることがわかる。では儀式が行われた場所は、具体的に御殿平面のどのような室、位置であったのか。以下、平面との比較から場所を比定する。

第3節. 天保御殿の平面における移徙儀式が行われた場所の比定

3-1. 天保御殿の平面構成

各種屋敷図に基づく天保御殿の平面と様々な文書に記された室名の同定、さらに室群が表向・奥向、表・中奥・大奥といった領域で認識される平面構成であった点については、すでに『高木家文書』をもとに整理している(註10)。そこで取扱一件の記述との比較から、儀式が行われた場所が平面のどこに該当するかを整理する。まず分析の前提となる天保御殿の平面構成を概観したい(図 2-4)。なお第1章附節でも述べたが、天保再建当初を描くと考えられる天保再建屋敷絵図(註11)が近年発見されたため、本稿では、この天保再建屋敷絵図をもとに移徙段階での室配置図を新たに作成した。

天保御殿は、大きく3棟の建物からなる。中庭を挟んで建つ東西棟の2棟のうち、南側が表棟、北側が奥棟で、さらにこの2棟の東妻をつなぐ形で、南北棟の長大な台所棟が建つ。玄関や台所などを含む台所棟である(註12)。一方、居住者の相違に基づく空間領域は建物配置とは別途設定されており、御殿全体は南半を「表」、北半を「奥」として領域的に二分されており、台所棟は表と奥に中ほどで南北に分割されている。西側を南北に貫く大廊下も御錠口で分割されている。さらに奥棟は、御中奥と称される西妻部分の3室が連なる室群と大奥と称される東半の3室が連なる室群からなっており、中奥・大奥は、それぞれ奥棟東西端に取り付く別の廊下で表棟と繋がっている。

以下では、引越の儀式の内容と性格に着目し、儀式と建築との対応関係を平面図上で検討した(図 2-4)。

3-2. 移徙儀式が行われた場所

取扱一件に記される移徙儀式が行われた場所は、「表御玄関」「表御居間」「竹之間」「御中奥」「御廣敷」「奥様御居間」「大奥御対面所」である。平面をみると複数室からなる場合があるが、取扱一件に詳細は記されないため、儀式が一室に留まるものか複数室にわたるものかは特定できない。しかし、室群としてみれば平面に齟齬なく対応し、儀式の行われた場所が想定できる。以下、対面・熨斗献上といった儀式ごとに平面上の場所を確認する。

関係する家臣との対面が行われたのは、殿様・若殿様が「表御居間」(5m)、女性家族が「大奥御対面所」(5f)である。それぞれ表棟、奥棟の南面中央を占め、西側に床・棚を備えた「上之間」から3室が連なる室群で、畳敷きの縁座敷が付属する。この二つの室群でのみ対面が行われ大熨斗献上が行われている。なお殿様・若殿様の対面では、家臣の身分に応じて「表御居間」とともに隣接する「竹之間」も用いられている。

大熨斗が献上された上記2室群の他、熨斗献上が行われた場所は、女性家族に関係する「奥様御居間」「御部屋」と、男性家族に関係する「御中奥」「御部屋」である。

「奥様御居間」(2f)は奥棟北側西寄りを占め、北側庭に面する床・床脇を備えた主室と押入を備えた次の間の南北2室からなり、北側に縁を伴う。鎮姫と於銚が熨斗を受けた「御部屋」は、2名それぞれ別室であったのか、儀式として2人1か所で举行されたのかはわからない。しかし同じく奥棟の「奥様御居間」の東側には、同様に南北2室からなる「鶴之間」「菊之間」「鷺之間」(3f)があつて、「御部屋」はこれら3室群のいずれかに該当するとみることができる。つまり大奥に属する奥棟北側室群が、熨斗献上の場となった。

これと異なり、男性家族が熨斗を受けた場所は、複数殿舎に分かれている。殿様が単独で熨斗を受けた「御中奥」(3m)は、奥棟の西側を占める。床・棚・付書院を備えた「上之間」から南北に3室が連なる室群で、畳敷きの縁座敷が付属する。この3室構成は「表御居間」「大奥御対面所」と同様で、「奥様御居間」など熨斗献上のみが行われた他の場所とは異なっている。一方、若殿様と慎之介が熨斗を受けた「御部屋」に相当するのは、部屋名からみて、表棟北面東側を占める「表御子様方御部屋」「表御子様方御部屋御次之間」(3'm)の2室と判断できる。

3-3. 儀式間の移動経路

このように儀式が行われた場所が明らかになる一方で、取扱一件には移動経路に関

する記述は無い。ただし儀式の場所を室配置図(図 2-4)に落とし込むと、平面上で経路が想定できる。

表から奥への経路に着目すると、表から中奥への殿様の移動には「御中奥御廊下」、若殿様と慎之介の「大奥御対面所」への移動には「三ノ間御廊下」、家臣の移動には「大御廊下」・「御錠口内大廊下」が用いられたと想定される。使用者に応じて動線が分離されており、平面に反映されていることがわかる。なお、その他の移動経路は明確ではないが、性別や身分に応じて入口玄関が複数設けられており、接続する廊下、縁などが経路として想定される。図 2-4 にはそのような想定に基づく一案を記入している。

第 4 節. 儀式からみる御殿の平面構成と空間的性格

以上、移徙儀式が行われた場所は、日常生活時における空間的性格の相違を反映していると考えられ、室構成と付随する建築装置から、その相違を読み解くことができる。以下、公的な儀式といえる対面、生活の場としての居住の観点で整理し、天保御殿の平面構成を分析する。表 1 は、儀式が行われた場所ごとに、室構成、規模、座敷飾の構え、天井高といった建築構成を整理したものである。

4-1. 対面空間

表棟、奥棟の南面が、対面儀式に対応した空間であり、座敷飾もそのような儀式に対応した構成を示していることがわかる。前述の通り、表棟の南面を占める「表御居間」と奥棟の南面を占める「大奥御対面所」は、室名に示されるようにいずれも西を空間的に上位とすると理解でき、西側に床・棚を備えた「上之間」から 3 室が連なり、畳敷きの縁座敷が付属する。どちらも次の間北面にも床を有するから、南の庭に向かう形で次の間が使用される場合が想定される。

一方で、挙行された儀式からは「表御居間」と「大奥御対面所」の空間的な性格の相違も読み取ることができる。すなわち、家族に限定された対面や食事といった私的ともいえる儀式は「大奥御対面所」で行われており、対面所とはいえあくまでも大奥という空間的な性格を反映した場所であったことがわかる。取扱一件によれば、この空間的性格を反映して、両所で実施された対面は実施手順が異なっている。「表御居間」での殿様・若殿様と家臣の対面では、主人との目通りができない身分とされる徒士と徒士格(註 13)が、隣接する「竹之間」で同時に拝謁している(5m)。表御居間と竹之間で行われる対面は、封建制に基づく身分の上下が使用する室の相違で可視化された儀式であったといえる。一方「大奥御対面所」での女性家族と家臣の対面は(5f)、両者の間に「御取次」を介する形式であった。御取次の存在は、日常の奥向における

要件伝達の場合も同様であり(註 14)、形式で同じといえる。

このような性格の相違に留意すると、「表御居間」と「大奥御対面所」の建築的な相違も注目される。奥向に位置する「大奥御対面所」は、表とは異なって女性家族が利用する場であり、家族同士の対面や食事、取次を介した家臣との対面まで多様な儀式が行なわれた。そのためか「表御居間」より 1 室ごとの規模が大きい。一方で「大奥御対面所上之間」には床・棚を構えるが付書院はない。さらに天井高をみれば(註 15)、「大奥御対面所」は 2878mm(9 尺 5 寸)、「御中奥御居間」が 3140 mm(10 尺 3 寸 6 分)であり(図 2-5)、「表御居間」の天井高は不明であるが、「御中奥御居間」よりは高かったであろうから、「大奥御対面所」は平面規模に反して天井高の低い空間であったことがわかる。

つまり両室群は、対面形式にみるように空間的な性格は大きく異なっており、それが建築的実体に反映されていたことが指摘できる。この違いは、家臣との関係を持つ公の場、家族との関係を持つ私の場合という、公と私の空間的な性格の違いに起因すると考えられる。

4-2. 居住空間

熨斗献上の祝儀が行われた場所のうち、平面構成で他と大きく異なるのが「御中奥」である。畳敷きの縁座敷が付属する 3 室構成は「表御居間」や「大奥御対面所」と同様で、主室に付書院を設ける点では「大奥御対面所」よりも格式ある意匠といえる。ただし次之間には床を設けない。前述の通り、この中奥部分は明治の改変を経て現存しているが、竿縁天井で縁座敷を含めて室内に長押を回す点で「大奥御対面所」と同様だが天井高は高い。天井高に大奥と中奥の空間的性格の相違が示されたものと理解できる。休息の間や寝間といった殿様の寝所に該当する室名が天保御殿には見いだせないが、殿様が単独で熨斗献上を受けたことに示されるように、表玄関から最も奥に位置し、かつ室名から大奥に関連すると考えられる「御鈴之間」「御化粧之間」が隣接する御中奥御居間が、殿様の寝所としても機能した可能性が高い。

女性家族の熨斗献上の場となった奥棟の北面には、南北 2 室からなる「奥様御居間」「鶴之間」「菊之間」「鷺之間」が連なる。これらは女性家族の居室で、「鶴之間」「菊之間」「鷺之間」のうちのいずれかが鎮姫と於銚の居室に充当されたことになる。「奥様御居間」主室は座敷飾として床と床脇が設けられるが、以外は床と押入の構成である。現存遺構の痕跡から「奥様御居間」東隣の「御化粧之間」は天井高 3090 mm(10 尺 2 寸)、室内に長押を回さない構成であったことがわかる(註 16)。室内の意匠が不明な「奥様御居間」以下の諸室も、同様な意匠・構成だったではなかろうか。

表棟の北面には、「北御座之間」「北御座之間御次」「表御子様方御部屋」「表御子様方御部屋御次之間」の4室が東西一列に並ぶ。東側「表御子様方御部屋」の2室が、若殿様と慎之介の居室に充当されたと考えられ、床と押入が設けられる。一方「北御座之間」は座敷飾として床と違棚を構えており、より格式の高い部屋となる。殿様の日中の居室、あるいは執務室とも考えられるが明確ではない(註17)。ただし、これら表棟北面の4室は相互が建具で仕切られた室で(註18)、西から「北御居間上之間」「北御次」「北御三之間」「北四之間」と連続する部屋名で記されている場合もある(註19)。空間的には一連と認識されていたことになる。

以上、表棟、奥棟は、いずれも南面と北面で空間的性格が異なっており、南面が対面空間、北面が居室空間となっていた。さらに対面空間と平面構成で類似する奥棟の西半の中奥は、殿様の専有空間であったと考えられる。

4-3. 儀式に用いられなかった室群

儀式において家臣は、表は「表御居間」まで、大奥は「大奥御対面所」まで参入しているが、平面でみると取扱一件に記されない、つまり儀式の場所として記されていない室も多い。台所棟の多くの室が該当するが、そのうち表向に属する「御臺所」「御祐筆部屋」「詰所」「紅葉之間」「侍部屋」「侍部屋履怒き」などは、部屋名と位置からみて、家臣の日常的な役務に用いられたと考えられる。一方、台所棟の御錠口以北に位置する「御臺所」「御老女部屋」「女中部屋」「御茶之間」などは、位置と室名から御老女や女中たちの役務に用いたと考えられる。平常時における御錠口以北への参入は制限されていた可能性が高い。

まとめ一天保御殿の空間構成から一

以上、西高木家陣屋の天保御殿について、移徙時の儀式で用いられた場所の分析から、御殿平面が家族の生活にどのように対応していたかという空間構成について明らかにした。

大名屋敷の作事や移徙に関する儀式の歴史的な分析については渋谷葉子の論文に取り上げられている(註20)。ただし儀式と居住者の相関、その先に見えてくる居住者による利用実態まで分析した事例はない。本稿では、あくまでも詳細が把握可能な事例ではあるが、移徙という居住に関わる儀式の分析から、平面だけでは把握できない利用実態と空間的な性格が把握できることを示した。以下では関連する先行研究の成果を踏まえ、以上のまとめとしたい。

移徙の儀式からみた天保御殿の空間構成は(図2-6)、表向は男性が参画する対面空

間(Am)、男性の居住空間(Bm)、家臣の役務空間(Cm)から構成され、奥向は女性が参画する対面空間(Af)、女性の居住空間(Bf)、女中たちの役務空間(Cf)から構成される大奥と、殿様の居住空間(B'm)である中奥からなる。表向、奥向ともに対面、居住、役務という三つの空間から構成されるが、表と奥それぞれの、対面空間における性質の違いが公と私に対応していた点が注目される(図 2-7)。

以上、引越の儀式から明らかになった室群の機能と建築との対応関係をみると、建築的な棟のまとまりや、従来の研究で用いられてきた対面の場に注目した把握、あるいは表と奥といった概念による把握では、建築的に錯綜した理解となることが指摘できる一方で、公と私で整理すると、室群が、空間的性格に対応して把握できることが明らかとなった(図 2-6)。

作事文書から萩藩毛利家の江戸屋敷の空間構成の変遷を分析した高屋麻里子は(註 21)、上屋敷が表御殿(本稿、天保御殿の表向に相当)と裏御殿(天保御殿の奥向に相当)からなり、それぞれが玄関と対面空間を備えるに至る変遷を明らかにし、従来私的な空間とされてきた裏御殿における対面空間の存在に着目すべきと指摘する。さらに江戸城本丸御殿の大奥御殿向殿舎(天保御殿の大奥奥棟部分に相当)の格式に注目する服部佐智子は(註 22)、座敷飾りと利用実態から従来私的とされてきた大奥御殿向が公的空間(御座之間、御対面所)と私的空間(御守殿、御小座敷)からなり、それぞれ表向(御対面所、御守殿)と内向(御座之間、御小座敷)に分かれ、御小座敷を除く大奥 3 殿舎が対面・接客にも用いられたとする。

このような近年の研究成果を踏まえるならば、表向と奥向に対面空間と居住空間が共存している点は、本稿でみた在地旗本の高木家をはじめとして、ある階層以上の近世武家住宅の空間構成の共通性として指摘できそうである。しかし、公と私で整理した場合、表の対面と奥の対面の性質の違いを読み取る必要がある。万延元年(1860)11月9日に行われた江戸城本丸再建移徙の移徙手順をみると(註 23)、使用する玄関や経路が将軍と女性家族で相違する点、表と大奥、それぞれで家臣との対面が行なわれている点に、天保再建移徙との共通性が指摘できる。

一方で上記江戸城再建移徙において「御座間」で行われている主人の居室における家臣との対面が、西高木家では行われていない。このように将軍を頂点とする近世武家住宅は、時代的な変遷と封建制に基づく家格の相違を反映して、居住形態や建築構成が一樣ではなく、展開される儀式も同一ではないことも明らかである。こうした儀式の共通点と相違点は、改めて平面と関連させて分析すべき事項といえる。

また天保御殿では、表棟と奥棟それぞれ、同一殿舎内に居住空間と対面空間が併存

している点が建築的な特徴として注目される。大名屋敷の殿舎と機能の關係に注目した平井聖は、明暦大火後の大名屋敷の殿舎について、対面機能と居住機能が分化した1列形の平面への変化を指摘する(註24)。萩藩毛利家の江戸桜田上屋敷は表御殿と裏御殿にそれぞれ居住空間と対面空間を備え、空間構成については天保御殿との類似がみられるが(註25)、各空間は別々の殿舎となっており、平井の指摘と同様の傾向がある。同一殿舎内に居住空間と対面空間が併存する構成が特殊であるか、ある階層や地域で普遍性を持つものであるのかについては今後の検討課題である。

附節. 天保御殿に関する新出絵図

附-1. はじめに

これまで、作事や普請に関する屋敷図や文献を多く収める高木家に関する文書群からは、天保御殿の平面を具体的に示す屋敷絵図は見つかっておらず、報告書の時点では造営の記録と安政屋敷絵図から推定するにとどまっていた。しかし、最近名古屋大学付属図書館が外部より入手した史料の中に、安政屋敷絵図に類似する平面を描いた屋敷絵図である、先述の天保再建屋敷絵図が発見されたため、記載情報と他の絵図との比較からどのような絵図であるかを判断したい。

附-2. 絵図の概要

天保再建屋敷絵図は196cm×163cmという大きさと、外題や内題、奥書、年代などの記載はない(図2-8)。絵図左下には「百分壹之割圖之」と記されるが、建物は1間(6尺5寸)を6分で描く6分計で、およそ108分の1に相当する(註26)。ヘラ目は入らない。同じく絵図左下には「㊦此色塀」「㊦此色石垣」「㊦此色土手峽藪」(㊦の部分丸の中に記した色で丸く塗られる)という彩色の凡例の記載もあり、絵図の彩色から、石垣や土手に囲まれた敷地全体の様子がわかる。

敷地内には建物の平面が描かれており、建物は主屋のほか、「表仮門」、「臺所門」、「埋門」、「中間部屋」、「薪部屋」、「番所」、「蔵」、「倉庫」、「物置」、「厩」、「雑蔵」、「道具入」などが確認できる。このうち、主屋には家相検討に用いたと考えられる方位が朱筆で記される。

主屋の平面(図2-9)には、式台を備えた表玄関である「仮玄関」をはじめ、主屋の東面中央に位置するもう一つの「玄関」、そして各部屋には「床」「床脇」「押入」「神棚」「佛壇」「湯殿」「竈」などの書入れがある。また、畳数を表す漢数字、床板の描写、「土間」という書入れからは、床の様子がわかる。さらに、柱間装置は線の本数によって建具、壁、框と描き分けがされており、隣接する部屋どうしの関係が理解できる。

部屋名は基本的に記されておらず、納戸などの一部のみに確認できる。貼紙は「玄関」から西に位置する部屋の板間部分と、西方に輪郭線で描く蔵、「雑蔵」という名称の3カ所のみである。

構成、平面、規模は、安政4年(1857)以降から明治6年(1873)頃までの西高木家陣屋を描いた安政屋敷絵図に酷似し、描かれる主屋と安政屋敷絵図の天保御殿は同一の建物とみられる(以後、三棟構成については天保御殿に関するこれまでの分析にならい(註27)、必要に応じて表棟・奥棟・臺所棟と表記)。安政屋敷絵図には縮尺が記されていない。採寸からは部屋によって多少の誤差がみられるが、6分計から若干間延びして描かれる。現存遺構と比較すれば、およそ105分の1に相当する。

附-3. 絵図の年代判定

高木家に関する文書群にはこれまで計画図なども確認されているため(註28)、天保再建屋敷絵図について問題となるのが、天保再建屋敷絵図が実現しなかった計画図か、実現した図かである。これを検討するにあたり、先述のように描かれた年代がほぼ明らかになっている安政屋敷絵図と、天保再建屋敷絵図を、以下イ)～ハ)の3点に注目し、比較した相違点を記す。

イ)「御玄関御使者之間」

安政屋敷絵図に記される玄関正面の室群は、間仕切りによって2室に分かれる「御玄関之間」(13 畳)(註29)と「御使ノ間」(19 畳)、板張の部分や、北側の6畳敷の廊下から構成される(図2-9)。この平面は、上屋敷再建時の文書である註11で述べた勘定帳に記される、「御玄関御使者之間四十式帖」という記述と合わない。これに対し、天保再建屋敷絵図には「仮玄関」正面に位置する1室に「四拾二帖」と書入れがあり、勘定帳の記述と一致する(註30)。

ロ) 下屋敷地の空閑

鳥瞰図の天保御殿北側には天保8年(1837)頃に建造された「若殿様御部屋」が、安政屋敷絵図の下屋敷地には嘉永5年(1852)から7年にかけて建造された下屋敷御殿が確認できる(図2-8)。これに対し、天保再建屋敷絵図の下屋敷地は安政屋敷絵図よりも規模が小さく、「畑」との書入れもある。つまり、造成前の状態を描いたとみられる。

ハ)「表仮門」と「仮玄関」

安政屋敷絵図には、天保再建屋敷絵図にみる「表仮門」と「仮玄関」という書入れがない(図2-10、図2-11)。

門については、安政屋敷絵図と天保再建屋敷絵図で位置・平面・大きさが異なる(図2-10)。安政屋敷絵図では東の石段・石垣に面して、門の左右には「見張」付きの部屋

が造られる。門の大きさは、先述の各絵図の縮尺をもとに両絵図の鏡柱間の柱間寸法を比較すると、安政屋敷絵図では13.9尺、天保再建屋敷絵図は9.9尺程度となるため、安政屋敷絵図の方が明らかに大きい。一方、天保再建屋敷絵図では東の石段から離れた場所に門が位置し、柱と塀のみの簡素な造りである。

玄関については、安政屋敷絵図と天保再建屋敷絵図で描写が異なる。式台の大きさには変化がみられないものの、安政屋敷絵図では、式台周囲にタタキと玉砂利敷きと考えられる描写が確認できるが、天保再建屋敷絵図ではタタキ状の描写がL字状にあるのみである。(図2-10)。

以上のイ)～ハ)の比較からは、天保再建屋敷絵図がある特定の、年代の御殿を描いたものといえる。イ)について、報告書では勘定帳に記される1室42畳という規模が安政屋敷絵図と異なることから、ある時期に1室から2室に分けられた可能性を指摘していた(註31)。これに対し、天保再建屋敷絵図は勘定帳と同じ内容を具体的に示しており、再建直後に実在した御殿を示すと同時に、報告書での推測が妥当であったことが確認できた。また、ロ)について、天保再建屋敷絵図は安政屋敷絵図よりも前の屋敷地を示したことは明らかであり、さらに、ハ)については、「仮」がつく名称そのものが再建直後であることを示すと考えられる。

附-4. 絵図の性格

実在した様子を示すことが明らかになった天保再建屋敷絵図には、前述の比較以外にも安政屋敷絵図との相違がある(図2-8、図2-9)。それは、御殿西方の「蔵」の位置の違いや、奥棟北側の雪隠の有無、奥棟と台所棟を繋ぐ廊下の有無などである。これについては、天保再建屋敷絵図と安政屋敷絵図の前後関係に矛盾が生じるようなものではなく、安政屋敷絵図が室の付加の結果であるものと理解でき、前述の通り、天保再建屋敷絵図は安政屋敷絵図よりも前の様子を示すと考えて矛盾はない。建物の比較については鳥瞰図も交えて、第4章第2節でおこなう。

先述の「雑蔵」の貼紙は「當年 雑蔵」という記載になっており、絵図作成からの時間的経過が想定される。また、絵図には経年の改修を示すような朱筆や貼紙はほとんど無く、描かれた当初のままの状態を基本図として保管されていたとみられる。

以上から、天保再建屋敷絵図は計画図ではなく、上屋敷再建後の屋敷全域を記録した敷地図であると考えられる。天保御殿の実態を示す貴重な史料といえる。

これまで天保御殿の平面を直接的に示す絵図は確認できていなかった。これについて、報告書では再建時の文献から明らかになった規模や殿舎構成の特徴から、天保御殿は、安政屋敷絵図に記載される上屋敷御殿に近い平面構成であることを指摘してい

る(註 32)。この報告書の推測が概ね妥当であることが天保再建屋敷絵図によって確認されたといえる。

附-5. まとめ

以上、本節では西高木家陣屋に関する新出の絵図である天保再建屋敷絵図の史料性格について、既往の報告との比較から検討をおこなった。比較からは、天保再建屋敷絵図が再建直後の屋敷地を示す敷地図であることが明らかになった。既往の報告内容である事実関係との対応に一致がみられ、それぞれの絵図は西高木家陣屋における実態を正確に示す史料であるといえる。これにより、天保の再建時からの整備過程が絵図面で具体的にわかるような状況になった。

天保再建屋敷絵図から、西高木家陣屋の変遷には「表仮門」「仮玄関」という、これまで報告になかった存在が加えられた。また、「表仮門」から鳥瞰図や安政絵図に記される表門に建て替えられた時期や、「御玄関御使者之間」が間仕切られた時期など、新たに解明すべき事実の存在が明らかになった。このように、新出の絵図は、西高木家陣屋の変遷の実態により近づく今後の可能性も示したといえる。

参考文献

- 1) 西田真樹:交代寄合美濃衆高木家年中行事-春-,宇都宮大学教育学部紀要 第 41 号 第 1 部, pp29-41, 1991. 3、交代寄合美濃衆高木家年中行事-夏-,宇都宮大学教育学部紀要 第 42 号 第 1 部, pp51-60, 1992. 3、交代寄合美濃衆高木家年中行事-秋-,宇都宮大学教育学部紀要 第 43 号 第 1 部, pp35-53, 1993. 3、交代寄合美濃衆高木家年中行事-冬-,宇都宮大学教育学部紀要 第 44 号 第 1 部, pp69-81, 1994. 3
- 2) 可児市史 第 2 卷 通史編 古代・中世・近世, 2010
- 3) 名古屋大学附属図書館・付属図書館研究開発室:名古屋大学附属図書館 2009 年春季特別展(地域貢献特別支援事業成果報告)旗本高木家主従の近世と近代-高木家文書と小寺家文書-, 2009
- 4) 大橋正浩他:「高木三家鳥瞰図」の分析からみる西高木家陣屋下屋敷の成立について, 日本建築学会東海支部研究報告集 第 49 号, pp749-752, 2011. 2
- 5) 上石津教育委員会:新修上石津町史, 2004
- 6) 大橋正浩他:旗本西高木家陣屋の建築的変遷についてー高木家文書による研究 その 1ー, 日本建築学会東海支部研究報告集 第 46 号, pp721-724, 2008. 2
- 7) 溝口正人編・執筆:岐阜県史跡 旗本西高木家陣屋跡 主屋等建造物調査報告書, 大垣市教育委員会, 2009. 3
- 8) 大橋正浩他:旗本西高木家陣屋の天保再建建物の平面構成についてー高木家文書による研究 その 2ー, 日本建築学会東海支部研究報告集 第 46 号, pp717-720, 2008. 2
- 9) 岐阜県大垣市教育委員会:大垣市埋蔵文化財調査報告書第 23 集 岐阜県史跡 旗本西高木家陣屋跡-測量調査・発掘調査報告書-, 2013
- 10) 上石津町編:上石津町史 史料編, 1975
- 11) 国史大辞典編集委員会編:国史大辞典 第 3 卷, 吉川弘文館, 1983
- 12) 渋谷葉子:幕藩体制の形成過程と大名江戸藩邸, 徳川林政史研究所研究紀要 第 34 号, 財団法人徳川黎明会, pp89-106, 2000
- 13) 作事記録研究会編:大名江戸屋敷の建設と近世社会, 中央公論美術出版 2014
- 14) 平井聖:日本住宅の歴史, 日本放送出版協会, 1974
- 15) 服部佐智子他:弘化期・万延期における江戸城本丸御殿大奥御殿向の室内意匠による殿舎の格, 日本建築学会計画系論文集 第 79 巻 第 697 号, pp789-797, 2012. 3
- 16) 尾張徳川黎明会:徳川礼典録, 下巻, 1942
- 17) 平井聖:日本の近世住宅, 鹿島研究所出版会, 1968

- 18) 鈴木賢次:旗本住居に関する研究, 私家版, 1987
- 19) 深井雅海著:江戸城 - 本丸御殿と幕府政治, 中公新書, 2008
- 20) 服部佐智子他:江戸城本丸御殿大奥御殿向における殿舎構成の変遷と空間構成について, 日本建築学会計画系論文集 第74巻 第641号, pp1631-1640, 2009. 7
- 21) モリス マーティン・N:小笠原家 江戸時代旗本屋敷の復原, 日本建築学会大会学術講演梗概集 F 都市計画 建築経済 住宅問題 建築史 建築意匠, pp667-668, 1986, 8
- 22) 作事記録研究会編:萩藩江戸屋敷作事記録, 中央公論美術出版, 2013

註釈

- (註1) 西高木家陣屋の住居建物を本稿では「御殿」と呼称する。天保3年の屋敷再建時において、当主家族が住まう住居建物は天保御殿のみである。しかし、嘉永5年(1852)には、下屋敷御殿を屋敷地南側の土地を造成して建造しており(第4章参照)、再建当初から上屋敷御殿という位置づけであったと推察できる。天保御殿の他にはこの他に付属建物として門、蔵、長屋(倉庫)などを造営した。
- (註2) 文献 B-031「御家移ニ付取扱一件【106-う】」。本稿資料編参照。
- (註3) 文献 A-020「御焼失一件日記【5-あ】」。本稿資料編参照。以下、焼失日記と記す。同記によれば、幕府には「御類焼之覚」、尾張藩は「覚」として、焼失建物の一覧を提出している。『高木家文書』には、類焼以前の各種屋敷絵図が残されており(絵図 A-001「〔屋敷絵図〕【47】」、絵図 A-002「御屋敷図面入【4】」、絵図 A-003「西館絵図【10】」、以上第1章参照)、類焼以前の屋敷の建物構成がわかる。これら屋敷絵図と一覧を比較すると「表奥御住居」「御下屋舗御住居」など主だった建物が焼失していることがわかる。
- (註4) 焼失日記には「御仮住居正覚と申候而者御不都合故御家中屋敷式三軒為取仰付」とあり、取扱一件には「御仮殿より御家中町宮坂本町通り…」とある(下線は筆者による)。場所と建築的な実態の詳細は不明であるが、西高木家陣屋南西の御家中町に建つ家中屋敷の何軒かが仮住居に充てられたと考えられる。
- (註5) 参考文献 9) p233、参考文献 10) pp28-47 の『文政五年八月 40 高木系譜』を参照。
- (註6) 取扱一件に「宮坂本町通り」と記される。高木三家屋敷地周辺を字絵図では「宮村」と記し、屋敷図にも記される大神神社(明治4年に流彦大明神から社号を復古)周辺は、現在も「宮町」と呼び、南北に抜ける通称「伊勢街道」沿いには近世から町場が形成されていた。大神神社南には西から東への下り坂があり、屋敷絵図にも記されるが、これが「宮坂」と称されたのであろう。
- (註7) 「大熨斗」の詳細は不明。「御席」への献上と記されており、個人への献上と

なっている熨斗と相違する。

(註 8) 女性家族と家臣が対面する場所は「大奥」とのみ記され、具体的な室名が不明であるが、直前には「大奥御対面所」で家族同士の対面をしており、引き続き同所を用いたとみられる。

(註 9) 後述するように若殿様と慎之介様が祝儀を受けた「御部屋」は「表御子様方御部屋」「表御子様方御部屋御次之間」に該当すると考えられる。対面の間、慎之介は居室である「御部屋」に待機していたのであろう。

(註 10) 参考文献 7) 8)。平面構成の特徴については、参考文献 7) pp23-24 参照。

(註 11) 分類番号は当てられていないが、名古屋大学附属図書館高木家文書デジタルライブラリー<http://libst1.nul.nagoya-u.ac.jp/eco/index.html> で閲覧可能である。天保再建屋敷図が天保再建直後を示すと考えられる特徴として、「表仮門」「仮玄関」という書込みがあること、下屋敷地に嘉永 5 年(1852)建造の御殿等の建物が記されていないこと、天保御殿造営に関する文書である文献 B-005『御普請中諸職人諸色勘定帳【5-か】』(以下、勘定帳と表記)に記される室名と規模に一致がみられる一方で、安政以後の改造が反映されていないことなどがある。なお安政の改修で玄関・使者の間は 2 部屋に分割されている。

(註 12) 勘定帳には、3 つの殿舎について「表御居間」「奥御居間」「御臺所」といった名称で記され、単位は「棟」が用いられている。「表御居間」「御臺所」については室名としても同様の記述があり、殿舎名か室名かの混乱を防ぐため、本稿では便宜上「表棟」、「奥棟」、「台所棟」と表記する。

(註 13) 参考文献 11)「かち(徒)」の項参照。大名や大身の直参・陪臣など、諸家における徒士は主人との目通りができない身分とされる。

(註 14) 参考文献 3)、p13 参照。類焼前の上屋敷御殿では、家臣が奥様に用件を伝える場合、茶之間で女中が面会して取次いでおり、茶之間が表の男社会と、奥の女社会の接点だったという。

(註 15) 参考文献 7)、p27 参照。御中奥御居間と大奥御対面所の一部は遺構で現存しており、廻縁欠き込みの痕跡から旧天井高さがわかる。本稿作成にあたり、旧天井高さを示す痕跡については再度実測を行った。

(註 16) 参考文献 7)、p27 参照。

(註 17) 参考文献 19)によれば、江戸城本丸御殿では、御座之間が奥の応接間とされる。

(註 18) 天保再建屋敷図は柱間装置についても線種を区別して記しており、「表御子様方御部屋」と「北ノ御座之間御次」の間仕切りは建具であったことがわかる。

(註 19) 参考文献 8)、p47 参照。

(註 20) 参考文献 12)pp86-109、参考文献 13)pp225-254 参照。参考文献 12)では 17 世紀前半における尾張藩江戸上屋敷の変遷を明らかにする過程で、藩主の移徙に触れている。また、参考文献 13)では享保から文政期に行われた萩藩江戸屋敷新築時における儀式の実態を整理している。しかし、2つの文献共に、御殿平面との対応関係にまでは触れられていない。

(註 21) 参考文献 13)第 2 章参照。高屋の論文で用いる接客空間は、本稿における対面空間に相当する。

(註 22) 参考文献 15)で服部は、弘化期・万延期における江戸城大奥御殿向の殿舎の格について室内意匠から格式における序列化を行っている。優位な指標として壁の指標を指摘し、御対面所、御座之間、御守殿、御小座敷の順に格が高いとした。

(註 23) 参考文献 16)『將軍徳川礼典附録 卷之二十一』、「御本丸御普請出来 御移徙」pp440-455 参照。江戸城本丸御殿との比較は、別稿で詳細な検討を行いたい。

(註 24) 参考文献 17)。この指摘を受けて、旗本の江戸屋敷を扱った鈴木は参考文献 18)において、大名屋敷ほど殿舎と機能の分化傾向が十分に達成されていないにしても、各棟の機能・性格は基本的に大名屋敷に準じるとしている。また、江戸城本丸御殿の空間構成と殿舎の関係を経年変化という観点から注目した研究に、深井の参考文献 19)、服部の参考文献 20)がある。深井は將軍の生活空間について、本来は別空間であった中奥と奥の消長から奥の殿舎群の拡充を指摘し、服部は、大奥における主人の生活空間と女中の役務空間の分離を指摘している。こうした事例は、殿舎と機能の分化が旗本屋敷から將軍が住む江戸城まで共通する傾向であることを示している。

(註 25) 参考文献 22)附録屋敷絵図 5「江戸桜田御上屋敷新御作事御指図」参照。とくに表御殿には「若殿様御休息ノ間」という若殿様の居室が確認できる。

(註 26) 現存遺構は 1 間が 6 尺 3 寸の内法制で計画されていて、柱芯々では 1 間は概ね 6 尺 5 寸となる。

(註 27) 参考文献 7) 8) を参照。

(註 28) 参考文献 7) 第 2 章第 2 節 2-1 参照。

(註 29) 部屋名については参考文献 7) 第 2 章第 2 節 2-2 及び pp47-48 を参照。

(註 30) 文献 B-005「御普請中諸職人諸色勘定帳【5-か】」。本稿資料編参照。

(註 31) 参考文献 7) p47 参照。

(註 32) 参考文献 7) p19, p23, p24, p47 参照。

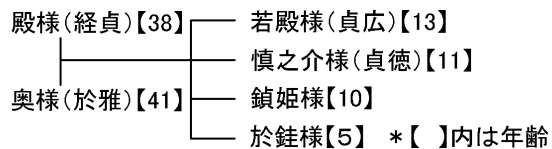


図 2-2 移徙当時の家族構成

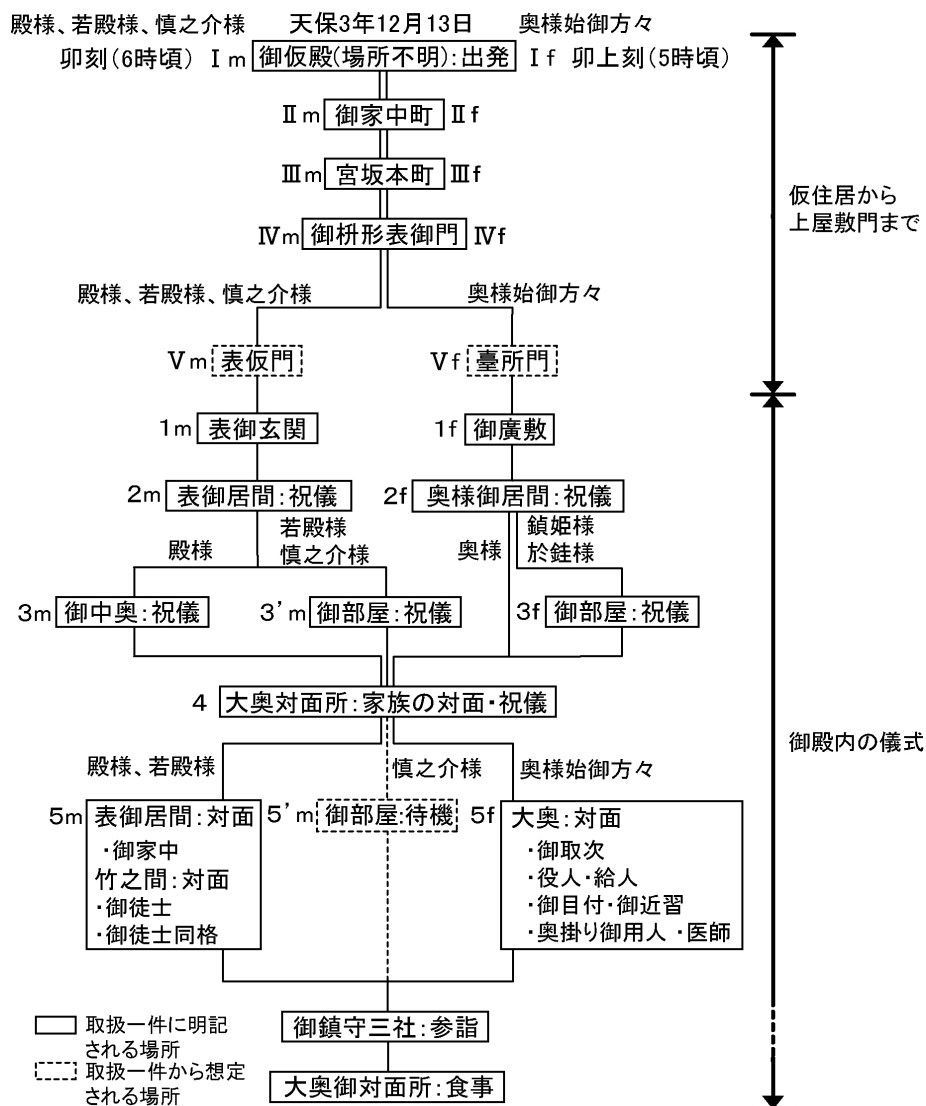


図 2-3 移徙手順図

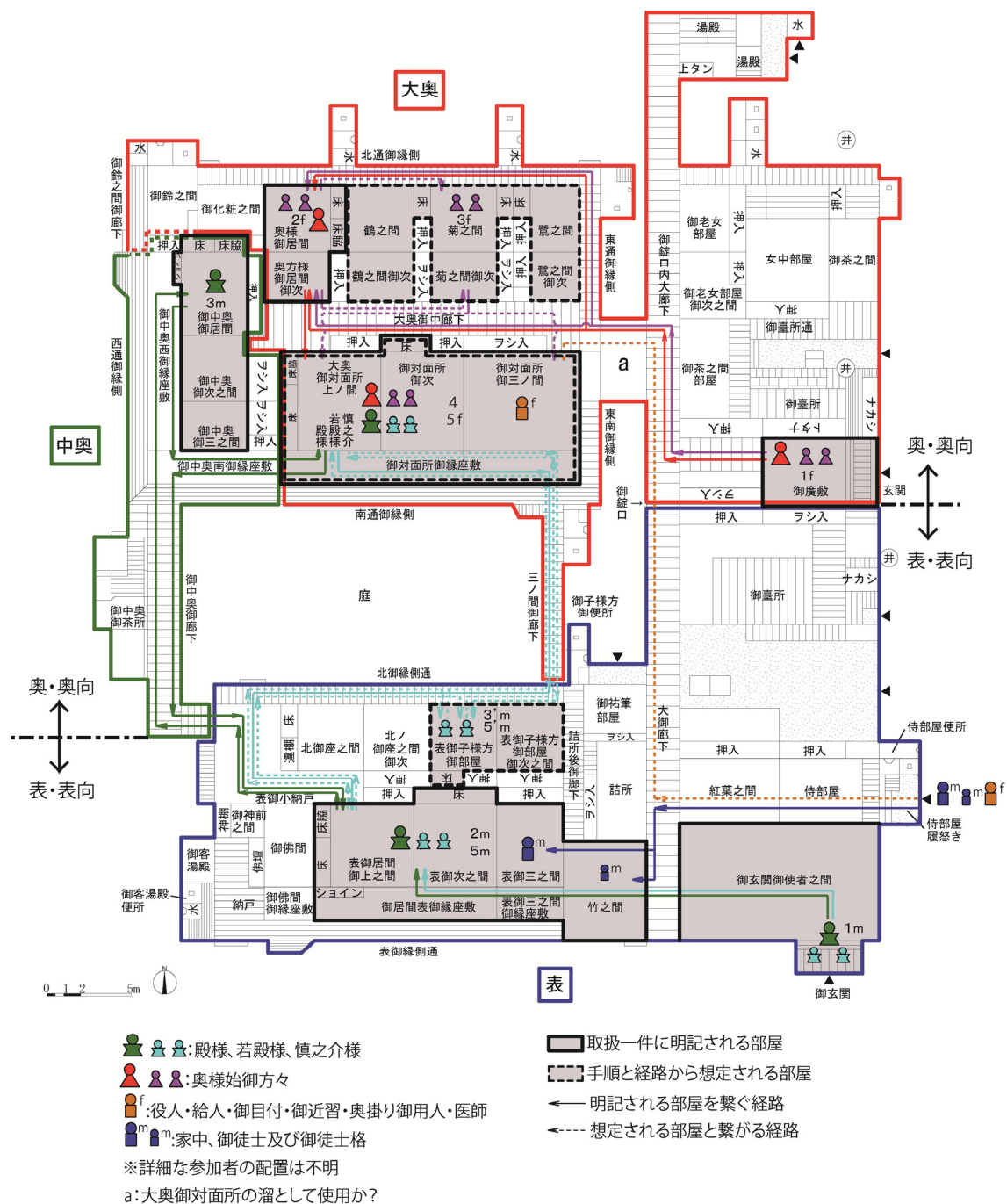


図 2-4 天保御殿内における移徙儀式が行われた場所と想定に基づく経路

表 2-1 儀式に用いられた場所の建築構成

空間	対面		居住			
室名	表御居間	大奥御対面所	御中奥御居間	奥様御居間	表御子様方御部屋	鶴之間・菊之間・鷺之間
室構成	3室+縁座敷	3室+縁座敷	3室+縁座敷	2室+落縁	2室+落縁	2+落縁
規模(畳)	12+12+10+縁座敷	15+15+21+縁座敷	10+8+6+縁座敷	8+6	8+6	8+6
座敷飾	床・床脇・付書院・次の間床	床・床脇・次の間床	床・床脇・付書院	床・床脇	床・(押入)	床・(押入)
天井高(mm)	不明	2945(9尺7寸)	3209(10尺6寸)	3180(10尺5寸)?	不明	3180(10尺5寸)?
長押	有り?	有り	有り	無し?	不明	無し?

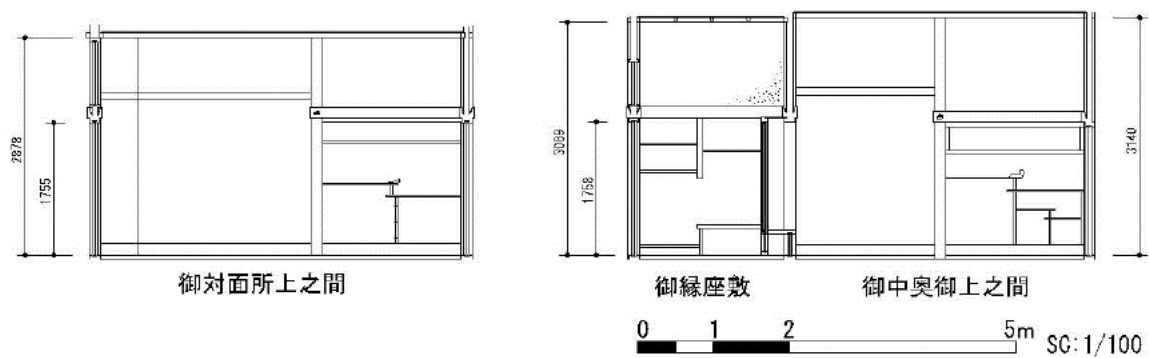


図 2-5 天保御殿 御中奥御上之間・御対面所上之間 復元展開図

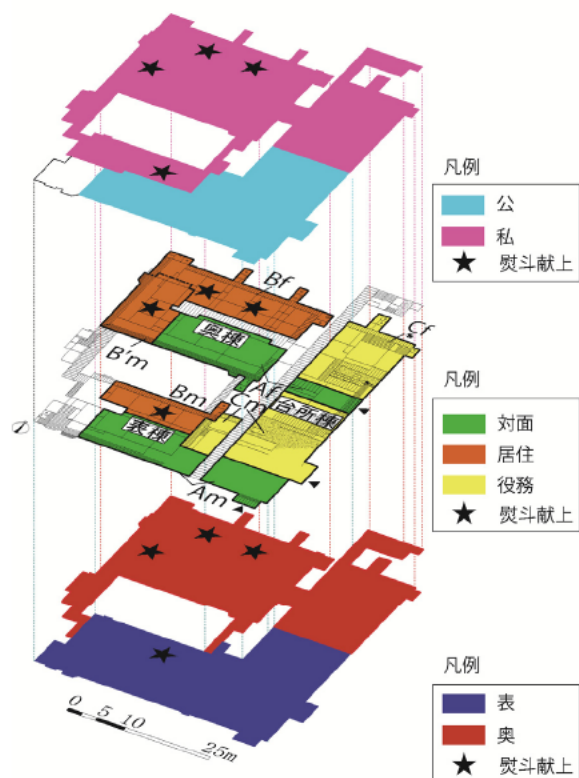


図 2-6 天保御殿の空間構成

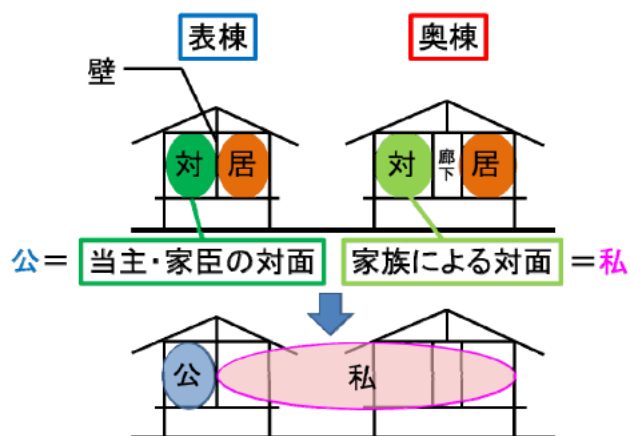


図 2-7 表棟・奥棟と公・私の関係

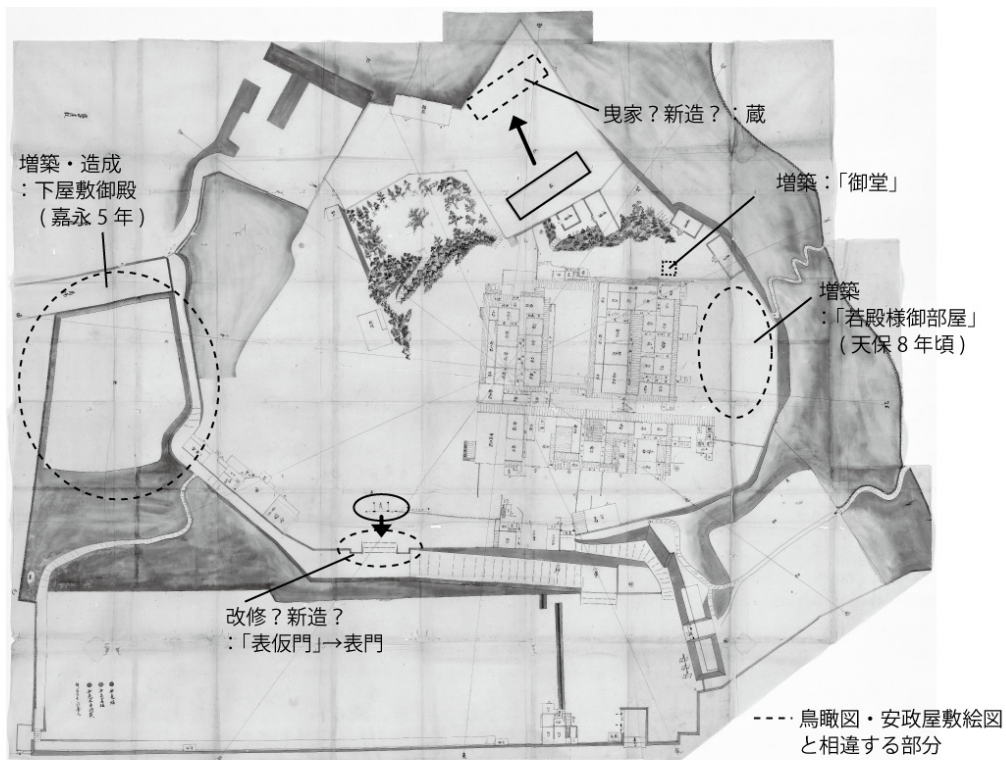


図 2-8 天保再建屋敷絵図・鳥瞰図・安政屋敷絵図の比較(右手が北)

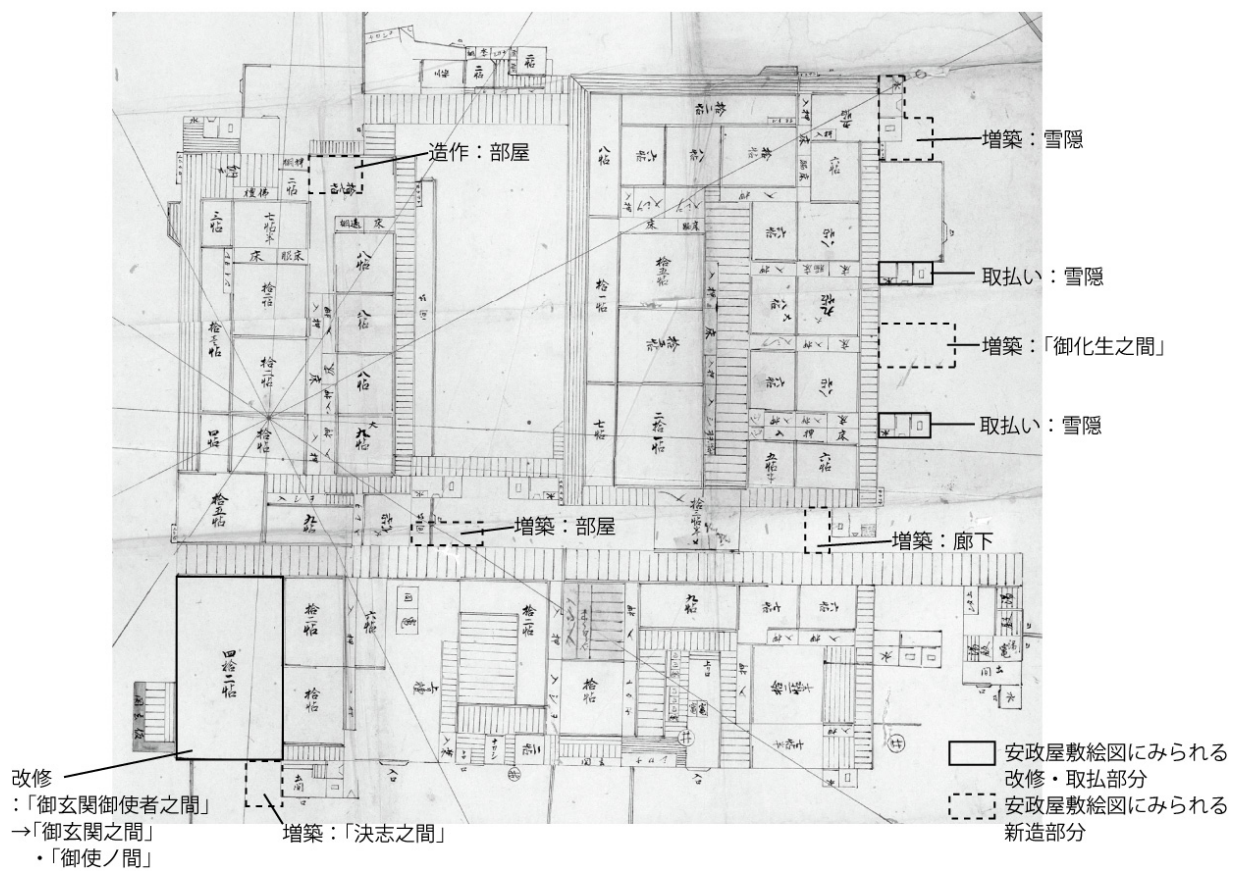


図 2-9 天保再建屋敷絵図と安政屋敷絵図の比

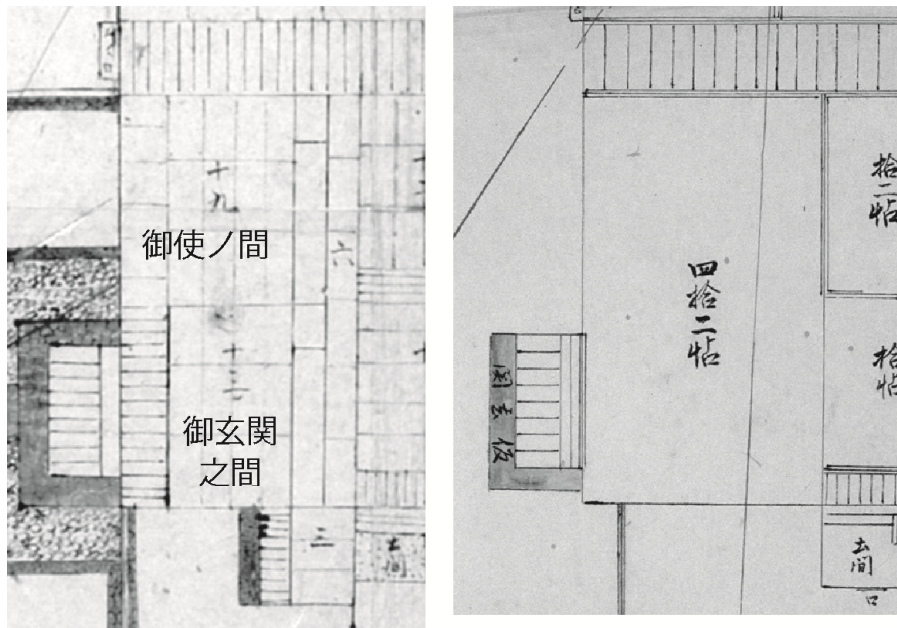


図 2-10 「御玄関御使者之間」部分 安政屋敷絵図(左) 天保再建屋敷絵図 (右)
(安政屋敷絵図の部屋名の書入れは筆者による)

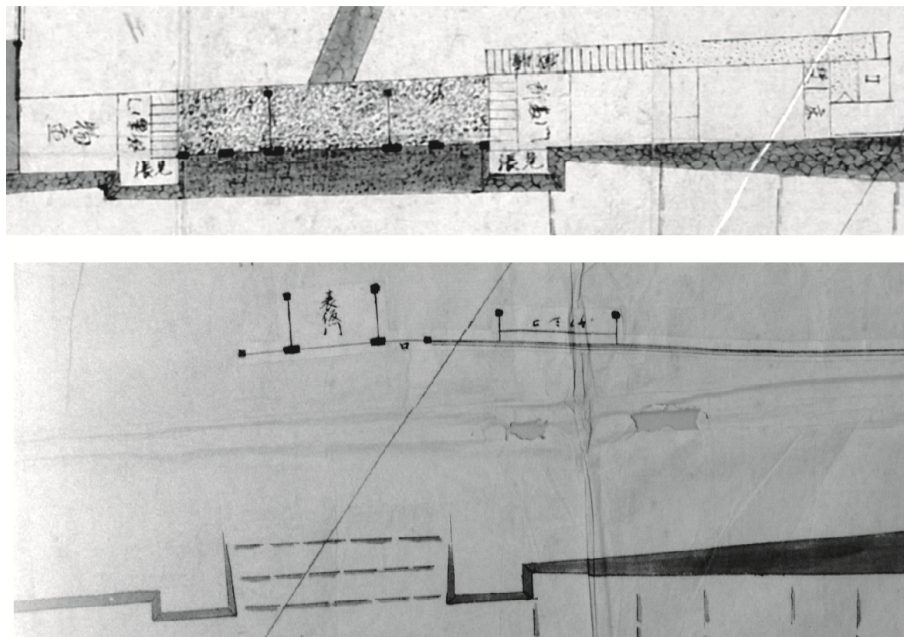


図 2-11 表門部分 安政屋敷絵図 (上) 天保再建屋敷絵図(下)

第3章

縮小明治御殿にみる平面構成の基本原則

第3章 縮小明治御殿にみる平面構成の基本原則

はじめに

広大な屋敷を構えた西高木家は、明治維新後の社会情勢の変化の中で屋敷の維持が困難になり、明治5年(1872)以降は建物を撤去して屋敷を縮小させた(註1)。本章では明治7年から改修に着手した明治御殿の平面に注目し、改修の過程で再設定された領域と建築構成との対応関係から、平面構成の基本原則について論じる。

まず関連資料の分析から、天保御殿の奥棟だけを残して居宅に改修した経緯を明らかにした上で、御殿の縮小改修の様子を記す絵図を高木家文書の中から確定し、改修前後の明治御殿の平面の変化を整理したい。

第1節 屋敷の規模縮小とその要因

屋敷の規模縮小に関しては、明治5年(1872)以降から建物の払下げが始まり、天保御殿の奥棟を居宅に改修したこと、下屋敷の御門を曳いて表門としたことがわかっている。表3-1は序章で述べた表1-1から明治期を抜粋した年表である。年表には報告書刊行以降、新たに発見された明治期の高木家文書により明らかになった事項を加え再整理している。

明治2年、高木家は知行地を返上する。明治4年には11代貞正が当主を継ぎ、修復した下屋敷御殿で居住している。この時点では下屋敷御殿を本宅とするか、残すつもりであったと判断できる。しかし、「桑原應助」(註2)という人物が西高木家に宛てた文献G-046「先君様の物語及びこの節の時勢を愚考して屋敷勝手向きの件申し上げにつき書状【607】」(註3)の内容が、屋敷の規模を縮小させた要因と考えられる。

文献G-046の日付は「五月十五日」と月日のみ記されるが、明治5年の6月から払い下げる建物の取調べが行われることから(註4)、明治5年5月15日の文献である可能性が高い。内容は「御勝手之儀ハ御家禄無之とも御暮し之出来候様ニ御拂物も被為在候」、「長間々御塀等御拂被遊候」、「大木等御拂候」、「御屋敷内之畑ニ合成候ハ場所不残茶園ニ被遊度御時勢儀者」など、塀や樹木の払い、茶園の開拓などの勝手向きに関する提案である。應助は愛知県での大区長や戸長の廃止など、時勢にも触れ、先代(10代貞広)の時代とこの時勢を比較した上での考えであると述べている。後述するように、実施された規模縮小は、この書状に記された内容に一致する。

天保3年(1832)建造の天保御殿は規模を縮小することにより、明治御殿として改修され近代を迎えたのである。

第2節. 屋敷の規模縮小を示す『高木家文書』

屋敷の規模縮小について建物の扱いを具体的に記述した文書は、報告書でも取り扱った文献 G-017「御屋敷御主法之覚【81】」（以後、主法之覚と表記）と絵図 G-006「[屋敷図]【44】」（以後、明治6年計画図と表記）（註5）以外に、報告書刊行以降新出の10点を確認できた。以下では新出の高木家文書の内容を記す。

①文献 G-038「主法帳【590】」：明治6年6月

表紙に「明治六年六月 主法帳」と記されている。建物名や棟数と共に、取払い、曳家、転用など、建物の扱いが記される。朱墨により、建物名、棟数、規模には加筆がされ、扱いには訂正がみられる。「徒部屋前□□高堀 壹 是表門トイタス」など、現状とは異なる記述があるため、主法之覚より古い計画途中の文書といえる。

②絵図 G-008「[建物図面]【574】」：年月日未詳(図 3-1)

旧中奥部分を省略した、旧奥棟東側諸室の建物平面図と考えられる。旧御対面所御三ノ間を「物置」、旧菊之間を「茶間」、旧鷺之間を「客間」への改修を計画している。玄関の位置も他の屋敷図と異なり、後述する絵図 G-004 の平面構成とも異なるため初期の計画案と考えられる。

③絵図 G-013「[建物図面]【588】」：年月日未詳(図 3-2)

上屋敷の配置図に貼紙をし、明治御殿の屋敷地について検討する。明治御殿に旧奥棟を利用したことがよくわかる。

④絵図 G-017「[屋敷図面]【616】」：年月日未詳(図 3-3)

上屋敷の表門周辺が記されており、絵図 G-013 の一部と考えられる。「大炮入」「稽古場」「厩」などが記される。

⑤絵図 G-001「[敷地図面]【575】」：明治6年(図 3-4)

文献 G-038 と同じ「元中玄関」「元臺所門」「元玄関前高堀」と、「奥向土蔵」と考えられる「土蔵」を記す。また、東側「物置」は「元耕遠楼」（註6）、東南「物置」は「元稽古場」と記す。旧奥棟東側の諸室に「茶ノ間」「同庭」「臺所」への改修を計画している。表棟と繋がっていた「三ノ間御廊下」が残る。

⑥絵図 G-009「[敷地図面]【577】」：年月日未詳(図 3-5)

詳細は第4節で述べるが「表」「奥」と区画分けを記す。旧奥棟東側諸室は北より「茶ノ間」「臺所」「玄関」と記す。文献 G-038 と同様「耕遠楼」「集義館」（稽古場）と記す。「玄関」は絵図 G-001 と違い旧主屋に内包する。「奥向土蔵」と考えられる建物を記す。

⑦絵図 G-012「[敷地図面]【587】」：年月日未詳(図 3-6)

「表」「奥」と区画分けを記す。旧奥棟東側諸室は絵図 G-009 と同様である。長屋門を記し、主屋から延びる「三ノ間御廊下」が長屋門西側の部屋と繋がる。「奥向土蔵」と考えられる建物を記す。

⑧絵図 G-010 「[敷地図面] 【578】」：年月日未詳(図 3-7)

旧奥棟に加え、「表棟」と繋がっていた「三ノ間御廊下」と、「奥向土蔵」と考えられる建物を記す。

⑨絵図 G-002 「[敷地図面] 【576】」：明治 7 年 2 月 17 日(図 3-8)

旧奥棟に加え、「表棟」と繋がっていた「三ノ間御廊下」、「奥向土蔵」と考えられる建物、3 か所に門を記す。

⑩絵図 G-004 「[建物図面] 【583】」：明治 7 年 2 月 28 日(図 3-9)

詳細は第 4 節で述べる。旧奥棟と改修後の明治御殿と考えられる平面図を隣接して記す。日付後に「認」とあり、最終案として西高木家から承認された可能性が高い。旧奥棟内部東側が臺所廻りに改修され玄関を内包する。「フロ」は建物北東に外接する。

第 3 節. 明治期における近世遺構の確定

規模縮小により残されるべき建物と取払うべき建物は文献 G-038、主法之覚に記される。これらは先に述べたように計画段階の文書である。近世から明治初期における屋敷の変遷を明らかにするには、他の絵図との建物名、建物数、建物規模、建物位置の比較が必要で、最終的な建物の扱いが明らかになると考えられる。以下では文献 G-038、主法之覚、新出屋敷図①～⑩と本章の関係研究と報告書で扱った安政屋敷絵図、明治 6 年計画図、現況建物で比較分析をおこなった。その結果をまとめたものが表 3-2 であり、変遷を図化したものが図 3-9 である。

以下、建物ごとに詳細を述べる。建物名は基本的に文献 G-038 の表記により、文献 G-038 に記されない建物は主法之覚や屋敷図に記される建物名を用いた。

イ) 残された建物

「上屋敷奥」：奥棟のことである。文献 G-038 の「上屋敷奥ニテ住居之事」、文献 G-017 の「御奥向之儀御手廣ニ付其俣御中ニ御茶之間御臺所を御庭を御繕ノ事」という記述、安政屋敷絵図の奥棟と絵図 G-013、絵図 G-017、絵図 G-004 の平面構成が一致することから残ったことは間違いない。「三ノ間御廊下」を記すものが多く、長屋門である現状表門の西側部屋(図 3-1)に繋がっていた可能性がある。

「御下屋敷之御門」：主法之覚に「御門御長屋ハ御下屋敷之分を御上屋敷へ御引」と記されるが、現状表門の棟札、安政屋敷絵図の下屋敷御門と現状表門の平面構成の一致

から残ったことは間違いない。

「奥向土蔵」：文献 G-038 に 5 棟確認できる。安政屋敷絵図、絵図 G-013、絵図 G-001、絵図 G-009、絵図 G-012、絵図 G-010、絵図 G-002 には奥棟の西側に 5 棟の建物が共通して記される。このような絵図のように、関連する記載と判断できる文献や屋敷図が多いため、計画当初から一貫して残す方針だったと考えられる。

「湯屋」：主法之覚に「下ノ風呂場ハ御住居其外御裏方に」とあり、下屋敷の風呂場を曳き家したと考えられる。絵図 G-013、絵図 G-001、絵図 G-004、明治 6 年計画図から最終的に居宅の「茶ノ間」北に取り付いたと考えられる。

「玄関前高塀」：文献 G-038 と絵図 G-001 に記される。当初の位置を推定すると、安政屋敷絵図に記される「表」の「御玄関」前の高塀と考えられる。長さおよそ 15 間で描かれる。御玄関前と表座敷前の庭を仕切る塀を合わせれば 30 間程になる。これを曳家すれば、絵図 G-001 のような外塀とすることは十分可能である。

ロ) 文書には残すとあるが取払われた建物

「徒部屋前高塀」：文献 G-038 に「表門トイタス」とあるが、「御下屋敷之御門」が表門とされたため、取払われたと考えられる。

「耕遠楼」：文献 G-038、絵図 G-001、絵図 G-009 に建物名が確認できる。建物の詳細は不明であるが長屋状の建物らしい。該当する建物は明治 6 年計画図に見当たらないので、取払われた可能性が高い。

「中玄関」：文献 G-038 には「当引夫ままに表解キ候帯引キ取ル」と記述がある。これは「表」に属した「中玄関」を解体時に曳家するという記述である。また絵図 G-001 には「元中玄関」を旧奥棟の東側に曳家した計画を描くが、近世上屋敷表棟中之口にあたる「侍部屋履怒き」と規模が一致する。最終的に玄関は絵図 G-004 のように奥棟内部に設けられたので取払われたと考えられる。

ハ) 取払われた建物

以下の建物は安政屋敷絵図からその位置が特定できるが、建物のほとんどが明治期の屋敷範囲の外であり、曳き家した記述もないため、取払われたと判断できる。

「稽古場」：文書によって取扱の違うものに「稽古場」がある。主法之覚は「御門御長屋ハ御下屋敷之分を御上屋敷へ御引被遊候哉左候ハハ御稽古場を引候御事ニ及不申候」と記す。しかし、「御下屋敷之御門」が曳家された現状では旧表棟の南側に位置した「稽古場」をそのまま置いたとは考えがたい。

「下屋舗」：文献 G-038 は「当時住居下屋舗ハ而取拂之事」、主法之覚は「当時住居被遊候下屋敷ハ一兩年も相立後御不用」と記す。その他「下屋舗」に関する記述はない。

「臺所門」：絵図 G-017 は敷地東南に「元臺所門」を記す。しかし、文献 G-038 に取払うと記す。

「表一棟」：文献 G-038 は「二十一間 八間二」と規模を記す。この規模は安政屋敷絵図における表棟の桁行と臺所棟の梁間寸法を足した規模である。よって、建築的には「臺所棟」に属する「御玄関之間」や「使者之間」までが「表一棟」になる。

「米蔵」：文献 G-038 は「十間二間」と規模を記す。安政屋敷絵図にはこれに該当する規模の「米蔵」が上屋敷北に位置し、この建物を指すと考えられる。

「馬屋」：文献 G-038 に記される「七三」は「間」を略して規模を記すと考えられる。安政屋敷絵図には上屋敷東南に「厩」が位置し、この建物が該当すると考えられる。

「作事部屋」：文献 G-038 は「二七」と規模を記す。安政屋敷絵図には「作事長屋」と名前が記されるが、規模が大きく、同一の建物か不明である。

「大炮蔵」：絵図 G-017 は「稽古場」の北隣に、「大炮入」という建物を記し、同一建物と考えられる。

「門番部屋」：文献 G-038 は「三九」と規模を記す。位置と規模から上屋敷表門北側の「役所」「薪部屋」「中間部屋」からなる 1 棟と判断できる。

「味噌蔵」「味噌部屋」：文献 G-038 は「味噌蔵」について「二五」と規模を記す。安政屋敷絵図に「味噌蔵」は記されていないが、位置と規模からは「米蔵」に隣接する「雑蔵」が該当すると考えられる。絵図 G-001 に記される「味噌蔵」については、安政屋敷絵図の「雑蔵」とは明らかに規模が異なり、改修や計画上の建物と考えられる。

「□門」：□は解読できず、建物の詳細は不明である。

「表長高塀」：文献 G-038 にのみ建物名が確認できる。詳細な位置は不明である。「不残取拂之事」と記す。

「枅形ノ門」：建物名から位置を想定すると、安政屋敷絵図の上屋敷東部に記される「惣門」と考えられる。

二) 文献に名前が記されていない建物

以下は明治 6 年計画図に記される建物であるが、文献には記されていない建物である。

「薪部屋」：安政屋敷絵図、絵図 G-017、絵図 G-001 の同位置に建物があり、残った可能性が考えられる。

「茶席」：現時点では明治 6 年計画図に記されるのみである。報告書では近世遺構である下屋敷御殿からの曳家である可能性を指摘している(註 7)。

「養蚕室」：文献 G-038 の「桑茶植付之事」という記述から、明治期に整備された、転用の建物である可能性が高い。

「馬屋」：明治6年計画図に記されるが、安政屋敷絵図の「厩」より規模が小さく、新築や改修が考えられる。

以上の分析から、近世の遺構のうち明治初期に残った建物は「上屋敷奥」、「奥向土蔵」、「湯屋」、「玄関前高塀」、「御下屋敷之御門」、「薪部屋」と判断でき、明治6年計画図に近い構成となる。この結果から、既往研究において明治6年計画図と判断した屋敷図のように屋敷整備は実施された可能性が高い。文献と絵図の内容から明治御殿は、應助の提案に一致するものと考えられる。

第4節 明治御殿に関する史料

明治御殿の平面構成と改修内容を読み取るうえで重要な絵図に絵図 G-004(図 1-13)と絵図 G-009 の2点があげられる。以下では絵図 G-004 を中心に、平面と改修内容を検討し、絵図 G-009 に記される「表」「奥」の領域にどのように対応するか検討する。

4-1. 絵図の概要

絵図 G-004 は外題や内題、奥書の記載はない。日付は「明治七年甲戌二月廿八日認之」と記される。縮尺を書入れないが、採寸から1間を約6分で描く。ヘラ目は入らない。この絵図の特徴は類似する平面が同じ縮尺で並べて描かれていることである。2つの平面にはそれぞれ方位と、「床」「違棚」「棚」「押入」「佛間」「ダイス」「戸棚」畳数など部屋の特徴を示す書入れが確認できる。彩色についての凡例を書入れないが、畳の部屋を黄色、板敷部分を茶色、「ダイス」を橙色、「押入」と土間を灰色で塗り分けていることが確認できる。

絵図 G-004 に描かれた平面は一部に大きな相違が確認できる。絵図 G-004 の左側は天保御殿の奥棟部分と同じ平面を記す。これに対して右側は同じ奥棟の平面ではあるが、朱墨や貼紙などによる修正を東側部分に集中して加えられている。

4-2. 絵図の性格

絵図 G-004 の修正部分について、左側は改修前の平面、右側は改修後の平面を描くと考えられる。そこで左右の図面の描写内容を比較し、以下の改修内容を読み取った。

まず、奥棟は「御中廊下」を中心に南側が「御対面所」、西側が「御中奥」、北側が女性家族の居室群というコの字型に諸室が配置される平面である。このうち改修されたのは中廊下を挟んだ東側の諸室である(図 3-10 線書込み部分)。「御対面所」の「御三ノ間」は床を切り落とし、建物に内包される玄関及び土間に改修される。また、「菊之間」「鶯之間」と「御中廊下」の一部は板間と竈など台所廻りに改修され、その北側には新築か改修かは不明だが「フロ」が増築される。絵図 G-004 の土間や板の間、竈

などの描写は文書の記述と一致し、既往の報告を具体的に裏付ける史料が確認できたことになる。

本稿で取り上げた絵図 G-004 はその描写内容から奥棟を居宅に改修した際の検討図であるとみてよい。また、記載される日付の後には「認」とあり、西高木家が承認した最終の検討図と考えられる。

4-3. 絵図と事実関係との対応

奥棟の改修について記された主法之覚には「御奥向之儀御手廣ニ付其俣御中ニ御茶之間御臺所を御庭を御繕之事」という記述内容が確認されていたが、奥棟がどのように改修を経て明治御殿となったかを具体的に示す絵図はこれまで確認されていなかった。絵図 G-004 の土間や板の間、竈などの描写は文書の記述と一致し、既往の報告を具体的に裏付ける史料が確認できたことになる。

一方、絵図 G-009 (図 3-5) は、御殿の中に表と奥の領域範囲を示し、絵図 G-004 と同じく土間廻りの改修を描く。両図を天保御殿の平面と比較すれば、土間廻り新設のため床が落とされた場所は、旧大奥御対面所三ノ間と鷺之間であったこと、新たに領域として設定された表は旧大奥対面所、奥は旧中奥御居間と旧奥様御居間を始めとする北側の諸室に該当することがわかる。

以上、2つの絵図の描写情報を整理したものが図 3-11 になる。これら縮小に関する絵図と文献の分析からは、改修において表と奥を再編し、表棟及び臺所棟の機能を旧奥棟に内包させるべく玄関・臺所廻りが新設されたこと、縮小前後での屋敷主屋の規模の劇的な変化に関わらず普遍的な領域として表と奥が意識されていたことが明らかとなる。しかしながら、表にも居住空間が存在していた天保御殿に比べ、ここでは表には対面と役務の室群のみが設定されており居住空間は存在しない。つまり天保御殿との一貫性を考えるならば、ここで示される表と奥という領域の性格は、公と私に置き換えることでより明解になる。

改修工事の内容でもっとも大がかりであったと考えられるのが、床切り落としによる2箇所土間の新設である。そして建築的には、土間と隣接する板の間、居室からなる室群が、公と私、2つの領域に必須であったことを、工事内容が示しているといえる。

第5節 規模の縮小過程と御殿平面の基本原理

屋敷縮小の検討過程では、当時居宅としていた下屋敷御殿を残す案、あるいは絵図 G-013 において天保御殿の奥棟と臺所棟のみを残す案も検討している(註8)。つまり

公の領域に属し、建築的にももっとも充実していたと考えられる表御居間を内包する表棟が一貫して撤去の対象となっている点からは、近世封建社会の終焉とともに、公の対面空間が存続する必然性が無くなったという近代の到来を読み取ることができる。一方で、1 棟に土間や台所を 2 か所設けた下屋敷御殿や台所棟が存続の対象となっている点からは、身分制が完全に解消しない近代初頭において、依然として近世を引き継いだ公と私の領域設定が必要であり、それぞれに対応して、土間を伴う役務空間が求められていたことがわかる。しかし、最終的には奥棟だけを残すこととなったため、床の切り落としが選択された。

土間新設とは対照的に、公の対面の場の整備は、領域再設定に伴う既存の室群の用途変更で対応している。縮小前には私の領域にあった旧大奥対面所は、東南隅に新設された玄関に面する公の領域に属することになった。結果として、公の領域の対面の場が、私の空間より天井が低く座敷飾りも簡素であるという(図 2-5)、建築的な逆転現象が生じることとなった。つまり意匠や格式といった建築構成よりも、領域設定に伴う室の位置関係が優先されたのである。

まとめ

以上、明治御殿の改修経緯からは、極めて限定される規模に縮小された中でも、公と私に分類できる 2 つの領域を設定していたことが明らかになった。公では対面に用いる座敷と土間を伴う役務諸室、私では居住に用いる居室群と土間を伴う役務諸室をそれぞれ設定するという指向が読み取れる。公が対面の座敷と役務諸室からなり、私が居室群と役務諸室からなるという平面構成は、天保御殿にも対応するものであり、このような公と私の構成が、改造前後の天保御殿に通底する平面の基本原理であったことを明らかにした。

あえて付け加えるならば明治 29 年(1896)のさらなる縮小では西高木家は近世の封建的な階層性に基づく領主的性格を失っていくため、公と私それぞれに居住・対面・役務に基づく部屋を設定する形から遂に変化した。居住と対面、公と私という領域性が明治 29 年に至ってなくなった。歴史的に言うならばこれが西高木家にとっての近代の到来といえる。

参考文献

- 1) 石川寛：交代寄合高木家主従の明治維新, 名古屋大学附属図書館研究年報 第8号, 2009
- 2) 上石津町編：上石津町史 史料編, 1975
- 3) 上石津教育委員会：新修上石津町史, 2004
- 4) 溝口正人編・執筆：岐阜県史跡 旗本西高木家陣屋跡 主屋等建造物調査報告書, 大垣市教育委員会, 2009. 3
- 5) 名古屋大学附属図書館 2009 年春季特別展(地域貢献特別支援事業成果報告) 旗本高木家主従の近世と近代—高木家文書と小寺家文書—, 名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室, 2009

註 釈

- (註1) 本稿第1章附節参照。
- (註2) 桑原應助は旧尾張藩領石津郡市之瀬村の庄屋を務めた人物であり、重要文化財桑原家住宅として遺構が残る桑原権之助家の一族と考えられる。應助と貞正は旧知の中であつたが、両人とも学区取締りに任命されるなど、地元の名士として親交が深かつたと考えられる。
- (註3) 新出の『高木家文書』には名古屋大学附属図書館室により仮整理番号が付けられる。
- (註4) 文献 F-034 「奥御館并御勝手御館御建前向取調覚帳【9-い】」。
- (註5) 参考文献4) 第二章第一節 pp12-14 参照。絵図 G-006 「〔屋敷図〕【44】」。
- (註6) 本章の関係発表論文である、大橋正浩, 溝口正人：旗本西高木家陣屋の明治初期における屋敷規模縮小について—高木家文書による研究 その3—, 日本建築学会東海支部研究報告集 第50号, pp769-772, 2012.2 では「耕造楼」としていたが、誤植であつたため「耕遠楼」に訂正する。
- (註7) 参考文献4) 第三章第一節 p. 30。
- (註8) 註1に同じ。

表 3-1. 『高木家文書』に記される明治期屋敷建物の変遷

西暦	和暦	日付	事蹟	該当資料
1869	明治2	8月28日	明治維新となり知行地返上	
1871	明治4	8月	10代貞広死去。養子貞正が11代当主となる	高木系譜【ffaa-0008】
1872	明治5	4月	御下屋敷修葺	文献F-033御下邸御修葺諸入用留記【9-あ】 文献F-035御下屋敷御修葺凡積り帳【10】
		4月15日	この頃貞正は下屋敷に住居	
	明治5? (年号未記載)	5月14日	桑原應助が西様に塀や大木の御払い、茶園の開拓など、屋敷勝手向きの件について書状を送る	文献G-046先君様の物語及びこの節の時勢を愚考して屋敷勝手向きの件申し上げにつき書状【607】
		6月	「奥御殿」、「御勝手館」御建前取調べ	文献F-034奥御館并御勝手御館御建前取調覚帳【9-い】
		7月8日	「御台所」壹棟を当十月切引払いとある	文献G-002差上申御請書之事【186-あ】
		7月	「御物置」壹ヶ所の払下げについて記述	文献G-003差上申御請書之事【186-い】
		8月29日	「御長屋」壹ヶ所の払下げについて記述	文献G-004差上申御請書之事【186-う】
		10月	「御台所」引払いか?	文献G-002差上申御請書之事【186-あ】
1873	明治6	6月	「上屋敷奥」を住居とすること、「稽古場」・「耕遠楼」を引くこと、門・蔵・塀などの払い（一部残る）、開拓地に桑・茶植え付けることなどが記述	文献G-038記【597】
			主屋内部東側には「臺所庭」「茶ノ間」、敷地には「物置」「薪部屋」「味噌蔵」「土蔵」などが記される	絵図G-009敷地図面【575】
			桑原應助の案として、上屋敷のうち「奥」を繕って住居とすること、「表」をはじめ不用の分を残らず払うこと、「下屋敷」を払うこと（1,2年後には不要のため）、「下屋敷御門」を引くこと、茶園の開拓などが記述	文献G-017御屋敷御主法之覚【81】
		8月5日	「御門南長屋」壹ヶ所の払下げについて記述	文献G-005奉差上御請書之事【186-え】
		12月	「御建家」壹処の払下げについて記述	文献G-006御請書一札之事【186-お】
1874	明治7	2月17日	奥棟の内部東側を玄関・台所廻りとし、表・奥の領域を設定した案が提出される	絵図G-002敷地図面【576】
		2月28日	奥棟を残し、建物内部東側を台所へ改修する案を西高木家が認める	絵図G-004建物図面【583】
		3月	上屋敷の修葺が行われ、「茶ノ間取繕」などが行われる	文献G-020御上邸修葺諸入用留【16】
1875	明治8	6月16日	上屋敷の屋根瓦修理（瓦葺き）について	文献G-023上屋鋪破損取繕記【19】
		10月16日～	「表御書院跡」「修義館前」の開発（これ以前に表書院取り壊し）	文献G-024表御書院跡并集義館前開発ニ付人足名前附留帳【492】
1879	明治12	1月7日	「御土蔵壹ヶ所」の払下げについて記述	文献G-007御約定証書之事【186-か】
1889	明治22	2月17日	屋敷売払代金受取について記述	文献G-026屋敷売払代金受取書下書【196】
1891	明治24	10月28日	濃尾地震	
1894	明治27	3月1日	貞正、第三回衆議院議員選挙当選	
		9月26日	入札と開札が行われる（入札対象不明）	日記【thbc-0014】
1896	明治29	2月13日	御屋敷を切組直す 旧御建物コボシ。土蔵5棟、長屋1棟、御茶席曳き家	文献H-001御受書【204-あ】 文献H-002受証【204-い】
		11月11日	主屋上棟	棟札

表 3-2. 文献と絵図にみられる建物の取扱い

		文献G-038 (数字は棟数・規模を示す)	主法之覚	安政屋敷絵図	絵図G-009	明治6年 計画図	分析 結果
文献 G ・ 0 3 8 ・ 主 法 之 覚 に 記 さ れ る 建 物 の 取 扱 い	残 存	上屋敷奥	上屋敷内奥向				残 存
			御下屋敷之御門			門	
		奥向土蔵 5		土蔵 (5棟)	無記名 (5棟)	土蔵	
		湯屋 1			フロ		
		玄関前高塀					
		徒部屋前高塀 (表門とする)					
		耕遠楼 1			耕遠楼		
		中玄関 1		侍部屋履怒き			
	取 拂	稽古場 1	6.5間×3間	稽古場	集義館		取 拂
			御長屋(稽古場)				
		下屋鋪 1	下屋敷				
		臺所門		臺所門			
		表一棟 1	21間×8間2	表棟			
		米蔵 1	10間×2間	米蔵			
		馬屋 1	7間×3間	廐			
				作事長屋			
		作事部屋 1	7間×2間				
		大砲蔵 1					
		門番部屋	3間×9間	役所・薪部屋 中間部屋			
		味噌蔵 1	2間×5間	雑蔵			
		味噌部屋					
		□門 (木門?) 1					
		表長高塀	御門外長キ高塀				
		枅形ノ門		惣門			
	無 記			薪部屋	無記名	納屋	残存
						茶席	転用
						養蚕室	新築
						馬屋	

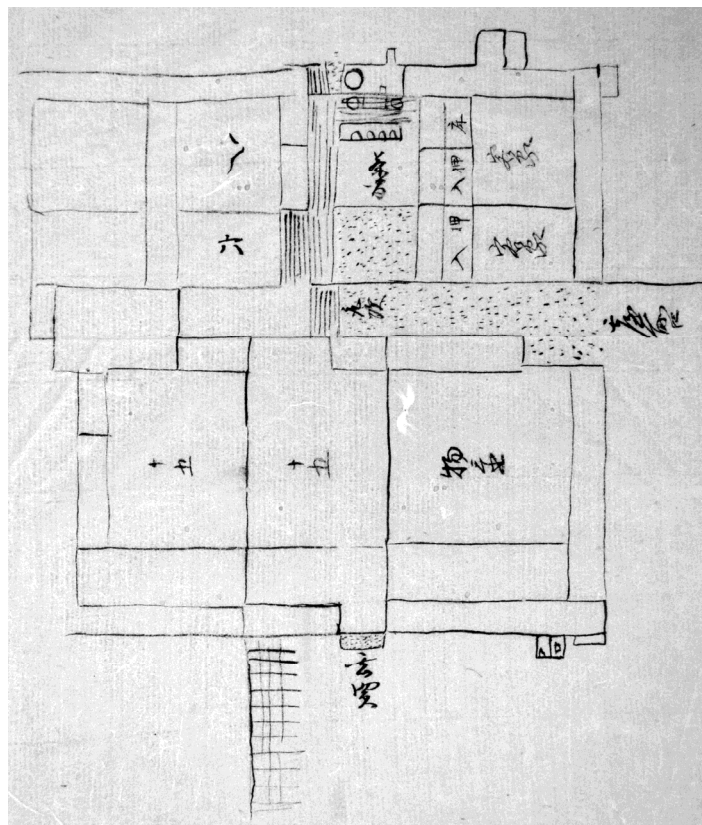


图 3-1 「[建物図面]【574】」

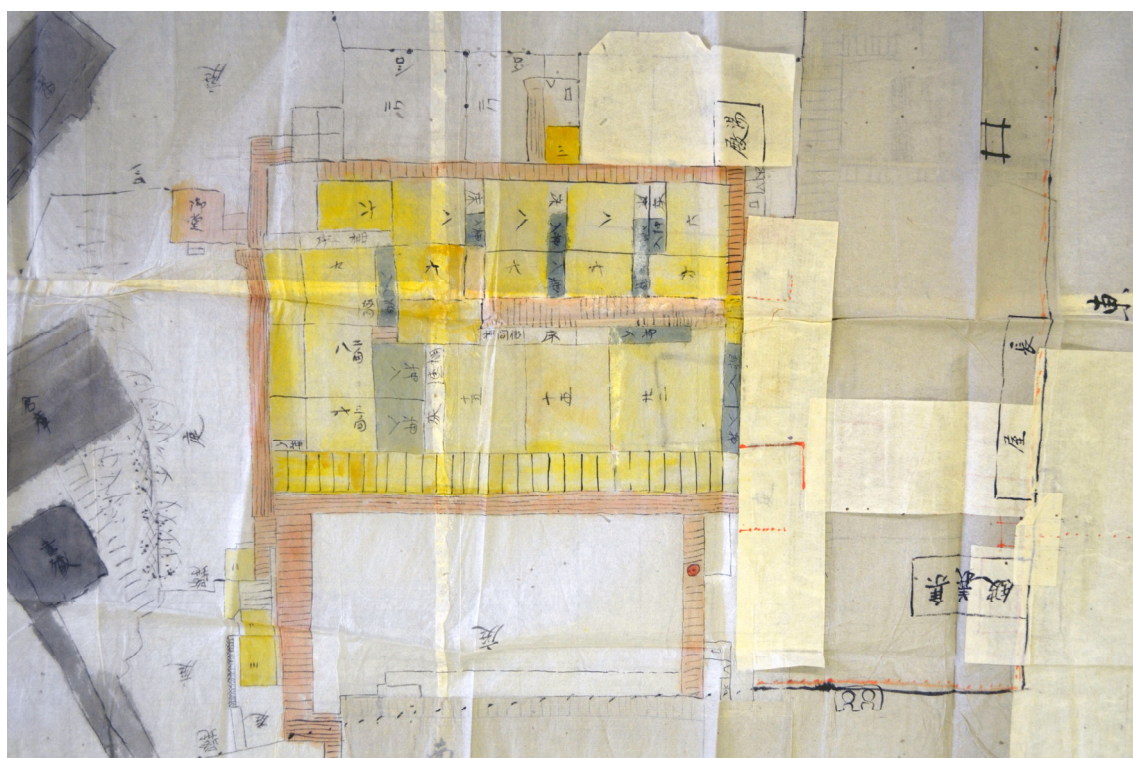


图 3-2 「[建物図面]【588】」

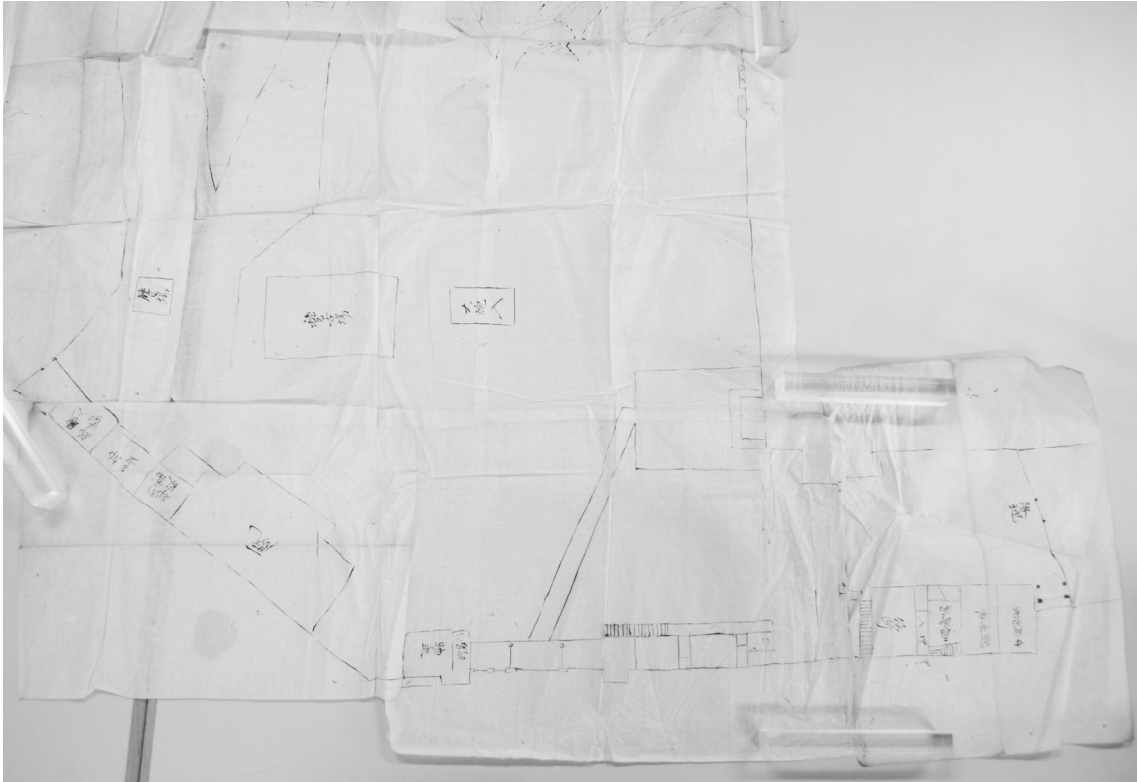


图 3-3 「[屋敷図面]【616】」

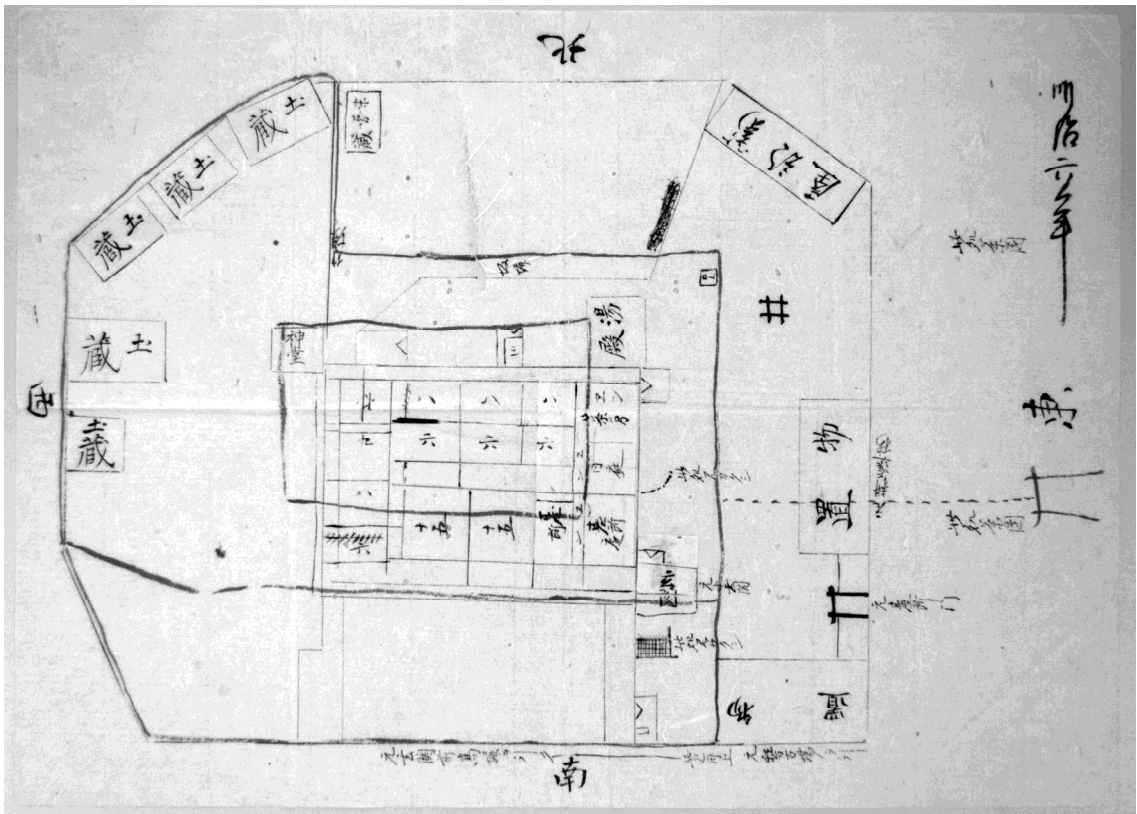


图 3-4 「[敷地図面]【575】」

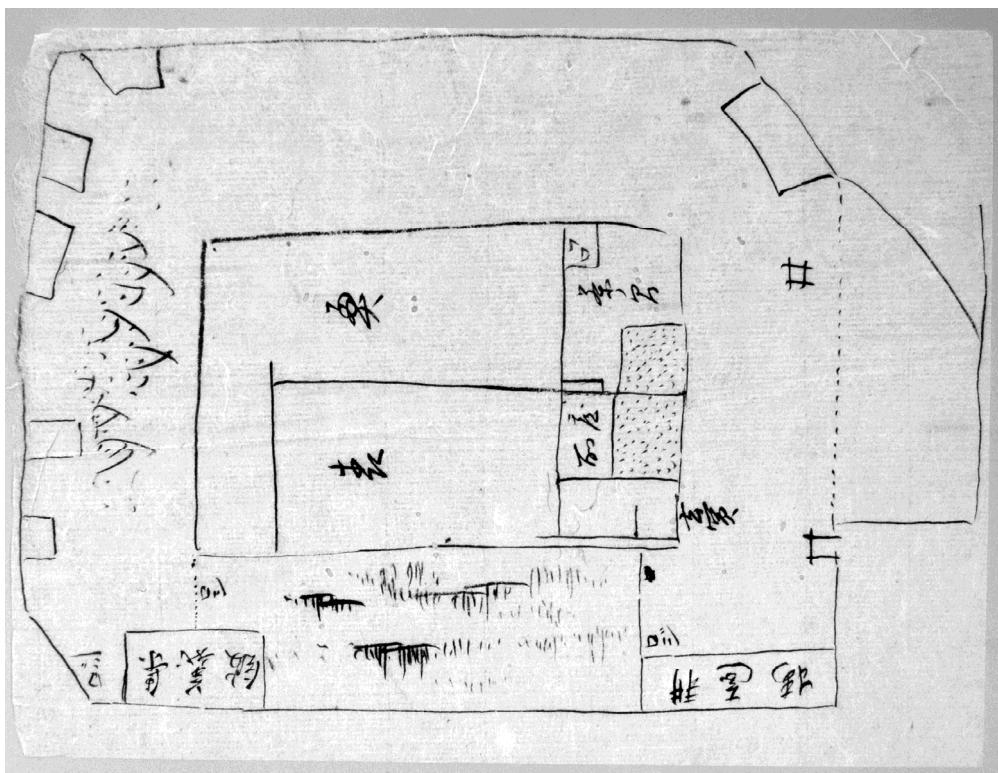


图 3-5 「[敷地图面]【577】」

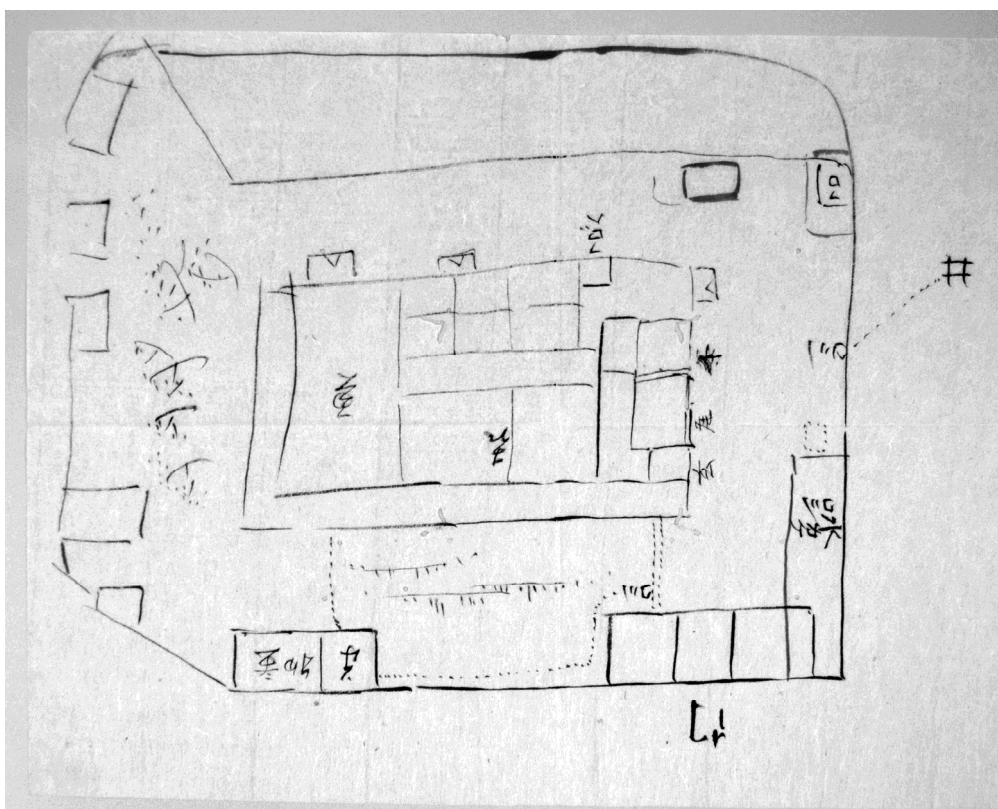


图 3-6 「[敷地图面]【587】」

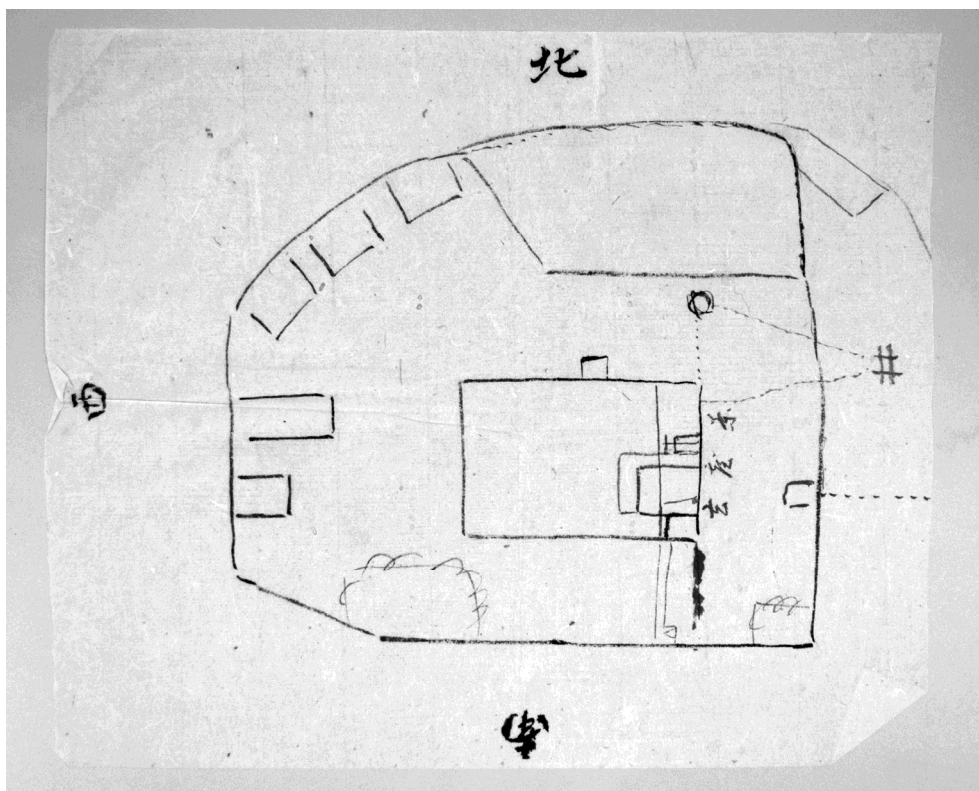


图 3-7 「[敷地図面]【578】」

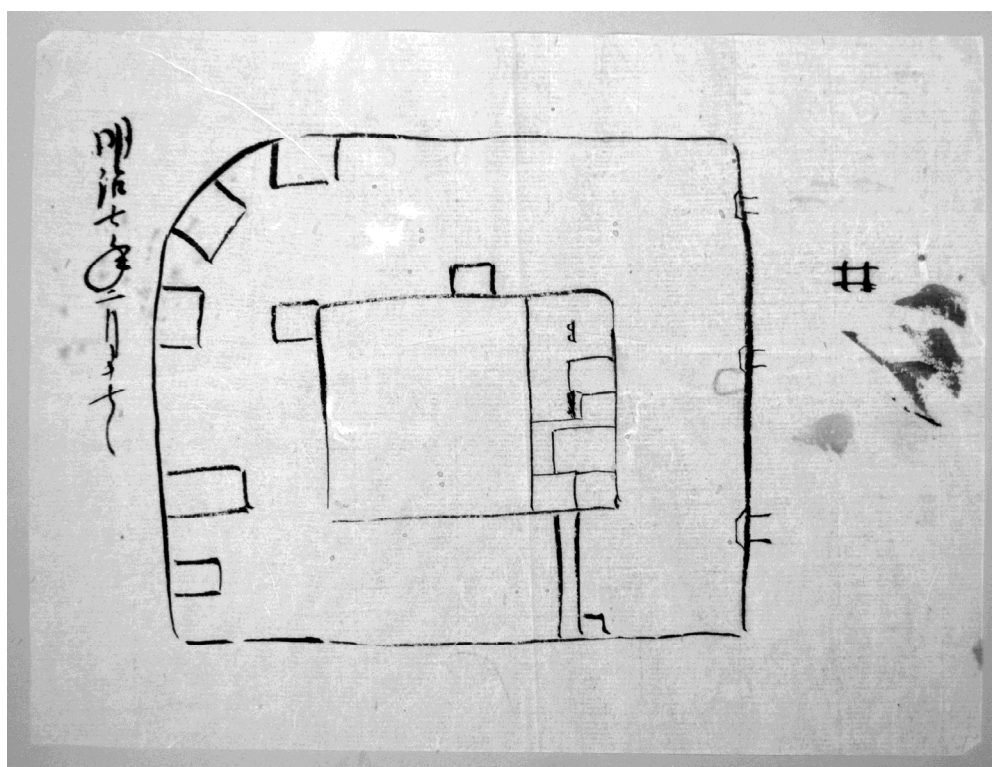


图 3-8 「[敷地図面]【576】」

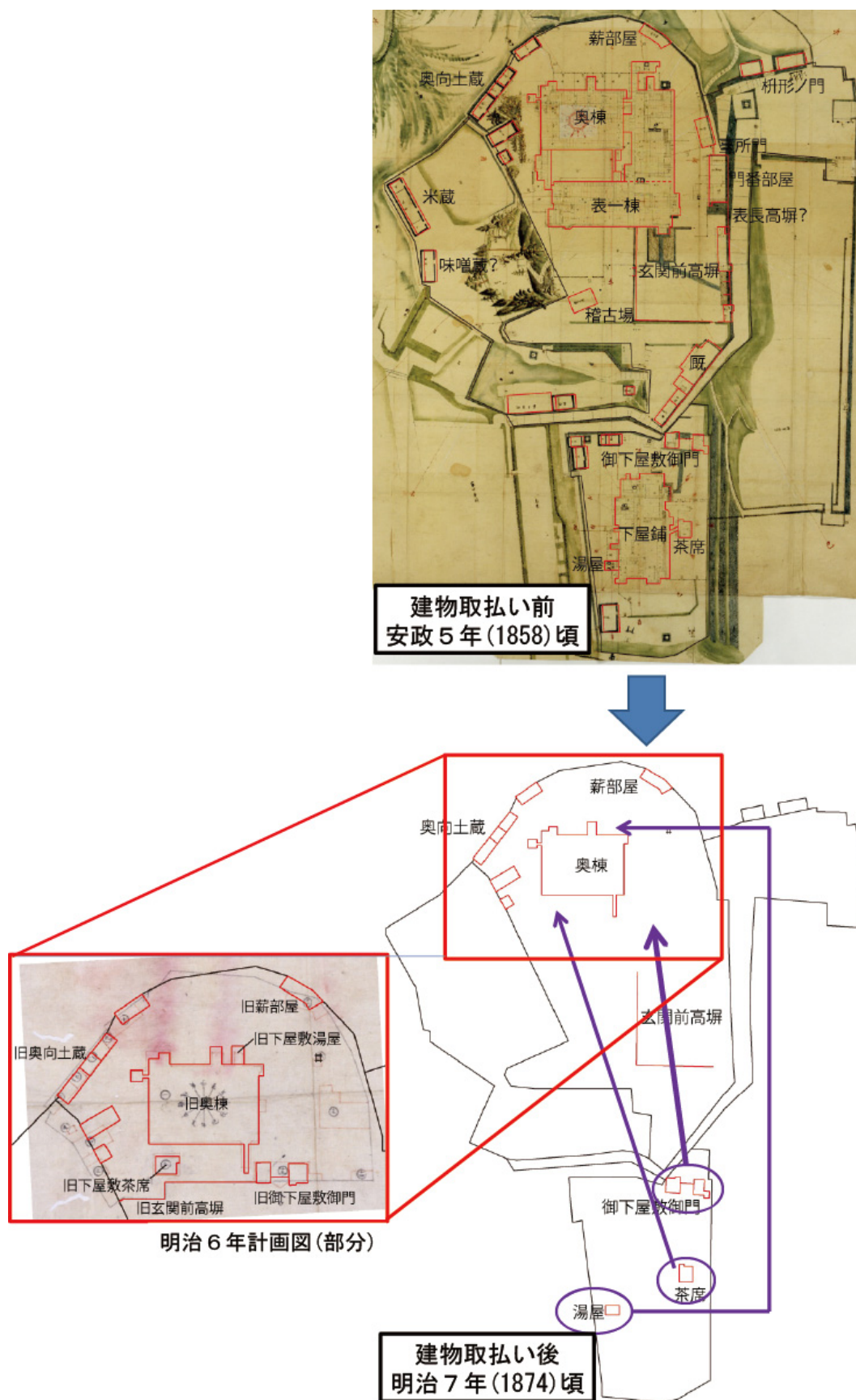


図 3-9 建物の取払い前後

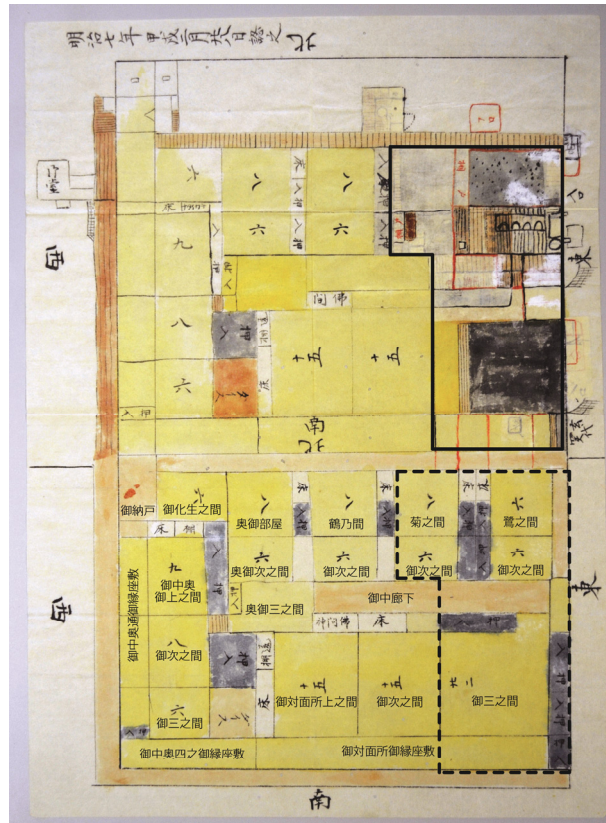


図 3-10 「建物絵図【583】」
(部屋名と改修範囲を示す実線と点線は筆者の書込み)

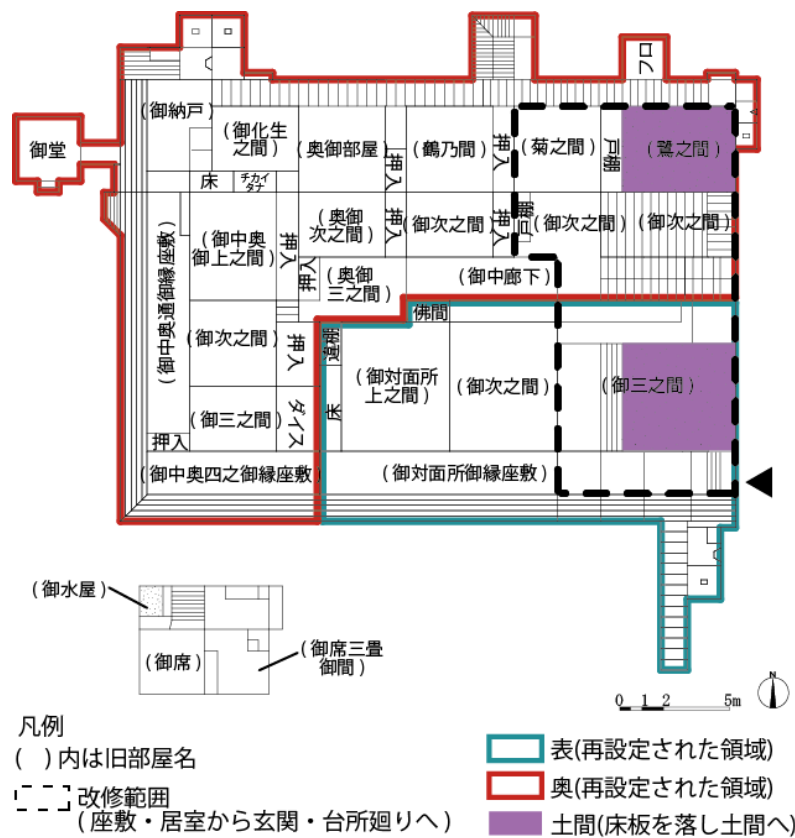


図 3-11 明治御殿の平面図

第4章

嘉永度下屋敷御殿の施設の性格

第4章 嘉永度下屋敷御殿の施設の性格

はじめに

下屋敷を分析対象とした既往の研究は数多く確認でき(註1)、災害時における上屋敷の代わり、若殿様の居宅、前当主夫妻の隠居家、茶室などを設けた遊興の場など様々な用途が指摘されている(註2)。こうした用途については、下屋敷単体での分析が進められてきたが、上屋敷と下屋敷の御殿の平面構成や建築的な特徴の比較に基づく実証的な考察は十分ではなかった。本章では、天保御殿と併存していた嘉永5年(1852)造営の下屋敷御殿について、平面構成や建築的な特徴を整理した上で、造営経緯を明らかにし、天保御殿との比較をもとに、下屋敷御殿の施設の性格について明らかにする。

第1節 高木家に関する文書群にみる下屋敷御殿の建築構成

1-1. 下屋敷御殿について記される高木家に関する文書群

天保3年(1832)の類焼では、陣屋のほとんどの建物が焼失している。第2章で述べた天保御殿が位置する上屋敷は火災と同年に再建されたが、下屋敷は遅れて嘉永5年(1852)から嘉永7年にかけて、上屋敷南隣の敷地に再建された(図4-1)(註3)。両屋敷は明治6年(1873)頃まで併存したが順次整理され、下屋敷の遺構は表門のみが現存する(註4)。

嘉永再建の下屋敷御殿に関しては、明治4(1871)年に当主が代替わりする時点での使用が確認できる。しかし、建物としての実体を示す史料は多くはない。現時点で下屋敷御殿の平面を描いた絵図は、安政屋敷絵図(図1-10、1-12)が知られるのみである。安政屋敷絵図は、造営に関わる家相図と考えられる絵図で、上屋敷と下屋敷のみならず屋敷地周辺までを描き、建物の平面には家相診断に伴う畳の割り付けと畳数のほか、玄関、押入など、いくつかの部位名を書き込む(註5)。畳数からは平面の規模が明らかとなるが、主要な部屋名の記入がなく、各室にどのような機能が存在したかは明確ではない。

そこで、まずは高木家に関する文書群のうち、下屋敷御殿の部屋名が散見できる文献15点(表4-1)に注目する。文献には、大きく造営に関するものと行事に関するものがある。このうち、下屋敷の行事に必要な準備の取り調べを記録した文献D-091、大工と木挽の工数目論見を記した文献D-085、各室の土壁の仕様などを左官師が記した文献D-097・文献D-102などに、多くの部屋名が記されている。このような、屋敷図

と文献に記載される部屋名を整理したものが表 4-2 である。以下では、屋敷図から下屋敷御殿の平面の概要を把握し、文献との照合から建物構成と各部屋名を明らかにする。

1-2. 下屋敷御殿の平面

下屋敷御殿は大きく 2 つの建物で構成される。西に位置する規模の大きい南北棟の建物は玄関、台所、書院座敷など主要な室群を備える主屋である。一方、主屋の東には茶室に係る室群を内包する数寄屋建物が廊下を介して接続される。主屋は、建物中央を南北方向に通る中廊下により、大きく東側と西側の室群分けられる。東側は玄関と床を構える室群が集中するのに対し、西側は台所と押入のみを備える室群でほぼ構成され、床を構えるのは 1 室のみである。以上のような平面を構成する各室と部屋名との対応を検討した結果が図 4-2 である。

主屋東側：安政屋敷絵図の描写から、北部には「式臺」を備える表向の「玄関」と家臣が出入りする「中之口」が位置することがわかる。また、「玄関」の南側には床を構える 7 つの室群をほぼ一列に配置する。この 7 室について、安政屋敷絵図にみられる規模と文献にみられる部屋名および規模との一致(註 6)、部屋名の記述順序からは(註 7)、「玄関」より「御使者之間」「御書院」「御対面所」「御居間」「御二畳」、そして数寄屋建物は「御席」「御席三畳御間」が該当する部屋名として想定される。以上の部屋名が該当すると考えれば、主屋東側は表向の場として機能したことになる。

主屋西側：安政屋敷絵図に記される竈の位置から、主屋北部には台所が 2 カ所に別れて位置することが確認できる。文献 D-091 には「表御臺処」と「御臺所」という 2 つの台所の名を併記する。2 つの台所の位置関係からは「玄関」に近い北側を「表御臺処」、南側を「御臺所」と想定できる。最も奥まった位置には西側で唯一床を構える部屋が位置する。東側の部屋名が比定された状況からは、文献 D-091 に記す部屋名のうち唯一残る「奥様御居間」が該当することになる。玄関から最も奥まった位置の部屋名として矛盾はない。「奥様御居間」から「御臺所」の間に位置する押入を備えた室群について、詳細な位置関係の特定はできない。しかし、「御茶之間」「茶之間部屋」「御臺子」「女中部屋」「御老女部屋」などが該当すると考えれば、女性が生活する奥向としての構成が理解できる。

位置が不明な部屋名には、文献 D-085 にのみ記される「御舞台」がある。部屋名からは能舞台、もしくは板の間の部屋が想定されるが(註 8)、建てられた場所や実在に關しては不明である。あえて場所を想定するのであれば、「御居間」の東、および数寄屋建物の南が空閑地になっている。ここに「御舞台」を設置したと想定すれば、「御居

間」から能を観覧できたであろう。大名や大名の家臣の屋敷に能舞台を設置した事例は存在するが(註9)、大名と同格の旗本の屋敷に能舞台が設置された事例は管見の限り確認できていない。旗本屋敷の遊興空間を知る上で重要な事例といえよう。

以上、下屋敷御殿の平面の概要を把握しつつ部屋名の比定を行った。これにより、『高木家文書』には記されていない領域の検討が可能になる。領域の呼称を考える上で注目されるのは、「御居間」である。文献 D-085 では「表御居間」、文献 D-091 では「御中奥御居間」という室名が記され、「御居間」という室名が共通する。この3つの室名が併存することは、屋敷図上の部屋数から考え難く、3つの室名は同一の場所を示すと考えられる。しかし、あまり時期が変わらない文献で「表」「中奥」という別の領域を示すことについては今後の検討を要する(註10)。その上で、下屋敷御殿の表向と奥向を示せば、「奥様御居間」と「御居間」の間、「御臺所」と「表御臺処」の間、そして「御中廊下」を境に分かれることが今回の検討からは想定できる。

1-3. 2階の存在とその意匠

下屋敷御殿において最も注目すべき特徴に、安政屋敷絵図に記されない「御二階」の存在がある。第1節で述べた部屋名が記される文献15点のうち9点には2階に関する記述が確認できる(註11)。さらに「御二階」の仕様について、文献 D-102 には「二階座敷」という記述が確認できる。また、「二階座敷」の規模、高さ、意匠などの建築構成については、複数の文献から断片的に明らかになる。これらの情報を整理し、想定される室構成をまとめたものが表4-3である。

文献からは、10畳2室の「二階座敷」、8畳規模の「御縁」など、諸室からなる「御二階」が想定できる。また、「松八分板」や「松八分二階板」など、床板に用いられたと考えられる厚板材の合計数量が28坪分であることから、「二階座敷」や「御縁」以外にも、室や廊下が存在したと考えられる。なお、柱材の長さは9尺(2727mm)であり、天井高はこれより低くなる。

10畳2室の天井に注目すると、竿縁と廻縁に桧材を用いた部屋と、竿縁と廻縁に杉材を用いた部屋に分かれていたと考えられ、片方の座敷には床と違棚を構える。壁には「色土」を塗り、長押の無い「薄鴨居」には「障子」や「半戸」などを建て込む。外部には手摺付きの「外縁」が付属する。以上の仕様からは数寄屋意匠の「二階座敷」が想定できる。

「御納戸御階」、「御茶之間二階上り戸」という文献の記述からは「御納戸」と「御茶之間」に2階に通じる階段があったと判断できる。2つの階段の位置からは建物の東半部もしくはそれぞれの直上2カ所に「御二階」が存在したことになる。「御納戸御

階」から通じる「御二階」は「二階座敷」であり、庭園に面する「御居間」「御次之間」の直上に展開したとみるのが妥当であろう。この位置からは手摺越しに景色を眺望できる。一方、「御茶之間」から通じる2階は物置などの収納空間があったとみられる。

以上、下屋敷御殿の「二階座敷」は景色を眺望することが可能であり、数寄屋風の意匠的特徴がみられた。また、主人の居室となる「御居間」の直上に「二階座敷」を構えたと判断できることから、私的性の強い御殿といえ、前述のように独立した数寄屋建物を持つ点も踏まえれば、対面や遊興をより強く意識した居宅という、下屋敷御殿の施設的な性格が示されているといえる。

1-4. 平面構成と行事の対応

文献D-091は、10月を除き、ほぼ1年に渡る年中行事の舗設について記す。とくに部屋名や人物に関する記述が多い時期は、「正月」「節分」「三月節句」「十一月」である。以下では、これら4つの行事内容をもとに、下屋敷御殿の使用状況について整理する。

「正月」：「年始御餅付向」という項には、床を構える部屋に懸物や生花を飾る内容が記されている。「正月二日」の項には下屋敷詰之者が出迎える中、殿様と若殿様が別々に下屋敷を訪れ、「御神前」「御鎮守」を参詣し、「御居間」で酒宴を催したことを記す。殿様と若殿様はその日のうちに還御する。「正月三日」の項には、場所不明であるが、御老女と女中に御吸物・酒肴が振舞ったことを記す。

「節分」：裃を着た年男が、「御居間」「奥様御居間」「御書院」「御玄関」「御臺所 御茶之間」の5カ所で豆まきをおこなう。その後の戌春からは「奥御次之間」「御玄関」の2カ所のみに変更している。

「三月節句」：「御居間」「奥様御居間」「御書院」の床に生花を飾る。

「十一月」：「当月八日火防」の項には、箇条書きされた多くの部屋名が確認できる。具体的な行事内容は不明だが、記された各室に火防の札を貼ったと推察できる。

以上、年中行事について記した文献により、懸物や生花を飾った室が確認できる。これら室群では、床の存在が、対面・居住上、重要な室を性格づけていることがわかる。そして下屋敷御殿の場合、主屋の東側にそのような室群が配されている。

また、「正月」などにみられた人物に関する記述からは、「下屋敷詰之者」がいたこと、常在は不明であるが御老女や女中がいたことが明らかになった。さらに、殿様や若殿様が下屋敷を訪問することから、普段は特定の主人がいなかった可能性もみえてきた。

第2節. 下屋敷造営の経緯

2-1. 「高木三館鳥瞰図」の分析からみる下屋敷の成立過程

先に述べたような使用状況が垣間見られつつも、特定の主人が不明である下屋敷御殿について、下屋敷造営の経緯を明らかにするとともに、造営計画上にあった主人についても検討していきたい。その上で、最も重要な史料となるのが第1章でも述べた鳥瞰図である（図 1-9, 4-3）。この鳥瞰図の描写内容を他の文書の内容と比定することにより、実は下屋敷御殿が新築ではなかったことが明らかとなる。以下では、鳥瞰図の描写内容に注目し、天保再建屋敷絵図および安政屋敷絵図との比較と、下屋敷御殿の前身と考えられる建物に関する文献と下屋敷御殿の造営に関する文献の内容の比定をおこない、まずは下屋敷御殿の成立過程について検討する。

鳥瞰図は西高木家のみならず、東高木家、北高木家の陣屋建物の配置および構成と外観、さらには地形や街道をも比較的細密に記載した、情報量の多い史料といえる。しかし、年紀がなく、いつの様子を描いたものか、そして描写内容が実体に則したものかが問題となる。この2つの問題を解決するために、鳥瞰図に記された建物と天保3年(1832)再建直後の建物構成を描く天保再建屋敷絵図および安政5年(1858)頃の建物構成を描く安政屋敷絵図との比較をおこなった。その結果、それぞれに共通して存在する建物と絵図によっては存在しない建物があることがわかった。それをまとめたものが表 4-4 であり、配置図として示したものが図 4-4 である。

天保再建屋敷絵図との比較からは、以下の点がとくに注目できる。共通する点は、下屋敷の敷地に建物が無く、空閑地となっていることである。相違する点は、第2章附節でふれたように、天保再建屋敷絵図に記す敷地際の石垣よりも内側の位置に「表仮門」が建ち、両脇には塀のみが建つことである。これに対し、鳥瞰図では敷地際に屋根が載った冠木門形式の「表門」が建ち、門の両脇に建物が描かれる。また、天保御殿の描写に注目すると、天保再建屋敷絵図では表棟・奥棟・臺所棟の3棟がコの字に配置されるのに対し、鳥瞰図では3棟の北側に東西棟の建物がもう1棟(以後、奥北棟と表記)確認できる。一方、安政屋敷絵図との比較からも、とくに注目できる共通する点と相違する点が明らかになる。共通する点は、表門の位置と両脇の建物であり、相違する点は安政屋敷絵図の下屋敷に御殿を記載することと、天保再建屋敷絵図と同じく天保御殿の棟数が違うことである。つまり、鳥瞰図は「仮表門」が「表門」に整備された後から下屋敷御殿が建造されるまでの期間を示す絵図の可能性が考えられることになる。しかし、この場合問題となるのが奥北棟の存在である。

奥北棟について検討するにあたり、以下の2点が重要な文献史料としてあげられる。

文献 C-002 「諸色御入用下調【11】」

天保8年(1837)と年紀の記されたこの文献には「若殿様御部屋」という部屋名と思わしき名称が記される。しかし、「桁行八間二張四間」、「此総坪数三拾貳坪余」と規模を梁行きと桁行で示すところや、「御屋根惣坪数七拾坪斗り」、「東屋作り」と、屋根面積や屋根の仕様について記す。ちなみに若殿様とは表 1-1 より貞広が該当し、元服から4年後に「若殿様御部屋」を構えたことになる。

文献 D-048 『御下屋敷御地面江奥御新御殿御引去り御普請御棟揚御規式并ニ御柱初メ御規式共御調帳【114】』

年紀はないが、下屋敷造営は嘉永5年(1852)から行われており、その頃の文献と考えられる。表題が示す通り、「奥御新御殿」という建物を御下屋敷地へ引き去り上棟式をおこなうための調書である。

これら2つの文献には天保8年に「若殿様御部屋」を造営した可能性と、下屋敷を造営するに当たり、「奥御新御殿」という建物を下屋敷の敷地へ曳家した事実が記されている。「若殿様御部屋」の建築規模は梁間4間、桁行8間の規模であり、「御部屋」と呼称されるが、平面規模は1室からなる単純な居室ではなく複数の室からなる建物であったと考えざるを得ない。さらに、屋根の仕様や形式を記し、「東屋作り(寄棟造)」(註12)としていることから、部屋ではなく独立した建物と判断できる。ただし台所部分などを備えた別世帯の構成であったかは明らかではない。ではこの2つの建物がどこに建てられたのか。それを示すのが鳥瞰図に描かれる奥北棟と考えられる。

下屋敷の造営が嘉永5年から始まることは「鉦始」について記した文献 D-045 「下屋敷建前につき覚【30】」などから明らかであり、天保再建屋敷絵図と鳥瞰図からはこのときまで下屋敷の敷地は空閑地であったと判断できる。そのため、下屋敷造営以前に新たに建物を造営するのであれば上屋敷以外に考えがたい。そこで建物の名称に注目してみると、「若殿様御部屋」は奥に属す建物と考えてよく(註13)、「奥御新御殿」は名称通り奥に属する建物と考えられる。これをうけ、天保再建屋敷絵図と安政屋敷絵図の天保御殿奥棟付近に注目すると、御殿北側に空閑地が確認できる。

空閑地は鳥瞰図の奥北棟と同じ位置にあたり、「若殿様御部屋」の規模がおさまる広さを有する。また、鳥瞰図に描かれる奥北棟の東面には屋根の妻側が確認でき、独立した建物であることが「若殿様御部屋」と共通する。以上の検討を踏まえると「若殿様御部屋」、「奥御新御殿」、奥北棟は同一の建物であり(以後、「若殿様御部屋」の名称に統一して表記)、この建物を下屋敷へ曳家し、御殿に改修したと判断できる。ただし、梁間4間・桁行8間の建物を、上屋敷の北方からそのまま曳家することは困難であり、

ある程度解体して移築したことになる。小屋の組み替えや天井の張り替えが計画されている点からも(註 14)、下屋敷が既存建物を利用した造営であったことがわかり、移築の経緯を物語っているといえる。

「若殿様御部屋」の存在を裏付けるように、平成 24 年に大垣市教育委員会が実施した発掘調査では、「若殿様御部屋」が建っていたと考えられる場所から敷石列の遺構を確認している(註 15)。「若殿様御居間」の存在が明らかになった以上、鳥瞰図に記される建物の構成が実態に即したものであった可能性は高いと考えられる。これにより、鳥瞰図の景観年代は「若殿様御部屋」に関する下調べが行われた天保 8 年から下屋敷が造営される嘉永 5 年の 16 年間に絞ることが可能となる。

以上のような、下屋敷の成立過程の理解のもとで図 4-2 をみると、「御居間」から「御対面所」「御佛間」までが「若殿様御部屋」に対応すると考えられる。「御書院」と「御対面所」の境では縁が連続しないなど不整合な部分が生じている点も、このような前身建物である「若殿様御部屋」の存在を考えると理解しやすい。つまり下屋敷御殿は、若殿様である貞広の元服に応じて建造された「若殿様御部屋」を利用しながら、必要諸室を付け加えて整備されたということになる(註 16)。また、下屋敷御殿の平面を描く絵図が安政屋敷絵図のみであることは先に述べたが、嘉永 4 年から嘉永 7 年まで記された日記を安政 2 年(1855) 4 月に改めて記した文献 D-105『御下屋敷御普請中日記【60 - あ】』には下屋敷御殿の規模を「桁行拾九間五尺三寸五分 梁行九間壹尺貳寸」と記す。この規模は安政屋敷絵図に記載される下屋敷御殿の平面規模とほぼ一致することから(図 4-2)、安政屋敷絵図の平面は創建時と大きく相違ないと考えられる。

では、このような建築的な由来を持つ下屋敷御殿が、前身建物と同様に、若殿様である貞広の居宅として建造されたものか、下屋敷の造営目的について整理したい。

2-2. 造営の目的

下屋敷御殿の造営時期について、表 4-5 に注目すると、下屋敷御殿が造営されてから間を置かず、若殿様である貞広が江戸城で初の御目見を行っている。これにより、嗣子として認められた貞広は、部屋住から独立し、居所が必要になったと想定できる。また、家督相続は文久元年(1861)であることから、「若殿様御部屋」を増改築した下屋敷はそのまま若殿様の居館となったと考えて筋が通る。

ところが、下屋敷御殿には「御居間」と「奥様御部屋」が隣接して存在しており、2 部屋は下屋敷御殿が夫妻での居住を想定しているといえる。下屋敷御殿が再建された時期、貞広は独身であり、夫妻は貞広の両親である経貞夫妻のみである。居住者の

生活に居館が対応していたとすれば(註17)下屋敷御殿は独身の貞広の居館とは考えがたい。さらに、数寄屋建物が建てられている点で、接客や遊興という部分に充実化が図られていることに注目できる。このような建物の特徴から、造営の目的は経貞夫妻の隠居家であった可能性が高いといえる。また、家督相続の時期を踏まえれば、結果的に経貞夫妻が上屋敷にとどまり、貞広が下屋敷へ引越した可能性も考えられる。

では、下屋敷の造営目的が経貞夫妻の隠居家であったとして、政庁を有する天保御殿との平面構成、建築構成、使用状況を比較し、そこから下屋敷御殿と天保御殿の類似と相違を明らかにしたい。

第3節. 下屋敷御殿の施設の性格

3-1. 下屋敷御殿と天保御殿との類似と相違

下屋敷御殿と天保御殿の規模を比較すると、下屋敷御殿は天保御殿の奥向より一回り程度小さい規模であるが、中廊下を有する平面は天保御殿の奥向に類似する。また、部屋名の表記に厳密な違いはあるが、下屋敷御殿の「御使者之間」「御書院」「御対面所」「御居間」「奥様御部屋」の主要な部屋は、天保御殿の「御使ノ間」「表御居間」「御対面所」「御中奥御居間」「奥様御部屋」とそれぞれ同意の部屋名と捉えられる(表4-6)。さらに、これら5室の構成は、表の玄関の側に位置する「御使者之間」から、最も奥に位置する「奥様御部屋」までの室群の構成に下屋敷御殿と天保御殿の類似が指摘できる(図4-5)。このような類似からは、各室が有する機能の類似の可能性が推察できるとともに、天保御殿と同じく対面・居住・役務の各空間を構成した可能性が指摘できる。

一方、数寄屋意匠の二階座敷、茶室を含む独立した数寄屋建物、舞台などが付属する建築構成は、天保御殿と大きく異なる下屋敷御殿の特徴といえる。隠居家に相応しい遊興の場としての性格が建築的な特徴からは読み取れる。では西高木家陣屋において特徴的な2階建ての下屋敷御殿について、他の武家住宅ではどのような性格を有しているか、いくつか事例をあげ、西高木家の下屋敷御殿が有する社会的位置づけについて検討をしてみたい。

3-2. 類例からみる二階座敷を有する御殿の社会的位置づけ

2階建築を住宅史の視点から注目した研究には、平安・室町時代の貴族住宅における2階を分析対象とした、溝口正人の研究がある(註18)。溝口は、文献史料にみられる「二階」あるいは「二階屋」とよばれる住宅建築について、文献史料にみられる建築形態と用途から、庭園の眺望を目的とした庭園建築であり、詩歌や管弦会といった

遊饗が行われる会所的な殿舎であったことを明らかにしている。また、建築法制という視点から、水野耕嗣は近世の武家住宅では数少ない3階建築の事例を報告している(註19)。この3階建築がどのように用いられたかまでは明らかにしていないが、夫人の居室廻りに「中御二階」と「御三階」を備えた殿舎が存在し、平面図に記される柱間装置の仕様から、「御三階」は豪華な座敷、「御中二階」は屋根裏的扱いで「御三階」の控の間であったとしている。

ここでは、近世武家住宅を扱った個別の実証的研究や修理工事報告書、古写真や絵図等の史料に確認できる、以下の代表的な2階建築の存在に注目し、その社会的位置づけについて考察する。

御三家である尾張藩徳川家は名古屋城御深井丸に二度、新御殿を造営した。一度目は文政10年(1827)に10代藩主斉朝の隠居家、二度目は文久三年(1863)に14代藩主慶勝の隠居家である。再建新御殿を写す、現存古写真からは庭に面する数寄屋風2階建ての建物が確認できる。2階には高欄がつき、庭を眺望する座敷が設けられていたと考えられる(註20)。

将軍家と婚姻関係を結び、江戸時代初期には御成りが行われるなど、御三家・御三卿に次いで家格の高かった加賀藩前田家では、12代藩主斉広の夫人である真龍院の居宅として文久3年(1863)に異新殿が造営された。2階は「網代ノ間」「群青ノ間」「越中ノ間」などの書院座敷から構成され、北面する庭園が眺望できる(註21)。

加賀藩の支藩である富山藩前田家では、10代藩主利康保の御殿として嘉永元年(1848)に千歳御殿を造営し、家族が居住した。この御殿の中央には能をおこなう「御舞台」が位置し、正面には3部屋からなる「御居間」と「御覧所」を設け、「御居間」と「御覧所」の上層には二階座敷を備えた。居住とともに遊興にも用いられた屋敷であった(註22)。

10万石を有した松代藩真田家では、9代藩主幸之の父の正室である貞松院のために元治元年(1864)に新御殿が造営され、隠居後の幸之自身も住んだ。新御殿は現存する遺構であり、数寄屋意匠の2階建て御殿からは、南面する庭園が眺望できる。建造当初から存在する2階は14畳の「御二階南之御間」と階段を含む12畳規模の「御二階北之御間」の2室で構成される。2階のある座敷棟は「表御居間」などの接客の場として用いられたといい、庭に面する「御二階南之御間」は床を構える(註23)。

福井藩松平家の家老であった松平主馬は文政3年(1820)頃に三秀園という数寄屋の別邸を造営した。主屋の1階には「自適庵」「醒心齋」という2つの茶席、そして2階には「裁錦樓」という二間の床を備えた広間敷の座敷と、六畳・四畳・納戸・三畳の

茶室からなる室群を有する。「裁錦樓」からは「自適庵」「醒心齋」の前面に広がる庭が眺望でき、2階の六畳からは中庭が眺望できる(註24)。このように一部の大名家臣も2階建ての御殿を有していた。

大名が江戸に構えた江戸屋敷にも2階建ての御殿が確認できる。萩藩毛利家の江戸屋敷については、作事記録研究会『萩藩江戸屋敷作事記録』(註25)が刊行され、造営の記録を中心に屋敷の変遷が詳細に整理されている。このうち、所収される「桜田御屋敷差図」(推定：享保17年(1732)から明和9年(1722)頃)(註26)には、桜田上屋敷裏御殿(奥向きの御殿)の「御座ノ間」上に二階座敷である床を構える「御二階」が位置する。さらに、敷地の中では裏御殿よりさらに奥にあたる「老中小屋」の「御座之間」上にも、二階座敷として床を構える「御二かい」が存在したことが記される。

旗本が江戸に造営した御殿については、鈴木賢次の『旗本住居に関する研究』(註27)に現時点で確認できる旗本の御殿の平面がほぼ網羅されている。鈴木が取り扱った事例のうち、2階建ては3例確認できる。このうち「仙石左門屋敷」では玄関から最も奥まった位置に床を構える「居間」があり、そこに「二かい」と書き込まれている。庭園の描写は無いが、塀で囲まれた方を向くため、庭園に面していると考えられ、2階は眺望可能な場所になっていたと推察できる。また、波多野純編『城郭・侍屋敷古図集成 江戸城Ⅱ〈侍屋敷〉』(註28)には旗本の役務である町奉行官舎の平面を記した「文化七年町奉行所図(南)」が所収されており、主屋の中でも「玄関」から奥まった位置に床を構えた二階座敷が確認できる。庭園の描写は無いが、塀で囲まれた方を向くため、庭園に面していると考えられ、2階は眺望可能な場所になっていたと推察できる。

旗本が自領に造営した御殿については信濃衆の小笠原家の屋敷に2階建て建物の存在が確認できる。小笠原家は数少ない交代寄合衆の中でも西高木家と同じく現地に遺構が現存する事例であるが、『重要文化財小笠原家住宅修理工事報告書』(註29)に記載される明治頃作成の「屋敷見取図」には、屋敷の奥まったところに、庭に面した2階建築の存在が確認できる。

以上のように、2階建て建物および二階座敷は数多く確認できるが、建てられた場所に注目すると、奥向に集中し、建物の主人も隠居した人物が多いことがわかる。また、2階部分を庭園が眺望できる位置に配置することや、能舞台や茶室を備えたことから、居住の他にも遊興施設として造営したと判断できる。これに関連して、近代の聞き取り調査から得られた情報をもとに、江戸城の御殿の用途について記した『千代田城大奥』(註30)には「御休息、御上段、御座の間、蔦の間、お小座敷、御対面所、

御佛間、新座敷、竹之間、唐子の間、間隔の御座敷には二階なく平屋なり之れを除きて外は悉く二階作りなり」という記述と、「因みに記す御休息等に関り何故に二階なきやというふに御住居の頭上を踏み歩くことを遠慮し…」という著者の註記が確認できる。江戸城に関するこれまでの研究によると(註 31)、記述される室群は将軍が自身の居室や公的な対面に用いた、将軍の生活領域といえる。『千代田城大奥』の記述からはこのような室群に2階を設けることは不敬にあたり、不可能だったことになる。つまり、2階建て建築はどこにでも建てられるものではなく、公的な機能を有しない私的な場所に、居住や遊興という機能を併せ持って建造されたと判断できる。これを具体的に示す事例として、先に述べた松代新御殿の場合には「表御居間」「表御居間御次」の上層に位置する二階座敷が、主人が座る床の前を避けるように、「表御居間」の中央までしか2階範囲は重なっていない(註 32)。

以上のように、二階座敷を有する御殿は大名、大名の家臣、旗本の屋敷などで確認できた。ただし、こうした事例は、政庁の機能のない上屋敷の奥向の殿舎や下屋敷御殿、新御殿などの隠居家に限られる。社会的位置づけは私的な性格を有する住居で共通すると指摘でき、西高木家の下屋敷御殿もこれに該当するといえる。

まとめ

本章では西高木家陣屋 嘉永度下屋敷御殿の施設的性格について、建築構成、居住者、上屋敷御殿である天保御殿との比較、類例から、隠居家および私的な別邸の可能性を明らかにした。

大名家江戸下屋敷の発達に注目した内藤昌は、寛永6年(1630)に秀忠・家光が御成した金沢藩前田家の本郷下屋敷の庭前に2階建ての数寄屋造の存在を御成の際の記録と江戸図屏風から指摘している。さらに江戸図屏風からは、多くの大名家下屋敷に2階建ての楼閣や茶屋が認められ、庭に力を入れた下屋敷の実態を示すとしている(註 33)。また、尾張藩江戸屋敷について、複数の江戸屋敷間における機能の移行や転換を明らかにした渋谷葉子は、上屋敷に中屋敷や下屋敷の機能が集中していく過程を明らかにしており、下屋敷は対面用の別邸として機能を強めたとしている(註 34)。先に述べた既往研究をふまえば、大名家における下屋敷の遊興や対面施設としての側面が確認できる。

西高木家の下屋敷御殿は「御居間」と「奥様御居間」など限定的な家族の居室が存在することや、主要な室群が天保御殿と一致する一方で、別棟の茶室、舞台、数寄屋意匠の二階座敷など、上屋敷や表向には存在しない室を有する点が類例とも一致する。

大名家と同様の遊興施設が在地の旗本にも存在したことが、本稿の西高木家陣屋の下屋敷に具体的に認められたといえる。

参考文献

- 1) 谷口徹: 槻御殿 彦根藩下屋敷の建物構成とその変遷, 彦根城博物館研究紀要第 4 号, 1993
- 2) 西浦裕他: 彦根藩槻御殿の殿舎構成について, 日本建築学会北海道支部研究報告集 No. 68, pp597-600, 1995. 3
- 3) 編者北尾春道: 数寄屋住宅聚 数寄屋別荘, 洪洋社, 1936
- 4) 伊豆蔵庫喜他: 松平主馬家下屋敷の景観-福井城下の視的考察 その 9- 『日本建築学会大会学術講演梗概集 1997 (建築歴史・意匠)』, pp185-186, 1997. 9
- 5) 可児市史 第 2 巻 通史編 古代・中世・近世, 2010
- 6) 監修平井聖, 編集波多野純: 城郭・侍屋敷古図集成 江戸城Ⅱ〈侍屋敷〉, 至文堂, 1996
- 7) 作事記録研究会編: 大名江戸屋敷の建設と近世社会, 中央公論美術出版 2014
- 8) 岐阜県史跡 旗本西高木家陣屋跡 一測量調査・発掘調査報告書一, 大垣市教育委員会, 2013. 3
- 9) 溝口正人: 岐阜県史跡 旗本西高木家陣屋跡 主屋等建造物調査報告書, 大垣市教育委員会, 2009. 3
- 10) 監修平井聖, 著者吉田純一: 城郭・侍屋敷古図集成 福井城・金沢城, 至文堂, 1997
- 11) 田中徳英: 兼六園の成立と異御殿の造営, 日本建築学会北陸支部研究報告集, pp387-390, 2006. 7
- 12) 岡田悟他: 富山城東出丸千歳御殿の平面-嘉永 2 年から安政 2 年まで-, 日本建築学会計画系論文集 第 621 号, pp157-164, 2007. 7
- 13) 大垣市史上巻, 大垣市役所, 1930
- 14) 深井雅海著: 江戸城 - 本丸御殿と幕府政治, 中公新書, 2008
- 15) 太田博太郎, 稲垣栄三編: 中村達太郎 日本建築辞彙〔新訂〕, 中央公論美術出版, 2011
- 16) 鈴木賢次『旗本住居に関する研究』(私家版, 1987)
- 17) 岡田悟: 藩政期における萩の御殿について, 日本建築学会計画系論文集 第 574 号, pp177-184, 2003. 12
- 18) 溝口正人: 平安・室町時代貴族住宅の「二階」について, 日本建築学会計画系論文集第 457 号, pp189-195, 1994. 3
- 19) 水野耕嗣: 江戸末期の三階建について 1 近世都市・建築法制史の研究-11,

日本建築学会東海支部研究報告, pp437-440, 1985, 2 ほか

- 20) 徳川慶喜・昭武・慶勝写真集 将軍・殿様が撮った幕末明治, 新人物往来社, 1996
- 21) 史跡松代城跡附新御殿跡 新御殿跡 整備事業報告書(御殿編), 長野市, 2012. 3
- 22) 重要文化財小笠原家住宅修理工事報告書, 飯田市, 1970
- 23) 永島今四郎, 太田賛雄 編: 千代田城大奥, 林書房, 1896
- 24) 監修平井聖, 編集伊藤龍一: 城郭・侍屋敷古図集成 江戸城 I 〈侍屋敷〉, 至文堂, 1992
- 25) 深井雅海: 図解 江戸城をよむ, 原書房, 1997
- 26) 内藤昌: 江戸の都市と建築, 私家版, 1972. 11
- 27) 渋谷葉子: 大名江戸屋敷の機能的秩序-尾張藩を素材として-, 徳川林政史研究所研究紀要 第 48 号, 公益財団法人 徳川黎明会, pp81-100, 2014. 3

註釈

(註 1) 参考文献 1)～5) 参照。

(註 2) 参考文献 6), p230 では、大名の江戸屋敷は、上屋敷は藩主在府時の正式な住まいおよび役所、中屋敷は退隠後の藩主や世嗣などの日常的な居住、下屋敷は郊外に建つ別荘地や蔵屋敷として建てられたとする。参考文献 7) によると、萩藩江戸屋敷では、明和 9 年(1772)の火災で上・中の両屋敷が焼失した際に、下屋敷が居所とされた場合もある。また、9 代藩主斉房の母や、10 代藩主斉熙の養子が居住している。また、参考文献 5) によると、在地旗本 4600 石の千村家は、知行所である久々利(岐阜県可児市)に上屋敷と下屋敷を含む陣屋を構えたが、上屋敷は主人と家族の居住と役所の機能をもち、下屋敷は隠居所や若殿様の居住に用いられたとされる。

(註 3) 図 1 は『上石津町基本図』(平成 8 年)を下図とし、後述する天保 8 年(1837)から嘉永 5 年(1852)の状況を描いた鳥瞰図、同じく安政屋敷絵図、『明治廿一年五月調 上石津郡宮村字繪圖 養老郡多良村大字宮』、上屋敷の発掘調査報告書である参考文献 8) の比較から作成した。

(註 4) 参考文献 9)、第 1 章附節参照。下屋敷は明治 6 年(1873)に取り払われたことが文書の記録から確認できる。

(註 5) 「床」「棚」「押入」などの書入れは、属する部屋を中心側を向く。

(註 6) 土壁の上塗りについて記した文献 D-097 には「御対面所 二間黄土」、文献 E-003 には「御対面所 八畳」と記述があり、「御対面所」の規模は 8 畳と考えられる。

- (註 7) 建具を取り付ける場所と数量を記した文献 D-080 には「御書院 御使者之間 御玄関」、使用する道具を調べた文献 D-083 には「御書院 御使者之間」と併記され、「御玄関」「御使者之間」「御書院」は隣接すると考えられる。
- (註 8) 参考文献 13) 所収『大垣城御三之丸御殿之圖』参照。大垣城三ノ丸御殿には南面する位置に 18 畳の「御舞臺之間」、中庭に面する位置に 24 畳の「九曜之間(御舞臺之間)」という 2 室の舞台がある。
- (註 9) 参考文献 2), 10)～12) 参照。下屋敷に能舞台が設置された事例には彦根城の槻御殿があげられる。また、下屋敷以外にも金沢城の竹沢御殿、富山城の千歳御殿などの隠居屋敷に能舞台が確認できる。
- (註 10) 参考文献 14) 「29 中奥と大奥」 pp116-121、参考文献 9) 参照。江戸城本丸御殿では、四代将軍家綱以降、中奥という領域名称が消滅し、中奥に属していた黒書院らが表の領域に入れられたとされる。一方で西高木家の天保御殿では、「中奥」は「大奥」とともに「奥向」に属している。
- (註 11) 表 4-2 に示したもの以外に、文献 D-032 「御二階之分」、文献 D-064 「御二階竹ず」、文献 D-077 「御二階壁」などの記述が確認できる。
- (註 12) 参考文献 15) では、東屋造について、「寄棟造をもいう」としている。
- (註 13) 参考文献 16), pp107-123 参照。旗本池田家屋敷には、西高木家陣屋と同じく「若殿様部屋」という室群があるが、「奥様御居間」や「女中部屋」が位置する「奥様御殿」の内部に位置し、奥向に属することが明らかである。
- (註 14) 文献 D-085 には「御古建野物入替夫二付小屋組替」「御対面所床天井張替」などの記述がみられる。
- (註 15) 参考文献 8), pp252-257 参照。
- (註 16) 参考文献 10) pp253-254 参照。解体した御殿の旧材を用いて新しい御殿の造営を計画した事例に、金沢城の東側(現兼六園内)に造営された竹沢御殿[文政 5 年(1822)]があげられる。竹沢御殿は 12 代斉広の隠居御殿であったが、斉広の死後に、新しい御殿造営の計画が立てられ、旧材利用の討議や実際に多くの建物の取り払いが行われている。
- (註 17) 参考文献 12) 17) 参照。岡田悟の研究によれば、隠居した藩主が家族と居住した御殿の事例である、萩城下の複数の御殿や富山藩の千歳御殿では、居住者の数、性別等を予め想定して家族空間が計画されたとしている。
- (註 18) 参考文献 18) 参照。
- (註 19) 参考文献 19) 参照。

(註 20) 参考文献 20) pp82-83 参照。

(註 21) 参考文献 11) 12) 参照。

(註 22) 参考文献 10) p148、12) 参照。

(註 23) 参考文献 21) 参照。

(註 24) 参考文献 3) 4) 参照。

(註 25) 参考文献 7) 参照。

(註 26) 口絵 6・附録屋敷図 4 として所収される「桜田御屋敷差図」には年紀の記載はないが、貼紙の色合いや、書き込まれた文字の筆跡の違いなどから、建物の増改築の度に改訂し、ある期間継続的に使用したとしている。改修の変遷と絵図の改訂部分との比較から、享保 17 年(1732)から明和 9 年(1722)頃の絵図と推定している。

(註 27) 参考文献 16) 参照。

(註 28) 参考文献 6) 参照。

(註 29) 参考文献 22) 参照。写真第七五図「屋敷見取図」。

(註 30) 参考文献 23) 参照。

(註 31) 参考文献 14) 24) 25) 参照。

(註 32) 参考文献 21) 参照。1 竣工御殿平面図。

(註 33) 参考文献 26), pp85-86 参照。内藤昌は下屋敷御成について、特に苑池での遊興が主であったとし、形式性が著しい書院造より、数寄屋造の座敷を重視したとしている。

(註 34) 参考文献 27) 参照。

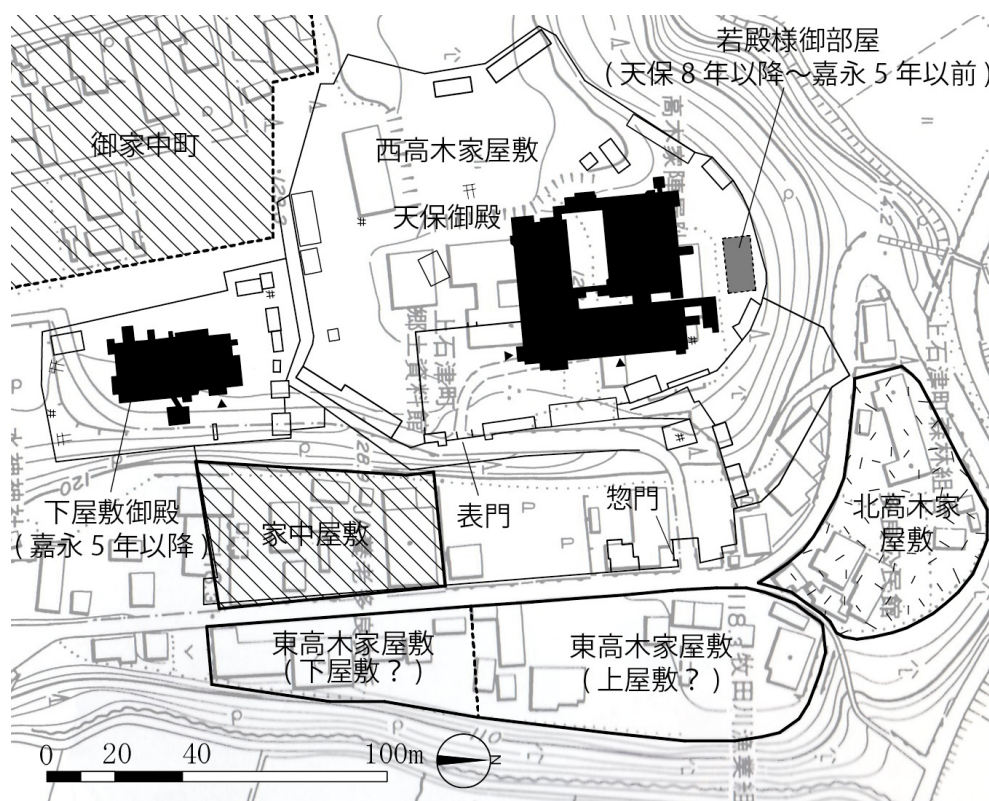


図 4-1 西高木家陣屋屋敷配置図

表 4-1 部屋名が記される文献

本論文番号	資料名	作成時期	名古屋大学分類番号
文献D-004	御鏡餅渡し方覚	嘉永3年12月	【13】 tffa-0013
文献D-032	御新建向木割覚	嘉永4年2月	【20】 【tfga-0020】
文献D-063	〔御席普請見積帳〕	子4月8日	【160】 【tfga-0160】
文献D-064	御新殿御入用諸色御買上物覚帳	嘉永5年7月～安政2年8月	【40】 【tfga-0040】
文献D-077	御建前御門御高塀腰張并ニ御雪隠向御湯殿破風板張大工木挽工数積立覚	嘉永6年2月	【45】 【tfga-0045】
文献D-080	御建前御建具向差上方并二代銀付立通	嘉永6年7月	【118】 【tfga-0118】
文献D-083	諸御道具取調向	嘉永6年11月	【15】 【tfgc-0015】
文献D-085	諸御道具取調帳并ニ御湯殿御雪隠向御廊下塀重御門御高塀共木挽手間積立覚	嘉永6年12月	【53】 【tfga-0053】
文献D-091	御下屋鋪諸事取調向	嘉永7年1月	【3】 【tffa-0003】
文献D-097	〔新殿壁上塗につき留〕	安政2年	【58】 【tfga-0058】
文献D-102	覚	安政2年正月22日	【59-え】 【tfga-0059-004】
文献D-104	御作事御入用品々正金ニ而御払分	安政2年極月	【124】 【tfga-0124】
文献D-110	御雇日記附留通	安政3年12月	【125】 【tfga-0125】
文献D-117	御新殿御壁上塗覚	年代未詳	【214】 【tfga-0214】
文献E-003	表奥御畳修覆取調帳	安政4年7月	【63】 【tfga-0063】

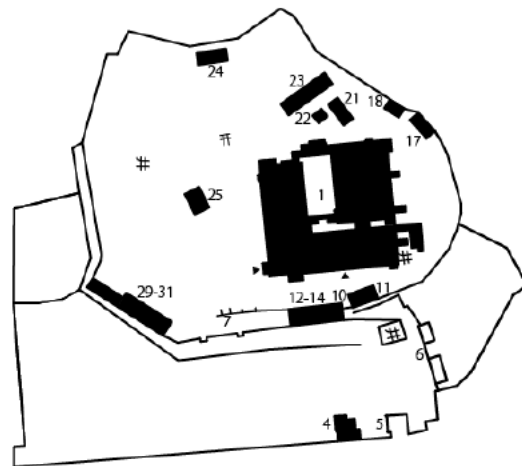
表 4-2 文献に記される部屋名

建物	領域	性格	安政屋敷絵図	文献D-085	文献D-091	文献D-097	文献D-102	その他文献
数寄屋	表向	公		御席	御席 四畳半 御席三畳之御間 御茶席			
東側			式臺					
			玄間	御玄間	御玄間	御玄間	御玄間	
				御使者之間	御使者間	御使者之間	御使者之間	
			中之口		御中之口 侍部屋			
						御玄間北 御客之間	北御上之間	御中ノ口西*1
						北御次之間	御次之間	
			御書院	御書院				
			御書院前 御縁				御縁座敷	
			御佛間	御佛前				
			御神前之間 御対面所	御神前 御対面所	御対面所	御対面所	御対面所	
		私	表御居間	御居間 御中奥御居間	御上御居間	御上ノ間		
			御次之間	御次之間				
				御三ノ間	御三ノ間	御三ノ間	御三ノ間	御中奥 御三之間*2
			御上之間 御縁				御縁座敷	
			御縁座敷 御次之間	御次之間 御縁座敷			御縁座敷	
					御三ノ間 御縁座敷	御縁座敷		
				御納戸				御納戸御階*3
				御二畳敷 表御臺処				
				御臺処				
			御臺所					
西側	奥向	私	入口	御臺所入口	御臺所口			
			湯殿		御上御湯殿 御次御湯殿	御湯殿	御湯殿	御上御次御湯殿*5
					奥様御居間 奥様御部屋 奥御次ノ間	奥様御部屋	奥様御部屋	
			御化生之間					
				老女部屋	御老女部屋	御老女部屋		
			女中部屋	女中部屋				
				御臺子	御臺子	臺子		
			御茶之間	御茶之間				
								御茶之間二階上 り戸*4
				御茶之間部屋				
東側？	2階		御二階	御二階	御階	御二階座敷		
			御二階御縁					
			御二階外縁					
	不明		御舞臺					

*1*2 : E-003 *3*4 : D-080 *5 : D-077



図 4-3 「旗本三高木館鳥瞰図」
(図右手が北)



天保再建屋敷絵図：天保 3 年（1832）

表 4-4 各絵図にみる建物の有無

	建物	天保再建 屋敷絵図	鳥瞰図	安政 屋敷絵図
1	上屋敷御殿 (3棟)	○	○	○
2	御堂	×	×	○
3	奥北棟(若殿様御部屋)	×	○	×
4	明月閣	○	○	○
5	惣門(門*1)	○	○	○
6	埋門	○	○	○
7	表仮門	○	×	×
8	表門	×	○	○
9	塀重門	×	○	○
10	臺所門	○	○	○
11	物置	○	○	○
12	中間部屋	○	○	○
13	薪部屋	○	○	○
14	役所(八畳*2)	○	○	○
15	割木置	×	○	○
16	薪部屋	×	○	○
17	倉庫	○	○	○
18	倉庫	○	○	○
19	物置	×	×	○
20	薪蔵	×	×	○
21	倉庫	○	○	○
22	倉庫	○	○	○
23	蔵	○	○	×
23	米蔵 (蔵を曳家力*3)	×	×	○
24	雑蔵	○	○	○
25	稽古場(射場*4)	○	○	○
26	作事長屋	×	○	○
27	雑蔵	×	○	○
28	鐘付場	×	×	○
29	厩(雑蔵含む)	○	○	○
30	別当部屋	○	○	○
31	道具入	○	○	○
32	下屋敷御殿	×	×	○

*1 安政屋敷絵図には「惣門」、天保再建屋敷絵図には「門」と記載

*2 安政屋敷絵図には「役所」、天保再建屋敷絵図には「八畳」と記載

*3 蔵と米蔵は同じ規模で記載

*4 安政屋敷絵図には「稽古場」、天保再建屋敷絵図には「射場」と記載



鳥瞰図：天保 7 年（1836） - 嘉永 5 年（1852）以前



安政屋敷絵図：安政 5 年（1858）頃

0 20 40 100m

図 4-4 各絵図の配置図

表 4-5 下屋敷と殿様家族に関する記述

西暦	和暦	日付	事蹟	該当資料
1833	天保 4	11月15日	貞広(14)元服	高木系譜【ffaa-0008】
1837	天保 8	12月	「若殿様御部屋」建前につき見積が提出される	文献C-002諸色御入用下調【11】
1838	天保 9	3月22日	経貞養子貞隆(0)多良館内へ移る	高木系譜【ffaa-0008】
1841	天保12	9月27日	鎮姫、井伊掃部頭家臣宇津木家へ嫁	高木系譜【ffaa-0008】
1843	天保14		梅樹院卒(56)	高木系譜【ffaa-0008】
1844	弘化元	11月15日	貞広(25)に室入興	高木系譜【ffaa-0008】
1845	弘化 2	2月1日	於銚、交代寄合高木貞郷(北高木)へ嫁	高木系譜【ffaa-0008】
		6月6日	貞広弟貞徳(25)卒	高木系譜【ffaa-0008】
		8月21日	貞広室(19)卒	高木系譜【ffaa-0008】
1851	嘉永 4	2月吉日	下屋敷御殿の木割が覚書される	文献D-032御新建向木割覚【20】
1852	嘉永 5	2月3日	下屋敷普請の仕事始め	文献D-044下屋敷建前につき覚【30】
		4月8日	下屋敷御席の造作について見積	文献D-063御席普請見積帳【160】
		9月	下屋敷地へ「奥新御殿(若殿様御部屋)」を曳家	文献D-048御下屋敷御地面江奥御新御殿御引去り御普請御棟揚御規式并ニ御柱建初メ御規式共御調帳【114】
		11月3日	下屋敷・御門の「御柱立御規式」が行われる	文献D-105御下屋敷御普請中日記【60-あ】
1853	嘉永 6	7月	建具の種類が覚書される	文献D-080御建前建具向差上方并ニ代銀附立通【118】
		11月19日	「御新殿(下屋敷)」へ移徙(予定日か?)	文献D-084御新殿御移徙御調帳扣【50】
1854	嘉永 7	2月	大工が下屋敷の普請遅延を願い出る(3月晦日まで)	高木系譜【ffaa-0008】
		3月晦日	下屋敷御殿普請完了?→この後移徙か?	文献D-084御新殿御移徙御調帳扣【50】
		6月1日	経貞(61)と貞広(35)が親子同道で江戸城に登城。白書院で御目見。貞広は初めての御目見。	高木系譜【ffaa-0008】
1855	安政 2	1月17日	下屋敷御殿の壁の上塗について、見積が提出される	文献D-097新殿壁上塗につき留【58】
		1月22日	下屋敷御殿の御座敷の壁について、上塗りの覚書が左官師から送られる	文献D-102覚【59-え】
1856	安政 3	7月19日	経貞養子貞隆(19)卒	高木系譜【ffaa-0008】
1857	安政 4	(-安政5)	上屋敷・下屋敷普請に関する下絵図が作成される	絵図E-006新規御普請下絵図入【218-せ】
		6月	御上屋敷と御下屋敷の普請(改修および増築)による木拾いが行われる	文献E-002御上屋敷御下屋敷【64】
		7月	下屋敷御殿の畳の修理箇所が取調べられる	文献E-003表奥御畳修履取調帳【63】
		9月	貞広に後室入興	高木系譜【ffaa-0008】
1858	安政5	3月	下屋敷普請の目論見が取調べられる	文献E-004御下屋敷新規御目論見御普請取調覚【65】
		6月11日	経貞室(68)卒	高木系譜【ffaa-0008】
1861	文久元	3月16日	経貞(68)卒	高木系譜【ffaa-0008】
			貞広(42)が家督相続	高木系譜【ffaa-0008】

* 人物に関する内容は斜字で記す

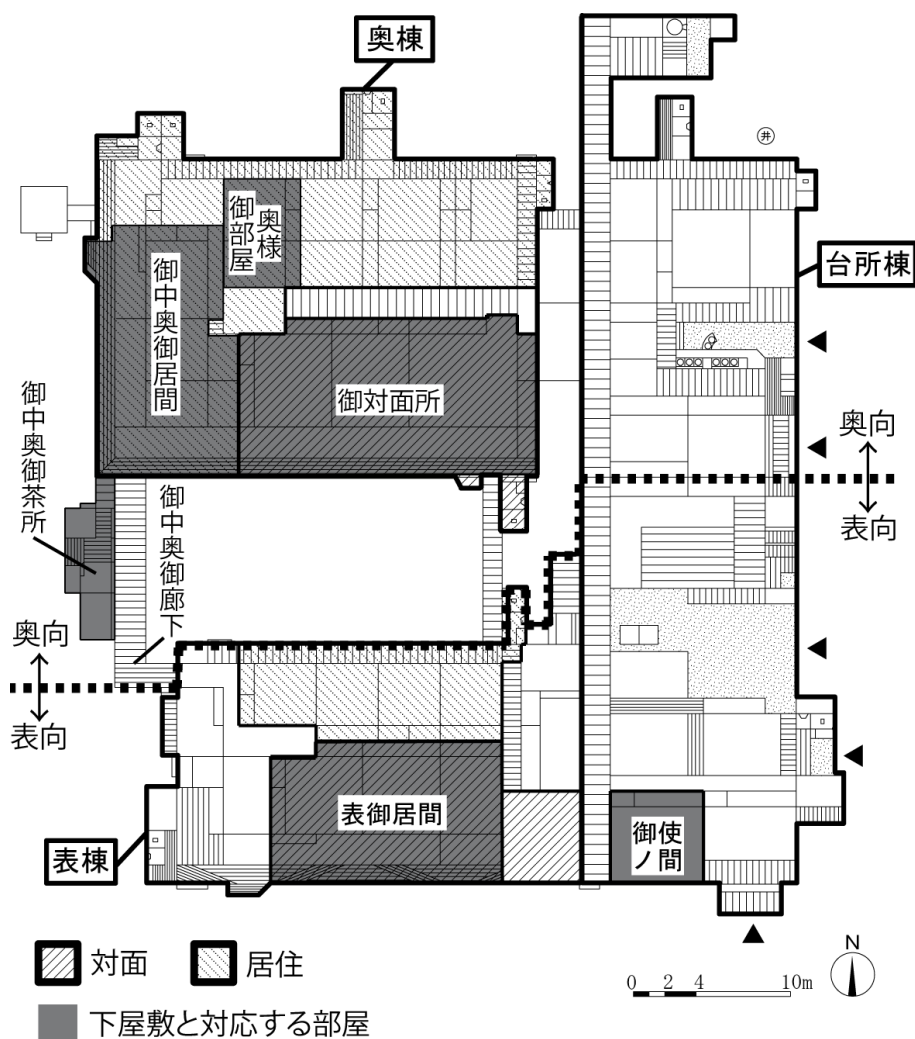


図 4-5 天保御殿の表向・奥向

表 4-6 下屋敷御殿と天保御殿の室名(座敷)の対応

	表向				奥向
下屋敷御殿	御使者之間	御書院	御対面所	御居間	奥様御部屋
天保御殿	御使ノ間	表御居間	御対面所	御中奥御居間	奥様御部屋

第 5 章

結論

第5章 結論

第1節 本論の成果

本論文の冒頭で設定した課題について、結論は以下のとおりである。

ア) 御殿の室群の空間的性格

西高木家陣屋の天保御殿、明治御殿、下屋敷御殿の分析を通して、3つの御殿は共通して対面・居住・役務の3つの室群で構成することが明らかとなった。また表と奥では理解できない空間構成は、むしろ社会的な役割から導かれた公と私の領域にもとづくものと理解できた。そして各室群の規模、意匠、建築構成などに、公と私の相違が反映されていることを明らかにした(図 5-1)。

イ) 平面構成の基本原理

公と私、2つの領域では、公が対面の座敷と役務諸室、私が居室群と役務諸室からなり、双方に土間を伴うという公と私の構成が、平面の基本原理であったことを明らかにした(図 5-2)。

ウ) 複数の屋敷群の施設的性格の相違

政庁として公的な性格を有する上屋敷御殿に対して、下屋敷御殿は私的な住宅の性格を有する存在であり、両者は施設的な性格として公と私の関係にあることを指摘した。

以上、西高木家陣屋御殿の平面および屋敷群の相互関係が公と私で整理できることを明らかにした。

図 5-1 のように機能から導いた、対面・居住・役務という階層のままでは、御殿全体に対して表と奥それぞれが入れ子構造のようにみえる。この入れ子にみえる状態で、対面を公、居住を私と置き換えれば、平井や服部と同じく、公と私が錯綜した状態のままとなる。そこで本研究では表に存在した居住空間の存在や、表と奥の対面がもつ性質の違いを明らかにした上で、もう一段階、既往の概念とは異なる公と私という階層を設けた。

対面は公に属する対外的な対面と私に属する身内を対象とした対面に分けられる。一方、居住は私に属する。さらに役務は公・私それぞれに従属する。一見すると特殊な場であるように思われる土間が重要な意味をもっていることは、第2章において明治御殿への改修の実態から指摘した通りである。以上のような公と私の構成が天保御殿、下屋敷御殿、明治御殿それぞれに共通する(図 5-1)。これが平井や服部の成果とは大きな違いであり、単なる階層の違いではない点である。

ただし、施設的な性格あるいは領域的な公と私の性格の相違に基づくと、それぞれの室群の規模、位置関係には相違が生じている。下屋敷御殿でみれば建築的な構成も異なる。また、上屋敷御殿と下屋敷御殿は施設的性格の違いから、公と私の関係にあると考えられる。上屋敷と下屋敷の構成がどのような関係にあったかは、同じ敷地内で包含されていたのではなく、別途設けられており、この関係は大名の江戸屋敷にも類似している(註1)。尾張藩江戸屋敷など屋敷間の距離が離れる事例も、表門の位置に関係なく御殿自体が公と私で構成され、さらに相互が公と私の関係になる入れ子構造になっていることがわかる(図5-3, 註2)。これと同様に、西高木家の天保御殿と下屋敷御殿の場合、それぞれ公、私という構成を内包しており、隣接する敷地であっても、相互が公と私と位置づけられる入れ子構造になっていると考えられる(図5-4)。

以上から、御殿内部および屋敷群は公と私で整理でき、空間がもつ機能をもとにする点で、表と奥よりも御殿の構成が理解できるようになった。さらに、複数の屋敷群の関係性が公と私という構成で説明できる点が明らかになった。また、公と私という領域性の違いが建築に反映されていることを指摘した。

本論文は部屋名、利用実態、機能も不明な状態から、先入観に基づく印象論ではなく、史料に基づく実態を把握したことから、基礎的かつ学術的な成果が得られた。建築の実態として、平面・意匠・天井高が明らかになったことにより、格付けが何で表現されるかという内部空間に着目することが可能となる。格付けは、天井高さ、部屋の広さ、同じ大きさであっても長押が廻っているかなどの意匠の総意による空間の性質で変わり、そこで行われる行為・機能と深く関係している。しかし、空間の性質まで明らかになる事例は少ない。西高木家陣屋の御殿は現存する遺構と高木家に関する文書群の整理から、空間の性質が明らかになる貴重な事例であり、本論文では実態に即して明らかにした。また、近世武家住宅を空間的な理解でみるときに、都市的なスケールで屋敷群の関係性をみることや、御殿内の室群がどのような関係性になっているか、領域で構成されているかを公と私でみることを新たな視点として論じた点が新しいといえる。

第2節 今後の研究課題

平面および屋敷群の相互関係が公と私で整理できるという理解は、江戸城本丸御殿を初めとして、従来用いられてきた表・奥による理解では不明解であった近世武家住宅の事例の理解にも展開が可能であると考えられる(図5-5, 註3)。実証的な分析が可能な他の事例で、公と私の構成に基づく把握の汎用性を確認することが今後の課題で

ある。

西高木家の場合、公と私、対面・居住・役務の構成が象徴的なのは天保3年再建直後の平面である。再建後、まずは居住に重点をおいたと考えられ、奥廻りが整備されるのに対し、表は「仮御門」・「仮玄関」・間仕切りのない「御玄関御使者之間」など、表の造作には途中段階のものが多い。この見方ではモリス・マーティン氏が分析の対象とし(註4)、増築を繰り返しながら機能が移り変わっていったとされる西高木家と同じ交代寄合の小笠原家住宅とは大きく異なる。また、平面の変化には西高木家の安政時の改修のように家族構成の変化に影響される部分が多い。萩藩江戸上屋敷では、入嫁の際に屋敷が大きく整備される(註5)。小笠原家住宅についても家族構成の変化からみる必要が考えられる。この辺からも公と私、対面・居住・役務と家族構成との関係から再検討できそうである。

また、本稿では御殿と方位の関係について検討をしていない。近世では家相が普及しており、今回分析に用いた屋敷図も家相図であるため、方位に細心の注意を払って計画していたことは明らかである。ただし、大岡敏昭著『日本の風土文化と住まい』(相模書房, 1999)では、近世武家住宅では宅地の入口および道路との関係が重視され、近隣社会に繋がる道路に家の正面を向けた住宅であったとしている。この見解は西高木家の場合も妥当と考えられるが、御殿と方位、および御殿と道路に関する詳細な分析は今後の課題としたい。

参考文献

- 1) 渋谷葉子：大名江戸屋敷の機能的秩序-尾張藩を素材として-, 徳川林政史研究所研究紀要 第48号, pp81-100, 2014, 3 参照。
- 2) 尾張徳川家初代義直襲封 400 年記念 尾張の殿様物語, 徳川美術館, 2007
- 3) 監修平井聖, 編集伊藤龍一:城郭・侍屋敷古図集成 江戸城 I 〈侍屋敷〉, 至文堂, 1992
- 4) 作事記録研究会：大名江戸屋敷の建設と近世社会, 中央公論美術出版, 2014
- 5) モリス マーティン・N:小笠原家 江戸時代旗本屋敷の復原, 日本建築学会大会学術講演梗概集 F 都市計画 建築経済 住宅問題 建築史 建築意匠, pp667-668, 1986, 8
- 6) 村田あが：江戸時代の家相説, 雄山閣出版, 1999

註釈

(註1) 参考文献 1) 参照。

(註2) 下図については参考文献 1) 図 1 尾張藩江戸屋敷の位置を筆者がトレースして作成。市谷屋敷は参考文献 2) 所収の『市谷御殿絵図』（徳川林政史研究所蔵）を筆者がトレースして作成。

(註3) 江戸城本丸御殿については参考文献 3) 所収の 50「江戸城御本丸万延度御普請御殿向表奥惣絵図」、98「江戸城本丸大奥向総絵図」を筆者がトレース。萩藩江戸桜田屋敷については参考文献 4) 所収の図 5「江戸桜田御上屋敷新御作事御指図」を筆者がトレース。

(註4) 参考文献 5) 参照。

(註5) 参考文献 4) 第2章4節参照。徳川家斉の娘の和姫の入興に伴う裏御殿は、表御殿から独立した空間として接客空間と玄関を備えた。

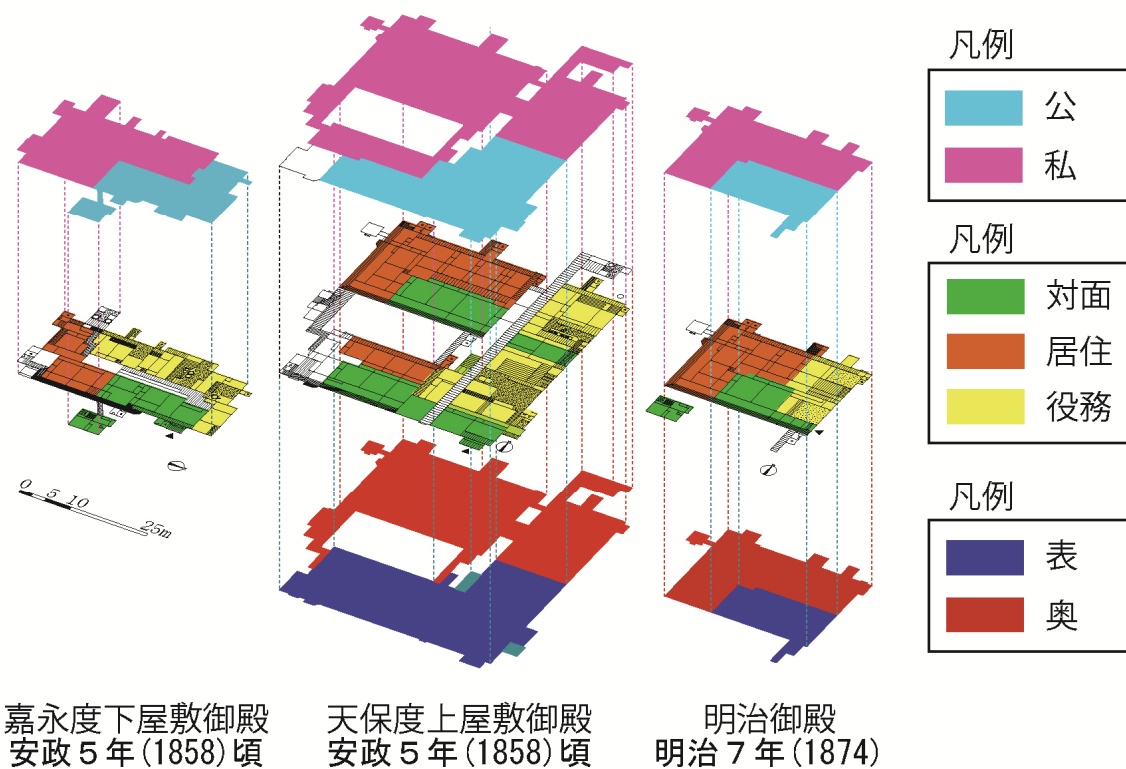


図 5-1 各御殿の公と私の構成

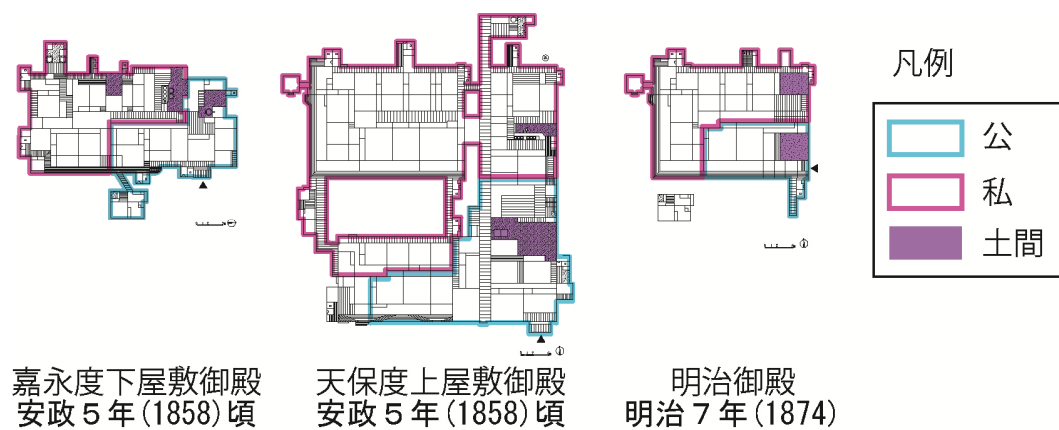


図 5-2 各御殿の公と私と土間

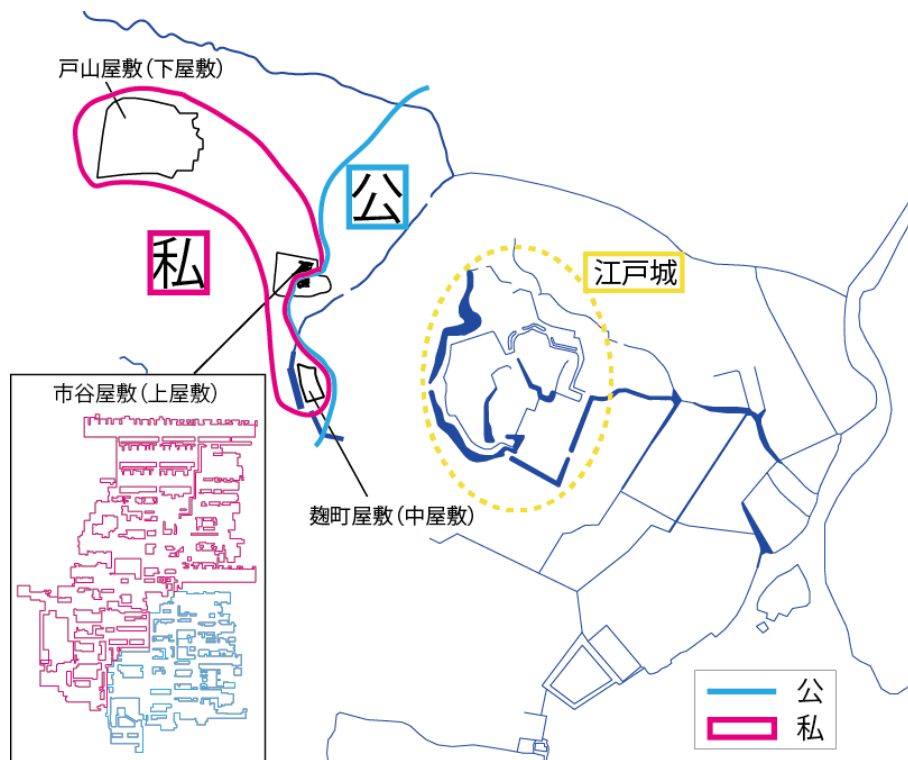


図 5-3 尾張藩江戸屋敷における公と私

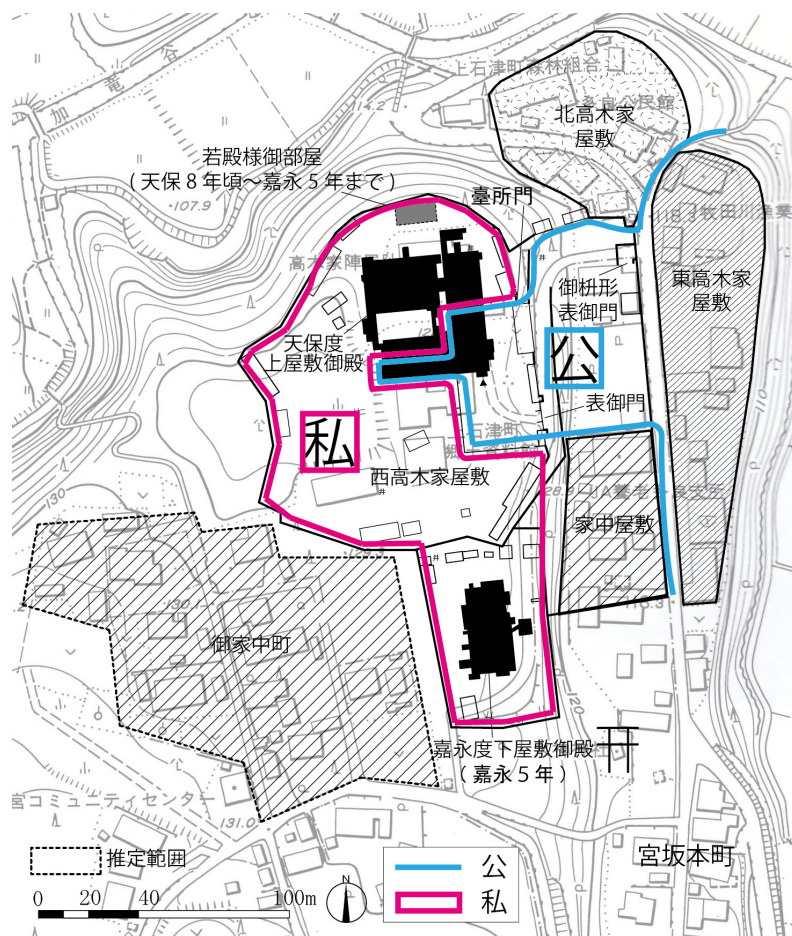


図 5-4 西高木陣屋の上屋敷と下屋敷における公と私

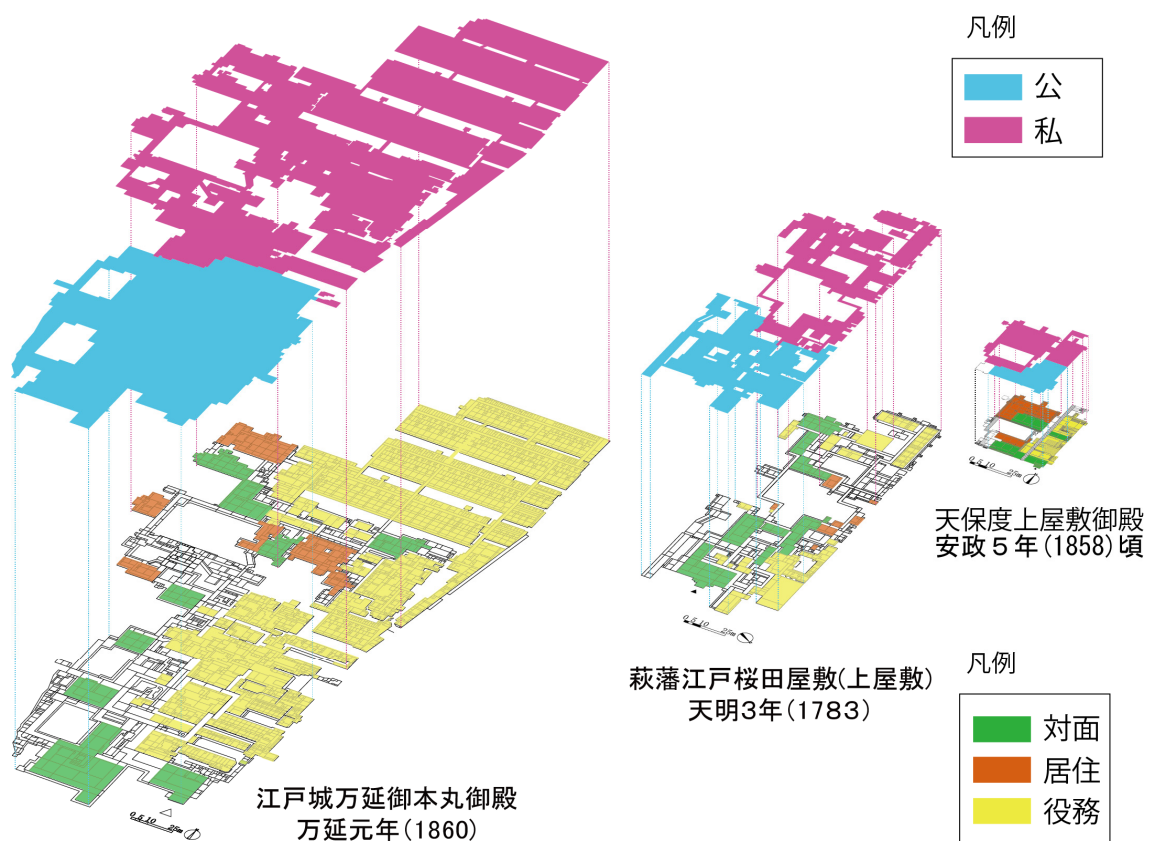


図 5-5 他の武家住宅における公と私

関連発表論文および報告

本研究は以下の論文・報告に加筆、訂正を加えたものである。

第2章 『天保三壬辰年 御家移ニ付取扱一件 十二月』にみる西高木家天保再建御殿の空間構成—高木家文書による研究その4—, 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp847-848, 2012. 7

再建後の移徙からみる西高木家陣屋天保度上屋敷御殿の空間構成について, 日本建築学会計画系論文集 第79巻 第705号, pp2535-2542, 2014. 11

西高木家陣屋に関する新出絵図2点について, 日本建築学会技術報告集 第21巻, No. 47, 347-350, 2015. 2, pp347-350

第3章 旗本西高木家陣屋の明治初期における屋敷規模縮小について—高木家文書による研究 その3—, 日本建築学会東海支部研究報告集 第50号, pp769-772, 2012. 2

西高木家陣屋に関する新出絵図2点について, 日本建築学会技術報告集 第21巻, No. 47, 347-350, 2015. 2, pp347-350

第4章 「高木三家鳥瞰図」の分析からみる西高木家陣屋下屋敷の成立について, 日本建築学会東海支部研究報告集 第49号, pp749-752, 2011. 2

旗本西高木家陣屋 嘉永度下屋敷御殿の建築的性格について—高木家文書による研究 その5—, 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp317-318, 2013. 7

謝辞

本研究にあたって、溝口正人先生には終始かわらぬご指導と励ましを賜った。

本研究で分析対象とした西高木家陣屋に私が初めて関わったのは、修士1年生であった平成19年2月である。発端は敷地内に現存する建物について、建築的な評価をしてほしいという依頼が、大垣市から溝口先生のところへ届いたように記憶している。当時、敷地内に現存していた主屋は明治の新築という見方がされ、棟筋より北側はすでに崩壊しているような有様で、いつ壊されてもおかしくない状態であった。ところ最初の実測調査を終えて数多くの痕跡を確認した結果、近世にさかのぼるであろうという結論に至り、筆者の研究題材として詳細な分析をおこなうこととなった。

その後の分析の中心となった『高木家文書』は、人文史学的には一級の史料とされる近世・近代の古文書群である。しかし、建築に関するほとんどの史料が精査されずにいる状況であることがわかり、一から翻刻をし、記述内容を読み解く必要があった。本物の古文書に触れた経験は皆無であり、ましてそれを翻刻して分析することになるなど、大学院に入学した当時は全く想像していなかった。しかし、このような地道な作業は自分にあっていたようであり、幼い頃から興味を持ち続けていた武家社会と建築の両方に関われることに喜々として取り組んだ。修士論文のときに知った研究の楽しさが、博士論文執筆のきっかけになったことは間違いない。

本論文の構成にあたり、名古屋市立大学の志田弘二先生、鈴木賢一先生、久野紀光先生には全体を俯瞰した視点から、向口武志先生からはゼミの場において、貴重なご指導を賜った。加えて、『高木家文書』をはじめとする貴重資料の閲覧については、大垣市教育委員会事務局文化振興課、上石津郷土資料館、名古屋大学附属図書館研究開発室に多大なご配慮をいただき、数多の貴重なアドバイスを賜った。また、私が学部生時代に師事した大同大学（筆者在学当時は大同工業大学）の佐藤達生先生にはゼミ生になる以前から将来の進路についてよく相談にのっていただき、導いていただいた。さらに、名古屋市立大学の溝口研究室の先輩である柳澤宏江氏、後輩には、公私にわたって励ましをいただいた。

最後に、会うたびに自分の近況や研究の話を楽しそうに聞いてくれた2人の叔父（両名ともに故人）、再度研究の道に戻ることを受け入れて何不自由なく支えてくれた両親ら家族にも感謝を述べたい。このような恵まれた環境の中で、期待に応えられなかった部分も多かったことは自身の不徳によるところである。それでも最後まで支えていただいた方々に記して深謝の意を示すものである。

資料編

資料編—高木家に関する文書群—

例言

- 一、本資料編は、高木家に関する文書群のうち、本研究を進めるにあたって分析をおこなった 510 点の目録と、そのうちとくに重要な文献 40 点の翻刻を紹介するものである。分析した文書には報告書で扱ったものも含む。
- 一、本資料編の目録は、名古屋大学附属図書館が収蔵保管する文書を中心に掲載したが、一部、大垣市教育委員会や個人所蔵の文書も掲載している。名古屋大学附属図書館所蔵の文書に関しては、一部を除いて名古屋大学附属図書館により分類番号がつけられている。
- 一、調査は、目録 5 巻と補遺文書として整理済みの文書、および大垣市教育委員会や個人所蔵の文書の中から、屋敷造営や儀式・行事に関するものを選抜し、書状、帳面、日記などの文献 402 点と敷地図や建物図面などの絵図 108 点を分析対象とした。時代範囲は天保 3 年(1832)屋敷類焼前のから明治 29 年(1896)以降までにおよぶ。
- 一、高木家に関する文書群の閲覧については、名古屋大学附属図書館研究開発室の協力を得て閲覧し、翻刻は報告書と同じく筆者がおこなった。
- 一、翻刻にあたっては、原文使用の文字を活字化することとした。なお、文字の抹消部分についてはもとの文字が読めるように、傍点をつけたり、その字の上に細い線を引いたりするなど、見せ消ちを用いて誤りであることを示した。また、朱墨部分は赤字で示した。
- 一、本論文に掲載した資料の、第三者の二次使用について、印刷媒体、CD-ROM、VTR、放送、講演会、講座、研究発表等で二次的に使用する場合、使用者は事前に原本所有者の許可を得るものとする。

表1 調査済み高木家文書群一覧

A. 焼失前：天保3年の屋敷類焼以前

2015.3時点

本文番号	報告書番号	記載対照	資料名	名古屋大学分類番号	作成者	作成時期	図版サイズ	形態・点数	内容・備考
絵図A-001	屋敷図3	類焼前	〔屋敷絵図〕	【47】 【tfgd-0047】			176×276	一枚	上屋敷部分が絵図A-003「西館絵図【101】」と類似 下屋敷も含んだ屋敷全景
文献A-001	文書(5)	類焼前	御客屋木割	【188】 【tfga-0188】				切紙 一通	絵図A-001「〔屋敷絵図〕【47】」に記載される安永年中造営の「客館」と同一建物か。
文献A-002	-	類焼前	差上申請一札之事	【1】 【tfga-0001】	善六他 ⇒ 三輪代右衛門	安永3年7月11日	28.6×41.3 + 包紙 24.4×15.7	一紙 一通	
文献A-003	文書1	類焼前	〔棟札等写〕	【94】 【tfga-0094】		寛政元年9月27日	40.6×14.1 + 包紙 27.9×20.4	切紙 一枚	
-	-	類焼前	〔埋門造作料受取覧〕	【2-あ〜い】 【tfga-0002-001-002】		文化12年5月17日		二通	
文献A-004	-	類焼前	覚	【2-あ】 【tfga-0002-001】	孫四郎 ⇒ 林曾次右衛門他	文化12年5月17日	25×34.5	一紙 一通	
文献A-005	-	類焼前	覚	【2-い】 【tfga-0002-002】	留助他 ⇒ 林曾次右衛門他	文化12年5月17日	24.9×40.8	一紙 一通	
-	-	類焼前	表通り石垣積直し新規共門八月廿二日出来金子相渡候請取書	【4-あ〜か】 【tfga-0004-001-006】			25×17.1	包紙 六通	
文献A-006	文書3	類焼前	奉差上候御請書之事	【4-あ】 【tfga-0004-001】	甚内他 ⇒ 奉行衆中	文政7年3月	28.9×40.4 + 包紙 34.6×25.1	一紙 一通	
文献A-007	-	類焼前	覚	【4-い】 【tfga-0004-002】	定吉他 ⇒ 三輪作左衛門	6月11日	25.2×17.8	一紙 一通	
文献A-008	-	類焼前	〔金子受取覧〕	【4-う】 【tfga-0004-003】	定吉他 ⇒ 平塚多右衛門	申6月晦日	23.7×21.4	一紙 一通	文政7年
文献A-009	-	類焼前	覚	【4-え】 【tfga-0004-004】	定吉他 ⇒ 平塚多右衛門他	申7月12日	25.6×28.7	一紙 一通	文政7年
文献A-010	-	類焼前	覚	【4-お】 【tfga-0004-005】	作事方共 ⇒ 勝手方衆中	閏8月20日	14.8×35.9	切紙 一通	
文献A-011	-	類焼前	覚	【4-か】 【tfga-0004-006】	豊助他 ⇒ 奉行	閏8月22日	24.6×34.6	一紙 一通	
文献A-012	-	類焼前	御作事向金銀別段納私覚帳	【104】 【tfga-0104】	用人	文政8年7月	24.2×17.2	半綴 一冊	
文献A-013	文書2	類焼前	御普請之事	【3】 【tfga-0003】	治右衛門他 ⇒ 奉行	文政7年8月13日		一紙包紙共 一通	
-	-	類焼前	〔味増蔵春屋普請につき諸書付〕	【105-あ〜お】 【tfga-0105-001-005】				一冊 四通	絵図A-001「〔屋敷絵図〕【47】」に春屋・味増蔵が記載
文献A-014	-	類焼前	御作事諸御入用覚帳	【105-あ】 【tfga-0105-001】		文政11年4月14日～	25×17.3	半綴 一冊	
文献A-015	文書4	類焼前	奉差上御請書之事	【105-い】 【tfga-0105-002】	多助 ⇒ 小寺平八郎	子5月晦日	27.9×39.5	一紙 一通	文政11年か
文献A-016	-	類焼前	〔左官代金受取書〕	【105-う】 【tfga-0105-003】	忠兵衛 ⇒ 小寺平八郎	6月晦日	15.7×17.6	切紙 一通	
文献A-017	-	類焼前	覚	【105-え】 【tfga-0105-004】	土屋定吉 ⇒ 小寺勇	6月	23.7×32.1	一紙 一通	
文献A-018	-	類焼前	覚	【105-お】 【tfga-0105-005】			22.3×15.1	一紙 一通	
絵図A-002	屋敷図1	類焼前	御屋敷図面入	【4】 【tfgd-0004】	司天宮家 高岡改め 高村様三	文政11年9月	138×113	包紙共 一枚	天保と同じ、北側土蔵が相違、図面入の裏に家相図有（大規模の一部）
絵図A-003	屋敷図2	類焼前	西館絵図	【10】 【tfgd-0010】		天保2年	210.0×200.5	包紙共一枚	文政13年紀あり
文献A-019	文書(39)	類焼前	〔類焼につき書状留〕	【166】 【tfga-0166】			12.2×33.4	半綴 21丁 一冊	焼失部分について
-	-	類焼前	御類焼一件	【5-あ〜こ】 【tfga-0005-001-010】	役所	天保3年3月		紙袋 一〇冊	
文献A-020	文書6	類焼前	御焼失一件日記	【5-あ】 【tfga-0005-001】	役所	天保3年3月4日～5月7日		半綴 一冊	

B. 再建期：天保3年類焼直後の再建

本文番号	報告書番号	記載対照	資料名	名古屋大学分類番号	作成者	作成時期	図版サイズ	形態・点数	内容・備考
文献B-001	文書7	天保上	御普請二付諸色御払方帳	【5-い】 【tfga-0005-002】	勝手方	天保3年3月～		半綴 一冊	
文献B-002	文書8	天保上	御作事御入用下調手扣	【5-う】 【tfga-0005-003】		天保3年3月～		半綴 一冊	
文献B-003	文書9	天保上	来々御音信帳	【5-え】 【tfga-0005-004】	役所	天保3年5月7日～12月3日		半綴 一冊	
文献B-004	文書10	天保上	〔棟上祝書類留〕	【5-お】 【tfga-0005-005】		〔天保3年〕 9月18日～		半綴 一冊	
文献B-005	文書11	天保上	御普請中諸職人諸色勘定帳	【5-か】 【tfga-0005-006】	普請方	天保3年～同5年12月		半綴 一冊	
-	-	天保上	〔火事日記〕	【5-き〜く】 【tfga-0005-007-008】				二冊	
文献B-006	文書12	天保上	日記	【5-き】 【tfga-0005-007】	役所	天保3年3月4日～4月29日		美横 一冊	
文献B-007	文書13	天保上	玄閣帳	【5-く】 【tfga-0005-008】	森代助他	天保3年3月4日～3月15日		美横 一冊	
文献B-008	文書14	天保上	御石築御規式調下帳	【5-け】 【tfga-0005-009】	作事役所	天保3年8月4日～9月5日		半綴 一冊	
文献B-009	文書15	天保上	〔類焼につき諸書類留〕	【5-こ】 【tfga-0005-010】		天保3年		切紙綴 一綴	
-	-	天保上	尾張様江御材木等御願一件	【140-あ〜ち】 【tfga-0140-001-017】		辰4月～9月	23.5×33	包紙 二冊 一五通	類焼により 天保3年か
文献B-010	-	天保上	〔類焼につき木材願い取扱い指示書下書〕	【140-あ】 【tfga-0140-001】	三和六左衛門 ⇒ 三輪忠右衛門他	6月17日	24.6×17.4	半綴 2丁 一冊	
文献B-011	-	天保上	〔贈物の札につき口上書〕	【140-い】 【tfga-0140-002】	服部新十郎	6月18日	17.1×34.6+ 包紙	切紙 一通	
文献B-012	-	天保上	〔贈物の札につき口上書〕	【140-う】 【tfga-0140-003】	丹羽平八郎	6月18日	16.3×31.6	切紙 一通	
文献B-013	-	天保上	〔贈物の札につき口上書〕	【140-え】 【tfga-0140-004】	吉川良助	6月18日	16×38.1	切紙 一通	
文献B-014	-	天保上	〔材木借用願いにつき書状〕	【140-お】 【tfga-0140-005】	遠山頼負 ⇒ 高木修理	9月6日	16.4×121.9	切紙 一通	
文献B-015	-	天保上	〔材木五十両分貸与につき書付〕	【140-か】 【tfga-0140-006】	⇒ 頼負	8月	15.8×57.3	切紙 一通	
文献B-016	-	天保上	〔五十両分の材木受取方等につき書付〕	【140-き】 【tfga-0140-007】		9月	15.5×45.7	切紙 一通	
文献B-017	-	天保上	〔書状取次につき書状〕	【140-く】 【tfga-0140-008】	沢田門太夫他 ⇒ 大塚半之進他	9月6日	16.1×47.2	切紙 一通	
文献B-018	-	天保上	〔書状送達につき添状〕	【140-け】 【tfga-0140-009】	佐左衛門他 ⇒ 半之進他	9月6日	16.3×44	切紙 一通	
文献B-019	-	天保上	〔材木借用願いにつき書下書〕	【140-こ】 【tfga-0140-010】	高木修理 ⇒ 遠山頼負	9月11日	12.3×34.7	半綴 2丁 一冊	
文献B-020	-	天保上	〔材木下上げにつき書下書〕	【140-さ】 【tfga-0140-011】		9月16日	15.8×31.3	切紙 一通	
文献B-021	-	天保上	口上之覚	【140-し】 【tfga-0140-012】	高木修理	9月16日	15.8×33.6	切紙 一通	
文献B-022	-	天保上	覚	【140-子】 【tfga-0140-013】		9月	15.6×44.3	切紙 一通	

文献B-023	-	天保上	覚	【140-せ】 【tfga-0140-014】		9月	15.5×26.8	切紙 一通	
文献B-024	-	天保上	材木屋間合大旨直段	【140-そ】 【tfga-0140-015】			15.5×46.3	切紙 一通	
文献B-025	-	天保上	内調	【140-た】 【tfga-0140-016】			15.5×28	切紙 一通	
文献B-026	-	天保上	〔木材代金覚〕	【140-ち】 【tfga-0140-017】			14.8×30.3	切紙 一通	
-	-	天保上	〔普請入用留〕	【7-あ〜い】 【tfga-0007-001-002】				二冊	
文献B-027	文書16	天保上	覚	【7-あ】 【tfga-0007-001】				半紙 一冊	
文献B-028	文書17	天保上	御普請金諸払覚帳	【7-い】 【tfga-0007-002】	役所	天保3年4月20日〜11月朔日		半紙 一冊	
-	-	天保上	御頼能御殿御普請ニ付御取扱向御宅件帳入	【106-あ〜う】 【tfga-0106-001-003】	役所	天保3年5月朔日		紙袋 三冊	
文献B-029	文書18	天保上	御普請ニ付取扱一件	【106-あ】 【tfga-0106-001】	役所	天保3年3月〜		半紙 一冊	
文献B-030	文書19	天保上	新初ノ略御規式一件	【106-い】 【tfga-0106-002】	役所	天保3年5月朔日		半紙 一冊	
文献B-031	文書20	天保上	御家移ニ付取扱一件	【106-う】 【tfga-0106-003】		天保3年12月		半紙 一冊	
-	-	天保上	御建前三棟諸職人ヨリ之請書類也	【6-あ〜と】 【tfga-0006-001-020】		天保3年		包紙 三綴一五通二枚	
文献B-032	文書21	天保上	差上申御請書之事	【6-あ】 【tfga-0006-001】	武太夫他⇒小寺平八郎他	天保3年5月		一紙包紙共一枚	「差上申御請書事」
文献B-033	文書22	天保上	差上申御請書之事	【6-い】 【tfga-0006-002】	伊兵衛他⇒小寺平八郎他	天保3年5月		一紙包紙共一通	
文献B-034	文書23	天保上	差上申御請書之事	【6-う】 【tfga-0006-003】	円吉他⇒小寺平八郎他	天保3年5月		一紙包紙共一通	
文献B-035	文書24	天保上	春差上御請書之事	【6-え】 【tfga-0006-004】	森平他⇒小寺平八郎他	天保3年6月22日		切紙包紙共一通	
文献B-036	文書25	天保上	春差上御請書之事	【6-お】 【tfga-0006-005】	太左衛門他⇒小寺平八郎他	天保3年8月6日		一紙包紙共一通	
文献B-037	文書26	天保上	春差上御請書之事	【6-か】 【tfga-0006-006】	伊右衛門他⇒小寺平八郎他	天保3年8月12日		一紙包紙共一通	
文献B-038	文書27	天保上	春差上御請書之事	【6-き】 【tfga-0006-007】	郭吉他	天保3年8月		一紙包紙共一通	
文献B-039	文書28	天保上	御請書之事	【6-く】 【tfga-0006-008】	忠五郎他 ⇒ 小寺平八郎他	天保3年8月		一紙包紙共一通	
文献B-040	文書29	天保上	春差上御請書之事	【6-け】 【tfga-0006-009】	三輪政五郎他 ⇒ 小寺平八郎他	天保3年8月		一紙包紙共一通	
文献B-041	文書30	天保上	春差上御請書之事	【6-こ】 【tfga-0006-010】	辰右衛門他 ⇒ 小寺平八郎他	9月24日		一紙包紙共一通	
文献B-042	文書31	天保上	春差上御請書之事	【6-さ】 【tfga-0006-011】	庄治郎他 ⇒ 小寺平八郎他	天保3年10月朔日		一紙包紙共一通	
文献B-043	文書32	天保上	春差上御請書之事	【6-し】 【tfga-0006-012】	多原次他 ⇒ 小寺平八郎他	天保3年11月5日		一紙包紙共一通	
文献B-044	文書33	天保上	春差上御請書之事	【6-す】 【tfga-0006-013】	善七他 ⇒ 小寺平八郎他	天保3年閏11月		一紙包紙共一通	
文献B-045	文書34	天保上	春差上御請書之事	【6-せ】 【tfga-0006-014】	嘉藏 ⇒ 小寺平八郎他	天保3年11月		一紙包紙共一通	
絵図B-001	屋敷図4	天保上	式拾分老之図	【6-そ】 【tfga-0006-015】			29.5×43.0	一枚	冠木門建絵図、「地口絵図」とも、塀は板葺きか？天保再建屋敷絵図に記述される仮表門と規模同じ
文献B-046	文書35	天保上	批仕法	【6-た】 【tfga-0006-016】				一紙包紙共一通	梁2間×長9間の建物平面と基本寸法絵図B-002「〔中間部屋等の間取図〕【6-ち】」に対応
絵図B-002	屋敷図5	天保上	〔中間部屋等の間取図〕	【6-ち】 【tfga-0006-017】			24×33	一枚	梁2間×長9間 中間部屋平面図
文献B-047	文書36	天保上	〔入札留〕	【6-つ】 【tfga-0006-018】				一紙綴 一綴	
文献B-048	文書37	天保上	〔入札留〕	【6-て】 【tfga-0006-019】				一紙綴 一綴	
文献B-049	文書38	天保上	〔入札留〕	【6-と】 【tfga-0006-020】				一紙綴 一綴	
文献B-050	-	天保上	御作事御台所請御払不足之分	【141】 【tfga-0141】			11.8×32	半横 3丁 一冊	已極月(天保4年か)、萩原村 三輪和右衛門
絵図B-003	-	天保上	〔屋敷絵図〕	-			196×163	一枚	仮表門、仮玄関の記述御玄関之間と御使者之間が1室など

C. 増築期：天保8年の造営

本論文番号	報告書番号	記載対照	資料名	名古屋大学分類番号	作成者	作成時期	図版サイズ	形態・点数	内容・備考
文献C-001	文書40	天保上	御作事方諸職人并二品々御払書出し	【10】 【tfga-0010】	小寺勇他	天保8年12月		半横 一冊	
文献C-002	文書41	天保上	諸色御入用下調	【11】 【tfga-0011】	作事奉行	天保8年12月		半紙 一冊	
文献C-003	文書42	天保上	諸職人御作料并二品御買物調帳	【109】 【tfga-0109】	作事方	天保15年12月		半紙 一冊	職人の作料について
絵図C-001	-	天保上	高木三郎島蔵図						

D. 整備・改修期Ⅰ：嘉永の造営

本論文番号	報告書番号	記載対照	資料名	名古屋大学分類番号	作成者	作成時期	図版サイズ	形態・点数	内容・備考
文献D-001	-	嘉永下	御鏡鑑覚帳	【12】 【tfga-0012】	台所方	嘉永元年12月	16×12	半横半 6丁 一冊	家族・部屋名
文献D-002	-	嘉永下	御下屋鋪御地面巻出シ石垣追御目論見調覚黒紙左平請負	【15】 【tfga-0015】	作事方	嘉永2年7月	34×12.4	半横 4丁 一冊	
文献D-003	-	嘉永下	御玄関諸入用手扣	【16】 【tfga-0016】	森代助	嘉永3年正月〜	33.6×12.2	半横 7丁 一冊	
文献D-004	-	嘉永下	御鏡餅渡し方覚	【13】 【tfga-0013】	台所方	嘉永3年12月	30.2×11.1	半横 5丁 一冊	
文献D-005	-	嘉永下	出火之節御調書	【26】 【tfga-0026】	側向	嘉永3年5月	33.7×12.5	半横 12丁 一冊	家臣の名 文献D-006「出火之節御調書【27】」と同じ内容
文献D-006	-	嘉永下	出火之節御調書	【27】 【tfga-0027】	役所	嘉永3年5月	33.6×12.5	半横 12丁 一冊	文献D-005「出火之節御調書【26】」と同じ内容に朱墨
-	-	-	御請書	【19-あ〜ち】 【tfga-0019-001-017】			31.4×23.1	包紙 一七通	
文献D-007	-	嘉永下	覚	【19-あ】 【tfga-0019-001】	忠助⇒作事奉行衆	嘉永3年10月21日	27.3×37.8	一紙 一通	蔵の名前と規模
文献D-008	-	嘉永下	覚	【19-い】 【tfga-0019-002】	忠助 ⇒ 作事奉行衆	嘉永3年10月21日	27.3×37.8	一紙 一通	
文献D-009	-	嘉永下	覚	【19-う】 【tfga-0019-003】	忠助 ⇒ 奉行衆中	亥極月	24.8×34.7	一紙 一通	嘉永4年か
文献D-010	-	嘉永下	覚	【19-え】 【tfga-0019-004】	忠助 ⇒ 作事用	子閏2月16日	28.1×39.8	一紙 一通	嘉永5年か
文献D-011	-	嘉永下	覚	【19-お】 【tfga-0019-005】	佐平 ⇒ 奉行	2月22日	24.4×31.2	一紙 一通	
文献D-012	-	嘉永下	覚	【19-か】 【tfga-0019-006】	左平 ⇒ 奉行	子4月3日	24.3×22.5	一紙 一通	嘉永5年か
文献D-013	-	嘉永下	覚	【19-き】 【tfga-0019-007】	佐平		15.7×17.6	切紙 一通	
文献D-014	-	嘉永下	覚	【19-く】 【tfga-0019-008】	忠助 ⇒ 奉行衆中	嘉永5年7月4日	24.8×34.6	一紙 一通	

文献D-015	-	嘉永下	覚	【19-け】【tfga-0019-009】	忠助 ⇒ 奉行所	子11月18日	28×39.7	一紙一通	嘉永5年か
文献D-016	-	嘉永下	請取之覚	【19-こ】【tfga-0019-010】	五兵衛他 ⇒ 奉行所	3月11日	15.8×26.1	切紙一通	
文献D-017	-	嘉永下	覚	【19-さ】【tfga-0019-011】	五平他 ⇒ 奉行所	6月8日	13.8×19	切紙一通	
文献D-018	-	嘉永下	おほへ	【19-し】【tfga-0019-012】	五兵衛他 ⇒ 奉行所	7月	16.1×22.5	切紙一通	
文献D-019	-	嘉永下	おほへ	【19-す】【tfga-0019-013】	喜内他 ⇒ 奉行所	亥7月14日	15.8×15.2	切紙一通	嘉永4年か
文献D-020	-	嘉永下	覚	【19-せ】【tfga-0019-014】			14.1×34.5	切紙一通	
文献D-021	-	嘉永下	〔南御屋敷普請必要金覚〕	【19-そ】【tfga-0019-015】			15.7×26.3	切紙一通	
文献D-022	-	嘉永下	覚	【19-た】【tfga-0019-016】	忠助		16.1×14.1	切紙一通	
文献D-023	-	嘉永下	覚	【19-ち】【tfga-0019-017】	正覚院 ⇒ 五兵衛	5月26日	13.7×13.7	切紙一通	
-	-	-	黒織請負請書	【24-あ〜く】【tfga-0024-001-008】	左平他		40.5×27.8	包紙 八通	
文献D-024	-	嘉永下	奉差上候御請書之事	【24-あ】【tfga-0024-001】	喜内他 ⇒ 奉行	嘉永4年正月	27.9×38.6	一紙一通	
文献D-025	-	嘉永下	奉差上御請書之事	【24-い】【tfga-0024-002】	喜内他 ⇒ 奉行所	嘉永4年4月	28×39.6	一紙一通	
文献D-026	-	嘉永下	奉差上御請書之事	【24-う】【tfga-0024-003】	文左衛門他 ⇒ 奉行	嘉永4年9月	28.3×40.6	一紙一通	
文献D-027	-	嘉永下	奉差上御請書之事	【24-え】【tfga-0024-004】	⇒ 奉行	嘉永4年9月	24.3×32.5	一紙一通	
文献D-028	-	嘉永下	覚	【24-お】【tfga-0024-005】	文左衛門他 ⇒ 奉行衆中	亥9月11日	28.3×20.4	一紙一通	嘉永4年か
文献D-029	-	嘉永下	奉差上御請書之事	【24-か】【tfga-0024-006】	左兵衛他 ⇒ 奉行衆中	嘉永4年12月	24×65.1 + 包紙 33.1×23.8	一紙一通	
文献D-030	-	嘉永下	奉差上候御請書	【24-き】【tfga-0024-007】	太郎左衛門 ⇒ 奉行	子2月	24.3×32.6	一紙一通	嘉永5年か
文献D-031	-	嘉永下	井戸請負	【24-く】【tfga-0024-008】	⇒ 奉行		15.5×21.5	切紙一通	
文献D-032	-	嘉永下	御新造向木割覚	【20】【tfga-0020】	小寺林平	嘉永4年2月	33.5×12.2	半横 45丁 一冊	二階之分
文献D-033	-	嘉永下	釘請取私覚帳	【21】【tfga-0021】	作事方	嘉永4年2月	27.5×10.5	半横 7丁 一冊	
文献D-034	-	嘉永下?	奉差上御普書之事	【25】【tfga-0025】	久平他⇒奉行所衆中	嘉永4年11月	27.4×37.9+包紙 37.9×27.3	一紙一通	
文献D-035	-	嘉永下?	奉差上御普書之事	【26】【tfga-0026】	久平他⇒奉行所	嘉永4年11月	27.5×37.9+包紙 38×27.4	一紙一通	土藏1カ所(どこのものか不明)
文献D-036	-	嘉永下?	御普請ニ付献上物附留帳	【111】【tfga-0111】	役所	嘉永4年11月	24.2×16.6	半横 17丁 一冊	木材、金などの献上品リスト
-	-	-	〔普請用材覚〕	【27-あ〜いゝ】【tfga-0027-001-002】				二冊	嘉永4年辛亥年 御普請口献木口覚帳 十一月吉日 御役所扣
文献D-037	文書43	嘉永下	御普請ニ付献木口覚帳	【27-あ】【tfga-0027-001】	役所	嘉永4年11月		半横 一冊	
文献D-038	文書44	嘉永下	御作事御用表柄わら受取覚	【27-いゝ】【tfga-0027-002】				半横 一冊	
-	-	-	〔普請につき諸覚帳〕	【112-あ〜え】【tfga-0112-001-004】				四冊	
文献D-039	文書45	嘉永下	御新殿御請負金米渡扣帳	【112-あ】【tfga-0112-001】	作事方	嘉永4年12月〜		半横 一冊	
文献D-040	文書46	嘉永下	〔地形請負覚帳〕	【112-いゝ】【tfga-0112-002】				半横 一冊	
文献D-041	文書47	嘉永下	御手元ヨリ金銀請取覚帳	【112-う】【tfga-0112-003】	森代助他	嘉永5年7月〜		半横 一冊	
文献D-042	文書48	嘉永下	諸職人金銀渡シ方差引帳	【112-え】【tfga-0112-004】	森代助他	嘉永5年12月		半横 一冊	
文献D-043	-	嘉永下	釘御通	【113】【tfga-0113】	蛭治屋作藏	嘉永5年正月	17.1×12.5	半横半 10丁 一冊	
文献D-044	-	嘉永下	御立前請負金米請取帳	【28】【tfga-0028】		嘉永5年正月	32.9×12.1	半横 4丁 一冊	
文献D-045	文書49	嘉永下	〔下屋敷建前につき覚〕	【30】【tfga-0030】		嘉永5年2月23日		折紙一通	
文献D-046	-	嘉永下	奉差上候御請書之事	【31】【tfga-0031】	角兵衛 ⇒ 奉行所	嘉永5年3月	24.1×32.7	一紙一通	
文献D-047	-	嘉永下	時祇園籠納扣帳	【33】【tfga-0033】	作事方	嘉永5年3月〜	32.7×12.1	半横 6丁 一冊	
文献D-048	文書50	嘉永下	御下屋敷御地面江奥御新御殿御引去リ御普請御棟指御規式并ニ御柱建初メ御規式共御調帳	【114】【tfga-0114】	役所	嘉永5年9月		半横 一冊	大工棟梁式人 吉田武太夫 三輪弥五郎 御棟札壹枚 長式尺三寸式分 巾六寸九分
文献D-049	文書51	嘉永下	御新殿御建前諸職人金銀渡シ方覚	【115】【tfga-0115】	普請方	嘉永5年9月〜		半横 一冊	
文献D-050	文書52	嘉永下	奉差上御請書之事	【35】【tfga-0035】	忠助他 ⇒ 森代助他	嘉永5年10月		一紙包紙共 一通	
文献D-051	文書53	嘉永下	奉差上御請書之事	【37】【tfga-0037】	敷右衛門他 ⇒ 森代助他	嘉永5年10月		一紙包紙共 一通	
文献D-052	文書54	嘉永下	奉差上御請書之事	【38】【tfga-0038】	忠助他 ⇒ 森代助他	嘉永5年11月18日		一紙包紙共 一通	
文献D-053	文書55	嘉永下	奉差上御請書之事	【46】【tfga-0046】	吉田忠助他 ⇒ 森代助他	嘉永6年3月		一紙一通	
文献D-054	文書56	嘉永下	奉差上御請書之事	【47】【tfga-0047】	忠助他 ⇒ 奉行所	嘉永6年3月		一紙包紙共 一通	
文献D-055	文書57	嘉永下	奉差上御請書之事	【48】【tfga-0048】	梅藏他 ⇒ 奉行	嘉永6年4月		一紙包紙共 一通	
文献D-056	文書58	嘉永下	奉差上御請書之事	【49】【tfga-0049】	来藏他 ⇒ 奉行	嘉永6年4月		一紙包紙共 一通	
文献D-057	-	嘉永下	〔寸さ針金等入用帳〕	【116】【tfga-0116】		嘉永5年	14.6×21.1	半横半 17丁 一冊	
-	-	嘉永下	〔普請につき入用物留〕	【29-あ〜え】【tfga-0029-001-004】				一冊三通	
文献D-058	-	嘉永下	御普請ニ付諸色御買上物御通	【29-あ】【tfga-0029-001】	奉行	嘉永5年2月	38.8×13.7	半横 11丁 一冊	
文献D-059	-	嘉永下	覚	【29-いゝ】【tfga-0029-002】	番所衆中	12月12日	13.9×39.8	切紙一通	
文献D-060	-	嘉永下	覚	【29-う】【tfga-0029-003】	王屋 ⇒ 奉行		13.9×19	切紙一通	
文献D-061	-	嘉永下	縄差上覚	【29-え】【tfga-0029-004】	福宜村 ⇒ 森代助他		28.4×30.2	折紙一通	
文献D-062	-	嘉永下	奉差上候御請書之事	【32】【tfga-0032】	角兵衛⇒奉行所	嘉永5年3月	24.2×32.7+包紙 40.3×27.9	一紙一通	
文献D-063	-	嘉永下	〔御席普請見積帳〕	【160】【tfga-0160】		子4月8日	12×32.8	半横 6丁 一冊	嘉永5年か
文献D-064	-	嘉永下	御新殿御入用諸色御買上物覚帳	【40】【tfga-0040】	普請方	嘉永5年7月〜安政2年8月	32.8×12.2	半横 14丁 一冊	杉皮、欄間、釘隠、畳、床縁、銅板の数量や値段について
文献D-065	-	嘉永下	御新殿御建前并ニ内造作釘渡シ方覚	【41】【tfga-0041】	普請方	嘉永5年9月〜同7年12月8日	32.8×12.2	半横 27丁 一冊	入用の場所
文献D-066	-	嘉永下	御新殿御建前諸職人金銀渡シ方覚	【115】【tfga-0115】	普請方	嘉永5年9月〜	33.2×12	半横 14丁 一冊	
-	-	嘉永下	壁下地入札	【36-あ〜お】【tfga-0036-001-005】		嘉永5年10月5日	27.6×37.2	包紙 五通	
文献D-067	-	嘉永下	〔入札〕	【36-あ】【tfga-0036-001】	壽七 ⇒ 奉行	嘉永5年10月2日	27.5×37.4	一紙一通	
文献D-068	-	嘉永下	覚	【36-いゝ】【tfga-0036-002】			25×17	一紙一通	

文献D-069	-	嘉永下	覚	【36-う】 【tfga-0036-003】			16.1×21.7	切紙 一通	
文献D-070	-	嘉永下	覚	【36-え】 【tfga-0036-004】	忠右衛門		16.3×20.9	切紙 一通	
文献D-071	-	嘉永下	覚	【36-お】 【tfga-0036-005】	赤坂兵八		25×34.4	一紙 一通	
文献D-072	-	嘉永下	増手間奉積り上候	【39】 【tfga-0039】	三輪弥五郎他 ⇒ 奉行所	嘉永5年11月	27.5×37.4	一紙 一通	
文献D-073	-	嘉永下	御下屋敷江移り染ニ付けん上物覚ひかえ長	【235】 【tfga-0235】		嘉永6年	32.7×12.2	半横 6丁 一冊	
文献D-074	-	嘉永下	石屋黒線諸良并ニ御尾扣帳	【42】 【tfga-0042】	森代助他	嘉永6年正月～10月	32.4×12.2	半横 10丁 一冊	
文献D-075	-	嘉永下	諸職入金銀渡シ方覚帳	【43】 【tfga-0043】	森代助他	嘉永6年正月～12月	32.2×12.1	半横 14丁 一冊	
文献D-076	-	嘉永下	時多良薬總受取覚帳	【44】 【tfga-0044】	普請方	嘉永6年2月～11月	32.9×12.1	半横 12丁 一冊	
文献D-077	-	嘉永下	御建前御門御高層腰張并ニ御雪隠向御湯殿破風板張大工木挽工取積立覚	【45】 【tfga-0045】	作事方	嘉永6年2月	35×12.3	半横 11丁 一冊	門、部屋名、奥
文献D-078	-	嘉永下?	乍恐以書付奉敷願候	【14】 【tfga-0014】	作藏他⇒奉行所	嘉永6年3月	28.1×40.1+ 36.3×27.9	一紙 一通	
文献D-079	-	嘉永下	御別荘御修復御入用扣	【50】 【tfga-0050】	普請方	嘉永6年4月	30.8×11.5	半横 9丁 一冊	井戸屋形、下雪隠、廊下、湯屋、上雪隠など(建物不明)の屋根工事
文献D-080	-	嘉永下	御建前御建具向差上方并二代銀付立通	【118】 【tfga-0118】	角兵衛⇒奉行	嘉永6年7月	17×12.2	半横半 12丁 一冊	部屋名
文献D-081	-	嘉永下	御詫一札	【51】 【tfga-0051】	藤吉他 ⇒ 奉行	嘉永6年7月	28.3×40.1	一紙 一通	
文献D-082	-	嘉永下	乍恐書付以奉敷願候	【52】 【tfga-0052】	今次他⇒奉行	嘉永6年9月1日	27.4×38.7+ 31.2×23.2	一紙 一通	
文献D-083	-	嘉永下	諸御道具取調向	【15】 【tfga-0015】	大嶽弁之丞他	嘉永6年11月	24.1×17	半横 21丁 一冊	
文献D-084	-	嘉永下	御新殿御移徙御調帳扣	【50】 【tfga-0050】	役所	嘉永6年11月19日	34.1×12.2	半横 9丁 一冊	部屋名
文献D-085	-	嘉永下	諸御道具取調帳并ニ御湯殿御雪隠向御廊下御重御門御高層共木挽手間積立覚	【53】 【tfga-0053】	森代助他	嘉永6年12月	32.2×12.1	半横 6丁 一冊	
文献D-086	-	嘉永下	御屋附留御通	【119】 【tfga-0119】	吉田忠助他 ⇒ 森代助他	嘉永6年12月	17.3×12.3	半横半 12丁 一冊	
文献D-087	-	嘉永下?	御屋附留御通	【120】 【tfga-0120】	吉田忠助⇒森代助他	嘉永6年12月	19.7×14.2	美横半 14丁 一冊	部屋名
文献D-088	-	嘉永下	納方勘定書通	【121】 【tfga-0121】	忠五郎 ⇒ 奉行所	嘉永6年12月	16.2×12.1	半横半 6丁 一冊	
文献D-089	-	嘉永下?	奉差上一札之事	【16】 【tfga-0016】	惣七⇒高木修理役人中	嘉永7年	24×34.1	一紙 一通	
文献D-090	-	嘉永下?	〔仮小屋取壊しにつき留書断簡〕	【42】 【tfga-0042】		嘉永7年	23.8×16.2	半横 2丁 一冊	場所不明
文献D-091	-	嘉永下	御下屋敷諸事取調向	【3】 【tfga-0003】		嘉永7年1月	25×17.5	半横 23丁 一冊	
文献D-092	-	嘉永下	御香通 御新殿御用	【720】 【tfga-0720】	左官忠助 ⇒ 於奈美	嘉永7年正月	19.5×14.3	美横半 8丁 一冊	
文献D-093	-	嘉永下?	諸色渡方取調	【6-1-4-3】	台所	嘉永7年正月19日～		半横 一冊	
文献D-094	-	嘉永下?	諸色渡方取調	【3】 【tfga-0003】	台所	嘉永7年正月19日～	24.3×16.6	半横 8丁 一冊	
文献D-095	-	嘉永下	乍恐以書付奉敷願候	【122】 【tfga-0122】	吉田武太夫他⇒奉行所	嘉永7年2月	27.2×72	一紙 一通	
文献D-096	-	嘉永下	杉松板・間挽賃金・并ニ大工木挽積り立工敷書出し帳	【57】 【tfga-0057】	森代助他	嘉永7年12月	32.7×12.2	半横 7丁 一冊	畳屋、建具屋
文献D-097	-	嘉永下	〔新殿壁上塗につき留〕	【58】 【tfga-0058】		安政2年	32.6×12.2	半横 4丁 一冊	部屋名、土壁の仕様
文献D-098	-	嘉永下	御用針御通	【123】 【tfga-0123】	作藏	安政2年正月～	17.7×12.3	半横半 14丁 一冊	
-	-	嘉永下	〔壁塗につき覚〕	【59-あ～お】 【tfga-0059-001-005】				五通	
文献D-099	-	嘉永下	覚	【59-あ】 【tfga-0059-001】	吉田忠助 ⇒ 森代助他	安政2年2月	27.7×60.3	一紙 一通	「一番御土蔵」「二番御土蔵」「三番御土蔵」の材料と代金
文献D-100	-	嘉永下	覚	【59-い】 【tfga-0059-002】	忠助 ⇒ 奉行所	安政2年2月	24×32.5	一紙 一通	土壁の仕様と代金
文献D-101	-	嘉永下	覚	【59-う】 【tfga-0059-003】	忠助 ⇒ 奉行所	卯2月18日	23.8×32.3	一紙 一通	土壁の材料と代金
文献D-102	-	嘉永下	覚	【59-え】 【tfga-0059-004】	吉田忠助 ⇒ 森代助他	安政2年正月22日	27.8×40.2	一紙 一通	各部屋名に土壁の仕様と代金
文献D-103	-	嘉永下	覚	【59-お】 【tfga-0059-005】	忠助 ⇒ 奉行所		15.3×32	切紙 一通	土壁の材料と代金
文献D-104	-	嘉永下	御作事御入用品々正金ニ而御私分	【124】 【tfga-0124】	作事役所	安政2年極月	33.8×12.3	半横 4丁 一冊	
-	-	-	御下屋敷御普請御入用并ニ取扱向一件帳入	【60-あ～い】 【tfga-0060-001-002】	森代助他	安政2年4月		包紙 二冊	
文献D-105	文書59	嘉永下	御下屋敷御普請中日記	【60-あ】 【tfga-0060-001】	森代助 ⇒ 平塚忠四郎	安政2年4月		半横 一冊	
文献D-106	-	嘉永下	御下屋敷御普請中諸職人作料并ニ其外御買上之品都而諸御入用ノ上覚帳	【60-い】 【tfga-0060-002】	森代助他	安政4年5月	34.6×12.5	半横 35丁	
文献D-107	文書61	嘉永下	奉差上御請書之事	【61】 【tfga-0061】	丈助 ⇒ 奉行所	安政3年6月9日		一紙包紙共 一通	
文献D-108	-	嘉永下	御下屋敷御土蔵窓戸開キ積立工取諸良 御土蔵上裏共	【62】 【tfga-0062】	作事方	安政3年7月	33.4×12.3	半横 5丁 一冊	
文献D-109	-	嘉永下	御下屋敷御土蔵窓戸開キ積立工取諸良 御土蔵上裏共	【62】 【tfga-0062】	作事方	安政3年7月	33.4×12.3	半横 5丁 一冊	
文献D-110	文書62	嘉永下	御屋日記附留通	【125】 【tfga-0125】	吉田忠助 ⇒ 森代助他	安政3年12月	20.3×13.9	美横半 14丁 一冊	
文献D-111	-	嘉永下	御新建木割帳	【98】 【tfga-0098】			30×11	半横 11丁 一冊	時代不明、「御上之間分」、「御二階之分」
文献D-112	-	嘉永下	木割之事尤仕上寸法	【102】 【tfga-0102】			12.1×33.3	半横 4丁 一冊	
文献D-113	-	嘉永下	〔下屋敷茶の間普請入用帳〕	【127】 【tfga-0127】	平塚忠四郎他		33.5×12.3	半横 3丁 一冊	
文献D-114	-	嘉永下	御中興御上之間ヨリ御三之間迄上壁仕直し御入用覚	【225】 【tfga-0225】	平塚忠四郎	6月23日	14.7×55.2	切紙 一通	
文献D-115	-	嘉永下	〔下屋敷詰夜泊り免ずるにつき書付断簡〕	【47-31】 【tfga-0047-070】	⇒ 三輪作右衛門、喜田漸兵衛、小寺孫八郎			切紙 1	
文献D-116	-	嘉永下	来ル十九日御新御殿御移徙ニ付御祝儀御料理向	【205】 【tfja-0205】			13.9×39.6	美横 4丁 一冊	
文献D-117	文書(135)	嘉永下?	御新殿御壁上塗覚	【214】 【tfga-0214】				半横 一冊	
文献D-118	-	嘉永下	御新御殿御入用	【828】 【tfga-0828】			11×29	半横 3丁 一冊	

E. 整備・改修期Ⅱ：安政の改修

本論文番号	報告書番号	記載対照	資料名	名古屋大学分類番号	作成者	作成時期	図版サイズ	形態・点数	内容・備考
文献E-001	-	嘉永下?	奉差上御請書之事	【61】 【tfga-0061】	丈助 ⇒ 奉行所	安政3年6月9日	24.4×30.8+ 30.8×24.1	一紙 一通	
-	-	天保上 嘉永下	新規御普請下絵図入	【218-け～せ】 【tfga-0218-009-014】		安政4年	24.9×33.7	包紙 六枚	

絵図E-001	屋敷図6	天保上	〔屋敷図〕	【218-け】 【tfga-0218-009】			28×48	一枚	奥北側部分
絵図E-002	屋敷図7	天保上	〔屋敷図〕	【218-こ】 【tfga-0218-010】			28×43	一枚	絵図E-001「〔屋敷図〕 【218-け】」 とほぼ同じ 家相図入る
絵図E-003	屋敷図8	嘉永下	〔屋敷図〕	【218-さ】 【tfga-0218-011】			27.5×32.0	一枚	台所・玄関
絵図E-004	屋敷図9	天保上	〔屋敷図〕	【218-し】 【tfga-0218-012】			24.7×34.5	一枚	上屋敷東長屋
絵図E-005	屋敷図10	不明	〔屋敷図〕	【218-す】 【tfga-0218-013】			24.5×31.0	一枚	白砂・式台
絵図E-006	屋敷図11	天保上	〔屋敷図〕	【218-せ】 【tfga-0218-014】			53.5×64.0	一枚	上屋敷略絵図
文献E-002	文書63	天保上 嘉永下?	御上屋敷御下屋敷	【64】 【tfga-0064】	森代助他	安政4年6月		半横 一冊	安政四年巳年 御上屋敷御下屋敷新規 御目論見御普請大工木挽工数積立其外 御入用取調見 六月日
文献E-003	-	天保上? 嘉永下?	表具御畳修理取調帳	【63】 【tfga-0063】	森代助他	安政4年7月	34.1×12.3	半横 6丁 一冊	
文献E-004	文書64	嘉永下	御下屋敷新規御目論見御普請 取調見	【65】 【tfga-0065】	普請方	安政5年3月		半横 一冊	
文献E-005	-	不明	釘御通	【126】 【tfga-0126】	作蔵 ⇒ 森代助他	安政6年正月～	19.9×14.2	美横半 12丁	
文献E-006	-	天保上?	奉差上御請書之事	【66】 【tfga-0066】	多平 ⇒ 奉行所	安政6年9月	27.5×38.3	一紙 一通	「御長屋」などの瓦の代金
文献E-007	-	嘉永下	〔下屋敷茶の間普請入用帳〕	【127】 【tfga-0127】	平塚忠四郎他	安政7年正月	33.5×12.3	半横 3丁 一冊	茶之間の材料
文献E-008	-	不明	乍恐以書付御請書奉指上候	【67】 【tfga-0067】	寅之介 ⇒ 奉行所	安政7年閏3月	27.6×38.7+ 包紙 38.5×27.4	一紙 一通	
文献E-009	-	不明	乍恐以書付奉願上候	【68】 【tfga-0068】	道具屋惣兵衛他 ⇒ 奉行 所	万延元年閏3月24日	27.5×39+ 包紙 38.4×27.6	一紙 一通	
文献E-010	-	嘉永下	御別荘御長屋内造作入用帳	【69】 【tfga-0069】	平塚忠四郎	万延元年閏3月	30.8×12.2	半横 4丁 一冊	
文献E-011	文書〔136〕	天保上	〔中奥東廊下量敷方につき伺 書〕	【217】 【tfga-0217】				一紙 一通	絵図E-007上石津資料館絵図及びtfgd- 0008の御中廊下とほぼ同じ
絵図E-007	屋敷図(54)	屋敷全景	上石津郷土資料館所蔵絵図	-					

F. 整備・改修期Ⅲ：万延から明治初期までの修復

本論文番号	報告書番号	記載対照	資料名	名古屋大学分類番号	作成者	作成時期	図版サイズ	形態・点数	内容・備考
文献F-001	文書65	天保上?	御破損所御修復向欠所附覧	【70】 【tfga-0070】	森代助他	万延元年5月11日		半横 一冊	
文献F-002	-	不明	釘御通	【129】 【tfga-0129】	作蔵 ⇒ 森代助他	文久2年	17.6×12.3	半横半 10丁 一冊	
文献F-003	-	天保上	槽古縮木割帳	【130】 【tfga-0130】	小寺林平他	文久3年8月	32.7×12.1	半横 11丁 一冊	
文献F-004	-	天保上	御普請御目論見御入用積立帳	【71】 【tfga-0071】	森代助他	文久3年8月	34.7×12.7	半横 14丁 一冊	
文献F-005	-	天保上?	釘金物御通	【131】 【tfga-0131】	作蔵 ⇒ 奉行所	元治元年	16.2×12	半横半 10丁 一冊	
文献F-006	-	天保上?	釘御用御通	【132】 【tfga-0132】	作蔵	元治2年正月	17.4×12.5	半横半 6丁 一冊	
文献F-007	-	天保上?	請取書	【82】 【tfga-0082】		元治元年4月21日～5月 25日	14.2×28.9	切紙綴 6通 一 綴	
文献F-008	-	埋門前	埋御門御修復并ニ御高増積り 立帳	【72】 【tfga-0072】	吉田武太夫他 ⇒ 奉行所	慶応元年9月	34×12.4	半横 3丁 一冊	
-	-	埋門前	埋御門御開御普請ニ付東縁ヨ リ内尋応答手紙入	【73-あ～お】 【tfga-0073-001- 005】		慶応元年10月14日	22.5×15.5	紙袋 五通	
文献F-009	-	埋門前	〔埋門修復につき書状〕	【73-あ】 【tfga-0073-001】	役人共 ⇒ 役人中	10月15日	14.3×42	切紙 一通	
文献F-010	-	埋門前	〔埋門普請につき書状〕	【73-い】 【tfga-0073-002】	役人共 ⇒ 役人	10月14日	14.6×46.6	切紙 一通	
文献F-011	-	埋門前	〔埋門普請手伝入足につき書 状下書〕	【73-う】 【tfga-0073-003】		慶応元年10月14日	14.6×57.6	切紙 一通	
文献F-012	-	埋門前	〔埋門修復につき書状下書〕	【73-え】 【tfga-0073-004】	役人 ⇒ 役人中	慶応元年10月16日	14.6×72.8	切紙 一通	
文献F-013	-	埋門前	〔埋門修復につき書状下書〕	【73-お】 【tfga-0073-005】	役人共 ⇒ 役人中	慶応元年10月14日	15.5×107.3 22.5×15.5	紙袋 五通	
文献F-014	-	埋門前?	奉差上御請書之事	【74】 【tfga-0074】	佐右衛門他 ⇒ 奉行所	慶応元年10月	27.7×57+ 包紙 34.6×24.8	一紙 一通	
文献F-015	-	埋門前?	奉差上御請書之事	【75】 【tfga-0075】	佐右衛門他 ⇒ 奉行所	奉行所 慶応元年10月	24.8×50.2	一紙 一通	
文献F-016	文書66	不明	諸色御私物書出帳	【133】 【tfga-0133】		慶応元年12月		半横 一冊	
文献F-017	-	不明	奉差上御請書之事	【76】 【tfga-0076】	佐右衛門 ⇒ 奉行所	慶応2年6月29日	25.1×85	一紙 一通	
文献F-018	-	不明	奉差上御請書之事	【77】 【tfga-0077】	佐右衛門他 ⇒ 奉行所	慶応2年6月29日	28.3× 102.5+包紙 40.6×28	一紙 一通	
文献F-019	-	天保上	集義館御家根互算方仕法之覚	【219】 【tfga-0219】		慶応2年6月	12.7×35	半横 2丁 一冊	
文献F-020	-	天保上? 嘉永下?	風雨ニ付御破損所御修復御入 用取調帳	【134】 【tfga-0134】	平塚忠四郎	慶応2年8月7日	35.3×12.7	半横 6丁 一冊	
文献F-021	-	天保上? 嘉永下?	御作事御入用御買上物時多良 義調御買上覚	【135】 【tfga-0135】		慶応2年12月	12.4×34.6	半横 4丁 一冊	
文献F-022	-	天保上 嘉永下	木割覚	【99】 【tfga-0099】		慶応3年卯正月	12×34.7	半横 3丁 一冊	表御書院、御中之口、御下屋敷、慶応 三年卯正月、吉田武太夫
文献F-023	-	不明	釘御通	【136】 【tfga-0136】	作蔵 ⇒ 平塚忠四郎	慶応3年正月	16.7×12.4	半横半 8丁 一 冊	
-	-	-	〔普請につき留帳〕	【78-あ～い】 【tfga-0078-001- 002】	平塚忠四郎			二冊	
文献F-024	文書67	天保上? 嘉永下?	所々御修復向積立帳	【78-あ】 【tfga-0078-001】	平塚忠四郎	慶応3年正月		半横 一冊	
文献F-025	文書68	天保上? 嘉永下?	御中口東御普請仕法帳	【78-い】 【tfga-0078-002】	平塚忠四郎	慶応3年11月		半横 一冊	
文献F-026	文書69	天保上? 嘉永下?	所々御修復向普請付覚帳	【79】 【tfga-0079】	平塚忠四郎	慶応4年4月		半横 一冊	
文献F-027	-	天保上? 嘉永下?	木割帳	【137】 【tfga-0137】	小寺林平他	慶応4年4月	30.9×11.9	半横 5丁 一冊	
文献F-028	文書70	天保上? 嘉永下?	御作事御入用諸色御私物扣帳	【138】 【tfga-0138】	平塚忠四郎	明治元年12月		半横 一冊	
文献F-029	文書71	天保上? 嘉永下?	御作事御入用諸色御私物扣帳	【139】 【tfga-0139】	平塚忠四郎	明治元年12月		半横 一冊	
-	-	不明	職人時節柄難渋増扶持願書付	【80-あ～う】 【tfga-0080-001- 003】		明治2年巳7月	33.8×24.8	包紙 三通	
文献F-030	-	不明	以書付奉願候	【80-あ】 【tfga-0080-001】	平塚忠四郎 ⇒ 役所	明治2年6月	14.9×42.7	切紙 一通	
文献F-031	-	不明	覚	【80-い】 【tfga-0080-002】	平塚忠四郎 ⇒ 役所	明治2年6月	14.9×49.5	切紙 一通	
文献F-032	-	不明	〔諸職人作料につき願書〕	【80-う】 【tfga-0080-003】	平塚忠四郎 ⇒ 役所	巳7月	14.6×28.7	切紙 一通	明治2年か
-	-	嘉永下	〔館修復入用覚帳〕	【9-あ～い】 【thba-0009-001- 002】				二冊	
文献F-033	文書72	嘉永下	御下部御修復諸入用留記	【9-あ】 【thba-0009-001】	平塚忠四郎	明治5年4月		半横 二冊	職人の人数、材料、修復箇所について
文献F-034	文書73	嘉永下	奥御館并御勝手御館御建前向 取調覚帳	【9-い】 【thba-0009-002】		明治5年6月		半横 一冊	建物規模、部屋名、寸法

文献F-035	文書74	嘉永下	御下屋敷御修履凡積り帳	【10】 【thba-0010】	吉田義太夫	明治5年4月		半横 一冊	
---------	------	-----	-------------	------------------	-------	--------	--	-------	--

G. 縮小期Ⅰ：明治5年以降の屋敷規模縮小

本論文番号	報告書番号	記載対照	資料名	名古屋大学分類番号	作成者	作成時期	図版サイズ	形態・点数	内容・備考
文献G-001	文書75	明治Ⅰ	〔日記〕	【1】 【thbc-0001】		明治5年4月14日～同6年5月18日		一紙 一通	
-	-	明治Ⅰ	〔屋敷払い下げにつき請書〕	【186-あへく】 【thba-0186-001-008】				八通	
文献G-002	文書76	明治Ⅰ	差上申御請書之事	【186-あ】 【thba-0186-001】	清左衛門他 ⇒ 取次中	明治5年7月8日		一紙包紙共 一通	
文献G-003	文書77	明治Ⅰ	差上申御請書之事	【186-い】 【thba-0186-002】	川添勇助他 ⇒ 平塚忠四郎	明治5年7月		一紙包紙共 一通	御物置堂ヶ所
文献G-004	文書78	明治Ⅰ	差入申御請書之事	【186-う】 【thba-0186-003】	老右衛門他 ⇒ 平塚忠四郎	明治5年8月29日		一紙 一通	御長家堂ヶ所
文献G-005	文書79	明治Ⅰ	奉差上御請書之事	【186-え】 【thba-0186-004】	職治 ⇒ 掛中	明治6年8月5日		一紙 包紙共 一通	御門南長家堂ヶ所
文献G-006	文書80	明治Ⅰ	御請書一札之事	【186-お】 【thba-0186-005】	坂口屋和乎他 ⇒ 渡辺佐次右衛門他	明治6年12月		一紙 一通	御建家堂系
文献G-007	文書81	明治Ⅰ	御約定証書之事	【186-か】 【thba-0186-006】	三輪茂左衛門他 ⇒ 渡辺佐次右衛門他	明治12年1月7日		一紙 包紙共 一通	御土蔵堂ヶ所
文献G-008	文書82	明治Ⅰ	記	【186-き】 【thba-0186-007】	多平他	3月20日		一紙 一通	
文献G-009	文書83	明治Ⅰ	記	【186-く】 【thba-0186-008】				一紙 一通	種堂
文献G-010	-	明治Ⅰ	〔包紙〕	200711-618		明治5壬申歳8月		包紙	上書「明治五壬申歳八月 家敷全図」
文献G-011	-	明治Ⅰ	〔袋〕	200711-591		明治5壬申8月2日		袋	上書「御屋敷地畝ト高井ニ因面共相改取調岐阜県へ差出候事常力之扣」但シ迄ハ宮村戸長江御談シニ付戸長口申出候間罷メ而戸長口持参仕果へ御納候」
絵図G-001	-	明治Ⅰ	〔敷地図面〕	200711-575		明治6年		一紙	朱あり、量数記載あり、「薪部屋」「味噌蔵」「土蔵」「湯殿」「物置」等記載
文献G-012	-	明治Ⅰ	御扶持方渡帳	200711-585	大雅館	明治6年		横	
文献G-013	-	-	〔金2両借用証文〕	200711-604	貞正(印)⇒佐次右衛門	明治6年酉3月		一紙	済証文
文献G-014	-	-	明治六癸酉年三月四日三百六号ニ有之享(美濃国第四区羽咋郡上田村農・松浦太平)	200711-612-1		明治6年3月4日		一紙	612は一紙
文献G-015	-	-	〔美濃国石津郡洲之上村の内同郡宮村持主高木貞正分上俵反畝等書上〕	200711-612-2		明治6年3月4日		一紙	2枚
文献G-016	-	明治Ⅰ	主法帳	200711-590		明治6年6月		切紙 一枚	上屋敷縮小の様子がよく分かる
文献G-017	文書84	明治Ⅰ	御屋敷御主法之覚	【81】 【thbd-0081】	桑原応助	明治6年6月	20.2×14.2	表横半丁 一冊	10
文献G-018	-	-	夏作(作物数量書上)	200711-594		明治6年8月12日		切紙 一枚	裏に蘭について記載あり
-	-	-	〔家売払いにつき帳簿〕	【187-あへい】 【thba-0187-001-002】				二冊	
文献G-019	文書85	明治Ⅰ	奥量弘之分	【187-あ】 【thba-0187-001】				半縦 一冊	部屋名、量数が記述
文献G-020	文書86	明治Ⅰ	〔家売り払い覚帳〕	【187-い】 【thba-0187-002】		明治6年12月18日		半縦 一冊	
絵図G-002	-	明治Ⅰ	〔敷地図面〕	200711-576		明治7年2月17日		切紙 一枚	576の貼紙なしと類似
絵図G-003	-	明治Ⅰ	〔建物図面〕	200711-572		明治7年2月27日		切紙 一枚	2011-572～619は袋紐一括、袋上書「明治七年二月廿七日 敷地図入」、2011-572～573は重紐一括
絵図G-004	-	明治Ⅰ	〔建物図面〕	200711-583		明治7年甲戌2月29日認之		一紙	彩色、量数あり、改造の跡あり
文献G-020	文書87	明治Ⅰ	御上邸修履購入用覚	【16】 【thba-0016】	大雅館	明治7年3月		半横 一冊	日付、人数、修理箇所が記載
文献G-021	-	-	記(田1ヶ所代価62円にて相渡寸旨)	200711-605-2	高木貞正(朱印)⇒上原村・美輪俊作殿	明治7年5月		一紙	
文献G-022	文書88	明治Ⅰ	日記	【2】 【thbc-0002】	大雅館	明治8年1月1日～12月31日		美横 一冊	
文献G-023	文書89	明治Ⅰ	上屋敷破損取繕記	【19】 【thba-0019】	大雅館	明治8年6月16日		半横 一冊	屋根修理について(瓦葺き)
文献G-024	文書90	明治Ⅰ	表御書院跡并集義館前開発ニ付人足名前附留帳	【492】 【thba-0492】	大雅館	明治8年10月16日～		半横 一冊	人数・名前が記載
文献G-025	文書91	明治Ⅰ	日誌	【4】 【thbc-0004】	大雅館	明治10年1月1日～28日		半縦 一冊	
文献G-026	文書92	明治Ⅰ	〔屋敷売払代金受取書下書〕	【196】 【thba-0196】	三輪正造 ⇒ 青山嘉助他	明治22年2月17日		一紙 一通	
文献G-027	文書93	明治Ⅰ 明治Ⅱ	日記	【14】 【thbd-0014】	高木貞正	明治27年4月26日～同29年7月22日	18.0×13.5	一冊	大工・木挽についての記述有り
絵図G-005	屋敷図(12)	明治Ⅰ	〔屋敷図〕	【41】 【tfgd-0041】			24.7×34.3	一枚	敷地概略図、南に長屋門あり、門移築時か?、敷地700坪
絵図G-006	屋敷図(13)	明治Ⅰ	〔屋敷図〕	【44】 【tfgd-0044】			31.8×45.0	一枚	敷地建物配置図「五百分一、縮図」
絵図G-007	-	明治Ⅰ	〔敷地図面〕	200711-573				切紙 一枚	量数記載あり
絵図G-008	-	明治Ⅰ	〔建物図面〕	200711-574				切紙 一枚	旧大奥御対面所三之間が「物置」、旧堀之間が「客家」、旧堀之間が「茶間」と記載
絵図G-009	-	明治Ⅰ	〔敷地図面〕	200711-577				切紙 一枚	「集義館」「跡達様」という建物名、「表」「奥」という領域、「臺所」「茶ノ間」という室名が記載
絵図G-010	-	明治Ⅰ	〔敷地図面〕	200711-578				切紙 一枚	南から「玄」「臺」「茶」「門」「井」が朱筆。位置関係は583と類似。
絵図G-011	-	明治Ⅰ	改正 主法帳略 家敷全図略	200711-579				切紙 一枚	包紙のみ
文献G-028	-	-	〔高木貞正所持下俵反畝等書上〕	200711-580	右(美濃国石津郡北脇村之内・同郡宮村)高木貞正(印)、副戸長・山口市藏(印)、戸長・喜田孫治(印)			一紙	580～は同一帳面の帳崩れカ、美濃国石津郡北脇村之内・同郡宮村・持主・高木貞正(印)
文献G-029	-	-	〔高木貞正所持下俵に地券下げ渡し願うにつき願書〕	200711-581				一紙	美濃国石津郡北脇村之内・同郡宮村・持主・高木貞正(印)
文献G-030	-	-	〔山林地代金等書上〕	200711-582				一紙	帳崩れカ
文献G-031	-	-	講懸金・借財・敷地年貢・山年貢取調帳	200711-584				横	
文献G-032	-	不明	記(奥村杉谷山弘代金惣ノ458円2分3釐3歩)	200711-586	大雅館・出納課	8月17日		切紙 一枚	

絵図G-012	-	明治Ⅰ	〔敷地図面〕	200711-587				切紙 一枚	朱あり、絵図G-010「〔敷地図面〕【578】」とよく似ている。旧大奥対面所が表、旧中奥と大奥諸室が奥に属する。下屋敷御門らしき門が東南に位置。
絵図G-013	-	明治Ⅰ	〔建物図面〕	200711-588				一紙	彩色、畳敷あり、改造の様子がよくわかる
文献G-033	-	-	記(小原山金等ノ385円75銭内訳)	200711-589				切紙 一枚	
文献G-034	-	不明	覚(彫刻代金ノ金7両につき)	200711-592	経屋庄六(印)⇒成瀬様・御屋敷	5月28日		切紙 一枚	
文献G-035	-	明治Ⅰ?	〔金銭書上〕	200711-593				切紙 一枚	裏も同様
文献G-036	-	明治Ⅰ?	記(安政午年より当末年までの金5両等3口ノ元利38両につき)	200711-595				切紙 一枚	
文献G-037	-	明治Ⅰ?	覚(講掛金等ノ金161円につき)	200711-596				切紙 一枚	文献G-037【596】～文献G-040【599】は紐一括、紐共
文献G-038	-	明治Ⅰ?	記(小原山払金50円等金銭書上)	200711-597				切紙 一枚	
文献G-039	-	明治Ⅰ?	〔小原山金20両等納金勘定書〕	200711-598				切紙 一枚	
文献G-040	-	明治Ⅰ?	〔金銭書上〕	200711-599				切紙 一枚	額ノ517両
文献G-041	-	明治Ⅰ?	記(納金337円50銭等金銭勘定書)	200711-600				切紙 一枚	残74円74銭5厘
文献G-042	-	明治Ⅰ?	〔殿治屋村納分小寺林平分立木払代金34両は49両にて皆済につき書付〕	200711-601				切紙 一枚	
文献G-043	-	-	〔美濃国石津郡第33区宮村住居土熊高木貞正得主石津郡羽ヶ原村土熊反歌等書上〕	200711-602				切紙 一枚	
文献G-044	-	-	重九会群衆(漢詩下書)	200711-603				切紙 一枚	
文献G-045	-	-	〔漢字書付〕	200711-605-1				切紙 一枚	200711-605は一括ではない
絵図G-014	-	明治Ⅰ	〔図面〕	200711-606				切紙 一枚	「表 御家形」「御臺所」と記載あり。屋根伏せか。
文献G-046	-	明治Ⅰ	〔先君様の物語及びこの節の時勢を愚考して屋敷勝手向きの件申し上げにつき書状〕	200711-607	桑原應助⇒西様・御側	9月14日		切紙 一枚	
文献G-047	-	明治Ⅰ	〔大工小屋・御味噌蔵等間敷及び代金書上〕	200711-608				切紙 一枚	
文献G-048	-	-	〔年賀挨拶御紙面の趣有り難き仕合わせ及び御集子一折頂戴の礼につき書状〕	200711-609	桑原應助⇒伊東嘉一様	2月9日		切紙 一枚	包紙共
絵図G-015	-	不明	〔荒無地図面〕	200711-610				切紙 一枚	
文献G-049	-	-	〔札〕	200711-611				切紙 一枚	「大垣侍従氏唐御難芳之助多良高木家江入集之御辞書」とあり
絵図G-016	-	明治Ⅰ	〔屋敷図面〕	200711-613				切紙 一枚	下書カ、支間・台所廻りが578,587によく似る。
文献G-050	-	明治Ⅰ	〔諸払及び講金等につき書上〕	200711-614				切紙 一枚	
文献G-051	-	明治Ⅰ	〔御前奥方様とも拝跪御付けられの件につき書状〕	200711-615	桑原應助⇒西様・御側衆様	6月2日		切紙 一枚	
絵図G-017	-	明治Ⅰ	〔屋敷図面〕	200711-616				切紙 一枚	上屋敷主棟を除いた表門、役所等が記載
絵図G-018	-	不明	〔図面〕	200711-617				一紙	不明
絵図G-019	-	明治Ⅰ	〔屋敷図面〕	200711-619				切紙 一枚	彩色、破損の為取扱注意、はがれた貼れ多数あり。高木貞正之家(長方形の外形)、旧臺所門ともう一つ別の門(ともに冠木門)、石垣などが記載。

H. 縮小期Ⅱ：明治29年の改修

本論文番号	報告書番号	記載対照	資料名	名古屋大学分類番号	作成者	作成時期	図版サイズ	形態・点数	内容・備考
-	-	-	〔屋敷修理請負書〕	【204-あ～い】【thba-0204-001-002】				一冊一通	
文献H-001	文書94	明治Ⅱ	御受書	【204-あ】【thba-0204-001】	吉田鎌三郎 ⇒ 高木貞正	明治29年2月13日		半綴 一冊	請負金と修理箇所について
文献H-002	文書95	明治Ⅱ	受証	【204-い】【thba-0204-002】	早川龜藏他 ⇒ 高木貞正	明治29年2月13日		一紙 一通	請負金と修理箇所について
文献H-003	文書96	明治Ⅱ	日記	【15】【thbc-0015】	高木	明治29年7月23日～同30年7月31日	18.0×13.5	一冊	大工・木挽についての記述有り
-	-	-	〔代金覚書〕	【330-あ～こ】【thba-0330-001-010】				二綴八通	
文献H-004	文書97	明治Ⅱ	記	【330-あ】【thba-0330-001】	加藤喜三	明治29年9月23日		一紙 一通	
文献H-005	文書98	明治Ⅱ	仕様外追加	【330-い】【thba-0330-002】	山田八十吉 ⇒ 高木	明治29年8月		一紙綴 一綴	
文献H-006	文書99	明治Ⅱ	建具寸法覚	【330-う】【thba-0330-003】				一紙綴 一綴	
文献H-007	文書100	明治Ⅱ	証	【330-え】【thba-0330-004】	山田八十吉 ⇒ 高木貞正	明治29年7月14日		一紙 一通	
文献H-008	文書101	明治Ⅱ	記	【330-お】【thba-0330-005】	山田八十吉 ⇒ 高木貞正	明治29年6月27日		一紙 一通	
文献H-009	文書102	明治Ⅱ	御請書	【330-か】【thba-0330-006】	山田八十吉 ⇒ 高木貞正	明治29年5月15日		一紙 一通	
文献H-010	文書103	明治Ⅱ	記	【330-き】【thba-0330-007】	山田八十吉 ⇒ 吉田鎌三郎	5月12日		一紙 一通	
文献H-011	文書104	明治Ⅱ	追増建具寸法	【330-く】【thba-0330-008】	山田八十吉 ⇒ 高木貞正	明治29年5月		一紙 一通	
文献H-012	文書105	明治Ⅱ	記	【330-け】【thba-0330-009】	山田八十吉 ⇒ 高木貞正	8月21日		一紙 一通	
-	-	-	〔屋敷図〕	【16-あ～お】【tfgd-0016-001-005】				五枚	包紙「出願色々絵図覚」
絵図H-001	屋敷図(14)	明治Ⅱ	〔屋敷図〕	【16-あ】【tfgd-0016-001】			27.5×39.5	一枚	鉛筆書き、板間多い
絵図H-002	屋敷図(15)	明治Ⅱ	〔屋敷図〕	【16-い】【tfgd-0016-002】			32×34	一枚	鉛筆書き、
絵図H-003	屋敷図(16)	明治Ⅱ	〔屋敷図〕	【16-う】【tfgd-0016-003】			27.5×37.0	一枚	屋敷配置図 明治か?、スケッチ
絵図H-004	屋敷図(17)	明治Ⅱ	〔屋敷図〕	【16-え】【tfgd-0016-004】			27×39	一枚	絵図H-001「〔屋敷図〕【16-あ】」に同じ
絵図H-005	屋敷図(18)	明治Ⅱ	〔屋敷図〕	【16-お】【tfgd-0016-005】			31×44	一枚	中廊下平面、家相図、絵図H-013「〔屋敷図〕【17-く】」に同じ
-	-	-	〔屋敷図〕	【17-あ～し】【tfgd-0017-001-012】				十五枚	
絵図H-006	屋敷図(19)	明治Ⅱ	〔屋敷図〕	【17-あ】【tfgd-0017-001】			118×109	一枚	鉛筆書き、平面の上に朱書き建物外形、配置家相図
絵図H-007	屋敷図(20)	明治Ⅱ	〔屋敷図〕	【17-い】【tfgd-0017-002】			16.0×16.5	一枚	部分図
絵図H-008	屋敷図(21)	明治Ⅱ	〔屋敷図〕	【17-う】【tfgd-0017-003】			16.0×33.5	一枚	部分図 座敷?

絵図H-009	屋敷図(22)	明治Ⅱ	〔屋敷図〕	【17-え】 【tfgd-0017-004】			29×40	一枚	部分図 土間？
絵図H-010	屋敷図(23)	明治Ⅱ	〔屋敷図〕	【17-お】 【tfgd-0017-005】			31.5×45.0	一枚	鉛筆 単線 絵図H-013「〔屋敷図〕【17-く】」と同じ
絵図H-011	屋敷図(24)	明治Ⅱ	〔屋敷図〕	【17-か】 【tfgd-0017-006】			31.5×45.0	一枚	鉛筆 平面 絵図H-013「〔屋敷図〕【17-く】」と同じ
絵図H-012	屋敷図(25)	明治Ⅱ	〔屋敷図〕	【17-き】 【tfgd-0017-007】			46.5×32.0	一枚	離れ？ 鉛筆
絵図H-013	屋敷図(26)	明治Ⅱ	〔屋敷図〕	【17-く】 【tfgd-0017-008】			31.5×44.0	一枚	中廊下平面、家相図、絵図H-005「〔屋敷図〕【16-お】」と同じ
絵図H-014	屋敷図(27)	明治Ⅱ	〔屋敷図〕	【17-け】 【tfgd-0017-009】			46.5×44.5	一枚	明治⇒現状と同じ
絵図H-015	屋敷図(28)	明治Ⅱ	〔屋敷図〕	【17-こ】 【tfgd-0017-010】			27.5×38.0	一枚	畳敷き様
絵図H-016	屋敷図(29)	明治Ⅱ	〔屋敷図〕	【17-さ】 【tfgd-0017-011】			27.5×38.0	一枚	式台？
絵図H-017	屋敷図(30)	明治Ⅱ	〔屋敷図断片〕	【17-し】 【tfgd-0017-012】			27×39	四枚	敷地図
絵図H-018	屋敷図(31)	明治Ⅱ	〔屋敷図〕	【20】 【tfgd-0020】			31×42	一枚	絵図H-013「〔屋敷図〕【17-く】」の土屋部が中廊下ではなく、10畳(2.5間)
絵図H-019	屋敷図(32)	明治Ⅱ	〔屋敷図〕	【21】 【tfgd-0021】			31×45	一枚	【20】と同じ 鉛筆書き 露地書込みあり 佐藤有
絵図H-020	屋敷図(33)	明治Ⅱ	〔屋敷図〕	【27】 【tfgd-0027】			39.0×110.5	一枚	立面図 現状か？
絵図H-021	屋敷図(34)	明治Ⅱ	〔間取図〕	【42】 【tfgd-0042】			23.7×32.2	一枚	中廊下型、鉛筆、南角屋張り紙の上プラン、これが絵図H-013「〔屋敷図〕【17-く】」などと同じ

I. 縮小後：昭和11年建物図

本論文番号	報告書番号	記載対照	資料名	名古屋大学分類番号	作成者	作成時期	図版サイズ	形態・点数	内容・備考
絵図I-001	屋敷図35	明治Ⅱ	昭和十一年建物圖面	-	高木貞元	昭和11年5月		一冊一通	直筆による建物外形線

J. 西高木家陣屋の建物に関係がある文書

本論文番号	報告書番号	記載対照	資料名	名古屋大学分類番号	作成者	作成時期	図版サイズ	形態・点数	内容・備考
-	-	-	入用書	【140-さ〜ち】 【tfga-0140-011~017】				包紙 七通	
文献J-001	文書(106)	不明	〔材木下げにつき請書下書〕	【140-さ】 【tfga-0140-011】		高 9月16日		切紙 一通	
文献J-002	文書(107)	天保上？	御作事御台所請御払不足之分	【141】 【tfga-0141】				半横 一冊	
文献J-003	文書(108)	不明	御小納戸御取纏ニ付諸職入其外品々御入用取調書	【145】 【tfga-0145】	作事方	午7月		切紙 一通	
文献J-004	文書(109)	不明	御弘方差引勘定帳	【149】 【tfga-0149】				半横 一冊	
文献J-005	文書(110)	嘉永下？	〔御席普請見積帳〕	【160】 【tfga-0160】		子4月8日		半横 一冊	
文献J-006	文書(111)	天保上？ 嘉永下？	〔館内修繕箇所見積りにつき同書〕	【163】 【tfga-0163】	森代助他	4月7日		切紙 一通	
文献J-007	文書(112)	天保上？ 嘉永下？	御茶之間化無利出し積り立	【164】 【tfga-0164】	吉田武太夫 ⇒ 奉行所	3月晦日		切紙 一通	
文献J-008	文書(113)	不明	〔棟札雛形〕	【180】 【tfga-0180】			57×16	一枚	大工棟梁 濃州高須住 長谷川□□ 義重
文献J-009	文書(114)	不明	〔棟札雛形〕	【181】 【tfga-0181】			57×16	一枚	大工棟梁 江州樋口村住 樋口□□ 苗慈
文献J-010	文書(115)	不明	間取畳敷吉因撰扣	【182】 【tfga-0182】		6月11日 同16日		半横 一冊	間取相生相克直し方 表御座敷向 奥御立間 御台所向 依御立間向 表御立間向 御内立間 御書院間
-	-	-	〔材木覚〕	【191-あ〜う】 【tfga-0191-001~003】				三通	
文献J-011	文書(116)	不明	覚	【191-あ】 【tfga-0191-001】				切紙 一通	
文献J-012	文書(117)	不明	覚	【191-い】 【tfga-0191-002】				切紙 一通	
文献J-013	文書(118)	不明	切取分	【191-う】 【tfga-0191-003】				切紙 一通	
文献J-014	文書(119)	不明	奉差上御請書之事	【193】 【tfga-0193】	藤助他 ⇒ 奉行所			一紙 一通	長屋建築普請書
-	-	嘉永下？	〔家普請につき諸書付〕	【194-あ〜お】 【tfga-0194-001~005】				五通	
-	-	嘉永下？	〔家取壊し古材引取り値段覚書〕	【194-あ〜う】 【tfga-0194-001~003】				三通	奥之間、仲長屋、物置
文献J-015	文書(120)	不明	覚	【194-あ】 【tfga-0194-001】	常吉	9月10日		切紙 一通	九月十日
文献J-016	文書(121)	不明	覚	【194-い】 【tfga-0194-002】	幸助 ⇒ 役人衆中	9月17日		一紙 一通	九月十七日
文献J-017	文書(122)	不明	覚	【194-う】 【tfga-0194-003】	常吉 ⇒ 役人衆	子9月10日		切紙 一通	子九月十日
-	-	不明	〔屋敷修繕諸入用書付〕	【194-さ〜お】 【tfga-0194-004~005】				二通	
文献J-018	-	不明	覚	【194-え】 【tfga-0194-004】	さかなや	11月29日	15.9×16	切紙 一通	
文献J-019	文書(123)	不明	〔屋敷修繕費請求書〕	【194-お】 【tfga-0194-005】	孫兵衛 ⇒ 役人衆中	子11月		一紙 一通	子十一月
文献J-020	文書(124)	不明	〔用材覚〕	【195】 【tfga-0195】				切紙 一通	
文献J-021	文書(125)	不明	〔屋敷坪数覚〕	【197】 【tfga-0197】				一紙 一通	
文献J-022	文書(126)	不明	〔家相覚〕	【199】 【tfga-0199】				切紙綴 一綴	
文献J-023	文書(127)	不明	〔家相覚〕	【200】 【tfga-0200】				切紙 一通	
-	-	類焼前？	〔家普請につき書付〕	【203-あ〜き】 【tfga-0203-001~007】				四冊 三通	
文献J-024	文書(128)	類焼前？	〔大工木挽手間覚〕	【203-あ】 【tfga-0203-001】				折紙 一通	
文献J-025	文書(129)	類焼前？	覚	【203-い】 【tfga-0203-002】				切紙 一通	
文献J-026	文書(130)	類焼前？	御類焼ニ付献上金銀札	【203-う】 【tfga-0203-003】				半横 一冊	
文献J-027	文書(131)	類焼前？	巳十二月御払い残り	【203-え】 【tfga-0203-004】				半横 一冊	
文献J-028	文書(132)	類焼前？	〔入用米等書上帳〕	【203-お】 【tfga-0203-005】				半横 一冊	
文献J-029	文書(133)	類焼前？	〔諸入費書上帳〕	【203-か】 【tfga-0203-006】				半横 一冊	
文献J-030	文書(134)	類焼前？	覚	【203-き】 【tfga-0203-007】	小寺平次郎他 ⇒ 小兵衛			切紙 一通	
文献J-031	文書(137)	不明	〔新規見積書〕	【220】 【tfga-0220】	弥五郎 ⇒ 奉行所	酉3月		切紙 一通	
文献J-032	文書(138)	天保上？ 嘉永下？	御中央御上之間ヨリ御三之間 迄上壁仕直し御入用覚	【225】 【tfga-0225】	平塚忠四郎	6月23日		切紙 一通	

絵図J-001	屋敷図(36)	不明	長屋門建絵図	【2】【tfgd-0002】			59.0×134.5	一枚	二重軒付け、椀皮葺?、番屋突出、大工図面
絵図J-002	屋敷図(37)	不明	〔屋敷絵図〕	【5】【tfgd-0005】			28.0×37.5	一枚	絵図J-003「〔屋敷絵図〕【6】」と同じ、すべて墨書き
絵図J-003	屋敷図(38)	不明	〔屋敷絵図〕	【6】【tfgd-0006】			28×38	一枚	新築朱引、小規模屋敷図
絵図J-004	屋敷図(40)	不明	〔屋敷図〕	【8】【tfgd-0008】			93×115	一枚	
絵図J-005	屋敷図(41)	不明	〔屋敷図〕	【19】【tfgd-0019】			40.0×55.5	一枚	「御屋形百分一之図」 絵図J-004「〔屋敷図〕【8】」の奥向北側諸室無し
絵図J-006	屋敷図(42)	不明	〔屋敷立体絵図〕	【28】【tfgd-0028】	吉田謙三郎		31.5×42.5	一枚	十畳間他建物絵図
絵図J-007	屋敷図(43)	不明	〔屋敷立体絵図〕	【29】【tfgd-0029】				十二枚	二畳台目起し絵図、規模不明茶室起し絵図
絵図J-008	屋敷図(44)	不明	〔屋敷図〕	【33】【tfgd-0033】			24.7×34.5	一枚	「地坪百五拾三坪五合七勺」建物配置、「席」二棟あり
絵図J-009	屋敷図(45)	不明	〔屋敷図〕	【34】【tfgd-0034】			27.6×39.0	一枚	三畳茶室平面、鉛筆書き、明治7年
絵図J-010	屋敷図(46)	不明	〔屋敷図〕	【35】【tfgd-0035】			24.6×24.0	一枚	「茶、間図」二階平面もあり、」鉛筆書入れありスケッチ
絵図J-011	屋敷図(47)	不明	〔屋敷図〕	【36】【tfgd-0036】			24.0×33.8	一枚	十畳・八畳・八畳からなる屋敷スケッチ、庭の茶室増築の図?
絵図J-012	屋敷図(50)	不明	〔屋敷図〕	【38】【tfgd-0038】			15.1×18.7	一枚	三畳と二畳からなる茶室平面
絵図J-013	屋敷図(51)	不明	〔屋敷図〕	【39】【tfgd-0039】			24.4×34.8	一枚	「客対口間」配置、場所不明
絵図J-014	屋敷図(52)	不明	〔屋敷図〕	【40】【tfgd-0040】			27.4×21.3	一枚	家作図、込み掛け、外観図
絵図J-015	屋敷図(53)	不明	〔間取図〕	【43】【tfgd-0043】			25.8×38.1	一枚	鉛筆、四畳半茶室平面、水屋とも、増築

K. 西高木家陣屋の建物に無関係または不明な文書

本論文番号	報告書番号	記載対照	資料名	名古屋大学分類番号	作成者	作成時期	図版サイズ	形態・点数	内容・備考
文献K-001	-	天保上	請書一札之事	【107】【tfga-0107】	松井佐門 ⇒ 小寺勇他	天保3年9月	24.5×34.2	一紙一通	
文献K-002	-	不明	奉差上御請書之事	【8】【tfga-0008】	太十郎他 ⇒ 小寺平八郎他	天保4年3月	27.3×77.3 + 包紙 38.8×27.7	一紙一通	
文献K-003	-	不明	瓦御請合一札	【108】【tfga-0108】	長兵衛他 ⇒ 小寺平八郎他	天保4年3月	117.7 + 包紙 27.8×26.8	一紙一通	
文献K-004	-	不明	萩原松ノ木瓦葺手間覚帳	【9】【tfga-0009】	役所	天保4年9月4日	34×12.2	半横 3丁一冊	
文献K-005	-	嘉永下?	間挽手扣帳	【17】【tfga-0017】	浦次他	嘉永3年8月	27.9×10.9	半横 9丁一冊	
文献K-006	-	嘉永下?	奉数願口書之覚	【18】【tfga-0018】	浦次他 ⇒ 作事奉行	嘉永3年8月3日	24.6×34.6	一紙一通	
文献K-007	-	不明	木割帳	【22】【tfga-0022】	執事方	嘉永4年2月	32.2×12.1	半横 6丁一冊	嘉永度下屋敷の茶室とは異なる
文献K-008	-	-	貞運院様御卒去御老件	【262】【tfka-0262-001-002】	用所	嘉永7年6月21日	31.1×21.5	紙袋一紙一通	北家15代貞有(求馬)継母
-	-	明治Ⅰ	〔私物落札帳〕	【8-あ〜い】【thba-0008-001-002】				二冊	道具類
文献K-009	文書(143)	明治Ⅰ	御私物落札帳	【8-あ】【thba-0008-001】		明治5年3月		半横一冊	
文献K-010	文書(144)	明治Ⅰ	落札名前付代銀帳	【8-い】【thba-0008-002】		明治5年3月		美横一冊	
文献K-011	文書(145)	明治Ⅱ	請取証	【330-こ】【thba-0330-010】	平塚忠四郎⇒高木貞正	明治29年8月28日		一紙一通	小学校設置によるオルガンの寄付
文献K-012	-	不明	差上奉領口書之事	【81】【tfga-0081】	嘉兵衛 ⇒ 奉行	7月29日	24.2×32.1 + 包紙 32.1×24	一紙一通	
文献K-013	-	不明	覚	【83】【tfga-0083】		丑4月18日	25.4×20.8	一紙綴 3通一綴	
文献K-014	-	不明	乍恐以上書奉申上候事	【84】【tfga-0084】	治八 ⇒ 森四郎助	9月27日	26.6×37.5 + 包紙 35.5×26.5	一紙一通	
文献K-015	-	不明	歡願仕御詫一札之事	【85】【tfga-0085】	角兵衛他 ⇒ 吉田森他	3月16日	28×39.9 + 包紙 39.5×27	一紙一通	
文献K-016	-	不明	奉差上御請書之事	【86】【tfga-0086】	喜平他 ⇒ 奉行	11月4日	27.5×37.8 + 包紙 37.7×27.3	一紙一通	
-	-	-	〔普請につき諸書付〕	【87-あ〜え】【tfga-0087-001-004】				四通	
文献K-017	-	不明	覚	【87-あ】【tfga-0087-001】	時堂之上村 ⇒ 代官所	子2月18日	23.7×32.8	一紙一通	
文献K-018	-	不明	口上	【87-い】【tfga-0087-002】	武平次 ⇒ 奉行		16×19.3	切紙一通	
文献K-019	-	不明	覚	【87-う】【tfga-0087-003】	与吉		23.3×31	一紙一通	
文献K-020	文書(140)	不明	引分	【87-え】【tfga-0087-004】			24×32.3	折紙一通	
文献K-021	-	天保上? 嘉永下?	御玄閑御入用釘扣帳	【89】【tfga-0089】	作藏		11.2×30.2	半横 14丁一冊	
文献K-022	文書(139)	不明	御玄閑入用	【90】【tfga-0090】				半横一冊	
文献K-023	-	天保上? 嘉永下?	御玄閑請負大工作料	【91】【tfga-0091】			11.3×30.3	半横 14丁一冊	
文献K-024	-	不明	乍恐以書付奉申上候	【93】【tfga-0093】	倉之丞 ⇒ 奉行	9月	31.3×123.6	一紙一通	
文献K-025	-	不明	〔板数書上〕	【95】【tfga-0095】	末や七之丞 ⇒ 奉行所		21.8×27.2	折紙一通	
文献K-026	-	不明	覚	【96】【tfga-0096】	弥吉 ⇒ 奉行所	亥9月8日	24.2×32.2	一紙一通	
文献K-027	-	不明	覚	【97】【tfga-0097】	彦三郎他 ⇒ 役人中	9月3日	28.4×40.9 + 包紙 34.2×24.6	一紙一通	
文献K-028	-	不明	〔諸職人手間賃書付〕	【100】【tfga-0100】			11.1×30.4	半横 4丁一冊	
文献K-029	-	不明	平塚忠四郎様・森代助様・瓦御通	【103】【tfga-0103】	三輪数右衛門		33.8×12.7	半横 5丁一冊	
文献K-030	-	不明	〔大工手間作料扶持方書上書〕	【110】【tfga-0110】			12.5×34.7	半横 4丁一冊	
文献K-031	-	不明	覚	【142】【tfga-0142】	作事共 ⇒ 役所	戌閏8月	14.2×19.6	切紙一通	
文献K-032	-	不明	覚	【143】【tfga-0143】	平塚忠四郎	丑11月	14.7×65	切紙一通	
文献K-033	-	不明	覚	【144】【tfga-0144】	作事方 ⇒ 山奉行衆中	己3月14日	14.8×75.5	切紙一通	
文献K-034	-	不明	釘金物御通	【146】【tfga-0146】	作藏	寅正月	17.2×11.9	半横半 10丁一冊	
文献K-035	-	不明	釘御通	【147】【tfga-0147】	作藏 ⇒ 奉行所		17×12.3	半横半 8丁一冊	
文献K-036	-	不明	釘御通	【148】【tfga-0148】	作藏 ⇒ 奉行所		16.5×11.7	半横半 8丁一冊	
文献K-037	-	不明	御払方差引勘定帳	【149】【tfga-0149】			12×30.8	半横 3丁一冊	

文献K-038	-	不明	瓦御通	【150】 【tfga-0150】	数右衛門 ⇒ 平塚忠四郎		27.7×13.8+ 紙袋 20.5×14.5	美横 5丁 一冊	
文献K-039	-	不明	瓦御通	【151】 【tfga-0151】	三輪数右衛門 ⇒ 平塚忠四郎他		34.7×12.6+ 紙袋 20.9×14.3	半横 一冊	
文献K-040	-	不明	瓦御通	【152】 【tfga-0152】	数右衛門 ⇒ 平塚忠四郎		13.8×39.3+ 紙袋 19.1×14.5	美横 3丁 一冊	
-	-	不明	〔瓦通板〕	【153-あ～い】 【tfga-0153-001-002】				二冊	
文献K-041	-	不明	瓦御通	【153-あ】 【tfga-0153-001】	三輪数右衛門 ⇒ 森代助他		20.1×12.7	美横半 20丁 一冊	
文献K-042	-	不明	瓦御通	【153-い】 【tfga-0153-002】	三輪数右衛門 ⇒ 森代助他	丑5月	19.9×14	美横半 16丁 一冊	
文献K-043	-	不明	釘御通	【154】 【tfga-0154】	作蔵 ⇒ 森代助他		17.2×12.3	半横半 一冊	
文献K-044	-	不明	釘御通	【155】 【tfga-0155】	作蔵 ⇒ 森代助他		16.5×12.2	半横半 16丁 一冊	
文献K-045	-	不明	御用万御通	【157】 【tfga-0157】	俵屋七太夫 ⇒ 平塚忠四郎他		19.4×15.1+ 紙袋 25.7×18.1	美横半 8丁 一冊	
文献K-046	-	不明	御用万御通	【158】 【tfga-0158】	七太夫 ⇒ 平塚忠四郎		21.7×15+ 紙袋 26.3×18.2	美横半 11丁 一冊	
文献K-047	-	不明	覚	【161】 【tfga-0161】	日比弥三右衛門 ⇒ 作事方	7月13日	14.1×19.7	切紙 一通	
文献K-048	-	不明	覚	【162】 【tfga-0162】	栄助他	12月13日	15.5×40.1	切紙 一通	
文献K-049	-	嘉永下	〔御席杉皮屏修覆につき伺書〕	【165】 【tfga-0165】	平塚忠四郎	5月19日	14.3×32.2	切紙 一通	
文献K-050	-	不明	覚	【167】 【tfga-0167】	平塚忠四郎	閏7月4日	14.7×54.5	切紙 一通	
文献K-051	-	不明	覚	【169】 【tfga-0169】		露月12日	12.1×31.6	切紙 一通	
文献K-052	-	不明	覚	【170】 【tfga-0170】			15.4×22.6	切紙 一通	
文献K-053	-	不明	覚	【171】 【tfga-0171】			14.9×34.4	切紙 一通	
文献K-054	-	不明	覚	【172】 【tfga-0172】			15.5×76.3	切紙 一通	
文献K-055	-	不明	覚	【173】 【tfga-0173】		2月22日	15.5×29.2	切紙 一通	
文献K-056	-	不明	〔釘寸法書〕	【174】 【tfga-0174】			16×18.6	切紙 一通	
-	-	不明	〔家普請諸入用書付〕	【175-あ～い】 【tfga-0175-001-002】				二通	
文献K-057	-	不明	覚	【175-あ】 【tfga-0175-001】	今次 辰	正月	15.5×56.5	切紙 一通	
文献K-058	-	不明	覚	【175-い】 【tfga-0175-002】	万平	辰正月23日	16.6×54.9	切紙 一通	
文献K-059	文書(141)	不明	覚	【194-え】 【tfga-0194-004】	さかなや	11月29日	15.9×16	切紙 一通	
文献K-060	-	不明	送り状之事	【215】 【tfga-0215】	山本屋吉右衛門 ⇒ 佐藤次郎左衛門他	寅11月	26.8×21	一紙 一通	
文献K-061	-	不明	〔大工木挽手間覚〕	【221】 【tfga-0221】		未12月23日	12.1×33.8	切紙 一通	
文献K-062	-	嘉永下?	御新屋敷御高屏木積り	【222】 【tfga-0222】	吉岡森治 ⇒ 奉行所	亥2月晦日	15.5×40.6	切紙 一通	
文献K-063	-	天保上?	御湯殿御ろうか屋根御入用	【223】 【tfga-0223】	武太夫 ⇒ 奉行所	丑3月	14.7×126	切紙 一通	
文献K-064	-	不明	覚	【224】 【tfga-0224】	小寺林平	12月29日	15.2×23.6	切紙 一通	
文献K-065	-	不明	覚	【227】 【tfga-0227】	平塚忠四郎 ⇒ 小寺林平	4月13日	14.2×27.6	切紙 一通	
文献K-066	-	不明	覚	【228】 【tfga-0228】	九右衛門 ⇒ 小寺林平	極月26日	25.3×19.9	一紙 一通	
文献K-067	-	不明	覚	【230】 【tfga-0230】	三輪弥五郎 ⇒ 奉行所	亥極月	15.1×20.9	切紙 一通	
文献K-068	-	不明	覚	【231】 【tfga-0231】	仁平他	12月20日	16.2×23	切紙 一通	
文献K-069	文書(142)	不明	〔作事入用覚〕	【232】 【tfga-0232】				切紙 一通	
文献K-070	-	不明	御請書一札之事	【235】 【tfga-0235】	忠助 ⇒ 田村九郎右衛門	寅9月9日	27.6×40.1	一紙 一通	
-	-	-	絵図都合三枚御引合御熟談可被成候	【1-あ～う】 【tfgd-0001-003】				包紙 三枚	別屋敷絵図
絵図K-001	屋敷図(55)	江戸屋敷?	〔屋敷図〕	【1-あ】 【tfgd-0001-001】			42×62	一枚	配置・平面図
絵図K-002	屋敷図(56)	江戸屋敷?	〔屋敷図〕	【1-い】 【tfgd-0001-002】			24.5×35.0	一枚	庭・樹木
絵図K-003	屋敷図(57)	江戸屋敷?	〔屋敷近辺総絵図〕	【1-う】 【tfgd-0001-003】			24.5×35.0	一枚	江戸屋敷周辺か
絵図K-004	屋敷図(58)	江戸屋敷?	〔屋敷絵図〕	【3】 【tfgd-0003】			133×120	一枚	江戸屋敷?、規模小
絵図K-005	-	不明	式拾分巻之図	【6-そ】 【tfgd-0006-015】			29.5×43.0	一枚	
絵図K-006	-	不明	〔屋敷図〕	【7】 【tfgd-0007】			28×38	一枚	場所不明 絵図K-018「〔屋敷立体図 29〕」と類似(2畳台目) 2畳台目障室に2畳間(いゝとまでの番付スズ)
絵図K-007	屋敷図(59)	江戸屋敷?	〔屋敷図〕	【9】 【tfgd-0009】			40×55	一枚	北面する小屋敷、江戸屋敷か?
絵図K-008	屋敷図(60)	江戸屋敷?	〔屋敷図〕	【11】 【tfgd-0011】			68×72	一枚	〔趣向具敷廻り屋敷図 12〕に同じく江戸屋敷、北建
絵図K-009	屋敷図(61)	江戸屋敷?	〔屋敷図〕	【14】 【tfgd-0014】			55×40	一枚	小屋敷、江戸屋敷か?
絵図K-010	屋敷図(62)	江戸屋敷?	〔屋敷図〕	【15】 【tfgd-0015】			40.5×39.5	一枚	不明、建物
絵図K-011	屋敷図(63)	不明	〔屋敷図〕	【18】 【tfgd-0018】			30×42	一枚	明治? 二階建て
絵図K-012	屋敷図(64)	不明	〔屋敷図〕	【22】 【tfgd-0022】			25×19	一枚	中岡崎矢野権兵衛門宅
絵図K-013	屋敷図(65)	不明	〔屋敷図〕	【23】 【tfgd-0023】			19×25	一枚	不明 庭園植栽図
絵図K-014	屋敷図(66)	江戸屋敷	〔屋敷図〕	【24】 【tfgd-0024】			27.5×39.0	一枚	麹町貝坂江戸屋敷敷地
絵図K-015	屋敷図(67)	江戸屋敷	〔屋敷図〕	【25】 【tfgd-0025】			20.0×24.5	一枚	不明 小規模座敷
絵図K-016	屋敷図(68)	江戸屋敷	〔屋敷図〕	【26】 【tfgd-0026】			55.0×51.5	一枚	近郷図 彩色あり
絵図K-017	-	不明	〔屋敷立体図〕	【28】 【tfgd-0028】	吉田鎌三郎		32×42.7	一枚	10畳・8畳、中廊下(クランク)、6畳・8畳 明治か
絵図K-018	-	不明	〔屋敷立体図〕	【29】 【tfgd-0029】			35.5×39.6	一二枚	場所不明 絵図K-006「〔屋敷図 7〕」と類似するが規模が小さい
絵図K-019	-	江戸屋敷	〔屋敷図〕	【30-あ～い】 【tfgd-0030-001-002】				二枚	
絵図K-020	屋敷図(69)	江戸屋敷	〔屋敷図〕	【30-あ】 【tfgd-0030-001】			30×43	一枚	江戸屋敷か? 不明
絵図K-021	屋敷図(70)	江戸屋敷	〔屋敷図〕	【30-い】 【tfgd-0030-002】			30×43	一枚	江戸屋敷か? 不明
絵図K-022	-	江戸屋敷	〔間取図〕	【32-あ～う】 【tfgd-0032-001-003】				三枚	

絵図K-023	屋敷図(71)	江戸屋敷	〔間取図〕	【32-あ】 【tfgd-0032-001】			24.7×34.5	一枚	十七畳を主室とする屋敷主屋 江戸屋敷？ スケッチ 単線
絵図K-024	屋敷図(72)	江戸屋敷	〔間取図〕	【32-い】 【tfgd-0032-002】			24.7×34.5	一枚	八畳二室を主とする屋敷主屋 江戸屋敷？ スケッチ 単線
絵図K-025	屋敷図(73)	江戸屋敷	〔間取図〕	【32-う】 【tfgd-0032-003】			24.7×34.5	一枚	絵図K-024「〔間取図〕 【32-い】」と類似 平面は異なる
絵図K-026	-	不明	〔屋敷図〕	【34】 【tfgd-0034】			27.8×39.1	一枚	
絵図K-027	-	不明	〔屋敷図〕	【36】 【tfgd-0036】			24.1×34	一枚	総坪四十九坪内八坪 土間之部：九間×五間 中二階：三間×二間半 七坪半
絵図K-028	屋敷図(74)	不明	〔屋敷図〕	【37-あ～い】 【tfgd-0037-001-002】				二枚	
絵図K-029	屋敷図(48)	不明	〔屋敷図〕	【37-あ】 【tfgd-0037-001】			27.4×39.1	一枚	場所不明庵園、持仏堂+庵
絵図K-030	屋敷図(49)	不明	〔屋敷図〕	【37-い】 【tfgd-0037-002】			27.5×39.2	一枚	持仏堂と庵の平面図か
絵図K-031	-	不明	〔屋敷図〕	【38】 【tfgd-0038】			15.1×18.7	一枚	
絵図K-032	-	不明	〔屋敷図〕	【43】 【tfgd-0043】			25.8×38.1	一枚	
絵図K-033	-	江戸屋敷？	〔屋敷図〕	【45-あ～い】 【tfgd-0045-001-002】				二枚	近世、どこかの屋敷、江戸ではない、小規模
絵図K-034	屋敷図(75)	江戸屋敷？	〔屋敷図〕	【45-あ】 【tfgd-0045-001】			24×34	一枚	単線、配置図、室名朱
絵図K-035	屋敷図(76)	江戸屋敷？	〔屋敷図〕	【45-い】 【tfgd-0045-002】			15.7×63.2	一枚	絵図K-034「〔屋敷図〕 【45-あ】」とは異なる主屋の図？書上
絵図K-036	-	江戸屋敷？	〔屋敷図〕	【46-あ～い】 【tfgd-0046-001-002】				一枚	
絵図K-037	屋敷図(77)	江戸屋敷？	〔屋敷図〕	【46-あ】 【tfgd-0046-001】			24.5×33.5		江戸？長屋状の建物二棟朱引
絵図K-038	屋敷図(78)	江戸屋敷？	〔屋敷図〕	【46-い】 【tfgd-0046-002】			24.5×33.5		敷地建物配置図

壹軒ニ付

壹分壹朱より

但シ

御物見除テ

一 御味曾藏壹軒

貳間

五間

此 貳十兩

文献 G-051 『御前奥方様とも拝謁仰付けられの件につき書状』【615】

拝啓奉候薄暑之節御謝忝

御前奥方様御揃益御機嫌克

被遊御住恐悦之至奉存候然バ

先達而ハ伺候処

御前奥方様とも拝謁被仰付

御懇之御意被成下誠以而難有仕合

奉存候御入懇之御支度被下置

是又

難有仕合奉存候憚乍右御礼宜

御申上可被成下候扱此一書恐入

候得共御差上被成下度宜奉願上候

余ハ追而参邸之節御旁

申上候以上

六月二日 桑原應助

西様

御側衆様

文献 H-001 『御受書』【204-あ】

御受書

一金壹千百貳拾円錢 請負金高

□□

一金五百四拾七円五拾錢

御屋敷切組直しツギ出し玄関廁共製図之
通り出来迄請負金高

一金百七拾五円五拾錢

右左官請負御屋敷回りサビ塗御勝手外回りハ

中塗ニ石灰で入上塗迄請負金高

一□百五拾貳円五拾錢

日雇大工手伝ヘ地築石据之建前足袋手間

荒壁瓦葺迄ノ請負金高

一金□拾円也

御土藏五ヶ所御長屋椀物□□椀方指図

之ぬり出来迄請負金高但し土藏□柱根継ぎ

此外之事

一金拾五円也

□□□屋コボシ手間請負金高

(略)

明治廿九年

二月十三日

(略)

請負人 吉田鎌三郎

高木貞正

文献 H-002 『受証』【204-い】

受証

一金□□□□拾九円也 請負金高

□□

一金貳百七拾五円也

御土藏五棟長屋壹棟
御茶席壹棟椀方地築石据
壁直し迄ノ請負金

壁直し迄ノ請負金

一金五拾円也

旧御建物コボシ手間代金

一金拾四円也

(略)

明治廿九年

二月十三日

(略)

高木貞正殿

大工小屋壹棟 小屋懸ケ金
釜屋壹棟

来蔵
四月六日
一 壹人
対面所
ゆか直し

(略)

十三日
一 壹人
雪隠直し
御部屋前也

(略)

十八日
一 壹人
茶ノ間
エン直し
十九日
一 壹人
茶ノ間
エン繕

(略)

時郷畳屋
久保村 忠五郎

五月廿一日

(略)

一 半人
中奥畳表
返シ

(略)

廿五日
一 壹人
玄間臺所之
分 事

(略)

六月一日
一 壹人
畳直し今日
ニ而終ル

文献 G-027 『日記【14】』
(明治二八年九月部分より)

廿六日晴 本日ハ□場平山ニヶ所入札払執行

平塚忠四郎取扱分治作善蔵

貞助基之外 佐右衛門 喜平

□同断手伝

西館臺所次之間□□席ニ而

入札開札之事

午後二時より

文献 G-046 『先君様の物語及びこの節の時勢を愚考して屋敷勝手向きの件申し上げにつき書状』【607】

謹而奉申上候私家之儀住古より御出入

仕候処別而私偽

先君様之蒙御懸命御親ク

御意被成下 御家之儀御勝手向

御主法御家来之御事等も御物語

被遊候

御当代合成候而御同様御懇御意

被成下難有仕□奉存候追々御時勢

之御変わりニ而不顧失礼御同□等

開化之折とハ乍申恐縮之至奉存候

然者当今士族僧農其外とも

種々探索御内聞之由不遠戸長

試験も御座候風聞 愛知縣ハ大區長

戸長不残被廃止候趣更ニ被命候

旨ニ御座候夫ニ付士族と申候而も

御家杯別段之御方々ニ付元藩等

之士族とハ別ニ縣庁より御目を付被成候

付而者学校之御世話も被遊乍恐

御自分之御学業も此上御骨折

被為遊旦諸方共下人ニ御付合被遊候

下情を能御承知被為遊度御勝手

之儀ハ御家録無之とも御暮し

之出来候様ニ御拂等も被為在候ハ々

早々御拂被遊金ニ成とも田畑ニ也とも

被遊度往来際々長間々御堀等

御拂被遊候而ハ如何大木等御拂候而
御屋敷内之畑ニ合成候ハ場所

不残

茶園ニ被遊度御時勢儀者

此上改正之御事合成可申奉存

候間御家録御目当被為遊間敷様

御工夫と御学業のミ厚付

折上候

先君様種々御物語と此節之

御時勢等愚考仕乍恐此段奉

申上候御採用被□候ハ々置難在

奉存上候誠恐頓首謹言

五月十四日 桑原應助

西様

御側

文献 G-047 『大工小屋・御味噌蔵等間数及び代金書上』
【608】
大工小屋壹軒

此 廿九匁 貳間

御高屋壹軒 三間

此 三拾九匁

御門南壹軒 九尺
三間

此 拾匁

御米蔵一軒

貳間

十間

此 四拾七匁

御住還通り

十二日 一 壹人 同所 取繕
 板張り
 十三日 一 壹人 同所
 薪部屋繕
 (略)
 十六日 一 壹人 茶ノ間煙出シ
 窓打繕
 (略)
 廿日 一 壹人 湯屋引き
 (略)
 廿九日 一 壹人 茶之間
 煙出シ打テ
 三十日 一 壹人 鷺之間
 ゆか直し
 (略)
 四月一日 一 半人 桐之間
 内直し
 二日 一 壹人 対面所
 ゆかハズシ
 四日 一 壹人 湯屋直シ
 (略)

十九日 一 壹人 湯殿繕
 湯殿
 出来
 廿日 一 壹人 (略)
 廿三日 一 壹人 湯殿取繕
 〆四拾五人
 (略)
 三月二日 一 半人 修覆向
 見積り手間
 喜平治
 大工
 柵宜村
 (略)
 九日 一 壹人 茶ノ間
 なかし繕
 (略)
 十四日 一 壹人 茶之間
 窓拵
 (略)
 十八日 一 壹人 臺所取繕
 (略)
 四月一日 一 壹人 同所同断
 (略)

四日 一 壹人 同所シキ入并ニ
 茶之間雪隠
 直し
 (略)
 九日 一 壹人 同所中間部屋
 取繕
 (略)
 十三日 一 壹人 同所并
 玄関シキ入
 十四日 一 壹人 同所取繕
 (略)
 十七日 一 壹人 玄関并ニ
 茶之間壁
 留
 (略)
 十九日 一 壹人 玄関取繕
 并ニシキ作ル
 廿日 一 壹人 玄関
 出来
 (略)
 廿三日 一 壹人 臺所繕
 〆三十九人半
 (略)
 下多良村
 大工

併只今御拂相成候ハ御門御長屋ハ
御下屋敷之分を御上屋敷へ御引
被遊候哉左候ハ御稽古場を引候

御事ニ及不申候

是ハ御下屋敷御拂之御思召候所
候上之御事

一御暮向ハ大方農家之大家風と被遊
候歟万事
奥様御引受末々之事迄御氣旨付
候様被遊度奉存候御事

一御前御儀者御暮向之御方法荒方
御工風被為遊候ハ御学業御心懸ケ
被遊内御暮方之御勸考被為遊
外何時如何様之御用御座候共無
御滞御勤被遊候様内外之
御賢考而已奉折上候御事

一当時皇宮様ニも御蚕專御飼被遊且
鉄道出来仕候得ハ御通交其余所々へ
被為幸
候間奥様ニも折々所々御出懸被遊
御見物等被遊当今之形勢被遊度
奉存候

御事

一御屋敷之中ニ桑も御植被遊度桑茶
相木ニ而桑ノ木ノ下ニ而随分茶ノ木も
出来仕候

右荒々申上奉度只今御家録無之とも
右御屋敷并御拂物等御座候得ハ私儀
御引受仕り候とも御暮万ニ御差支無
御残奉存乍恐被遊
御安心被遊御日夜御工夫被為遊候様

奉折上候余ハ追而拝 謁之上ニ奉
建言□候

文献 G-019 『奥疊払之分【187-あ】』

奥疊拂之分
一 廿三畳 御三ノ間
一 拾一畳 梅ノ間
一 六畳 菊之間次
一 六畳 鶴之間次
一 五畳 御納戸
〆五十七畳

表疊払之分

一 十畳 紅葉ノ間
一 三畳 決志之間
一 六畳 廊下
一 十畳 竹ノ間
一 十畳 詰所
一 二畳 神前
一 七畳 佛間之西廊下
〆四十八畳
式口〆百〇五畳

一 十帖 徒上ル口部屋
一 十式帖 紅葉ノ間
一 六帖 廊下疊
一 十九帖 御使ノ間
一 十三帖 御玄関之間
一 九帖 詰所
一 十五帖 竹ノ間
一 十二帖 表一ノ間
一 十二帖 御次ノ間
一 十帖 御三ノ間
一 十八帖 御エンザシキ不残
一 八帖 御佛間
一 式帖 神前

一 十二帖 北廊下疊
三帖引

一 六帖 隅スウエン
一 北ノ間疊 一ノ間
八帖

一 〃 二ノ間
一 〃 三ノ間
一 九帖 四ノ間
一 六帖 用所
〆式百三帖
内七十八帖引
残而百二十五帖払

残疊ノ内
六十八帖 奥より持参
右ワ疊五十七帖之処へ入ル

一 四拾六畳

文献 G-020 『御上邸修覆諸入用留【16】』

明治七年戊午
御上邸修覆諸入用留
三月 大雅館

(略)

三月二日

一 半人 修覆向

五日 見積り手間

一 壹人 修覆向

取繕□□

ゆかはずし

(略)

九日

一 壹人 茶ノ間

遊茶園其外御開キ尤黒嶽も余程
御雇無之候而ハ御開拓行届不申と
奉存候

一 御殿向其外御拂被遊御住居之向も
御繕茶園等御開キ御入用差引
殘金ハ田畑之内御買上被遊候歟ハハ
金ニ而御貸付被遊候歟其時々ニ応シ
御勘考被遊度奉存候御事

一 御道具之類金ニ而御買上相成候

全而追々ニ御拂被遊何れも金る
又ハ田畑山林ニ被遊度御事
御茶園

一 御詰之御家從并御仲間日々心を
尽シ開拓植付仕り候様最
御自身ニも專御心得懸ケ御見廻被遊度
奉存候御事

一 当八月頃ヨリ多良之内実意之

又ハ九十月

御頼茶実宜キ品御買上被遊度
右御入用之跡ハ何時ニ而も御拂被遊
候方可然一ヶ年後レ候得ハ数年
之御損ニ相成申候御事

一 只今御植付相成折共御茶園江

御風呂の水ニ油かす等又小便をまぜて折々
但風呂の湯を落とし候

茶ノ木の根へ御口させ被遊度

又ハはきだめの土又ハよき

こゑ土を茶の木の根へ入レ候様

仕度候事

但御家之茶之木少々痩せ居候ゆへ
早々御肥し被遊度候

一 御茶園解能出之盛相成候ハハ基時

宜キニ応シ茶制之職人御雇入
御茶制御御拂被遊歟 生茶ニ而
御拂

被遊候歟其時々之御勘考之御事

一 当冬ハ茶ノ実定拂底旦高価

と奉存候其都合ニヨリ只今御植

置相成居候茶ノ木御分被遊新

御開拓へ御植させ被遊候も可然歟

一 都而地面之三分一茶御植付

三分二

茶種ノ類

大豆 御蒔口被遊候方可然

奉存候 ○○○○

外植もの ○○○○

茶ノ木 ○○○○

外植もの ○○○○

○ ○ ○ ○ ○

一 御奥向之儀御手廣ニ付其俣共御中ニ
御茶之間御臺所を御庭を御繕之事

御奥ヲ御住居仕立



(書き起こしによる)

一 御勝手之火をたき候所ハ御一棟之

中ニ御繕之事ニ付煙り之外へ出不申様

鍛冶職之場之如クぬり込ニ仕候方

可然煙リハ窓より出る候様仕組可申事

一 御湯殿も御火をたき候ハぬり込より火を

たき御湯被為召候者御板間之辺より

御召被遊候様可仕可仕方此御湯月ニ十度位

一下ノ風呂場ハ御住居基外御裏方に

仕り御方可然

是ハ只今御座敷御勝手御門内之

風呂を

御引被遊候方可然御事

此湯毎日之事

一 御門之儀ハ御路次同様御手輕之方

可然奉存候御事

御門御高塀とも只今御座候内成丈

丈夫之分御引付御繕被遊候方可然

奉存候御事

一 御長屋ハ只今御座候御稽古場を御引付

被遊候方可然奉存候也

一 御住居大棟之御事ニ付其余ハ成丈

御手輕之方拝見仕ルニ宣ク哉

乍去御下屋敷も御拂相成候ハハ御下屋敷之

御門御引被遊候

一 当時御住居被遊候御下屋敷ハ一兩年

も相立後御不用と御治定相成候迄

ニ而

御拂被遊候方可然か

当分其儘

一 中玄関 壹

是ハ当引夫ままに表解キ候帶引キ取ル

一 玄関前高塀引

引クコト

一 是ハクズン置

崩

右之分ハ奥住居ニ付而ハ

残置事也

一 当時住居下屋舗ハ追而

取拂之事

一 臺所門 壹

一 表一棟 壹

表取拂次第早々奥ニ而

取カヘルコト

一 米蔵 壹

一 馬屋 壹

一 作事部屋 壹

一 大砲蔵 壹

一 門番部屋 壹

一 味噌部屋 壹

一 口門 壹

一 表長高塀 壹

一 益形ノ門 壹

一 右之分不殘取拂

之事

一 都而入れ之事

一 当ハ九月頃ニハ大方取拂

之事

一 都而

一 壁土ハ残置之事

右土置処ハ元矢場ノ処江積ミ置

少々カケビサシ出シ西ニ降サル口コトニ致置

一 右家形取拂次第早々

桑茶植付之事

一 右ハ都而鎮守石垣下より積置

一 開拓ニ付ハ人足并黒楸

雇入之事壹人何程ト積ル

人足何人壹人何程價也

一 当冬茶実求ル事

一 開拓地家形跡ニ不限部分

空地よりハ不殘茶桑植付

之事

一 別紙図面壹返是ハ

上屋敷住居之

右荒々記置候追々ニ

書載ス

文献 G-017 『御屋敷御主法之覚【81】』

明治六年六月

御屋敷御主之覚

桑原應助

愚案

記

御上屋敷之内奥向御繕ニテ

御住居ト御治定相成候上々

御表始御不用之分不殘御拂

跡敷地御開拓之旨御治定

相成候ハ、右之御次第早々

夫々御布告被遊度御手順之

儀左ニ

一 御門外長キ高塀御拂之事

長壹間何程と申入札ニ而も不殘

ニ而も宜ク其内一ツか三ツニ

仕切

御拂被遊度

是ハ元御家族来之内可然方ヘ

御申付

入札御申解買手寄合候上

幾札ニ可致と御相段御拂之事

但壁土瓦土ハ御拂旨之

御談之事

右壁土ハ御門外茶園ニ被遊候所

ヘ雨ニ染不申内夫々ヘ御入させ之

方可然雨ニ染候得ハ人夫多分

相懸り申候

一 御表之儀ハ成文御周旋御拂方

被遊度併大キ過候間何れ瓦ハ瓦

建具敷内板鴨居柱差物等

解賣之方直段宜ク奉存候是ハ

御拂之御布告有之候得バ人之思い

入レ相立て可申共右御拂御触相成

斬日

過而御拂相成候方可然奉存候直ニ

御拂相成候而ハ人々思い入レ相立候間

無之奉存候

都而御拂ニ壁土ヘ御拂無之候事

一 御門御高塀等御不用之分御拂

被遊共外御長屋御馬部屋等

追々ニ御拂可然奉存候

御拂物当八月頃迄ニ大方之御拂

相成夫より専茶園御開拓之御

用意可然奉存候

一 御上屋敷之内不用之立木成丈

薪ニ御申付被遊御邪間ニ相成

不申候処御積せ飯屋根御申付相成

数年薪御買上無之とも宜様被

遊度奉存候

一 当秋ハ九月頃より茶園其外ニ能

心得居候御仲間西人程御召抱被

疊 九拾四疊
内十五疊長口ウカ引
残七十九疊

(略)

惣家根

瓦式間五拾五坪
但五拾六扱坪

(略)

一御湯殿壹軒

桁行 四間

梁行 式間

御廊下三間ニ一間

右之内

棧戸 七本

上下取交七

瓦 拾八坪

以上

右凡見積書ニ御座候

申六月 平塚忠四郎

上

(略)

文献 G-002 『差上申御請書之事【186-あ】』

御請書 壹通

差上申御請書之事

一金百五拾両也

右は速金ニ而御屋敷御建前

之内御台所壹棟疊建具

右不残御拂請申処実正ニ御座候

引拂之儀者当十月切引拂

可仕候為後證御請書奉差上候
以上

明治五年

買主

馬瀬村

申七月八日

清左衛門(印)

請人

清之助(印)

高木福之助様

御取次中様

文献 G-004 『差入申御請書之事【186-う】』

差入申御請書之事

但し玄關疊共

一御長家壹ヶ所也

此代金三拾六両式分也

右之通り私江御拂被下候付則代

金相納申候処実証也□□取拂

立入候節猥成義毛仕間敷火之元

別段念入不申候為後日御請

一札差上申如件

明治五年

壬申八月廿九日

宮村本人

宅右衛門(印)

同世話人

坪原米蔵(印)

高木貞正様御家扶

平塚忠四郎殿

文献 G-006 『御請書一札之事【186-お】』

御請書瓦之事

一御建家一忝

御玄關並御中玄關裏入口
北通り西御茶席壁下地竹
御建具付御疊見渡し被仰

右價金三百五両御拂請仕候処相違無御座候為
手金百両上納仕候跡金之義来戊二月三十日金百両
上納同三月三十日ニ金百五両皆上納仕候御建家取拂
之事火之元并猥り間敷義急度仕間敷候為後日証券
奉指上候処如件

明治六癸 酉十二月

取扱人

坂口屋和平

大垣クセ川御拂請人

鹿野伝八

大垣船町御拂請人

藤田與助(印)

渡辺佐次右衛門様

大嶽弁之丞様

文献 G-016 『主法帳【590】』

明治六年六月

主法帳

記

六反七畝十八歩式分五厘

一 上屋敷奥ニテ住居之事

□次

一 徒部屋前□□高堀 壹

是表門トイタス

一 稽古場

一 是小当分其儘物置也

一 耕遠楼

一 是二直引クコト

一 味噌蔵

一 是当分其儘 拂う

一 奥向土蔵

一 其儘 五

一 臺所門

一 是当分其儘 拂う

一 湯屋 壹

押入式間半三尺
 一御次之間 八畳
 巾壹間押入付
 一御三之間 六畳
 右之外^二壹間四方
 御臺厨付
 一四之御縁座敷 九畳
 一西御縁座敷 拾壹畳
 上^二押入袋棚付
 下^二三尺押入付
 右之所建具
 (略)
 以上
 御北之間之部
 一御納戸 六畳
 帶戸 三本
 巾三尺五寸余
 一御化生之間 六畳
 押入壹間
 一奥御部屋 八畳
 御床 壹間 壹畳
 通り袋棚壹間
 一同御次之間 六畳
 押入九尺
 一同御三之間 五畳
 □長畳三畳
 押入壹間
 右四ヶ所御建具
 (略)
 奥御部屋
 御雪隠 壹ヶ所
 一鶴之間 八畳
 御床 壹間 壹畳
 押入壹間
 一同御次之間 六畳

押入壹間
 右式ヶ所建具
 (略)
 御雪隠 壹ヶ所
 一菊之間 八畳
 御床 壹間 壹畳
 押入 壹間
 一同御次之間 六畳
 押入九尺
 一同御化生之間 三畳
 御畳無之
 押入壹間
 右之所御建具
 (略)
 梅之間 六畳
 御床 壹間
 押入 壹間
 一同御次之間 四畳半
 坪入九尺
 (略)
 御雪隠 壹ヶ所
 以上
 (略)
 惣家根
 瓦式百八拾坪
 但□□□□坪
 並瓦 拾四坪
 御中奥御雪隠
 御化生之間家根
 一御臺所屋南也
 壁際より北迄御取拂
 京間六尺三寸

桁行拾七間
 梁行七間
 此坪百拾九坪
 此内譯
 一御臺所板間之外
 畳拾四畳
 (略)
 一御茶之間板間外
 畳 八畳半
 (略)
 一老女部屋 六畳
 次之間 六畳
 内三畳 板間
 (略)
 一大廊下 拾畳半
 (略)
 同長廊下
 右畳 拾五畳
 (略)
 一女中部屋板間之外
 畳 拾式畳半
 (略)
 一御茶之間部屋板間□外
 畳 七畳半
 (略)
 雪隠 壹欠所
 巾壹間長式間半
 以上
 右之立所
 上中共

長五間 横壹間 （但大家根より 附おろし）	右御入用之木割	一土臺六間 内三四 長壹丈	一柱 長 壹丈五寸	一桁 長 壹丈四尺	同 長 壹丈五寸	一母屋桁 長 壹丈七尺	同 長 壹丈七尺	一梁 長七尺 式丈壹尺 四寸五分	一間戸ふち長七尺 五寸	一垂木 二寸	一裏板 角 三寸	一縁ふち 長 三寸	一上屋 長 五寸	一ゆか板 松六分 長一丈	一板 壹丈三尺 長九尺	一敷 式丁
--------------------------------	---------	---------------------	-----------------	-----------------	----------------	-------------------	----------------	---------------------------	----------------	-----------	----------------	-----------------	----------------	--------------------	-------------------	----------

其余へ是迄有集り之物 相用可申事	一大工手間 四拾人	木挽手門 拾式人	五拾式人 御作料	銀八拾六匁六分六厘	此扶持方 米五斗式升	一銀拾五匁 釘代	一銀貳拾七匁 杉皮代	一銀六拾三匁 瓦代	一銀拾五匁 （左官手間 見込み）	銀貳百六匁六分六厘	此金三兩壹歩式朱 四匁壹分六厘	木五斗式升	一御修次式ケ所	戸 式本御入用之事	間口敷入用之事	御矢場南江 長四間半 底ン之事
---------------------	--------------	-------------	-------------	-----------	---------------	-------------	---------------	--------------	------------------------	-----------	--------------------	-------	---------	--------------	---------	-----------------------

横壹間 （略）	右御入用之木割 （略）	文獻F-034 『奥御館并御勝手御館御建前向取調覚帳【9-い】』 明治五壬申年 奥御館并御勝手御館 御建前向取調覚帳 六月	一奥御館 壹ヶ所	桁行拾四間二尺	梁行拾間式尺	此坪数百八拾坪六分七丁 但京間共六尺三寸	右内訳氏調	御対面所之部	一御上之間 拾五疊	御床式間三尺式疊	壹間袋棚違棚	横方ニ押入付	一御次之間 拾五疊	御床九尺三尺	一御三之間 式拾三疊	押入付	一御縁座敷 拾八疊	右之御建具 （略）	以上	一御中奥之部	一御上之間 拾疊	御床 壹間壹疊	違棚袋棚壹間
------------	----------------	--	-------------	---------	--------	-------------------------	-------	--------	--------------	----------	--------	--------	--------------	--------	---------------	-----	--------------	--------------	----	--------	-------------	------------	--------

老女部屋
 一 拾貳畳半之内
 六畳半
 (右流球表直し而見繕イ
 表替之事
 女中向支度所御茶之間御繕場
 一 八畳半
 右流球表ニ相成候て
 御廣敷上下
 一 拾壹畳
 古表相用仕替之事
 表御玄閑
 一 拾貳畳 (表替
 黒へり事
 同下屋敷 (新規
 一 五畳 (御仕替之事
 紅葉之間
 一 拾畳
 古表宜敷所見計
 取繕之事
 御役所之内 (古表見計
 一 貳畳 (取替之事
 侍部屋
 一 拾畳之内
 五畳 (古表宜敷所
 見計取替之事
 御臺所
 一 拾貳畳之内

五畳 (流球
 表替之事
 詰所
 一 九畳之内 (流球表
 貳畳之処 (取替之事
 壹畳ニ相成ル
 御対面所上之間床
 一 貳畳
 表替之事
 同所御次之間床
 一 壹畳半
 表替之事
 右今度 床とこニ相成ル
 鶴之間床
 一 一畳
 取替之事
 御中之口下屋敷
 一 貳畳
 右者御玄閑下屋敷□□
 有来り相用候事
 新表
 六拾四畳
 古表取繕
 七拾七畳
 外ニ小畳三畳
 流球表
 貳拾壹畳
 御下屋敷之分

御対面所
 一八畳
 表替
 御佛間
 一六畳
 表替
 御中奥御三之間
 一五畳之内
 壹畳裏返し
 四畳表替へ
 御中□
 一五畳表替へ
 御中之口西
 一八畳
 表尤新とこ也
 右御佛間古表也
 右者壹畳長五尺余之畳
 一八畳也
 御臺所
 一流球表貳畳
 取替へ之事
 新表貳拾三畳
 古表九畳
 流球貳畳也
 外ニ
 御臺所前三畳敷
 古流球表ニ而薄へり之事
 文獻E-007『下屋敷茶の間普請入用帳』【127】
 安政七申年正月
 御下屋敷御茶之間江

一 同	壹丈	貳寸五分	角
一 桁	壹丈貳尺八寸	三寸二分	壹本
一 同	壹丈	貳寸五分	壹本
一 桁	壹丈貳尺八寸	三寸八分	壹本
一 同	壹丈	三寸二分	壹本
一 桁	壹丈貳尺八寸	三寸八分	壹本
一 同	壹丈	三寸	貳本
一 梁	五尺七寸	三寸	貳本
一 敷板	六分板	壹坪半	貳坪四〇
一 裏板	六尺五寸	拾三本	
一 極	貳寸角	壹丁	
一 廣小舞	貳間	壹丁	
一 御箱段板	三尺	八寸	貳枚
一 土臺	三寸	壹丁	
一 〃	壹丈五寸	貳丁	
一 同	五尺三寸	貳丁	
一 同	貳尺五寸	壹丁	

(略)

文獻 E-003 『表奥御疊修復取調帳【63】』
安政四年
表奥御疊御修復取調帳
〇七月〇
森代助
平塚忠四郎
覚

御対面所	一 拾五畳	(表替へ 紺へり也)
同御次之間	一 拾五畳	
右表へり共御対面所	右表打用取繕之事	敷替取繕不申
右取繕之处御上之間表基儘にて	敷替取繕不申	
同御三之間	一 貳拾三畳	
右之内九畳ハ昨辰年御修復有之	残而拾四畳	右御次之間古表相廻シ
取繕之事	御対面所御縁座敷	一 六畳
御対面所御縁座敷	(表替へ 黒へり)	同御次之間御三之間御縁座敷
一 拾貳畳	内七畳	右之内見計古表相用
取繕之事	へり同様之事	黒
鶴之間御上之間	一 九畳	表替
但とこ取繕之事	黒へり之事	
菊之間御上之間		
一 八畳	表替	黒へり之事
但とこ取繕之事	梅之間御上御次之間共	一 拾壹畳
右古表相用取繕之事	とこふみ直シ	
奥様化生之間	一 六畳之内	右表打用
貳畳	(取繕之事	
奥様御部屋御上之間	一 八畳	(裏返しとこふみ
御床畳共	(直シへり黒と	取替之事
御新建御化生之間	一 三畳	とこ表共新繕相成之事
大廊下	一 九畳	
内三畳	(古表相用	取繕之事
外ニ小畳三畳	取繕之事	
御対面所御次之間	一 北より入口壹畳古にて取繕之事	
老女部屋	一 六畳之内三畳	右古表見繕御修復之事

137

十一日 一 貳人	御内玄関上ぬり 御雪隠中塗 □□	廿一日 一 貳人	諸 御はそん	一 壹人	御門内中塗 御席炉上塗
十二日 一 貳人	御内玄関上ぬり 御雪隠中塗 □□	廿二日 一 貳人	"	一 半人	同日 御下屋敷御物 置うら返し 中ぬり□
十三日 一 貳人	御使者□□間 とぬり	廿三日 一 貳人	"	十一月十六日 一 貳人	御下屋敷 御中ノ上塗
十四日 一 貳人	同所	廿四日 一 貳人	"	十七日 一 貳人	同所 □□□□□□ 中ぬり
十五日 一 貳人	御下屋敷御物 置中ぬり	廿六日 一 壹人	御臺所前 中塗り 御□□□ 御はそん□	十八日 一 壹人	御宝蔵物置 白とぬり □□
十六日 一 貳人	御茶間黄土 上ぬり	四拾壹人半		廿九日 一 貳人	御宝間竈 ぬり
十七日 一 貳人	同所	十六日 内 貳斗	御請取	卅日 一 貳人	御臺所大卷 女中風呂場 御下屋敷 石切
十八日 一 壹人	同所 □□	廿三日 □内 壹斗	御請取	一 七分五□	
十九日 一 貳人	御下屋敷□□ うらばかり 御中□上塗	□内 貳斗	御請取	拾五人半 貳分五□ 内壹斗□□□□	
廿日 一 貳人	御内玄関敷 壹奥込上ぬり 御雪隠分中塗	十月之分 十四日 一 貳人 十五日 一 貳人 十六日	御下屋敷 □さし中塗	□□分□引式□七□五□ 惣々由七拾八人七分□ 百拾九人七分□ □□分 代百九拾□□七分□ 五拾九人 □□分	

八日	一式人	同所 □□	廿七日	一式人	同所	二日	一壹人	御下屋敷御 物置とうら 大なおし 中□
九日	一式人	御雪隠壁 うら返し	廿八日	一壹人	御下屋敷 御物置うら 返し □□	三日	一式人	同所□□
十日	一式人	火□ 御物置 あら壁ぬり	廿九日	一壹人	同所□さし 裏□□	四日	一壹人半	御廣敷黄土 とぬり ○□△□
十二日	一式人	火□ 御下屋敷 □さし下地	卅日	一式人	御□□□□ 中ぬり □□	五日	一式人	同所 鶴御間□□ 上ぬり
十三日	一壹人	火□ 〃あら壁ぬり	六月□□	一式人	壹番御土蔵 □□□□	六日	一式人	御□□□□ 御□□ 女中部屋 中ぬり
廿日	一壹人	黄土□□□□ 御下屋敷壁下地 □	〆三拾三人 扶持三斗三斗 先月之分式升五合□□ □〆三斗五升五合	廿七日	内 壹斗 御請取	七日	一壹人	女中部屋 中ぬり
廿一日	一壹人	同所下地あ□ 壁ぬり □	九月三日	内 壹斗 御請取	廿八日	一壹人	御鶴ノ間上塗 火□	
廿三日	一式人	御雪隠中塗 御宝蔵中塗 □□	九月五日	内 壹斗 御請取	廿九日	一壹人	同所□□	
廿四日	一式人	御鶴ノ間上塗 火□	九月朔日	一式人	御雪隠中ぬり	十日	一壹人	〃
廿五日	一式人	同所□□	〆五升五合不足					
廿六日	一式人	御湯殿とぬり						

拾七人 式分五り 米壹斗 御申請候	〇〇〇〇	廿六日 取一式人 御宝蔵 中ぬり 〇〇〇〇	廿七日 取一式人 //	廿八日 取一式人 //	一五拾人 御宝蔵 小直しより上塗迄 一番御土蔵 中ぬりより上ぬり 迄	六月廿八日 一書蔵 御書蔵 御宝蔵 御はそん	廿日 一書蔵 御宝蔵 壹め〇ぬり 〇〇〇〇	四日 一書蔵 御宝蔵物 〇天壁 〇〇〇〇	五日 一書蔵 御〇者〇之間 壁下地 〇〇〇〇
六日 一書蔵 //	九日 一書蔵 同所あら壁 ぬり御宝蔵 物〇〇〇 砂〇〇〇	十一日 一書蔵半 御宝蔵北 〇壁根た々き 〇〇〇〇	十二日 一書蔵 御宝蔵物 〇〇 〇白土上ぬり 御書蔵上ぬり 御はそん 〇〇〇〇	十九日 一書蔵半 雪隠壁下地 あら壁ぬり △〇〇〇〇	廿一日 一書蔵 御下屋敷風呂竈 ぬり 〇	廿三日 一書蔵 御雪隠下地 〇〇	廿四日 一書蔵 同所 〇〇	廿五日 一書蔵 同所 〇〇〇〇	
廿六日 一書蔵 御下屋敷 三番御土蔵 京〇〇〇十塗 〇〇〇〇	三月より七月迄 〇式拾七人半 御〇より 卯二五拾人 御詰 〇〇	同 〇七拾七人半 三月より七月迄 〇分 〇四十八升 引 〇テ	式斗九升五合 七月廿九日 内 七坪 御請取	八月〇日 〇内 壹斗 御請取	八月〇〇日 〇内 壹斗 御〇〇〇	八月朔日 一書蔵 御雪隠下地 御物置下地	二人 〇 同所	一書蔵 〇 同所	一書蔵 〇 同所
六日 一書蔵半 同所 △〇〇〇	七日 一書蔵 同所 〇〇下地								

金四両壹分
米四俵

□すり 中塗迄
左官忠助江

文献D-110 『御雇日記附留通【125】』

安政三丙辰十二月改 左官師

吉田忠助

御作事

御雇日記附留通

森代助様
平塚忠四郎様

辰十二月分

朔日 小倉谷石切

一 壹人

三日 御茶間竈

一 壹人

ぬり

四日

一 壹人

〃所

五日 諸々竈

一 壹人

御はそん

六日 御下屋敷

一 壹人

竈御はそん

七日 正党院

一 壹人

壁裏返し

八日 正林寺

一 壹人

行

十八日

一 壹人 〃所

廿一日 翁御火鉢
一七分五り
ぬり

廿二日 御茶間
一 壹人 中ぬり

廿三日 〃所
一 壹人 上塗

廿四日 〃所
一 壹人

〆拾壹人七分五り
右扶持米御請取

三月十二日 御せき上塗
一 壹人 直し多し

四月廿一日 一番御土蔵
一 壹人 大なおし

廿二日 〃
一 壹人

廿三日 御次風呂竈
一 壹人 ぬり

廿四日 御宝蔵
一 壹人 足拭口

廿五日 〃
一 壹人

五月十一日 小所
一 壹人 小なおし

〇 十二日 〃
一 壹人

十三日 〃
一 壹人

十四日 〃
〇 一 壹人

十五日 〃
一 壹人

十六日 〃
一 壹人

十七日 〃
一 壹人

十九日 御へ□□□
入一 半人 御はそん

廿日 御宝蔵
一 壹人

廿一日 〃
一 壹人

〇 廿二日 〃
一 壹人

廿三日 〃
〇 一 壹人

此作料
合銀百三拾五匁ツ、

加而

石ひろい中間拾五人

此貨銀三拾匁

但壹人銀式匁ツ、

(略)

文献D-102 『覚【59-え】』

覚

一 御座敷壁御上塗之事

御上ノ間より御三ノ間御縁座敷御対面所

御使者之間御玄関同所御通り御縁座敷御縁側

不残壹子奥様御部屋御老女部屋御

二階座敷右之所色土ニ而上塗仕候

御路之分不残御湯殿御二階むらとならん

御雪隠三ヶ所御玄関前御高塀不残

右之所白土ニ而上塗仕候

右之通り所ニ不残御上ぬり仕上仕候

代金三両一步卜

米 三俵

安政二年卯正月廿二日

御作事御用

森代助様

平塚忠四郎様

左官師

吉田忠助

文献D-104 『御作事御入用品々正金ニ而御払分【124】』

安政貳年

御作事御入用品々正金ニ而御払分
卯極月 作事役所

代金御拂分

杉皮 桂原村 為蔵

一 百五拾坪

此代金三両

内

壹両

引残而

金貳両

手附金

御渡候

一 同六坪 下多良村 杉之助

右御修復向御用

代七匁式分

一 左官忠助

一 金三両壹歩

米三俵

御下屋敷

御上塗一色

不残御雪隠

御玄関前

御高戸屏込

請負

坪数廿七坪式分六厘

一 銀四拾三匁

式分四厘

但壹坪ニ付

壹匁六分

(略)

御下屋敷

御上之間御次

御三之間御縁座

敷込上塗

色壁土代

文献D-105 『御下屋敷御普請中日記【60-あ】』

嘉永四亥年より

同七寅年迄

御下屋敷

御普請中日記

安政二卯年

四月改記

森代助

平塚忠四郎

(略)

一 嘉永四年辛亥十一月

御下屋敷御普請段々御調べ之上吉田武太夫三輪

弥五郎兩人江被付候ニ付差出候請書

奉差上御請書之事

御建前壹ヶ所 桁行拾九間五尺三寸五分

梁行九間壹尺式寸

(略)

嘉永四辛亥年 木挽 久平(印)

十一月日 栄介

御手大工 赤川留八(印)

三輪佐兵衛(印)

三輪弥五郎(印)

吉田武太夫(印)

御作事

行奉行衆中様

(略)

子ノ

一 十一月十三日吉辰ニ付御門御柱立御規式被仰付候

尤其節大雪ニ付地形雪取のけ候而御柱立漸々

鏡柱かふ木建起シ之事相済候上

御作事奉行御山奉行大工木挽左官石屋

黒鍬当日詰合不残江御蒸物茶津盛一つつつ

被下之并ニ一流御酒頂戴之事

一 御門壁下地より中塗仕上迄

荒壁 裏返し

大直シ 小直シ

万延元年より金壹朱ツ、□□□□□□
□□□申上

十二月

一 御□佛^江付□之者^江□□□□御酒式升□□

一 □□□□□□□□御佛□□御□佛□上□□□□□□□□之事

一 大明□□□□御佛前花立之□上之事

飾附御用取扱向

一万延元申六月十一日 □光院様御三面□□付

九日

九日

(略)

文献 D-095 『乍恐以書付奉歎願候【122】』

乍恐以書付奉歎願候

一 今般 御下屋敷御普請不残私共江□

作付□□仕合奉存候□処御出来□限□

御定日 作□奉□□□御請合奉

申上候□之与手□□□相成□候奉

御日□之成□□□□□御用向下□□□共

候今皆□□□□□成立申□早兩三年

□打過候事□□□□□□出来不仕候□

金□私共不出□相□□御座候右之付

今屋敷□之□□ 御□□□□

奉□合□之申上方□御座候□□不顧正

奉□□□□□之□ □□□□私共

是迄仕来り之式分^ニ御座御間□□□續

仕□□□□□仕御間何卒御慈悲之

御□□□右御譜請之成立是迄之

通り□ 作付□□只□奉頼候□

御来之成玄武人共一流□敷申合

万事 御用向御不□合候□之□

御座候様出情可仕候且又此度御

普請之儀写一入出情仕三月晦日限り

不残皆出来可仕候 尚又建具屋之義ハ

追之御用済^ニ相成候事少々之事^ニ

大キ二手後仕候間是又格別二早行^ニ

皆出来可仕候右様奉申上候□□□

□□□御座候□□節之□□□□□

御□□□江 仰付□□□□□

仕間敷□□右□之返り御□堀^ニ

候成下^ニ□候ツ、□分仕合奉依而一流

□□□奉□□御処□□

嘉永七寅二月 大工

吉田武太夫 (印)

三輪弥五郎 (印)

木挽 留八 (印)

栄助 (印)

久平 (印)

建具屋

角兵衛 (印)

御作事

御奉行所

文献 D-097 『(新殿壁上塗につき留)【58】』

御新殿壁上塗御調

安政二^乙卯年

正月十七日御新殿壁

上塗御調左之通り

一御上御居間より御三ノ間

御縁座敷迄五間

色壁

一御対面所二間黄土

一御使者間より御玄関黄土

一御玄関北御客之間黄土

一奥様御部屋黄土

一御中ろうか白土半分者

めつぶし半分ぬりながし

一御階色土

但□孝之上

一御臺子祢すみすり壁

一御階はり口銀白土

めつぶし

一御縁側不残黄土

一御湯殿黄土

御ろうか白土

但半分ハ目つぶし半分ハ

ぬりながし

一御老女部屋黄土

一御玄関前御高屏向

白土

一御門白土

一御雪隠三所 白土

但半分めつぶし半分ハ

ぬりながし

一御高屏向内外不残

中塗

安政二^乙卯年

御下屋敷石垣積^リ立

一南より所けや木迄

式拾間半

一けや木より小梅迄

式拾間

合^テ四拾間半

石垣高サ壹丈

此坪六拾七坪半

但壹坪^ニ付賃銀貳匁ツ、

奥御次ノ間
表御玄閣
ニケ所斗
ニ合成

参り 御居間奥様御居間御書院
御玄閣御臺所御茶之間^ベ五ヶ所
右之通り豆打被済候上御年男^江御祝義
青銅式拾足扇子式^止又^ハ扇子料として廿四文
被下之事も有之相済候上御届^ケ御年男之御札申上候事
一 止年々両度猿屋参上御臺処^{上ル}上^ケ物
御札一うま之絵一ひも式筋白米壹升被下之

十四日

一 御年越付御燈明上^ケ事

十五日

一 御燈明御神酒下^ケ之事

廿八日

一 今日例年於御佛前大般若^{□□}
前[□]寺方江申口置 本堂寺江 ^{□□□}
(略)

二月初午

一 前日御のぼり御燈[□]数等取調御蠟燭
何丁[□]御入用^{□□□}午申上[□]当番之者
立合之上御[□]錢勘定仕差上候事
一 当月^{□□□□□□□□□□}湯立^{□□□□}
御中之[□]

申上御系請^{□□□□□□}江当日於御玄閣

一 汁三菜御料理^{□□□□□□}之御茶^{□□□□}并^ニ
青銅三拾足^{□□□□□□}之御^{□□□□}申上候事

一 御神前^江赤飯三^{□□□□}御神酒被供候事

一 ^{□□□□}御^{□□□□}御^{□□□□}勘定
之上差上候事

一 当日御^{□□□□}之^{□□□□}系譜之^{□□□□}御神酒之

一 伊勢大神^{□□□□□□}安政二卯年^{□□□□}

式^{□□}白米三升^{□□}辰二月金壹分式朱^{□□□□}
一 御家中之^{□□}御神酒茶^{□□□□}下之

禮[□]

一 御花御佛供^{□□□□□□□□}之事

三月御節句

一 御系譜御神前江御神酒御燈明[□]
之事

一 御居間御書院奥様之御居間生花之
事

一 止廿五日蓮如上人御^{□□□□□□□□□□□□□□□□}
御佛前^{□□□□□□□□□□□□□□□□}阿弥陀[□]
^{□□□□□□□□}

四月

一 止三日 殿様之御誕生日^ニ付御神前
江御供御神酒被備候事御頂載濟請合
之者頂載之

一 止当九日

五日

一 御節句三^{□□□□}飯之事
一 せ^{□□}ぶさし正月御^{□□□□}之通り也
一 五月^{□□□□□□□□□□}菱団子御神前^{□□□□□□}之事

六月

(略)

七月七夕

一 止七夕^ニ付御^{□□□□}申上御節句之通り也
(略)

八月

一 十五日御^{□□□□}御神酒江奥^{より}御供
御神酒^{□□□□□□}

一 御先祖様御まつり御花差上御燈明
御佛供差上^{□□□}
一 ^{□□□□}二月御同様之事

九月

一 御節句五節句之御規式通り
一 十五日御^{□□□□}付御神前江御神酒ハ御
月次之通り御供三^{□□□□}御頂載之[□]
御下屋敷当番之者頂載之事

十一月

一 当月八日火防	一 御居間	一
一 奥様御部屋	一 御土蔵	三
一 御臺子	一 御対面所	一
一 御納戸	一 一女中部屋	一
一 老女部屋	一 御茶之間	一
一 御茶之間部屋	一 四疊半	一
一 御茶席	一 御長屋	二
一 侍部屋	一 御臺処	一

内[□] 御壹子 御茶之間 御居間
御書院一 御三ノ間一 御上御湯殿一

共
御次湯殿一 表御次之湯殿
一 御二疊敷押入^{□□□□□□□□□□}
一 御^{□□□□□□□□□□□□}

同十一日

一 止^{□□}息^{□□}御^{□□}付御^{□□□□}御花^{□□}式かざり
御佛供^{□□□□□□□□□□}御臺処^江壹人^{□□□□□□}
^{□□□□□□□□□□□□□□□□}
青銅拾足^下下^シ御花生ハ御下屋敷
之者明[□]頂載之事阿弥陀^{□□□□}
(略)

一 止中田式部太夫御札曆長のし^{□□□□}差上
御物[□]として青銅式拾足^下下^シ

145

文献 D-091 『御下屋鋪諸事取調向【3】』
嘉永七寅之年

廿六日 一壺人	〃	廿七日 一壺人	諸〃御はそん	廿九日 一壺人	御次風呂場 付直し	〆 五人分 五升 右御請取申上候	九月分	十五日 一壺人	御下屋敷 竈上ぬり	十六日 一壺人	御上屋敷敷御茶之間 竈御はそん	十七日 一壺人	御口風呂場 御はそん 御玄関 御高塀中ぬり	廿七日 一壺人	黄土拵	廿八日 一壺人	御筋カイ廊下 上ぬり	廿日 一壺人	〃	十日 一壺人	〃	〆 六人半 右六半五合御請取 申候	十月分	朔日 一壺人	御中哭 御はそん	二日 一壺人	〃	三日 一壺人	炉 上ぬり	五日 一壺人	御中国哭 御はそん	六日 一壺人	〃	七日 一壺人	〃	八日 一壺人	〃	九日 一壺人	〃	十日 一壺人	〃	十一日 一壺人	〃	十二日 一壺人	〃	十三日 一壺人	〃	十四日 一壺人	〃	十五日 一壺人	〃	十六日 一壺人	〃	十七日 一壺人	御表棟 御トコ壁下地	十八日 一壺人	御門東御座敷 御トコ中ぬり	十八日迄 壹斗六升	十九日 一壺人	同所中ぬり 塗直し	廿日 一壺人	同所高塀中塗 御壹所大釜 中ぬり
------------	---	------------	--------	------------	--------------	---------------------------	-----	------------	--------------	------------	--------------------	------------	--------------------------------	------------	-----	------------	---------------	-----------	---	-----------	---	----------------------------	-----	-----------	-------------	-----------	---	-----------	----------	-----------	--------------	-----------	---	-----------	---	-----------	---	-----------	---	-----------	---	------------	---	------------	---	------------	---	------------	---	------------	---	------------	---	------------	---------------	------------	------------------	--------------	------------	--------------	-----------	------------------------

廿一日	一 壹人	〃	晦日	一 壹人	御茶間 ぬりたり	四月廿二日	一 壹人	御門足場掛
廿二日	一 壹人	〃	三月朔日	一 壹人	〃 所	壬七月十日	一 壹人	御下屋敷 諸〃御はそん
廿三日	一 壹人	〃	七日	一 半人	〃 所	十一日	一 壹人	〃 所
廿四日	一 壹人	〃	〃 先之分	り共	火袋中ぬり	十二日	一 壹人	〃 所
廿五日	一 壹人	御湯殿 ひさし 下地布	八升 右御請取申上候	十六日	一 壹人	十三日	一 壹人	〃 所
九人	〃 壹斗三升五合	〃	〃	十七日	一 壹人	十四日	一 壹人	〃 所
内	〃	〃	〃	〃	〃 所	十五日	一 壹人	〃 所
二月十三日	壹斗	草とり	〃	十二日	一 壹人	廿三日	一 半人	〃 所
二月廿五日	升弐式升	草とり 昨年	〃	十三日	一 壹人	廿四日	一 半人	〃 所
一 壹人	〃	御湯殿 ひさしぬりたれ共	〃	〃 四升	御請取申上候	〃 拾人	〃	〃
二月廿六日	一 壹人	御壹所 ぬりたり うらか△し	〃	五月弐日	一 壹人	式口〃壹斗四升	〃	〃
廿七日	一 壹人	〃 所	〃	〃	諸〃荒壁	八月	〃	〃
八日	〃	〃	〃	廿一日	一 壹人	廿四日	一 壹人	〃
廿九日	一 壹人	〃 所	〃	〃	御茶之間竈 御はそん	廿五日	一 壹人	〃
一 壹人	火袋布	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

一大工拾壹人	御雪隠向 其の外共 拾六ヶ所 水もり多づ 仕候積立
一同二人 木挽壹人	御茶之門 二階上り戸 此切
一大工三拾五人	式番御土蔵 内造作并 かけひさし迄 積立
一大工拾九人	三番御土蔵 并ニ味噌部屋 内造作 かけひさし迄 積立
大工手間 四百拾四人半 木挽手間 三百八拾壹人半	
此作料 銀壹貫三百式拾六匁 六分六厘	
内 六間九拾匁八分三厘 六間三拾五匁八分式厘木挽 作料 此金式拾式両分 六匁六分六厘	大工 作料 木挽 作料

御扶持米 七石九斗六升	一金式分式朱 米二斗	表ニ一疊ニ敷 床違棚 別段御目論 見積立
一金壹両式分 米六斗五升	式朱 米六斗五升	御門見張 惣けや木作り 大工木挽 積立
一金式両 米七斗		御書院御使者 之間御玄閑 御佛間御対面 所長押入 大工手間積立
金四兩壹分ト 米壹石五斗六升		
金式拾六兩壹分ト 銀六匁六分六厘 米九石五斗式升		
右之通り金渡候分		

文獻D-087『御雇附留御通【120】』
嘉永六丑十二月 左官師 吉田忠助
西御作事
御雇附留御通

森代助様 平塚忠四郎様	丑十二月改	八日晦日 一式人 枳形御高堀 上ぬり 右ハ御帳面落
十二月九日 一壹人	御茶間龜 御むら直し	右ハ御扶持御申請候
十日 一壹人	御次之湯殿 御むら直し	〃所
十一日 一壹人 〃四人半	御北間之 御雪隠むら直し	
式月十二日 一壹人	二はん御土蔵 間戸荒ぬり	
十七日 一壹人	御茶間 御壹所 足場かけ	
十九日 一壹人	〃所 塗たり布	
廿日 一壹人	〃	

一大工五人 木挽式人	御書院前 御縁外三疊 式口取り也	一大工八人	御二階御縁 両銀鴨居上 焼板張手間	一大工拾壹人 木挽四人	御門かり戸 式本くぐり 共
一大工四拾人 木挽式拾七人	御舞臺 板敷張りかへ 但しさせはぎ	一大工七人半	御書院晴床 志らげ天井 はな板取也	一大工式人	御臺所入口 家祢裏板張
一大工式拾九人 木挽拾五人	御玄閑床 長板敷 張りかえ并ニ 柱取りはずし	一大工拾人 木挽五人	御書院違棚 之下地板 床縁拵へ 手間	一木挽九拾五人	御化生之間 庇シ并ニ御湯殿 女中部屋庇 雪隠御はた 部屋かけ ひさし御茶之間 雪隠迄積立
一大工式人 木挽壹人	御上之間 御縁外三疊	一大工三拾人 木挽拾三人	御神前 御佛間内造 作但御神前ハ 側張天井 段二つ 御佛間同斷	一木挽式拾六人	御上御雪隠 式カ所積立
一大工八人 木挽壹人	御縁座敷 御次之間檜 天井と取り也事 増手間	一木挽拾八人 木挽九人	御対面所 床天井張替 違棚地袋 こしらえ直シ	一同四拾八人	御席筋違 御廊下并ニ 御雪隠二カ所 御長屋所 雪隠壹ヶ所 積立
一大工三拾式人 木挽拾五人	御二階外縁 手摺外雨戸 敷御窓式口	一木挽拾八人 木挽九人	御対面所 床天井張替 違棚地袋 こしらえ直シ	一同拾人	御水掛路次 積立
一大工式拾壹人 木挽九人	御神前之間 御書院 御玄閑迄 蘭間敷 八口入	一大工五人半 木挽壹半	表御居間 違棚之分 地袋別段 御目論見	一同拾六人	御門雪隠 并ニ車高堀 三間半積立
一大工拾五人 木挽八人半	御書院縁 側檜之木板 張り也	一大工三拾四人 木挽式拾四人 一大工三拾五人 木挽六人	井戸家形 二ヶ所 御二階壁おひ 両方共	一拾四人 同	表御次湯殿 雪隠積立
				一同拾七人	堀重御門 并ニ御高屏 積立

一三匁五分

御納戸窓

雨戸

壹本

木材共

銀壹両〇九匁五分

比金拾八両壹歩式朱ト七匁

手間廿五人

他ニ御土藏分六人

右之内廿五人分ハ

御書出候ニ付頂戴

内

昨子七月丑月極月

御書出来迄

金拾貳両貳歩式朱ト

三分九リ

受験

引残而

五両三歩ト

六匁六分

三リ

不足

三月二日

内金三分受取

一三拾六匁

丑年之

七日ト

戸障子六本

□□□六日

一八匁

御茶間

半障子

四本

式月十五日

一拾壹匁

戸一本

三月九日

一拾四本

かかみ

戸貳本

一四拾三匁

帶戸

六本

一七匁八分

御ツテ釘共

戸貳本

一〇匁五分

釘共

戸貳本

一七匁

十八間かく

板六坪

一廿匁

式下

百五拾四匁五分

一拾匁三分五厘

三寸釘

貳千三百本

取賃代

文獻D-083 『諸御道具取調向【15】』

嘉永六丑年

御下屋敷

諸御道具取調帳

十一月

大嶽辨之丞

小寺林平

平塚忠四郎

(略)

一御臺処大巻ふさ付

一御茶之間小巻

(略) 壹

一御湯殿中巻

一御次風呂巻

おけふさ付

一火ばし

(略)

御湯殿御用

(略)

一やき火鉢

(略)

一しろはしき

一御次

内

女中部屋壹

御茶之間部屋壹

御対面所壹

御使者之間壹

四〇也

文獻D-085 『諸御道具取調帳并ニ御湯殿御雪隠向御廊下

塀重御門御高塀共木挽手間積立覚【53】

嘉永六年

御建前後御目論見大工木挽工数

積立并ニ御湯殿御雪隠向御廊下

塀重御門御高塀共木挽手間積立覚

一大工三拾人

木挽八人

御古建野物

入替夫二付

小屋組替

一大工三人半

木挽貳人半

檜木柱

式本取り也

但壹間□匁六ト之割

杉皮惣

百三坪

木挽手間

惣 貳間拾五人

内

拾五人 右内□

□□

貳百人

此作料

銀三百三拾三匁三分

此扶持方

貳名

大工手間

惣 四百五拾八人半

此作料

銀七百六拾四匁壹分六厘

御扶持方

四名五斗八□五合

御門□□□三本

大工手間

拾四人 内木挽手間四人□□□

此作料

貳拾三匁三分三厘

御扶持方

壹斗四□□

(略)

丑 式月十五日改

文献 D-079 『御別荘御修復御入用扣【50】』

嘉永六丑年

御新殿御移徒御調帳扣

十一月吉日 御役所扣へ

十一月十九日御新殿

御移徒御祝儀御式

御当日御着座之節

壹番

一上々様江御移

御座敷江御着座之上

御熨斗

三方差上ル

(略)

文献 D-080 『御建前御建具向差上方并二代銀付立通【118】』

丑

嘉永六年 七夕

建具屋 角兵衛

御建前御建具向

差上方并二代銀付立通

御作業

御奉行様

覚

一五拾匁

御からかみ 廿一本

一四拾三匁

御大戸 三本

一百七拾匁四分

御あま戸 三十五本

一八匁

御きりかくし 四本

一四匁

御尔かい 半戸 貳本

一百拾匁

上御障子 廿二本

一六拾匁

御けんか人戸 四本

一廿匁

御げんかん脇 貳本

一廿八匁

御尔かい 障子六本

一四匁

御高へい半モノ 三本

一三拾七匁五分

御戸五口 九本

木材共

一五匁五分

檜木三寸貳分 壹寸六分

四丁

式拾六人
 一御上御次御湯殿梁壹丈
 桁二間半 壹ヶ所
 (略)
 此大工手間 四拾貳人
 此木挽手間 貳拾五人
 □□□物相用御□□
 一御次雪隠壹間ニ壹丈
 三尺壹ヶ所
 (略)
 此大工手間 貳拾八人
 此木挽手間 拾五人
 右物ニて相用
 一御茶之間雪隠壹ヶ所
 (略)
 此大工手間 八人
 此木挽手間 五人
 右物ニて相用
 一御臺所小便所壹ヶ所
 (略)
 此大工手間

八人
 此木挽手間 六人
 一表縁御雪隠二ヶ所
 (略)
 此大工手間 貳拾八人
 此木挽手間 拾五人
 一御門御雪隠壹ヶ所
 四尺ニ壹間別建
 (略)
 此大工手間 拾壹人
 此木挽手間 七人半
 一下湯殿并ニ雪隠共
 壹間と式間壹ヶ所別建
 (略)
 此大工手間 拾八人
 此木挽手間 拾四人
 北御井戸家形壹ヶ所
 (略)
 此分□□
 □□□□□
 此大工手間 拾八人
 此木挽手間

拾貳人
 内
 大工手間□□□□□
 □□ニ相成候ニ付□
 南
 御井戸家形壹ヶ所
 (略)
 此大工手間 拾六人
 此木挽手間 拾人
 内
 大工手間□□
 □□□□□ニ相成
 候ニ付□
 御□建破風御二階
 風おひ式所共
 (略)
 此大工手間 四拾六人
 但□□板ニて
 此木挽手間 八人半
 此内
 御二階壁おひ□□
 板
 (略)
 百拾六坪半
 此□価
 百八拾六匁四分

中壹疊ニ付
三匁
(略)

六六百拾六匁
此金拾兩壹歩ト

壹匁

内
五兩 八月□□
□□

九月十九日

一銀百匁

琉球表
四拾枚

大垣井筒屋
丈吉口入ニて

但壹枚
式匁五分ツ、
御買上

内
壹兩三步 □□□

つり

五百四拾八□□□□

(略)

文獻D-077 『御建前御門御高塀腰張并ニ御雪隠向御湯殿
破風板張大工木挽工数積立覚【45】』
嘉永六年

御建前御門御高塀腰張并ニ御雪隠向
御湯殿破風板張大工木挽工数積立覚

癸丑二月日

御作事方

御門腰張高サ五尺

四方九間半并見張共
木割工数

一式間 二寸三分
五寸

一壹間勺 六丁
八丁

一五尺 二寸
壹寸八分
四拾丁

一四分板 拾坪
上物
一八尺 三寸
六寸 □□
壹丁

一八尺 三寸五分
四寸 式丁

一四尺五寸 二寸五分
四寸 式丁

一六尺 三寸五分
角 式丁

一式間 壹寸四分
水切 五丁

一壹間巾尺八分板三枚
四寸一寸 壹丁

一壹間 四寸一寸

此大工手間

四拾四人半

此木挽手間

拾八人半

一東御高屏外通り

高三尺五寸 三拾壹間半

腰張右之内式間高屏建次

木割工数

(略)

此大工手間

五拾五人半
此木挽手間
拾七人

塀重御門戸平共

惣檜木造り并兩銀

御高兵屏三間半同所より東高塀屏
内腰張拾五間高サ四尺五寸

木割工数
(略)

此大工手間 内四拾五人
六拾九人 御門御高兵屏分
□□壹本□□□

此木挽手間 式拾五人
腰張分

内 拾六人 塀重門分
□□九人 腰張分

一御玄関前より御臺所入口まで迄
六間半腰張木割工数
(略)

此大工手間 拾三人半

此木挽手間 拾人

一御上御雪隠梁四尺壹丈
式々所木割工数
(略)

此大工手間 四拾八人

此木挽手間

此大工手間 四拾八人

此木挽手間

此大工手間

此木挽手間

一六人 (御中門 大和不残)

五拾壹半 森次 弥五郎

四月十七日 御席御待合 砂せつじん 御高屏杉皮腰 張御席板腰 張

一拾壹人

工数 大工木挽 建具代 一百人

右ハ御席北壹御待合高塀 大和門屏共切戸式本 砂雪隠杉皮高屏甚 積立

子二月廿八日

四月七日 御藏といふき

一九寸 百本入用

一八寸 百三十本

一八寸 御高屏直シ

一三寸 御入用

八日

一 下多良より御買上御土藏 針入用

六月廿六日 かしや 作口衛門 相渡

右金 貳百四十匁

七月朔日

一八寸 百本 (百本 □□□打)

一九寸 三拾本

一三寸 五百本

(猪尻)

井尻村より御買上御土藏 釘入用 一八寸 百本

井ノ尻村より御買上ニ相成候 御藏地形請負扣

一壹大四尺 一式丈三尺五寸

比平坪九坪壹分四厘 比玄坪三坪八分〇七 比石掛坪五坪貳分〇八

右請負銀ニ拾八匁 但シ壹坪ニ付三匁〇三厘三

文献D-064 『御新殿御入用諸色御買上物覚帳【40】』 嘉永五年

六 七 御新殿御入用諸色御買上物覚帳

子ノ七月より 丑十二月迄 寅正月より (略) 御普請方控

六月五日 一 六匁三分 御二階竹ず 御入用竹九本 此但六寸 祢宜村金次より 御買上

同日 一 五匁五分 右同断竹ず 四枚あみちん 下多良喜三郎江 候 仰付被 御買上

但しろなわは高田俵屋江

一 二〇匁拾壹匁八分 (略) 右ハ七月十三日相渡ス済

八月二日 一金三步 □□□□ □□□□ 壹丁代 大垣船町 井瀬屋源 より□□□□

銀 一 五百四拾六匁 但上壹匁ニ付 三匁五分 御買上 百七拾匁 内上六拾六匁 中百五匁 代

ゑん津か
一同壹丈四尺

(略)

四寸
角

三本

文献D-045『下屋敷建前につき覚』【30】

嘉永五壬子年二月廿三日
御下屋鋪御建前同御門共
今日新始ニ付

(略)
一 新始規式左之通

大工棟梁

吉田專治

三輪弥五郎

大工

佐平

武右衛門

吉藏

得兵衛

角兵衛

木挽

留八

久平

栄助

磯治

小右衛門

庄次郎

柳吉

喜八

多助

(略)
一 御棟札 壹枚
長式尺三寸式分
巾六寸九分

(略)

覚

御祝儀被下

大工棟梁式人

吉田武太夫
三輪弥五郎

(略)
一 脇棟老入
金百拾疋

三輪佐平

羽ヶ原村

一 大工加役之者

□右衛門

一 青銅□拾疋

木挽棟梁 并脇棟梁

〆三人

赤川留八

青銅五拾疋ツ、栄助

久平

(略)

文献D-063『御席普請見積帳』【160】

子ノ四月八日取調

一上杉四分板

但ン壹坪ニ付

代四分斗

右之處釘次之通り御入用

一六寸百本 五寸式百本
三寸五百本

〆八百本

一拾參人

一五人半

〆拾八人半

森次
弥五郎

御席内造作并ニ取之

一拾六人

御水屋袋棚
〃長カシ御
次ノ間疊ニ而板間
御待合前計

一五人半

御麻板疊
〃戸障子立合
角棚天間戸
杓八品之拵

一五人

御長カシニツ
こしらへ

一八人半

御高屏間
戸ふち五〇
戸四本二三丈
壹本古直シ

一六人

□□□そで
垣こしらえ

一四人

御力掛式つ□
こしらへ

文献D-048『御下屋敷御地面江奥御新御殿御引去り御普
請御棟揚御規式并ニ御柱建初メ御規式共御調帳』【114】

同 ^マ 壹丈八尺	四寸	壹丁	同	同サヲ縁	一寸二分	廿本
同二	六寸	壹丁	同	同壹丈四尺	一寸二分	廿本
同壹丈四尺	同	貳丁	同	かぶ板□	張上	八坪
松鴨居	四寸二分	壹丁	同	一上天井板		九坪
同壹丈八尺	八寸	壹丁	同	杉壹間		
同三	八寸	壹丁	同	一上天井板		
同 ^マ 壹丈四尺	同	三丁	同	中天井板		
同 ^マ 壹丈四尺	同	三丁	同	縁桁		
同 ^マ 壹丈四尺	同	三丁	同	一長壹丈四尺	八分	三拾枚
同壹丈壹尺	四寸二分	壹丁	同	一松敷板	四寸	
同 ^マ 壹丈四尺	八寸	壹丁	同	根太丸こ	六分	廿壹坪
同 ^マ 壹丈四尺	同	三丁	同	一長壹丈七尺	六分	四本
同 ^マ 壹丈四尺	同	三丁	同	同		
同 ^マ 壹丈四尺	同	三丁	同	同壹丈三尺		拾貳本
同壹丈四尺	同	六丁	同	同		
同壹丈七尺	二寸	壹丁	同	同壹丈		八本
松敷	四寸	壹丁	同	同		
同壹丈四尺	二寸	壹丁	同	同六尺五寸		拾本
同	四寸二分	壹丁	同	同根□津か		
同壹丈四尺	同	六丁	同	同貳間	□丸	拾本
同	同	九丁	同	内法つか杉上物	四寸	
同六尺五寸	同	壹丁	同	同壹丈四尺	角	五本
同壹丈四尺	二寸	壹丁	同	松		
同壹丈四尺	三寸五分	壹丁	同	一裏板	四分	拾坪
△上杉長押	△四寸五分	拾三丁	同	内法ぬき	板	
同壹丈四尺	二寸	拾三丁	同	一長壹丈四尺	一寸	拾丁
同壹丈	二寸	貳丁	同	次ぬき	四寸	
同壹丈	三寸	貳丁	同	同壹丈四尺	八分	貳拾丁
床縁	三寸五分	壹丁	同		三寸	
同七尺五寸	五寸	壹丁	同			

同八尺	同	一敷板	松板	貳拾坪	二寸	三
入口上一		根た津か丸こ	敷居	貳拾坪	貳寸	
同八尺	五寸	一長壹耐丈	同七尺五寸	五拾本	同壹丈七尺	壹丁
栗土壹入口下	八寸	松四分板	鴨居	拾坪	廻り縁	
同壹丈四尺	四寸	一裏板	同壹丈七尺	拾坪	同壹丈七尺	貳寸
松鴨居	五寸	日中マド敷鴨居	二寸五分	廿四丁	同	同
同七尺五寸	四寸	一長七尺五寸	四寸	同	同壹丈四尺	同
押入敷鴨居	七寸	御茶之間入用	四寸	五間	サヲ縁	同
同貳尺	貳寸	一栗土臺	五寸	同	同壹丈四尺	拾本
杉廻り縁	四寸	杉上柱	四寸二分	七本	ヨセ敷	拾本
同壹丈四尺	貳寸	一長壹丈四尺	角	同	一長壹丈四尺	五本
杉サ才縁	一寸六分	〃中	同	八本	△上	六坪
同壹丈四尺	貳寸	同壹丈四尺	四寸	壹丁	一天井板	拾八枚
御臺所向〇〇ツカ	一寸六分	松臺敷一	七寸	壹丁	△上敷壹	
中天井板	杉板	同壹丈八尺	四寸	貳丁	一長三尺五寸	
松八分板	四分	〇〇敷二	五寸	同	鴨居入かへ一	
二階板	貳拾坪	同壹丈七尺	四寸	同	同入力へ一	
根た丸こ	貳拾坪	松鴨居一	五寸	同	一壹丈八尺	
一長貳間	拾八本	同壹丈八尺	四寸貳分	壹丁	同入力へ一	
同	拾八本	床縁	壹尺	壹丁	一長壹丈壹尺	
同壹丈	拾本	同壹丈七尺	三寸五分	壹丁	御上之間杉志んさり柱	
同壹間	八本	〇〇〇	五寸	壹丁	同壹丈四尺	
一上尾利	百四拾七間	同壹丈七尺	二寸五分	壹丁	上柱	
一敷板	松板	鴨居	四寸	壹丁	同壹丈四尺	
中	六分	同七尺五寸	四寸	壹丁	中柱	
下	貳拾五坪	敷居	七寸	壹丁	同壹丈四尺	
		同七尺五寸	四寸二分	同	松臺敷一	

同	同六尺五寸	八本	同壹丈四尺	四寸二分	貳拾本	同	同七尺五寸	同	壹丁
一上屋口	百三十五間	貳間物	〃中	同	三拾本	一〃	ナゴ	四寸	三丁
中松		六拾七丁	同壹丈四尺	同	貳拾本	同七尺	同七尺	七寸	三丁
一敷板	六分	拾坪	〃下	同	貳拾本	同二二	同二二	三寸	拾貳丁
下			同壹丈四尺	同		同七尺	同七尺	六寸	
同	同	貳拾坪	松臺敷一	四寸		同	同	同	
床縁ケヤキ	同		同壹丈壹尺	四寸	壹丁	同壹丈壹尺	同壹丈壹尺	同	四丁
一長六尺五寸	四寸		栗下敷	六寸		同壹丈壹尺	同壹丈壹尺	同	
〇〇〇杉上物	二寸三分	貳丁	同壹丈	四寸五分	壹丁	同	同	同	
一同六尺五寸	四寸		松敷鴨居	三寸	壹丁	同壹丈壹尺	同壹丈壹尺	四寸	壹丁
棚口床入用	二寸二分	貳丁	同六尺五寸	四寸二分	三丁	付ナゴ	同六尺五寸	五寸	六丁
同壹丈	貳寸		同敷鴨居	七寸		同	同	貳寸	
棚口床板ケヤ木	三寸五分	貳丁	同六尺五寸	四寸二分	拾八丁	同壹丈	同壹丈	同	貳丁
一同六尺五寸	中壹尺五寸		同臺敷	二寸		ヨセ敷	同壹丈	貳寸	
違棚板同	厚サ壹寸三分	壹板	一〇七尺五寸	四寸	壹丁	同	同	一寸二分	拾丁
一〇四尺	中貳尺		同壹丈	六寸		同	同	貳寸	
是より御次之間分御臺所迄	厚サ壹寸三分	貳枚	ナカン上一	四寸二分	四丁	同	同	角	四丁
ケヤ木柱			同壹丈五尺	二寸		エン縁	同壹丈四尺	貳寸	四丁
一長壹丈四尺	八寸	四本	同壹丈五尺	九寸	壹丁	同	同	三寸	四丁
同壹丈四尺	角		ツシより〇一	五寸		同	同	五寸	
同	六寸	五本	同貳丈貳尺	九寸	壹丁	同壹丈六尺	同壹丈六尺	同	壹丁
同壹丈八尺	角		ナゴウアミ	六寸		御臺所臺敷一	同壹丈五尺	五寸	壹丁
栗柱	壹本		同貳丈貳尺	九寸		同壹丈五尺	同壹丈五尺	八寸	壹丁
一同壹丈四尺	五寸	六本	同	五寸	三丁	大鴨居二	同壹丈五尺	四寸五分	貳丁
上杉柱	角		同壹丈五尺	九寸	壹丁	同	同	壹尺	

161

文献D-007『覚【19-あ】』

覚
壹ヶ所

一御書物蔵 北東南三方

右壁仕方之事

右白土けずりおとし

砂ずり 壹人也

中塗 貳人也

白土塗流 貳人也

以上 五人也塗

左官工手間 貳拾人

米 貳斗

嘉永三戌十月廿一日

左官師忠助

西御屋敷様

御作事奉行衆中様

文献D-008『覚【19-い】』

一御宝蔵 南前更

壹方

右壁土仕法之事

右白土けずりおとし

砂ずり塗 壹人也

中塗 貳人也

白土塗流 貳人也

以上 五人也仕上

左官工手間 拾貳人

米 壹斗貳升

嘉永三戌十月廿一日

左官忠助

西御屋敷様

御作事奉行衆中様

文献D-032『御新築向木割覚【20】』

嘉永四年

御新築向木割覚

亥二月吉日 小寺林平

御新屋敷御高屏

(略)

御二階之分

檜柱

一長壹丈 三尺 四寸五分

杉柱 角 拾貳本

一同壹丈 三尺 三寸

一同壹丈 四寸 九本

松軒桁

一同式丈七尺 五寸

□□桁一 七寸 貳丁

一同式丈八尺 同 貳丁

母屋桁 同 貳丁

一同式丈七尺 四寸 四丁

一同物 五寸 四丁

一同壹丈八尺 末口 貳本

一同 六寸 貳本

一同式丈四尺 同 貳本

同 同 貳本

一同式間 同 貳本

一同式間 同 貳本

一同式間 同 貳本

一同式間 同 貳本

一同式間 同 貳本

一同式間 同 貳本

一同式間 同 貳本

一同式間 同 貳本

一同式間 同 貳本

一同式間 同 貳本

163

若殿様御部屋

一桁行八間^二張四間^二但^シ間延為也

取此惣坪数 三拾貳坪余

代金三拾三兩貳朱^二而木材不殘

下たら村

大工木挽一色御請負

浦治

右之外諸色御入用向瓦積り

一御屋根惣坪数七拾坪斗り

右御屋根東屋作り之の合

一瓦七拾坪 但し棟のしは役瓦共
内

(略)

文獻D-001『御鏡繻覺帳【12】』

嘉永元^{戊申}十二月改

御鏡繻覺帳

御壹所方

大壹鎊

殿様

若殿様

梅樹院様

御姫様

於鐵様

於重様

御部屋様

恵方棚

御納戸

御腰之物

御立板

天満宮

奥

御宝劔

御佛前

正林寺

正党院

大明神

本堂

御土蔵

御釜

石臼

御茶之間

惠比寿

大黒

秋葉

摩利志天

御鎮守

御廐

御具足鏡

外^二大菱切式^一つ添

惣合而

之

五拾三鎊

菱式切

右之通り無間違様入念

申合せ取扱可申者也

申

十二月廿五日

文獻D-004『御鏡餅渡し方覚【13】』

嘉永三年

御鏡餅渡し方覚

戊ノ十二月改

御壹所方

元治二丑改^ス

奥御鏡 四拾拾

并^二三鎊り例年表御用

之内より上に

奥御鏡床

式升五合

御納戸方渡候

御神前

御朱印

御宝劔

奥二鎊

御鎮守

御土蔵

一翁

一卷薫臺

御納戸

御佛前

四拾三鎊

右へみかん相そえ

へき

御すわり

御具足

但 四斗

一御具足

但 四斗

一御具足

但 四斗

一御具足

但 四斗

一御具足

但 四斗

一御具足

但 四斗

一御具足

但 四斗

一御具足

但 四斗

一御具足

但 四斗

一御具足

但 四斗

一御具足

但 四斗

一御具足

但 四斗

御熨斗差上候

十三日卯刻

一 殿様 若殿様 慎之介様 御同道

御道筋前同断

表御玄関より御居間江御着座

右御席江大熨斗差上候

若殿様 慎之介様右御同座之上御部屋江

御着座 御熨斗差上候

一 殿様御中奥江御着座

御熨斗差上候

一 夫より大奥御対面所江

殿様始御方々様被入御対顔被為在候

右御席江大熨斗差上候

右被為相済

御座附

御吸物

御酒 但し御冷酒

御肴 巻鰯

一 殿様 若殿様 表御居間御着座

御家中一統一列限 恐悦申上候御徒士

之者竹之間ニ而恐悦申上候徒士格同断

奥様御始御方々様江御役人共大奥ニ而

御前江罷出恐悦申上候

一 御同所様江御給人御目付御近習者奥掛り

御用人迄恐悦申上夫より御取次を以申上候事

一 御医師御大奥江罷出恐悦申上候事

右恐悦相済

一 御鎮守三社江御参詣被遊候事

一 流彦大明神江御名代相勤候事

一 大奥対面所江

殿様

奥様

若殿様

慎之介様

御着座

鎖姫様

御鉈様

御料理一汁三菜 差上る

文献 B-032 『差上申御請書之事【6-あ】』

差上申御請書之事

一 今度御普請之儀御台所向私共江御建前内造作

(略)

落札主

御手大工

天保三辰年

五月日

武太夫 (印)

兵吉 (印)

弥五郎 (印)

山中村

太兵衛 (印)

小寺平八郎様

菊本勉吾様

小寺 勇様

大嶽要人様

文献 B-033 『差上申御請書之事【6-い】』

差上申御請書之事

一 今度御普請之儀表御居間向私江御建前

(略)

天保三辰年

五月日

落札主

江州坂田郡樋口村

大工伊兵衛 (印)

同所請人

庄屋藤太夫 (印)

小寺平八郎様

菊本勉吾様

小寺 勇様

大嶽要人様

文献 B-034 『差上申御請書之事【6-う】』

差上申御請書之事

一 今度御普請之儀大奥向私江御建前内造作

(略)

落札主

濃州石津郡高須

御役大工

天保三辰年五月

円吉 (印)

同断

利兵衛 (印)

親類

久助 (印)

請人

御役大工□□

吉兵衛 (印)

小寺平八郎様

菊本勉吾様

小寺 勇様

大嶽要人様

文献 C-002 『諸色御入用下調【11】』

天保八年

御部屋御建前

諸色御入用下調

御作事奉行

酉

十二月

手扣

一	八坪三合七才	三ノ間御廊下向
一	拾三坪七合五才	南通御縁側向
一	拾貳坪	西通御縁側向
一	三坪貳合五才	東南御縁側
一	貳拾七坪三合	大奥御中廊下
一	拾五坪四合七勺	御鈴之間御廊下
一	七坪六合六勺六才	御湯殿向
一	四坪	奥方様御隠所
一	四坪	御子様方右同斷
一	五坪	御中奥御隠所
一	八坪九合九才	大奥御納戸内
一	貳坪貳合六勺六才	御中奥御廊下入口之所
一	拾四坪七合七勺七才	御老女部屋
一	六坪五合壹才	同所便所
一	貳坪五合五勺四才	小廊下内
一	七拾七坪三合貳勺七才	女中部屋より御老女部屋次之間迄
一	四拾九坪六合九勺三才	御茶之間部屋
一	三坪	御茶之間部屋雪隠
一	三拾壹坪四合七勺二才	御錠口内大廊下向
一	貳拾貳坪六合三勺壹才	御廣敷向
一	三拾七坪五合八勺	御臺所向
一	四拾四坪三合	同所通向
一	ノ千貳拾貳坪四合三勺壹才	
外側通		
一	四拾七坪四合	御玄関南東角より
一	五拾四坪貳合六勺	御茶之間北東角迄
一	貳拾九坪三合六勺	風呂場御湯殿雪隠共
一	拾壹坪五合八勺七才	御祐筆部屋迄
一	貳拾貳坪六合四勺二才	御中廊下向
一	三拾坪三合七勺八才	大奥東妻并三ノ間御廊下小廊下共
		同北面御隠所三ヶ所共

一	拾四坪六合三勺六才	同西妻
一	三拾貳坪六合三勺	同南面并御中廊下
一	御三坪七合四勺六寸	御鈴之間御廊下共
一	貳拾三坪四合六尺六才	表御居間北向
一	拾九坪四合七勺五才	同西妻御客湯殿
一	七坪三合三才	同所并御便所共
一	拾八坪七合貳才	同南西御玄関東角迄
内外坪数		表御居間破風
ノ千三百五拾四坪貳勺壹才		大奥両破風
但 壹坪二付銀八分〇		
共銀壹〇八拾三〇六分〇		
(略)		
御上塗左之通		
(略)		
文獻B-029『御普請ニ付取扱一件【106-あ】』		
天保三壬辰年		
御普請ニ付取扱一間		
三月ヨリ		
御役所		
(略)		
四月廿九日曇り		
一御普請之義御臺所壹棟御手大工武太夫		
兵吉弥五郎大奥壹棟高須大工御居間		
壹棟樋口大工江請負被仰付来月七日		
新始被仰付候旨御作事係より申渡夫々		
請書可差出旨申渡奉畏引取候事		
山中村大工太兵衛義夫々談じ之上御臺所組		
相棟梁ニ而相勤候筈		

(略)		
五月七日		
一今四ツ時新始ノ御規式首尾能相済候ニ付		
(略)		
文獻B-030『新初メ略御規式一件【106-い】』		
天保三年		
新初メ御規式一件		
壬申五月朔日 御役所		
今般御普請ニ付来 七日新初略御規式		
(略)		
文獻B-031『御家移ニ付取扱一件【106-う】』		
天保三壬辰年		
御家移ニ付取扱一件		
十二月		
(略)		
御引移御順		
十三日卯上刻		
一 奥様 鎮姫様 御銚様 御同道		
御飯殿より御家中宮坂本町通り		
御枳形表御門御廣敷より		
奥様御居間江御着座		
右御着座之上御熨斗差上候		
鎮姫様 御銚様 者		
奥様御居間江御同座之上御部屋江御着座		

一銀九百五拾〇四分 平坪三百壹坪八分
但し壹坪二付銀〇〇〇

(略)

此より御壁はり附向

一六坪七分五〇 御玄閣

一壹坪 竹之間

一貳坪 表御三之間御縁座敷共

一五坪半 同御次之間御床

一三坪 同御上之間御床

一壹坪七分五〇 同所御違棚向

一九坪半 御小納戸向

一貳坪半 御仏間

一四坪半 御神前之間

一四坪七分五〇 御中奥御床御違棚

一六坪七分五〇 御対面所

一四坪式分五〇 同御次

一六坪七分五〇 御化粧之間

一壹坪半 同御次之間

一五坪式分五〇 奥様御居間

一五坪 鶴之御間

(略)

御疊請負人

疊屋忠五郎

上疊六拾五帖代但し

一銀五百〇五分 壹帖付

御中奥御上之間拾帖

同御次八帖表御居間

御上之間拾式帖半同御次

十二帖半北御居間八帖

奥様御居間五帖

御床疊九帖

中疊貳百三拾五疊

但壹帖二付

御中奥御三之間六帖同御縁座敷
拾三帖同南座敷九帖

奥様御居間三帖同御次六帖

御化粧之間六帖鶴之間九帖

同御次六帖菊之間八帖御次八帖

御対面所拾五帖同御次十五帖

御三之間廿壹帖右御縁座敷

拾一帖同七帖表御小納戸

十七帖御神前之間式帖

御仏間七帖半同御縁

座敷三帖御居間表

御縁座敷十壹帖北ノ

御座之間御次八帖北表

御子様方御部屋八帖

同御次九帖表御三ノ間

十帖竹之間拾五帖

ノ二百三拾五帖

下疊五拾帖

但壹帖二付

詰所九帖御玄閣

御使者之間四拾式帖

(略)

三棟御建前中塗坪数

一 貳拾坪三勺

一 貳拾式坪四勺

一 四坪八合三勺三才

一 拾四坪九合三勺三才

一 八坪四合

一 拾七坪八合九勺式才

一 拾三坪四勺四才

一 三拾坪四合式勺式才

一 拾三坪八才

一 拾四坪八合四勺五才

拾五坪壹合九勺

拾五坪九合三勺

貳拾坪三合八勺

拾壹坪七合七勺

拾六坪貳合壹勺式才

拾三坪貳合七才

拾壹坪八合九尺二才

廿壹坪四合壹尺八才

七坪九合六勺

拾壹坪三合二勺六才

拾七坪七合七勺

拾貳坪壹合三勺八才

拾壹坪五合六勺五才

四坪五合七勺

是より奥向

拾八坪六合六勺六才

拾坪九合四勺

八坪三合九勺五才

拾三坪八合四勺九才

六坪

八坪九合四勺

七坪壹合八勺七才

七坪七合三才

拾五坪七合九勺

拾貳坪二合七勺三才

貳拾貳坪九勺

貳拾三坪九合九勺

五坪五合五才

貳拾壹坪五勺

拾九坪七勺九才

貳拾貳坪五合七勺六才

拾五坪壹合五才

拾坪壹合五才

表御子様方御部屋
同御次之間

北御縁側通

詰所後廊下

詰所向

飯御役所

東御中廊下

大御廊下

御渡口迄

竹之間

紅葉之間

御玄閣御使者之間

侍部屋

同所履怒きより便所迄

御子様方御隠所

御中奥御居間

同次之御間

御中奥御三ノ間

同所西御縁座敷押入共

同所御茶所

御対面所御上之間分

御三ノ間迄押入向

同所御床違御棚向

同所御上之間

同所御次之間押入共

同所御三之間

同所御縁座敷通

奥方様御部屋

同御化粧之間

鶴之御間向

菊之御間向

鷺之御間向

北通御縁側向

東通御縁側向

関連史料

文献 A-020 『御焼失一件日記【5-あ】』

天保三壬辰年

御焼失一件日記

三月四日

御役所

(略)

御類焼之覚

一表奥御住居向不残

一表御門

一埋御門

但し此埋御門は櫓御門と書出し候義相成間敷哉

御勸考之上可然御取計可被成候

一裏御門

一御土蔵

一御長屋

一御廐

一御作事小屋

一御稽古小屋

一御下屋鋪御住居向不残

一同所御門

一御家中屋敷

外 人馬怪我無之候

以上

別啓本文ニ御土蔵不残と申進候得共御藏

式三ヶ所并御客屋者相残り申候此段為御心得

申遣候玄蕃御藏式ヶ所御稽古小屋一軒

相残り申候当時御仮住居正覚院と申候而者

御不都合故御家中屋敷式三軒為取仰付

当時御住居可相成哉猶追而委細可申進

(略)

三月五日出 宮宿より 道中 五日切

(略)

覚

三月四日午ノ中刻同家高木玄蕃屋鋪より

出火良刻私屋鋪飛火類焼之ヶ所左之通

一表奥御住居向不残并侍中部屋共

一表門

一櫓門

一裏門

一堀重門

一土蔵

一長屋

一廐

一通用路地

一惣囲

一御稽古小屋

一下屋鋪御不残

一門

一家中屋敷 壹部

(略)

但シ 壹ヶ所 門共

東・北

壹ヶ所

壹ヶ所

壹ヶ所

壹ヶ所

壹ヶ所

壹ヶ所

壹ヶ所

壹ヶ所

壹ヶ所

壹ヶ所

壹ヶ所

壹ヶ所

壹ヶ所

壹ヶ所

壹ヶ所

壹ヶ所

四分式厘

三百拾四両之割

(略)

大奥御建前 濃州高須住

請負人

大工 吉兵衛

丹吉

利兵衛

一六百貫拾六匁八分

三百拾四両之割

(略)

表御座之間 江州樋口村

御建前請負人

一銀四貫五百

八拾三匁七分

但し壹之割

(略)

表御居間御屋根

井ノ口口口口口口口

高須仙藏請負

一銀七百口六分也

平坪式百四拾式坪余

但壹坪ニ付銀三分口也

(略)

奥御居間御屋根

口口口口口口口口

口口口口口口口口

口口口口口口口口

口口口口口口口口

口口口口口口口口

口口口口口口口口

口口口口口口口口

口口口口口口口口

口口口口口口口口

口口口口口口口口

口口口口口口口口

口口口口口口口口

口口口口口口口口

口口口口口口口口

御臺所屋根 長久寺村

一銀八百拾分也

口口口口口口口口

口口口口口口口口

口口口口口口口口

口口口口口口口口

口口口口口口口口

口口口口口口口口

一銀八百式拾式匁

御臺所棟百八拾四坪

江州山中村

大工 太兵衛

吉田武太夫

三宅兵吉

三輪弥五郎

棟梁

御普請中諸職人諸色勘定帳

御普請方

文献 B-005 『御普請中諸職人諸色勘定帳【5-か】』

天保三壬申年ヨリ

同五甲年十二月迄

御普請中諸職人諸色勘定帳

御普請方

御臺所棟請負

棟梁

吉田武太夫

三宅兵吉

三輪弥五郎

江州山中村

大工 太兵衛

御臺所棟百八拾四坪